



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	青年期における対日イメージの発達的变化：中国の若者の自己認知と他者認知に注目して
Author(s)	文, 慧超
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14415号
Issue Date	2021-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k14415
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96771
Type	doctoral thesis
File Information	WEN_HUICHAO(2021.6.15).pdf



博士課程 学位申請論文

青年期における対日イメージの発達的变化
——中国の若者の自己認知と他者認知に注目して——

北海道大学大学院 教育学院

多元文化教育論講座

文 慧超

2021 年 3 月

目次

第1章 序論	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的及び意義	7
1.3 研究方法	8
1.4 論文の構成	9
第2章 先行研究と理論的枠組み	11
2.1 マス・メディアによる世論の形成から SNS などによる個人の発信まで	11
2.2 対象者の属性別の研究	12
2.3 主体としての対象者の視点を扱った研究	14
2.4 理論的枠組み構築に向けて—認知発達段階論に関する先行研究	16
2.5 本研究の着眼点	18
2.5.1 イメージの定義	18
2.5.2 本研究における研究対象の居住地域及び年齢層	18
2.5.3 本研究における対日イメージの形成を見る視点	19
第3章 【研究1】中国の若者の対日イメージの形成年齢層	20
3.1 研究方法	20
3.1.1 質問紙の作成と調査概要	20
3.1.2 分析方法	21
3.1.2.1 質的分析	21
3.1.2.2 量的分析	21
3.2 結果	23
3.2.1 対日イメージの実態	23
3.2.1.1 対日イメージのカテゴリー抽出	23
3.2.1.2 学校段階別の対日イメージ比較	25

3. 2. 1. 3 カテゴリー別の対日イメージ分析	28
3. 2. 2 対日情報源の実態	33
3. 2. 2. 1 対日情報源のカテゴリー抽出	33
3. 2. 2. 2 学校段階別の対日情報源比較	35
3. 2. 2. 3 カテゴリー別の対日情報源分析	38
3. 2. 3 対日イメージと対日情報源の関連	43
3. 3 考察	45
3. 3. 1 対日イメージの実態	45
3. 3. 2 対日情報源の実態	47
3. 3. 3 対日イメージと対日情報源の関連	49
3. 3. 4 学校段階別に見る対日イメージの形成要因	50
3. 4 結論と課題	52
第 4 章 【研究 2】 中国の若者の対日情報源の利用の実態	53
4. 1 研究方法	53
4. 1. 1 質問紙の作成	53
4. 1. 2 調査概要と分析方法	54
4. 2 結果	55
4. 2. 1 記述統計量	55
4. 2. 1. 1 対日イメージの記述統計量	55
4. 2. 1. 2 対日情報源の記述統計量	57
4. 2. 2 対日イメージの因子分析結果	58
4. 2. 2. 1 高校生	58
4. 2. 2. 2 大学生	61
4. 2. 2. 3 対日イメージの因子構造の比較	63
4. 2. 3 対日情報源の因子分析結果	65

4. 2. 3. 1 高校生	65
4. 2. 3. 2 大学生	67
4. 2. 3. 3 対日情報源の因子構造の比較	69
4. 2. 4 対日イメージと対日情報源の相関関係	71
4. 3 まとめと考察	72
4. 3. 1 記述統計量	72
4. 3. 2 因子分析の結果	73
4. 3. 3 相関関係の結果	73
4. 4 結論と課題	76
第 5 章 【研究 3】 中国の若者の対日イメージの形成過程	78
5. 1 研究方法	78
5. 1. 1 調査概要	78
5. 1. 2 分析方法	79
5. 2 結果	81
5. 2. 1 中学生の対日イメージの形成過程	81
5. 2. 1. 1 若さんの場合	81
5. 2. 1. 2 飛さんの場合	81
5. 2. 1. 3 明さんの場合	82
5. 2. 2 高校生の対日イメージの形成過程	82
5. 2. 2. 1 宇さんの場合	82
5. 2. 2. 2 雪さんの場合	83
5. 2. 2. 3 朋さんの場合	84
5. 2. 3 大学生の対日イメージの形成過程	85
5. 2. 3. 1 相さんの場合	85
5. 2. 3. 2 越さんの場合	86

5. 2. 3. 3 亮さんの場合.....	86
5. 3 考察	87
5. 3. 1 中学生について	87
5. 3. 2 高校生について	90
5. 3. 3 大学生について	93
第 6 章 総合考察.....	96
6. 1 本研究の要約.....	96
6. 2 考察	98
6. 2. 1 対日イメージの発達的变化について	98
6. 2. 2 対日イメージの形成過程について.....	101
6. 2. 3 本研究で得られた知見.....	102
6. 2. 3. 1 世論と個人のイメージ形成の相違.....	102
6. 2. 3. 2 認知要素に見られる評価の多様化.....	103
6. 2. 3. 3 「日本の大衆文化」と「中国にある日本」に対する解釈.....	104
6. 3 今後の課題.....	105
引用文献.....	108
参考文献.....	112
引用ウェブサイト	113
謝辞	114
付録 1 【研究 1】 中国の若者の対日イメージの形成年齢層.....	116
1. 1 自由回答式アンケート質問紙（中国語）	116
1. 2 自由回答式アンケート質問紙（日本語）	117
付録 2 【研究 2】 中国の若者の対日情報源の利用の実態.....	118
2. 1 選択肢式アンケート質問紙（中国語）	118

2.2 選択肢式アンケート質問紙（日本語）	121
付録3【研究3】中国の若者の対日イメージの形成過程	124
3.1 データの分析手順の例	124
3.2 テキストの再文脈化	139
3.2.1 中学生	139
3.2.1.1 若さん	139
3.2.1.2 飛さん	140
3.2.1.3 明さん	144
3.2.2 高校生	148
3.2.2.1 宇さん	148
3.2.2.2 雪さん	151
3.2.2.3 朋さん	155
3.2.3 大学生	161
3.2.3.1 相さん	161
3.2.3.2 越さん	165
3.2.3.3 亮さん	169

表一覧

表 3-1	イメージの上位カテゴリーの定義と代表的な下位カテゴリー	23
表 3-2	対象者の対日イメージ（数字は%）	25
表 3-3	情報源の上位カテゴリーの定義と代表的な下位カテゴリー	33
表 3-4	対象者の対日情報源（数字は%）	35
表 4-1	対象者の性別・学校段階別構成	54
表 4-2	対日イメージ記述統計量	55
表 4-3	対日情報源記述統計量	58
表 4-4	高校生の対日イメージの因子分析	59
表 4-5	大学生の対日イメージの因子分析	61
表 4-6	「日本の社会と文化」の項目比較	64
表 4-7	「日本のポップカルチャー」の項目比較	64
表 4-8	「中国にある日本」の項目比較	65
表 4-9	高校生の対日情報源の因子分析	66
表 4-10	大学生の対日情報源の因子分析	68
表 4-11	対日情報源の項目の比較	69
表 4-12	対日イメージと対日情報源の相互相関（高校生）	71
表 4-13	対日イメージと対日情報源の相互相関（大学生）	71
表 5-1	対象者リスト（インタビュー時）	78
表 5-2	大学生相さんの対日イメージの形成過程の分析手順（一部）	80

図一覧

図 1-1 相手国に対する印象	1
図 1-2 相手国への渡航経験がある人.....	3
図 1-3 ハルビン市の位置	5
図 1-4 本研究におけるトライアングレーションデザイン.....	9
図 3-1 対日イメージの増減傾向	29
図 3-2 対日情報源の増減傾向	39
図 5-1 対象中学生の対日イメージの形成過程.....	90
図 5-2 対象高校生の対日イメージの形成過程.....	93
図 5-3 対象大学生の対日イメージの形成過程.....	95
図 6-1 対象者の対日イメージの形成過程と自己成長の過程.....	102

第1章 序論

1.1 研究の背景

中国と日本の交流は、1972年の日中国交正常化を機に活発になり、それとともに日中関係やお互いの国に対するイメージに関する調査も増えてきた。その一環として、日中の相手国に対する認識に関する世論調査も数多く発表されているが、そのうち、規模が最も大きく期間が最も長い調査は、言論NPO¹が2005年から年に1回、2019年まですでに15年間連続して行ってきた「日中共同世論調査」である。この調査では毎年ほぼ同様な内容で設問され、ほぼ同じ²都市で実施されているため、そのほかの単発に行われている世論調査に比べ、より直観的に日中両国の国民における対日イメージの時系列変化を見ることができる。その中で、相手に対する良い印象、悪い印象をグラフにしたものが図1-1である。

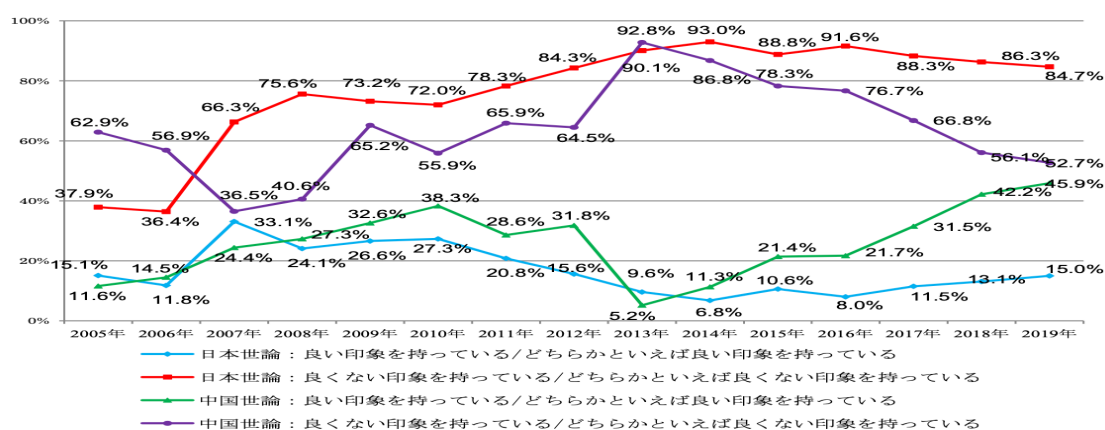


図 1-1 相手国に対する印象³

¹ 言論 NPO のホームページ (<https://www.genron-npo.net/about/>) によれば、言論NPOは、民間主導の中立・独立で、多くの自立した個人が参加し、国境を超えて多くの世界の知識層とも連携し議論を行う、シンクタンクである。2001年の創立以来、(中略)世界の主要なシンクタンクや多くの知識層と連携し、世界やアジアの様々な困難に立ち向かう、新しい流れをつくりだしている。活動内容は「民主主義を強くする」、「世界の課題を挑む」、「日本の課題を考える」、「北東アジアに平和をつくる」という4つの部分に分けられている。「日中共同世論調査」の目的は、「できるだけ全面的に、客観的に中国国民の日本に対する全体的イメージ、及び中日関係の現状とその行方に対する基本的な見方を明らかにし、中国国民の、中日関係の問題と日本の認識に対する思考パターン、その変化の傾向を解明し、的確に深い学術研究を展開することである。そして1つの側面から中日関係の動きを観察し、中日関係の健全な発展を推し進めるため、その政策に参考となる資料を提供することである。」

² 日本では、調査地は日本全国である。中国では、2005年～2014年の10年間の調査地は北京・上海・成都・瀋陽・西安の5都市であり、2015年～2019年の5年間の調査地は上記の5都市にさらに広州・武漢・南京・青島・鄭州の5都市が加えられ、合計10都市となっている。

³ 言論 NPO. (2019). 第15回日中共同世論調査.
<<https://www.genron-npo.net/pdf/15th.pdf>>(2020年3月20日)より

日本に対して良くない印象を持っている中国人は、2005 年の反日感情の高まりの年に 62.9%で、2006 年の日中間の首脳会談後の 2007 年に 36.5%に減少し、2010 年の中国漁船衝突事件後の 2011 年にまた 65.9%に上昇し、さらに 2012 年の尖閣諸島国有化後の 2013 年に過去最悪の 92.8%に達しているが、その後、2013 年から 2019 年まで、7 年間連続減少しており、2019 年 5 月には 52.7%まで減少している。中国人の持つ対日イメージの改善の背景には、日中関係の以外の要因があるのではないか。小林（2008）は 1988 年から 2007 年まで発表された各種の中国における対日感情に関する 28 に及ぶ世論調査の結果を総合的に分析した結果、日中関係と日本に対するイメージの間には関連があると結論づけたが、さらに、対象の住んでいる地域、年齢による差異も示唆している。地域や年齢は日本人との接触⁴機会に影響を及ぼす可能性があるので、イメージ形成を「接触経験の有無」という観点から見ていく。

「日中平和友好条約」締結 15 周年を祝して高校生を対象として行われた調査（朱，1995；陳，1995）を見ると、この時代は首都北京であっても、生徒の日本に対する知識、イメージは学校教育に大きく影響され、主に否定的なイメージである。2000 年初頭になっても、地方では歴史教育やテレビなどの限られた情報源しかなかったため、当時高校生になった筆者の日本人に対するイメージは、出身地ハルビンの中学校や高校⁵で受けた歴史の授業のもたらす残虐なイメージのみであった。しかし、2004 年に大学に進学し日本語専攻になり、日本での交換留学⁶のチャンスを得た筆者は、ちょうど反日デモによる日中関係が悪化した 2005 年⁷であったにも関わらず、当時の日中関係に影響されず、一般世論とは逆に、

⁴ ここで「接触」とは、日本人と直接に会って交流することである。

⁵ 筆者が生まれてから日本に留学するまでの生活を過ごした都市は中国黒竜江省にあるハルビン市である。ハルビン市は中国東北部にある副省級市（日本の県都に相当）であるが、副省級市においては、経済的には遅れている。また、親が中学校職員である家庭で育てられてきた一人っ子としての筆者は、普通中学校での学習歴を経て、高校受験を経て、省重点高校（ハルビンの 102 校の高校のうち難易度順位 3 位）に進学した。

⁶ 筆者は 2006 年 4 月～2007 年 3 月に、北海道の大学に交換留学生として留学し、日本語や日本文化についての留学生のために設置された科目を受講した。それとともに、大学主催の日本人学生との交流会やホームステイ、小学校・高校訪問などのイベントにも積極的に参加し日本人との直接交流ができた。さらに、ホテルのウェイトレスや英語の家庭教師などの大学との直接な関係のない経験を通して日本社会に触れることもできた。

⁷ 2005 年春、日本の国連安全保障理事会常任理事国入りに反対するデモが行われた。それは 1949 年中華人民共和国が成立以来、初めての本格的な反日デモであった。その後、日本製品不買運動、日本企業や日本料理店に対する破壊行為などが中国各地で続いた。日中関係は悪化の一途を辿った。

日本に対する親近感を感じ、多方面の日本を知ることにもできた。次は相手国への渡航経験がある人を調査したグラフ(図 1-2)である。2013 年頃から筆者のように直接日本に行って日本を体験できる中国人が急激に増えていることがわかる。

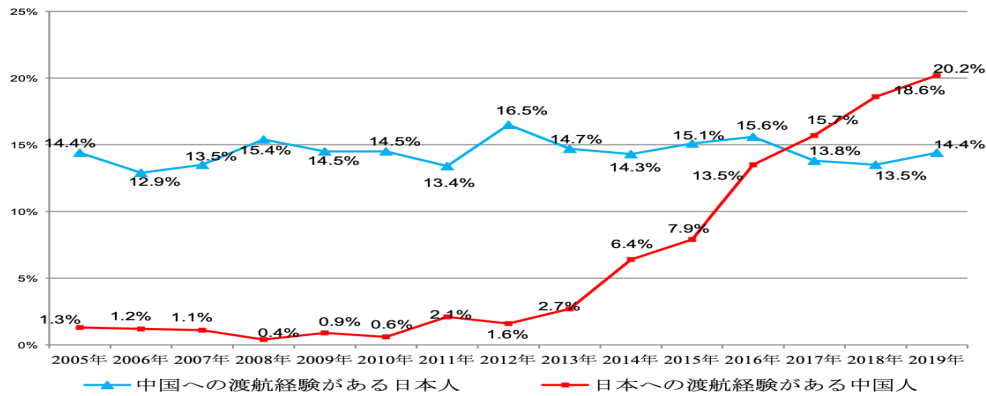


図 1-2 相手国への渡航経験がある人⁸

2005 年から 2012 年までの 8 年間は、「日本への渡航経験がある」中国人はわずか 1%～2%の割合に留まっていたが、2012 年から 2019 年までは、1.6%から 20.2%へと大幅に増加している。渡航理由は「観光」が突出しており、また、渡航時期は「最近の 5 年以内」との回答が 97.5%にもものぼる。その変化、渡航理由の証左となるものとして、例えば、日本政府観光局(JNTO)⁹ (2018) の訪日外客数¹⁰に関する統計データがある。それによれば、2013 年、2014 年、2015 年の訪日中国人客数はそれぞれ 131 万人、241 万人、499 万人と年々大幅に増加しており、2018 年は 838 万人を超える過去最高に達した。国・地域別で見ても中国は訪日外客数の最も多い国でもある。これは中国人の日本への関心の高まりを如実に反映した数字であると言える。

⁸ 言論 NPO. (2019). 第 15 回日中共同世論調査.
<<https://www.genron-ngo.net/pdf/15th.pdf>>(2020 年 3 月 20 日)より

⁹ 日本政府観光局(JNTO). (2018). 訪日外客数の動向.
<http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/pdf/2013_15_tourists.pdf>(2019 年 12 月 21 日)より

¹⁰ 訪日外客とは、国籍に基づく法務省集計による外国人正規入国者から、日本を主たる居住国とする永住者等の外国人を除き、これに外国人一時上陸客等を加えた入国外国人旅行者のことである。駐在員やその家族、留学生等の入国者・再入国者は訪日外客に含まれる。なお、上記の訪日外客数には乗員上陸数は含まれない。(参考：同注 8)

また、中国人留学生の数も、2008年に文部科学省が「留学生30万人計画」を策定して以来、在籍数が2008年から2017年までの10年間に於いて、約7万人から10万人弱まで増加し、2018年には11万人を超え、過去最多となった¹¹。しかし、中国国内で日本との接点のある中国人はどのくらいいるだろうか。ビジネスは大きな日本との接点であるが、若者はどうだろうか。

就労前の若者にとっては、日本語学習が日本との接点を得る1つのきっかけである。1972の日中国交正常化を機に、中国は第1次日本語ブームを迎えることになり、多くの大学で日本語教育が開始され、日本語学習者数も増加する一方である。2019年3月の時点で、中国の日本語教育機関数は2435で、教師数は2万220人であり、中国人の日本語学習者数は100万人弱に達している¹²。そのうち、「学校教育以外¹³」の学習者数は33.4%で、中学生と高校生の学習者は合わせて9.4%であったが、大学生は57.3%にも及んだ。しかし、中高生の日本語学習者の数は非常に少ないことから、大学生に入る前の中高生たちは、日本人との直接の接触機会は少ない可能性が高いことがわかる。

本研究のフィールドであるハルビン市に目を向けてみると、ハルビン市は中国黒竜江省の省都であり、最北部に位置する中国の副省級市（日本の県都に相当）でもある（図1-3で位置を示す）。面積は約53068km²、人口は951.54万人（2018年現在）¹⁴、2019年のGDP¹⁵は5249.4億元であり、中国の28の副省級市のうちの18位を占めているが、一人当たりのGDPは4.88万元で最下位の28位となる。また、以下2017年現在の統計デー

¹¹ 日本学生支援機構ホームページ。(2018). 外国人留学生在籍状況調査.
<http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html>(2019年12月21日)より

¹² 国際交流基金日本語国際センターホームページ。(2019). 中国(2019)日本語教育国・地域別情報.
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/china.html#KEKKA>>(2021年2月01日)より

¹³ 例えば、各種の一般成人向けの日本語クラスによる日本語学習者、日系企業や日本・日本人との取引が多い地元企業の中には、従業員向けに企業内日本語教育を受けている学習者、自学自習している学習者が挙げられる。(参考：同注11)

¹⁴ ハルビン市人民政府ホームページ。(2019). ハルビン統計年鑑2019.
<<http://www.harbin.gov.cn/col/col39/index.html>> (2020年12月20日)より

¹⁵ 搜狐。(2020). 2020年中国省都GDPランキング9.
<https://www.sohu.com/a/402679416_120607879>(2020年12月20日)より、以下の一人当たりのGDPも同じ出典

タであるが、在留邦人数¹⁶については、在留邦人が最大の上海の 43455 人に対して、ハルビンでは 120 人と遥かに少なくなっている。日系企業数は 27 社あるが、中国での日系企業数が 1 位の上海の 1 万 43 社、2 位の大連の 1550 社との差も大きい。日本の 19 の都市との直行便があり、週間直行便数が 300 便以上に達する上海に対して、ハルビンは日本の 4 つの都市との直行便が 4 都市合わせても週 8 便となっている。以上のように、位置、経済状況、在留邦人数、日系企業数、日本との直行便数から考え、中国の副省級市の中でハルビン市は日本や日本人との接触機会が少ない都市であると言える。



図 1-3 ハルビン市の位置

¹⁶ 日本外務省. (2020). 海外在留邦人数調査統計統計表一覧（令和元年（2019 年）以前）2018 年詳細版 2020 年 10 月 13 日.

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_003338.html>(2020 年 12 月 20 日) より、以下の日系企業数も同じ出典

日本への渡航経験がある中国人は増加しているとは言え、それでも2割程度の割合に留まり、日本や日本人と直接接触が皆無あるいはハルビン市のような接触機会の非常に少ない環境にいる中国人が大多数である。にもかかわらず、上記の日中共同調査の結果が表すように、近年、中国人の日本に対する印象は大幅に改善されている。つまり、接触経験の拡大に加え、さらに他の要因があることになるが、1つ考えられるのは情報環境の変化である。

筆者の中学校や高校時代と異なり、現在の中国には、急速な経済発展がある。この急速な発展の中で中国社会の情報化も急速に進んでいる。情報化は、「高度な情報通信・処理システムの普及に伴う現代社会の産業的、社会的、文化的変化」を指す(青木・梶原, 1999, p. 3)。1997年から毎年2回、中国のインターネット発展状況調査を行っている中国インターネット情報センターの統計報告によれば、2005年12月時点¹⁷のネットユーザー数は1.11億人で、普及率は7.9%にとどまっていた。それに対して、2020年3月時点¹⁸のネットユーザー数は9.03億となっており、ネット普及率は64.5%に達している。また、同報告(2020)の年齢別データでは、上位3位は、20代は21.5%、30代は20.5%、10代は19.3%であり、職業別データでは、学生が26.9%で最も多く、上述の日本語学習者数が少ない中学生と高校生を含む若年層はネットユーザーの4割以上を占めている。

情報化が進む中国社会の発展を考えると、対日情報を入手する機会はインターネットの利用によって増加するとともに、SNSなど個人が能動的に情報発信する機会も増えてきている。情報化社会の発展に伴い、依然としてインターネットは中央がコントロールしている部分も多いが、現在の中国社会では、世論もインターネットによって作られ、日中関係に影響することが可能になっている。このような情報化社会の中で、日本との直接接触経験がない中国の若者たちがどのように様々な情報を受け止め、どのような対日イメージを形成しており、そのイメージの過程はどのようにになっているのか明らかにする必要がある。

¹⁷ 中国互聯網絡信息中心(CNNIC). (2016). 中国互聯網絡發展狀況統計報告.
<<http://www.cnnic.net.cn/hlwfzyj/hlwxxzbj/hlwtjbg/201601/P020160122444930951954.pdf>>(2016年1月21日)

¹⁸ 中国互聯網絡信息中心(CNNIC). (2020). 第45回中国互聯網絡發展狀況統計報告.
<http://www.cac.gov.cn/2020-04/27/c_1589535470378587.htm>(2020年10月27日)

1.2 研究の目的及び意義

本研究は、青年期における対日イメージの発達的变化を検証するものである（イメージの定義については次章で詳しく述べる）。具体的には、青年期の 3 つの学校段階の対日イメージの相違と、対日イメージの形成における主体の視点を手がかりとして、以下の 3 点を研究目的とする。

研究目的 1：中国の若者の対日イメージの形成年齢層を知ること。

研究目的 2：中国の若者の持つ対日イメージの形成に影響を及ぼす情報源の利用の実態を知ること。

研究目的 3：中国の若者の対日イメージの形成過程¹⁹を解明すること。

これらの目的を達成するために、以下の 3 つの研究課題を立てて調査を実施する。

研究課題 1：自由回答式アンケート調査を行い、中国の若者における対日イメージと対日情報源の相違を学校段階別に調べることで、どの学校段階から対日イメージが形成されるかを明らかにする。

研究課題 2：選択肢式アンケート調査を行い、中国の若者における対日イメージと対日情報源の相関関係を調べ、情報源の利用の学校段階別の特徴を明らかにする。

研究課題 3：半構造化インタビュー調査を行い、自己認知と他者認知という観点から、中国の若者の認知の中で、対日イメージに関する思考や推論はどのような行われ、その思考や推論の変化によってどのような対日イメージが確立されるかを発達的に探究する。

本研究の意義は以下のようにまとめられる。第一に、接触経験の有無の観点から見て、日本との往来の機会が多い大都市ではなく、日本人との接触機会が少ない地方都市を研究

¹⁹ ここでいう過程は学校段階別に見るイメージの変化とイメージを形成する主体の視点から見る思考や推論の過程の 2 つの要素から構成されていることとする。

フィールドをとる本研究は、より一般的な中国の若者の持つ対日イメージに近づくことができる。第二に、情報化社会の発展を背景に、インターネットを利用し対日情報を入手できる若者の年齢層は大学生から高校生さらに中学生へと低年齢化している。従来の対日イメージの在り方に関する研究は、日本語研究の観点から日本語専攻の大学生を軸に調査したものが多いが、本研究は、これまで対象とされてこなかった中学生と高校生も対象とする。成長中の若者における対日イメージの発達的变化を示すことは本研究の独自性である。第三に、対日イメージの形成における情報源の役割を中心とする議論を越え、本研究は、イメージを形成する主体の視点から、対日イメージの形成過程を解明する。若者の推論や思考の行われ方を明らかにすることで、中国の中等教育と高等教育の現場におけるメディア・リテラシー教育や異文化理解教育の改善や発展に貢献すると期待される。第四に、国際関係論の視点から見て、隣国である日中両国の友好関係はますます重要になってきている。そのため、未来の日中関係を作る、現在青年期にある人々の相互理解がますます不可欠になってきている。

1.3 研究方法

本研究は上記の研究課題を遂行するために、混合研究法を用いる。Creswell & Plano clark (2006/2010, pp. 5-6)によれば、混合研究法は、「1つの研究、または順次的研究群での量的かつ質的データを集め、分析し、混合することに焦点をあてる」手法であり、その狙いは「量的・質的アプローチを用いる方が、どちらか一方だけを用いるよりもさらなる研究課題の理解を生むこと」にある。混合研究法デザインは主にトライアングレーションデザイン、埋め込みデザイン、説明的デザイン、探究的デザインという4つのタイプがあるが、本研究はトライアングレーションデザインを採用する。トライアングレーションの意義は、いくつかの手法を組み合わせたり重ね合わせたりすることで、得られるデータの妥当性を高めることができ、また、明らかにしようとしている現象の真実により近づくことが可能となることにある（筒井ほか、2005）。

本研究では、異なる学校段階における対象者の対日イメージの相違を客観的に捉えるために、研究課題1と研究課題2では、自由回答式アンケートと選択肢式アンケート調査による量的研究手法を採用する。イメージ形成に関する対象者の具体的な語りに基づき概念化するために、研究課題3では、半構造化インタビュー調査による質的研究の手法を用いる。量的データを分析するためのデータと、質的データを分析するためのデータをそれぞれ

れアンケート調査とインタビュー調査によって収集することで、データと方法のトライアングレーションを実施する（図 1-4）。

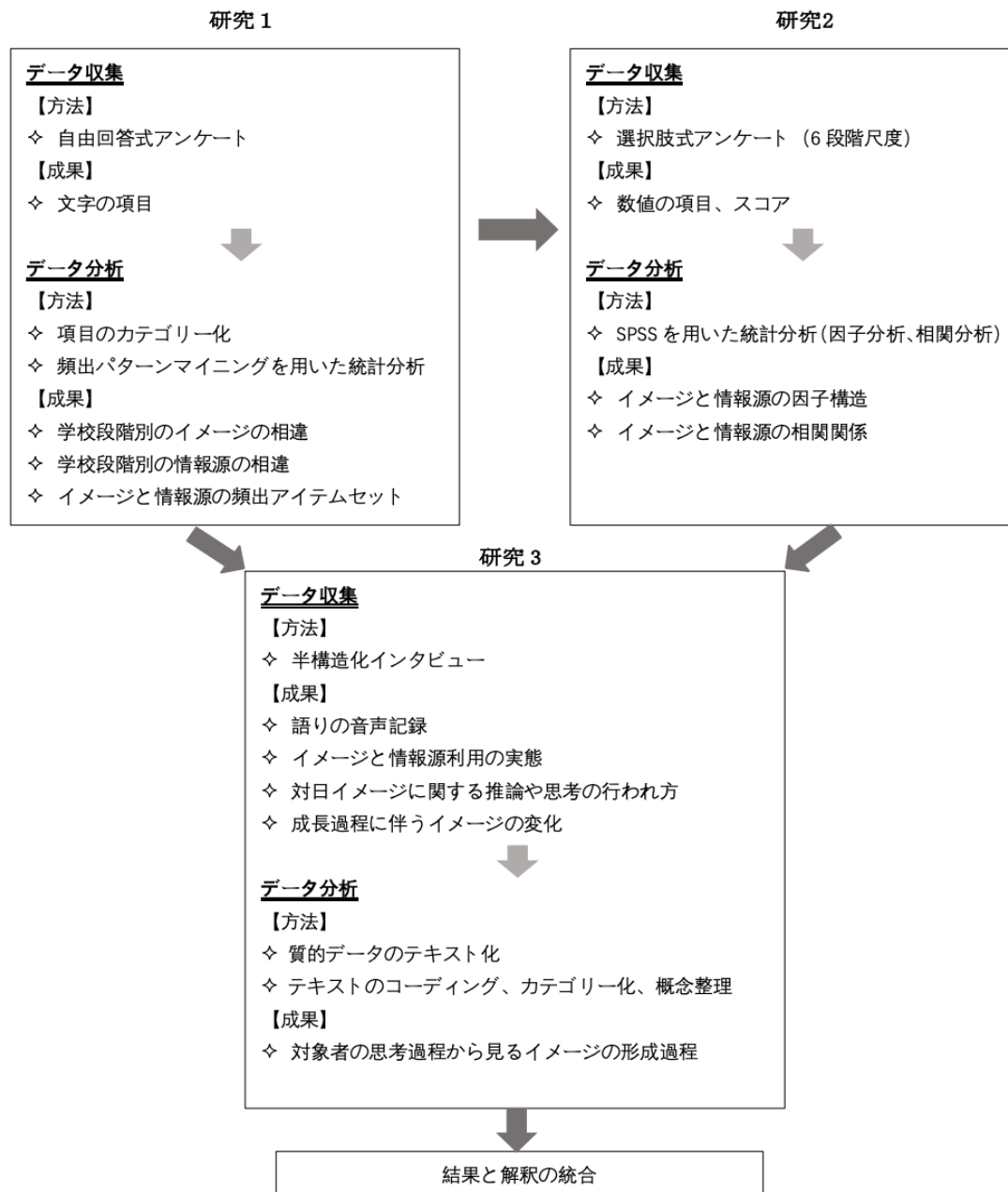


図 1-4 本研究におけるトライアングレーションデザイン

1.4 論文の構成

本研究は、青年期にいる中国の中学生・高校生・大学生における対日イメージの形成過程を検証するために、3つの研究によって多面的な検討を行った。論文の構成図は次の通りである。

第1章の本章では、研究の背景、研究の目的と意義、研究方法について述べ、論文の構成を示す。

第2章では、世論分析による全体の分析、対象者の地域、対象者の年齢による全体の傾向から個人へと関連領域を絞りながら、先行研究を概観し、本研究の位置づけを示す。まず、もっとも大きな領域として、マス・メディアによる世論をもとにした中国人の対日イメージ研究を通時的に確認する。次に、その要素の中から、地域と年齢という対象者の属性別の研究をまとめた上で、主体としての対象者の視点を扱った研究に絞っていく。以上の対日イメージ研究と合わせて、本研究は青年期における対日イメージの発達的变化を検証することを目的とするため、理論的枠組み構築に向けて、認知発達段階論に関する研究に注目して整理する。最後に、以上の先行研究における到達点と問題点をまとめ、本研究の位置づけを示す。

第3章の【研究1】では、中国の若者の対日イメージの形成年齢層を知ることを目的とし、まず、自由回答法により得られた対日イメージと対日情報源のデータから、コーディング作業により、カテゴリーを抽出する。次に、学校段階別の相違に着目して量的分析を行う。さらに、対日イメージの相違の要因を解明するために、中学生・高校生・大学生別の対日情報源を比較し、対日情報源が果たす役割を検討する。

第4章の【研究2】では、高校生と大学生の持つ対日イメージの形成に影響を及ぼす要素を知ることを目的とし、まず、先行研究を参考にした上で、【研究1】で分類したカテゴリーを用いて質問項目を作成する。次に、選択肢式アンケートによる量的研究を行い、高校生と大学生の多様化している対日イメージと対日情報源の因子構造を調べ、両者における対日イメージに与える対日情報源の影響の特徴を明らかにする。

第5章の【研究3】では、中国の若者における対日イメージの形成過程を解明することを目的とし、インタビュー調査を行い、学校段階別に見るイメージの発達的变化の過程とイメージを形成する主体の思考や推論の変化の過程を質的に分析する。

第6章では、本研究の要約、3つの研究の結果に基づく総合的な考察、今後の課題について述べる。

第2章 先行研究と理論的枠組み

1990年代に入ってから、中国人における対日イメージに関する調査研究は様々な分野で行われ、蓄積されてきた。ここでは、まず、対日イメージ研究における世論から個人へとという視点の転換の流れに従って検討する。また、本研究の理論的枠組み構築に向けて、認知発達段階論に関する研究に注目して整理する。

2.1 マス・メディアによる世論の形成から SNS などによる個人の発信まで

日中関係とイメージの関係性に注目する研究としては、劉(1995, 2003, 2005)、範(2007) 小林(2009)、楊・橋元(2010)らの研究が挙げられる。

劉(1995, 2003, 2005)は世論調査の結果に基づき、時系列で1990年代以降の中国人の対日感情の基本構造とその変遷を論じ、その傾向を「日本好き」から「日本嫌い」へと変化する過程と結論づけている。そしてその要因について、劉(2005)がマス・メディアの報道と中国の対日世論の変化が一致することを指摘した点は注目に値する。2005年の世論調査を用いた範(2007)の研究は、認知の観点からも、1990年代半ば以降の中国人の対日イメージの変化と日中関係には相関性があることを実証し、地域や対象の属性による多様性の可能性を指摘した。小林(2009)は、さらに1990年代から2008年の間に中国において実施された30以上の世論調査のデータを活用して、20歳代から70歳代以上までの幅広い年齢層をカバーし、対象者の属性別に一般世論における対日イメージの感情要素を鳥瞰し、歴史問題や誤解などの個人の「心情」の問題の存在を示唆した。楊・橋元(2010)はマス・メディア中心からインターネットへの情報源の多様化は、政治・歴史という国家レベルの次元から、個々の出来事について人間性をみる個人レベルの判断へと中国人を導いていることを確認した。ただし、個人レベルとはいえ、これはあくまでもSNSなどを通じた匿名性の高い一部の書き込みを基に論証したものである一方、石井(2006)は社会学的にインターネットと反日意識と愛国心、反日デモとの関連性を調査し考察した結果、対象者の属性(年齢、在住地域、性別)に日本のマス・メディアが指摘するようなインターネットとの相関性が見られなかったことを実証している。したがって、若者イコールインターネットの影響といった短絡的な結びつけは適切とは言えない。

以上のように、劉(1995, 2003, 2005)は世論の中での対日イメージがマス・メディアによって変化してきたことを実証し、小林(2009)はその変化を主に年代別に俯瞰するとともに個人の「心情」についても述べた。また楊・橋元(2010)はその世論のもととな

る情報源の多様化と、それに伴うイメージの多様化についての個々人の意見の存在を指摘した。これからさらに研究を進めるならば、対象者の属性に焦点を当てたアンケートやインタビューによる実際の個人の意識調査が必要になるだろう。そこで、対象者の属性別の研究を見てみよう。

2.2 対象者の属性別の研究

本節では、日本との接触の有無を軸に、居住地及び年齢に焦点を当てた研究を概観する。日本との接触に関しては大西(2014)の定義を参考とする。大西(2014)は、「日本語接触機会が少ない学習環境」は「1) 在留日本人が少なく、日本人と日本語でコミュニケーションをする機会が少ない。2) 日系企業、日本人観光者が少なく、仕事に日本語が活かせない。3) 地理的、経済的に日本を訪れることが難しい」の3点を挙げている。

片桐(2002)は、本研究同様、日本人との接触機会の少ない調査地(ハルビン市)で行われた研究である。日中両国の大学生のそれぞれが持つ日本人に対するイメージをアンケート調査によって比較検討することにより相互イメージのギャップを確認した。中国人大学生の日本人に対するイメージは肯定的、否定的両面があるのに対して、日本人大学生の自己イメージは大部分が中立的なものだった。その理由については、他集団についての情報が不十分であるせいで、そのためイメージが固定化しステレオタイプとなった可能性がある」と指摘した。王(2012)は国際関係論における外国イメージの形成と国際関係との関連を背景に、北京の大学生を対象に対日イメージについて調べた。その結果、同じ北京の大学生でも出身地による差異が確認され、イメージは理性的かつ客観的であると指摘している。理由としては出身地による日本人との接触機会の多少が挙げられ、地域の特徴を配慮した上での対日イメージ研究の必要性が示唆された。

以上の研究のいずれにおいても、対象者の居住地域によって対日イメージが異なる結果が検証されたことから、対象者の居住地域による日本人との接触機会について配慮した上で研究を行う必要があることがわかる。次に、2.1 で見たように、対象者の属性のうち、イメージ形成に影響を与える要素の1つである年齢に注目した研究を見てみよう。

日本人の外国や外国人に対するイメージを調べた大坪(2011)は、世代によるイメージの差を確認している。この結果を受け、本節では、まず、これまでにほとんど注目されていない高校生(朱, 1995)、中学生(井田, 1997; 中橋・潘・義永, 2015)を対象とする年齢別の先行研究を概観する。次に、中学生、高校生以外の若者も対象とする魏(2014)

と姜 (2017) の研究, 最後に, 韓国人の小・中・高・大学生を対象とした加賀美ほか (2008) の研究の位置付けについて述べる。

1995 年に端を発する中国の中高生に対する調査は, 1992 年の日中友好条約を記念するものである。朱 (1995) は, 北京の高校生の日本についての知識の程度を知るために, 自由記述によるアンケートを行った。年代的に古く, 研究というよりは報告だが, 高校生を対象とする調査としては先駆的なものであり, 学校教育と生徒の知識の間に相関性を認めた結論は注目すべきである。井田 (1997) は, 上海の都市部と郊外の小学生と中学生, 及び教師を対象にアンケートによる対日イメージ調査を行った。その結果, 小学生から中学生になるにつれ, また都市部から郊外に行くにつれ, 否定的なイメージが多くなることがわかった。その理由としては, 年齢による戦争などについての知識の増加に加えて, 郊外では都市部よりも知識を得る手段が限られ, 教師の対日イメージがそのまま生徒に影響していることが指摘されている。片桐 (2002) の指摘のように, 情報不足がゆえにステレオタイプ化されたイメージが形成される可能性が考えられる。中学生を対象とする中橋ほか (2015) でも, 日本・米国・中国の中学生を対象としたアンケート調査の結果, その国の人々との直接的な交流を経験する前のメディアや周囲の大人の影響が要因として挙げられている。中国人の中学生は日本の豊かさを評価しており, 日本のマス・メディアでしばしば指摘されている中国人の反日感情は確認されなかった。中学生を対象とするこの研究は, 中学生と一般世論における対日イメージの齟齬を示唆しており, この知見を踏まえて, 本研究では高校生と比較したいと考える。

中学生, 高校生や大学生のいずれかではなく, この 3 つの学校段階を幅広くカバーする研究としては, 魏 (2014) と姜 (2017) の研究が挙げられる。魏 (2014) の研究は 2012 年当時の日中関係悪化を背景に, 中国の若者の日本のポップカルチャーの受容と対日イメージの関連性について調べたものである。その結果, 若者はアニメを通して政治や外交と異なる次元で日本をポジティブに捉えていることが明らかになった。居住地域における対日感情の差も示唆されてはいるが, 地域別の分析は行っていないため, さらに検討する余地がある。姜 (2017) は日本と接触機会の多い都市である北京に居住する中学生・高校生・大学生・大学院生 (修士課程) という幅広い学校段階を対象に, 国際政治学の観点から, 日本国や日本人に対するイメージについて調査した。その結果, 日本国と日本人の双方に肯定と否定の両方の面が見られ, 影響を与える情報源としてはインターネットやテレビなどの可能性が示唆された。しかし, 学校段階別の比較検討は行われていない。

韓国の小・中・高・大学生の日本イメージの形成過程を量的に分析した加賀美・守谷・岩井・朴・沈(2008)の研究も参考に値する。学校段階別の相違を考察し、否定的対日イメージは小学校から形成され、中学生が最も強く、高校生から大学生までは固定化されていくプロセスであると結論づけた。また、否定的イメージが強調されやすい一因としては、「日本と韓国のマス・メディアのステレオタイプの報道のためである」と分析している。異文化理解教育の視点からなされた本研究は、研究対象を若者に絞ることにより、個人の発達段階別に成長中の若者における対日イメージの形成過程を検討するという新たな視点を示している。中国の若者を対象とする研究でも、同様の調査方法を用いて新たな知見が得られることが期待される。

本節で述べた先行研究は全て対象が若者であるという共通点がある。とりわけ加賀美ほか(2008)の研究は、イメージ形成を発達段階別に検討する意義を示している。次に、イメージを形成する主体としての若者の「個人」の視点を扱った研究を見てみよう。

2.3 主体としての対象者の視点を扱った研究

社会心理学分野でのイメージ研究においては、これまでメディアや学校教育などによる影響要因が多く扱われていたが、江(2014a)は「日中関係・日中間の重大事件に対する評価」と「愛国心、国際志向、自国評価、生活満足度」などの「自己評価」という意識面の要因がイメージ形成に影響を与えていることを確認した。ただ、江(2014a)は単純化された4要素によるSD方式を採っているため、項目はそれぞれの要素の一部しか測定できず、得られたイメージの全体像は要素的な全体像であり、内容的な全体像とは言いがたい。上述の4要素にさらに他要素を追加し補完する余地があろう。江(2014b)はさらに上記の研究成果を踏まえて、アンケートによる量的研究を行い、単一の情報源は肯定的と否定的イメージともに相関係数が低いことから「中国人の対日イメージは複合的な情報環境において形成された」と結論づけ、中でも、「家族や友人との会話」を例とした直接接触経験と対日イメージの形成の間の肯定的な関連性を確認している。この研究は情報の受け手の立場から中国人の対日イメージと対日情報源の相関関係を検証している。しかし、これまで述べてきた全ての対日イメージに関する研究は統計を用いた量的研究であることから、量的研究による相関関係の検証の結果及び情報源からイメージ形成に至るまでのプロセスは、情報の受け手の認知という視点から質的研究によって詳しく調査・分析する余地がある。

日本人と接触経験のある若者を対象とするイメージ形成のプロセスについての研究は、まず、中国人留学生を対象とする横田・Hennessy (2012)、松田・安 (2018)、青木・安 (2019) の研究が挙げられる。横田・Hennessy (2012) は、中国在住の一般の中国人よりも中国人留学生のほうが肯定的イメージを持っていることが明らかにした。松田・安 (2018) と青木・安 (2019) では、留学生は日本や日本人との接触経験によって、訪日前のステレオタイプのイメージから、それとは異なる日本社会の実情を反映するイメージを持つようになったことが実証され、さらに日本滞在期間が長くなるにつれて日本の伝統文化への理解が深まることも確認された。それでは日本滞在経験のない大学生の場合はどうだろうか。

中国在住の大学生を対象とする外国語教育（この場合は日本語教育）の視点からなされた研究としては、見城 (2007)、見城・三村 (2010)、張 (2013)、喬 (2014)、杜 (2017) らが挙げられる。見城 (2007) は、自由回答式アンケートにより日本語専攻の大学生の「日本イメージ」を調査した結果、伝統文化や戦争に関わるイメージだけではなく、日本の現代社会や文化についてのイメージも顕在していることを明らかにした。見城・三村 (2010) はさらに調査対象を細分化し、中国人大学生のうち日本語専攻生・日本語学習生と日本語非学習生の違いを検証した。その結果、日本語学習歴の長さ、つまり日本に対する知識がイメージの形成に大きな影響を与えていることが分かった。張 (2013) は、中国の日本語専攻生を対象に、量的研究と質的研究の併用により対日態度と情報源の相関関係のみならず、同じ対象者に対するインタビューにより、認知的視点から態度の形成過程も明らかにした。対日情報源の経時的変化と態度の形成過程を調べた結果、学年が上がるにつれて、肯定的から否定的、中立的態度へと変化が見られ、「中等教育やメディアへの依存度が低くなる」ことと「日本人との直接接触が増加する」ことが顕著であることが分かった。対象が日本語専攻生なので、日本のポップカルチャーへの傾倒の指摘は当然ともいえる一方、他の研究とは逆に、接触経験が否定的態度の形成に影響を与えることもあるという指摘をしている。同様に、喬 (2014) も、日本語学習者の大学入学前と入学後における学習者の対日イメージを調べた結果、「日本人と中国人」のステレオタイプの図式から「個人と個人」の関係へと変容することを示すと同時に、学習者がイメージを形成する能動的な主体であるという新たな視点を提示した。それが「自立精神の確立とも関係がある」という指摘に関しては、大学入学前の中学生、高校生も比較対象とすることでより明確になると考えられる。杜 (2017) の研究は、中国在住の大学生および学院生の「日本観」の変遷及び

その影響要因の探究を試みている。大学入学後、日本についてのイメージは様々な日本人や日本についての知識との接触経験とともに変化し、対象者が変化する動態であることが確認され、喬（2014）の結論を裏づけている。しかし、単に「多様である」とされた大学入学前のイメージの形成され方については、さらに詳しく分析する余地がある。

以上、江（2014a, 2014b）の主体の視点から対日イメージの影響要因について考察したが、これに欠けている主体の視点からそのプロセスを探る研究として、横田・Hennessy（2012）、松田・安（2018）、青木・安（2019）があり、それにより接触経験によって形成された留学生の対日イメージの特徴が明らかになった。また、中国にいる日本語専攻生を対象とした見城（2007）、見城・三村（2010）、張（2013）、喬（2014）は「日本語学習」という影響要因を切り口にして、日本人と接触経験のある対象者の対日イメージの形成における個人の能動的な役割の重要性を示した。杜（2017）は対象の範囲を広く一般大学生とし、イメージ形成のプロセスにおける個人の役割を説明したが、さらに異なる発達段階に分けて、日本人と接触経験のない中国の若者におけるイメージの形成過程について、中学生以降の認知的能力の発達と共に検討する必要がある。

2.4 理論的枠組み構築に向けて—認知発達段階論に関する先行研究

人間の認知的能力とは、人間が「外界から様々な情報を入力し、それに処理や操作を加え、それに基づいて判断を行う」²⁰認知機能を支えるシステムが発揮する能力のことをいう。認知的能力の発達に関する最も体系的な理論は、「認識はいかに獲得されるか」という問いに答えるピアジェの認知発達段階論²¹（Piaget & Inhelder, 1966/1969）がある。この理論によると、認知的能力の発達段階は、感覚運動的段階（0～2歳頃）、前操作的段階（2～7歳頃）、具体的操作段階（7～11歳頃）、形式的操作段階（11歳頃以降～）の4つの段階に区分される。ピアジェらによると、具体的操作段階では、子供は具体的対象が眼前に存在すれば論理的思考ができるが、抽象度の高い課題であれば理解しにくくなる。そ

²⁰ 青年心理学事典（久世・齋藤，2000，p. 120）

²¹ しかし、足立（1994）は、年齢と対応させて発達段階を記述するという点に対しては、その後、多くの認知心理学研究者から批判されていると述べている。例えば、理論が要求する一貫性が実験課題に欠けていること、年齢段階と発達段階と結びつける出張の不適切さ、子供の問題が領域の異なる科学的概念と推論能力と同時に混同されることが挙げられる（足立，1994）。また、ピアジェが規定したこの段階の思考に到達できる子供は実際に極めて少ないという指摘もある（青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 120）。

れに対して、形式的操作段階に入ると、具体的な対象に拘らず、子供は論理的命題を仮説実験したり、組み合わせ可能な全ての結合を論理的に作ったりして、仮説演繹的思考ができるようになるという。形式的操作段階は青年期に相当する。

青年期については、青年心理学事典²² では以下のように述べられている。青年期は、社会的・政治的変動の中で発達し、概ね 10 歳から 20 歳代半ばまで、つまり、思春期的変化の始まりから 25, 26 歳までの児童期から成人期への成長と移行の時期である。この移行期は「生物的移行」、「認知的移行」、「情緒的移行」と「社会的移行」の 4 つの時期でもあるとされているが、ここでは本研究に関係のある「認知的移行」と「情緒的移行」の 2 つの時期についてより詳細に見ていこう。まず、認知的移行の場合は、ピアジェの発達段階論に基づいて言えば、青年期は認知能力が発達し、抽象的な思考ができるようになる。そうすると、哲学や政治などの領域などでの課題解決能力が発達し、それらの自然や社会の問題に関心を寄せ、抽象的な概念について理解できるようになる。また、同時に青年期は情緒的移行の時期でもある。青年は自分に対する見方や独立性を発揮する能力が発達することにより、自我を発見し、自己を再定義していく。以上の 2 つの移行期の特徴からも分かるように、青年期の特徴は内面生活の展開にある。この内面生活の特徴から青年期を区分すれば、青年期は思春期的な主観的特徴を示しやすい青年期前期、内面的世界の獲得、発見と展開の青年期中期、外界と内面の調和とアイデンティティ達成の青年期後期に分けられる。学齢では、それぞれの区分に該当するのは中学生・高校生・大学生である。

この青年期におけるイメージ形成については、小城ほか (2010) の調査によると、どの世代においても、自身が青年期に該当する 10 代から 20 代に体験した社会的出来事を鮮明に記憶する傾向があるという。それゆえ、個人のイメージの基本構造はおもに幼年時代に築かれるが、実際には幼年期より青年期のほうが、イメージの大部分を決めるのに決定的であるという議論がある (Boulding, 1980, p. 69)。

²² (久世・齋藤, 2000, p. 4-5, 149)

2.5 本研究の着眼点

2.5.1 イメージの定義

辞書的定義によれば、イメージとは、「①心の中に思い浮かべる姿や情景。心象。形象。イマージュ。②心の中に思い描くこと」である（『大辞林』²³）。しかし、イメージについては、国際関係学、教育学、異文化コミュニケーション、心理学など様々な分野で使い方が異なる。社会心理学分野の御堂岡（1992）は、イメージを「ある人が別の文化集団の文化、成員について持つイメージの複合体が、その人のその文化集団についての理解の仕方」であると指摘し、「認知要素（対象の属性についての概念）、評価要素（優劣の評価）、感情要素（好悪の感情）、行動要素（行動意図）」に分けられるとした。対象者主体の視点からイメージを扱った江（2014a）の研究では、御堂岡（1992）の定義に基づき、「中国人の日本イメージ」を「中国人が異文化集団としての日本についての理解を指す複合的な概念」としている。また、御堂岡（1992）のいう4要素における関連性を検証した江（2014a）は、先行研究で多く指摘されている感情要素と行動意図の間の負の関係のほか、中国人が認知要素と評価要素に基づいて日本に対する行動を行う可能性を示唆した。認知要素と評価要素はイメージ形成の基礎となると言えよう。本研究では、御堂岡（1992）の4要素理論と江（2014a）の定義を参考にし、中国における若者が抱く対日イメージを、中国の若者が日本や日本人に対する認知要素および価要素から構成された複合体である、とする。

2.5.2 本研究における研究対象の居住地域及び年齢層

2.2 で紹介した若者を対象とする先行研究は、若者の対日イメージの特徴を明らかにしたが、発達段階別のイメージ形成の特徴は検証されていない。また、若者の年齢層を幅広くカバーする研究では、対象者の年齢層に重なりがあるが、異なる年齢も含まれているため、若者の年齢層を明確にする必要がある。2.4 で述べたように、青年期における内面生活の展開の特徴によって、青年期は青年期前期、青年期中期、青年期後期に分けられる。学齢では、それぞれの時期の若者は概ね中学生・高校生・大学生に相当する。また、先行研究で明らかになった「日本人との接触機会が少ない環境」の定義と接触機会の有無と対日イメージの形成との関連を踏まえて、本研究では、日本人との接触機会の少なさという

²³ <https://sakura-paris.org/dict>

点で一般的な中国人の代表性を持つハルビン市を調査地に選定し、研究対象の若者を中学生・高校生・大学生に分ける。

2.5.3 本研究における対日イメージの形成を見る視点

2.4 で述べたように、青年期の到来とともに成立する思考の段階はピアジェのいう形式的操作段階に相当する。この認知的能力の発達過程においては、思考の能力が変化している。思考の能力が変化していく中で、人間は学習や経験の積み重ねによって成長していく。その成長過程において、ある人は、誕生時から大人になってから、その人のある事象に対するイメージを能動的に理解することによって、そのイメージの内的意味が徐々に豊富になっていくと言えよう。2.2 で述べた青年期の若者における認知的移行と情緒的移行の特徴に注目すると、青年期の若者の自己個体化するプロセスにおいて、イメージを形成する主体は何を経験し、どのように考えて対日イメージを形成しているかについて主体の視点から検討する必要がある。

先行研究では、主体の視点から、中国人大学生におけるイメージ形成のプロセスが明らかにされた。世論ではなく主体の視点からイメージの形成過程を解明することは新たな視点ではあるが、大学生を対象とする形成過程についての研究では、大学入学前のどの段階でイメージがどのように形成されたかについては解明されていない。前節で述べた青年期のイメージ決定に与える役割から考えて、若者の対日イメージは、青年期でどのように、どの程度、形成されているのだろうか。今まで「青年期」と一括りにされてきた発達段階のなかに、より細かな変化が見られるのではないか。これら 2 つの問いに答えるために、対日イメージの発達の变化も調査する必要がある。

第3章 【研究1】中国の若者の対日イメージの形成年齢層

中国の若者の対日イメージの形成年齢を知ることを目的とした【研究1】では、自由回答法により得られた質的データを学校段階別の相違に着目して量的に処理し、また、その要因を解明するために、中学生・高校生・大学生別の対日情報源を比較することによって、対日イメージの形成に対するそれぞれの段階での対日情報源の役割を比較し考察することを研究課題とする。

3.1 研究方法

3.1.1 質問紙の作成と調査概要

第2章で述べたように、社会的態度の研究においては、イメージを認知要素、評価要素、感情要素、行動要素に分けることができる。御堂岡（1992）によれば、イメージの測定法としては、自由回答法で主としてイメージの認知要素と評価要素をとらえることができるとしている。よってイメージの認知要素を測定する【研究1】では、自由回答法によるアンケートを用いる。自由回答法とは「質問文に対する回答を回答者に自由に答えてもらう方法である。（中略）回答として定量的データと定性的データのいずれかを得たいのかによって、数値記入回答形式と文字記入回答形式」に分けることができる（辻・有馬，2006，p.73）。本研究はこのうち文字記入回答形式で調査を実施した。

【研究1】で使用した質問紙は中国語で作成し、フェイスシートと質問文の2つの部分からなっている。質問文では、対日イメージと対日情報源を問う2つの質問に対して中国語で回答してもらった。質問項目は以下のとおりである。

(1) フェイスシート：性別・生年月日・学年

(2) 対日イメージと対日情報源の質問文

①あなたが「日本」と聞いてイメージするものを自由にご書いてください（回答は多ければ多いほどよい²⁴）。

②あなたは主にどのような手段を通して日本についての情報を得ていますか²⁵。

²⁴ イメージの認知要素の全体像を把握するため

²⁵ 情報源の全体像を把握する上で、イメージと情報源の関係を調べるため

本調査は、2014 年 6 月から 7 月にかけて、中国黒竜江省ハルビン市に居住する中学生・高校生・大学生計 728 名（男子 356 名、女子 372 名）を対象に、対日イメージ及び対日情報源の実態に関する質問紙調査を実施した。調査にあたって、筆者は各教育機関の担当者に事前許可を得た後、計 7 校（中学校 1 校・高校 2 校・大学 4 校）を訪問し調査を行った。そのうち、①A 中学校²⁶の 2 年生と 3 年生計 257 名にそれぞれ 2 回の調査を実施した。②A 高校の 1 年生と 2 年生にそれぞれ 2 回、B 高校の 1 年生と 2 年生にそれぞれ 1 回、両高校合わせて計 254 名を対象に調査を行った。③A 大学・C 大学・D 大学それぞれ 2 回、B 大学 1 回計 217 名の学部 1 年・2 年・3 年の大学生を対象に調査を実施した。

3.1.2 分析方法

3.1.2.1 質的分析

対象者全員の回答を原文のままテキストとして入力した。その後、コーディング作業により中学生・高校生・大学生別にカテゴリ抽出し、最後に、全体を合わせて内容分析を行った。具体的な分析手順は、まず調査者、調査者の指導教員、調査者と同講座に属する大学院生計 3 名でテキストをもとに下位カテゴリを抽出し、次にそれらを包括する上位カテゴリを検討した。さらに、分析に関係していない研究協力者 4 名が上記の手順で再度下位カテゴリと上位カテゴリを抽出した。ずれの生じたものに関しては全員で討議し最終的な結果を決めた。最後に、下位カテゴリの内容によって、カテゴリを肯定的、中立的と否定的に分類した。なお、中立的なカテゴリについては、肯定的と否定的な下位カテゴリが混在しているものと肯定的か否定的のどちらか明確になっていないものをそれに分類することにした。

3.1.2.2 量的分析

頻出パターンマイニングを用い、上述のコーディング作業によってカテゴリ化したデータを量的に分析することにする。

1) 頻出パターンマイニング

膨大なデータの中から情報、知識を取り出す技術がデータマイニングであるが、パターンマイニングはその中でも特に、データ中に高頻度で出現する特徴的なパターンを見つける技術である。頻出パターンマイニングとは、データ集合中で、一定頻度以上で現

²⁶ ハルビンでは、義務教育は小学校 5 年と中学校 4 年の「5・4 制」である。

れるパターンを列挙し、抽出する手法である。それにはデータに隠されているが役立つような部分的傾向知識を発見し（鷲尾，2007），物事の関連を見出すことができる²⁷。本研究では、この分析方法を用い、対日イメージと対日情報源の同時出現パターンを抽出することにより、対日イメージと対日情報源の相関関係を探ることにした。

2) 相関ルール

バスケット分析による相関ルール抽出は頻出パターンマイニングの基礎である。相関ルールは、ある事象と他の事象の間における相互依存性と関連性を反映している（Agrawal 他 1993）。もし、2 つ（あるいは 2 つ以上）の事象に一定の相関関係があれば、その中のある事象によってある事象を予測することができる。そのため、 $I=\{I_1, I_2, \dots, I_m\}$ ($I \neq \emptyset$) を m の異なるアイテムの集合²⁸とする。 D ²⁹を全トランザクションの集合とする。ここで各トランザクション T は I の部分集合である。本研究においては、相関ルールによって「アイテムの支持度」と「相関ルールの支持度」を算出する。

まず、アイテム X の支持度 $\text{support}(X)$ ³⁰とは、抽出される X がトランザクション D に出現する頻度を表す値であり、 X の重要度を説明している。 $X, X \subset I$ に対して、 $\text{count}(X \subseteq T)$ を全トランザクションの集合 D に含まれている X の個数とする。本研究において、 $X=24$ カテゴリーの対日イメージのうちの 1 カテゴリー/27 カテゴリーの対日情報源のうちの 1 カテゴリー；トランザクションの集合 D には 4 種類あり、それぞれ中学生・高校生・大学生・全対象者³¹の人数である。公式は以下のとおりである。

$$\text{support}(X) = \frac{\text{count}(X \subseteq T)}{|D|}$$

²⁷ それが最初にバスケット分析の顧客の同時購買パターンの抽出に用いられた。例えば、「おむつを買った人はビールもよく一緒に買う」という頻出同時購買パターンを見出すことができた（鷲尾，2007）。

²⁸ 1 つの i_k ($k=1, 2, \dots, m$) を 1 つのアイテム(Item)と呼ぶ。そのアイテムの集合 I をアイテムセットと呼ぶ。

²⁹ 全トランザクションの集合 D はトランザクションの全体から構成されている。全トランザクションの集合 D に含まれたトランザクションのフォーマットを $|D|$ で表記される。

³⁰ また、アイテムセットの最低支持度(Minimum Support)は指定され、 $\text{sup}_{\min}$ と記される。それはアイテムセットが満たすべき最低重要度を測るために用いられる。

³¹ 全対象者は中学生・高校生・大学生全員のことを指す。下同。

また、 $X \subset I, Y \subset I$ でかつ $X \cap Y = \phi$ を満たす物を相関ルール(Association Rules) $R: X \Rightarrow Y$ と呼ぶ。相関ルール R の支持度は D の中 X と Y を同時に含むトランザクション数の割合である。本研究において、 $X=24$ カテゴリーの対日イメージのうちの 1 カテゴリー； $Y=27$ カテゴリーの対日情報源のうちの 1 カテゴリー；トランザクションの集合 D は 4 種類あり、それぞれ中学生・高校生・大学生、全対象者の人数である。公式は以下のとおりである。

$$Support(X \Rightarrow Y) = \frac{count(X \cup Y)}{|D|}$$

相関ルールの抽出には 2 つのステップがある。まず、データの中から全ての頻出アイテムセット³²(Frequent Itemsets)を抽出する。それから、頻出アイテムセットによって相関ルールを抽出する。

3.2 結果

3.2.1 対日イメージの実態

本節では、対日イメージについては、カテゴリー抽出の結果、学校段階別の比較、カテゴリー別の分析に分けて述べる。

3.2.1.1 対日イメージのカテゴリー抽出

質問 1 の回答を分類した結果、上位カテゴリー 24 と下位カテゴリー 242 を確定した。上位カテゴリーとその定義そして代表的な下位カテゴリー、評価は表 3-1 のとおりである。

表 3-1 イメージの上位カテゴリーの定義と代表的な下位カテゴリー

上位カテゴリー		定義	代表的な下位カテゴリー	評価
1	戦争・歴史認識	日中間における戦争に関する事柄と日本政府の日中戦争に対する認識などに対する批判を表すもの	日中戦争、南京大虐殺、日本軍、日清戦争、史実を認めない、故意に歴史を歪曲する、教科書の改竄	否定的
2	大衆文化	日本のアニメ、漫画、ゲーム、テレビドラマ、映画、歌など今の日本ではやっている文化を表すもの	アニメ、漫画、推理小説、ゲーム、テレビドラマ、スリラー映画、歌、芸能人	肯定的

³² アイテムセット I の相関ルール支持度は予め指定された最少支持度に満たしているとし、 I は頻出アイテムセット(frequent itemset)である。上述のアイテムセットの最低支持度と同様に、 sup_{min} と記された相関ルールの最低支持度は予め指定されたもので、頻出アイテムセットの最低支持度を測るものである。それは相関ルールが満たすべき最低重要度を測るために用いられる。

3	政治・領土問題	尖閣諸島, 日中関係など中国に関わる問題と捕鯨問題, 原発事故など現代日本における問題を表すもの	日中関係, 尖閣諸島は中国の領土だ, 無責任な政府, 原発事故, 捕鯨, 憲法改正, 安倍晋三, 右翼勢力	否定的
4	代表的な風物	桜, 富士山という中国人の日本をイメージする最も代表的なもの	桜, 富士山	肯定的
5	食文化	日本特有な食べ物や日本の食習慣	寿司, ラーメン, 清酒, 抹茶, 蛸焼き, 吉野家	中立的
6	自然・地理環境	日本の自然条件や地理的環境を表すもの	面積が小さい, 地図, 島国, 海, 北海道漁場, 自然災害が多い, 地震, 津波, 火山	中立的
7	科学技術・高性能高品質	日本の先端技術や, 日本の性能や品質のよい品物を表すもの	科学技術, 新幹線, 自動車, 電化製品, 腕時計, 建築の質がいい, 質のいい眼鏡	肯定的
8	伝統文化	伝統衣装, 国技など日本の伝統的な文化を表すもの	下駄, 和服, 相撲, 柔道, 剣道, 空手道, 生け花, 茶道, 神社, 鯉のぼり	中立的
9	秩序・礼節・習慣	日本社会に昔から今に伝えられた秩序, 礼節, 習慣	整然とした社会環境, 安全で治安がいい, 海賊版がない, 清潔, 礼儀正しい, まじめ, 誠実	肯定的
10	民族・言語	日本人の外見的特徴, 日本民族の性質, 日本語を表すもの	日本人, 日本人女性, 背が小さい, 日本語, 団結精神, 大和民族, 真似するのが上手	中立的
11	反日感情	日本への反感を表す行動や侮蔑語などを表すもの	日本は中国に非友好的, 中国をいじめる, 日本製品を買わない, 小日本, 侮蔑語 (王八蛋, shit)	否定的
12	経済	日本の経済に関わるもの	経済の発展, 工業	肯定的
13	観光	日本の観光都市や, 名所など観光の象徴となるもの	きれいな風景, 東京の夜景, 東京, 京都, 北海道, 沖縄, 大阪城, 銀座, 温泉	肯定的
14	伝統的思想	武士道や男女地位差など日本人の代表な伝統的な思想に関するもの	武士道 (武士, 切腹, 武士刀, 日本刀, 『菊と刀』), 日本女性の地位, 亭主関白	中立的
15	性風俗	成人向け映画, 風俗業に関わるもの	風俗業, 成人向け映画, 18歳未満禁止	中立的
16	生活環境	日本の住環境など日本の生活で頻繁に接するもの	自然環境がいい, 海産物が肉より安い, 一戸建て, 和室, 畳, 自販機	中立的
17	ファッション	日本ではやっている洋服, 洋服のブランドや化粧法など	学校の制服, ミニスカート, 洋服のブランド品, Evisu ³³ , メイク	中立的
18	日本の歴史	日清戦争以前の日本の歴史に関わる歴史に関するもの	日本は中国を見習った, 鑑真の渡日, 日本の戦国時代, 明治維新以後	中立的
19	文学	日本で有名な作家や文学作品など日本の文学に関するもの	文庫本, 芥川龍之介, 夏目漱石, 川端康成 (ノーベル賞受賞), 村上春樹, 『ノルウェイの森』	中立的
20	現代社会	日本の現代社会で優れている面と社会問題を表すもの	自殺率が高い, 仕事のストレスが大きい, ヤクザ, 電車内の痴漢, 教育レベルが高い	中立的
21	親近感	日本に親しみを感じさせるもの	『愛情公寓』 (ドラマ) の関谷, 矢野浩二	肯定的
22	日本の象徴	国旗と天皇	天皇, 国旗	中立的
23	抗日ドラマ・映画	主に日中戦争に関するテレビドラマ・映画	「抗日神劇」 ³⁴ , 映画『南京! 南京! 』	中立的
24	不詳	日本との関わりが不明なもの	テコンドー, 人, 免税店, 瓶	不明

³³ 日本の洋服のブランド

³⁴ 過剰にグロテスクで荒唐無稽なテレビドラマ

3. 2. 1. 2 学校段階別の対日イメージ比較

本結果は質問項目 1 に対して中学生・高校生・大学生・全対象者から得られた全ての回答を分析したものである。対象者の対日イメージとしては、計 3526 例のアイテムが収集された。上述のアイテム X の支持度の算出法によって、中学生・高校生・大学生・全対象者別に、24 の上位カテゴリーそれぞれのアイテムの支持度を算出し、全対象者の支持度の高い順に整理した結果は表 3-2 のとおりである。

表 3-2 対象者の対日イメージ（数字は%）

対日イメージ		中学生	高校生	大学生	全対象者
1	戦争・歴史認識	72.4	59.8	57.1	63.5
2	大衆文化	21.0	72.4	45.6	46.3
3	政治・領土問題	27.2	39.8	30.9	32.7
4	代表的な風物	21.4	31.9	37.8	29.9
5	食文化	13.6	34.3	26.3	24.6
6	自然・地理環境	16.3	22.4	21.7	20.1
7	科学技術・高性能高品質	4.7	24.8	29.0	19.0
8	伝統文化	11.3	24.8	20.3	18.7
9	秩序・礼節・習慣	2.7	27.2	20.7	16.6
10	民族・言語	4.3	24.4	17.1	15.1
11	反日感情	23.0	9.4	11.5	14.8
12	経済	2.3	21.3	12.9	12.1
13	伝統的思想	0.8	14.6	7.8	7.7
14	性風俗	0.4	10.2	12.9	7.6
15	観光	1.9	13.4	6.5	7.3
16	現代社会	0.8	6.3	10.1	5.5
17	生活環境	1.9	5.9	8.8	5.4
18	日本の歴史	1.9	4.7	2.3	3.0
19	文学	—	5.9	2.3	2.7
20	ファッション	0.8	5.9	0.9	2.6
21	親近感	—	5.1	0.5	1.9
22	日本の象徴	—	1.2	4.6	1.8
23	中国の抗日ドラマ・映画	0.4	0.8	—	0.4
24	不詳	—	—	0.9	0.3

中学生・高校生・大学生が抱く対日イメージを比較するために、まず、 χ^2 検定³⁵を行った。その結果、カテゴリー間の度数は、中学生・高校生・大学生で有意に異なっていた。

($\chi^2=518.583$, $df=46$, $p<0.001$)

支持度 10 以上の全対象者の結果を見てわかるように、最も多いカテゴリーは「戦争・歴史認識」63.5%で、次いで「大衆文化」46.3%、「政治・領土問題」32.7%といずれも 30%以上であった。また、4 位から 12 位までは、「代表的な風物」29.9%、「食文化」24.6%、「自然・地理環境」20.1%、「科学技術・高性能高品質」19.0%、「伝統文化」18.7%、「秩序・礼儀・習慣」16.6%、「民族・言語」15.1%、「反日感情」14.8%、「経済」12.1%の順になっている。

中学生・高校生・大学生別にみれば、中学生からは 836 例、高校生からは 1587 例、大学生からは 1103 例のアイテムが得られた。支持度 10%以上のカテゴリーを順番に見ると、中学生では、「戦争・歴史認識」72.4%、「政治・領土問題」27.2%、「反日感情」23.0%、「代表的な風物」21.4%、「大衆文化」21.0%、「自然・地理環境」16.3%、「食文化」13.6%、「伝統文化」11.3%という 8 項目であった。高校生では、「大衆文化」72.4%、「戦争・歴史認識」59.8%、「政治・領土問題」39.8%、「食文化」34.3%、「代表的な風物」31.9%、「秩序・礼儀・習慣」27.2%、「科学技術・高性能高品質」24.8%、「伝統文化」24.8%、「民族・言語」24.4%、「自然・地理環境」22.4%、「経済」21.3%、「伝統的思想」14.6%、「観光」13.4%、「性風俗」10.2%という 14 項目であった。大学生では、「戦争・歴史認識」57.1%、「大衆文化」45.6%、「代表的な風物」37.8%、「政治・領土問題」30.9%、「科学技術・高性能高品質」29.0%、「食文化」26.3%、「自然・地理環境」21.7%、「秩序・礼儀・習慣」20.7%、「伝統文化」20.3%、「民族・言語」17.1%、「経済」12.9%、「性風俗」12.9%、「反日感情」11.5%、「社会問題」10.1%という 14 項目であった。

中学生の場合は、1 位となる「戦争・歴史認識」（72.4%）は、唯一支持度 30%以上のカテゴリーであり、2 位の「政治・領土問題」（27.2%）との差は 45.2%にも及んだ。この結果から、中学生の日本をイメージする事柄が「戦争・歴史認識」に関わるものが圧倒的多数であることが明らかになった。また、「反日感情」は 3 位であり、中学生のみ上位 5

³⁵ χ^2 検定とは、帰無仮説が正しければ検定統計量が漸近的にカイ二乗分布に従うような統計的検定法の総称である。

位に入った項目であるため、中学生の日本に対する抵抗感が最も強いと言えよう。以上の上位 3 位のカテゴリーは全て否定的なイメージであり、中学生における対日イメージの否定的な傾向が明らかである。さらに、支持度 10%以上の上位カテゴリー数は 8 項目にとどまっており、高校生・大学生に比べ最少となっている。上位 4 位から 8 位までのカテゴリーの支持度は 20%～10%程度ではあるが、全て否定的ではなく、肯定的あるいは中立的なイメージである。

高校生の場合は、「大衆文化」が 72.4%で 1 位となり、2 位の「戦争・歴史認識」(59.8%)を 12.6%上回った。これは高校生が「大衆文化」への高い関心度を示している。一方、「戦争・歴史認識」も「大衆文化」に次いで非常に高い支持度となっており、突出したイメージだと言えよう。すなわち、高校生には、肯定的な「大衆文化」と否定的な「戦争・歴史認識」という 2 つのイメージが併存している。この結果からは高校生が二律背反の対日イメージをもつことがうかがえる。また、「政治・領土問題」が 39.8%に達しており、30%以上の支持度であった。現代の日本における様々な問題に高校生の関心が示されていると判断できる。しかし、支持度 10%以上の上位カテゴリーの 14 項目を見ると、それらのうち「戦争・歴史認識」と「政治・領土問題」以外は、全て肯定的あるいは中立的なイメージであり、高校生が多種多様な対日イメージを持つことが明らかになった。特に「食文化」(34.3%)は、高校生のみ上位 5 位に入った項目であり、「大衆文化」,「代表的な風物」とともに 30%以上の支持度であり、高校生の日本文化への関心の多様性、そして特に現代の日本文化のポジティブな側面への関心を典型的に示すと言えよう。

大学生の場合は、中学生と同様、「戦争・歴史認識」(57.1%)と「大衆文化」(45.6%)が 1 位と 2 位であったが、中学生と比較すれば、この 2 つのカテゴリーにおける支持度 11.5%の差でそれほど大きくない。つまり、中学生に比べ、「戦争・歴史認識」イメージはそれほど強くないが、大学生に比べ、「大衆文化」もそれほど強くない。どちらも上位ではあるが、どちらも他の学校段階ほど突出しないイメージであった。次に、「戦争・歴史認識」の支持度は中学生(72.4%)と高校生(59.8%)と比べ最低であった。この結果から、中学生と高校生に比べ、大学生のほうがより冷静的に過去の日本を見ていると言えよう。また、大学生のみで「科学技術・高性能高品質」は上位 5 位に入ったことから、大学生においては対日イメージが内面的な事柄になる傾向がみえる。さらに、高校生と同様に、支持度 10%以上の上位カテゴリー数も 14 項目に達したが、そのうちの否定的イメージは、中学生と同様に、「戦争・歴史認識」,「政治・領土問題」と「反日感情」であ

った。しかし「反日感情」は13位であり、支持度も11.5%にとどまっている。この結果から、大学生が抱いている反日感情は中学生ほど強くないと判断できる。

全体的な特徴に関しては、まず、否定的なカテゴリーより、肯定的、中立的なカテゴリーのほうが多かった。しかし、全対象者の支持度が30%以上のカテゴリーは上位3位の「戦争・歴史認識」、「大衆文化」、「政治・領土問題」という3項目のみであり、そのうちの2項目は否定的なイメージであった。「戦争・歴史認識」は中学生と大学生においては1位、高校生においては2位であり、いずれも高い順位を占めたが、中学生から大学生と年齢が進むにつれてそのイメージが弱まる傾向が見られる。「大衆文化」については、中学生は21.0%にとどまっているのに対し、高校生は72.4%に達した。大学生は45.6%で、高校生より少なかったが、全体的には中学生より高校生と大学生のほうが「大衆文化」への関心が高いと言えよう。一方、「大衆文化」と同様に、現代の日本における一つの側面として「政治・領土問題」も高校段階から若者に注目されるようになった。次に、支持度10%以上の上位カテゴリーのうち、「科学技術・高性能高品質」、「伝統文化」、「秩序・礼節・習慣」、「民族・言語」、「経済」は日本における内面的な事柄である。この結果は、対象者が表面的な事柄のみならず、内面的なものにも目を向けており、多様な対日イメージを持っていることを示している。一方、「反日感情」については、中学生は支持度が23.0%であり、高校生と大学生よりそれぞれ10%ほど多かった。この結果からも対象者が高校段階からより冷静的に日本を見ていく傾向がうかがえる。

また、平均回答数（一人あたり記入した回答数）から見れば、全対象者は4.8例、中学生は3.3例、高校生は6.3例、大学生は5.1例であった。カテゴリーの支持度からもわかるように、中学生の対日イメージはそれほど豊富になっておらず、「戦争・歴史認識」に集中しているため、平均回答数も3例ほどにとどまった。しかし、高校生は中学生の倍近くになっており、そして、その内容も多様化している。大学生は高校生より少し少なくなっているが、高校生とほぼ近い程度の数であった。すなわち、高校生から学生の対日イメージが定着する様相が見て取れる。

3.2.1.3 カテゴリー別の対日イメージ分析

本節では、減少傾向のイメージ、増加傾向のイメージと高校生の回答が最多のイメージに分け、中学・高校・大学生の対日イメージの特徴を分析する。図3-1は増減の傾向を示すものである。

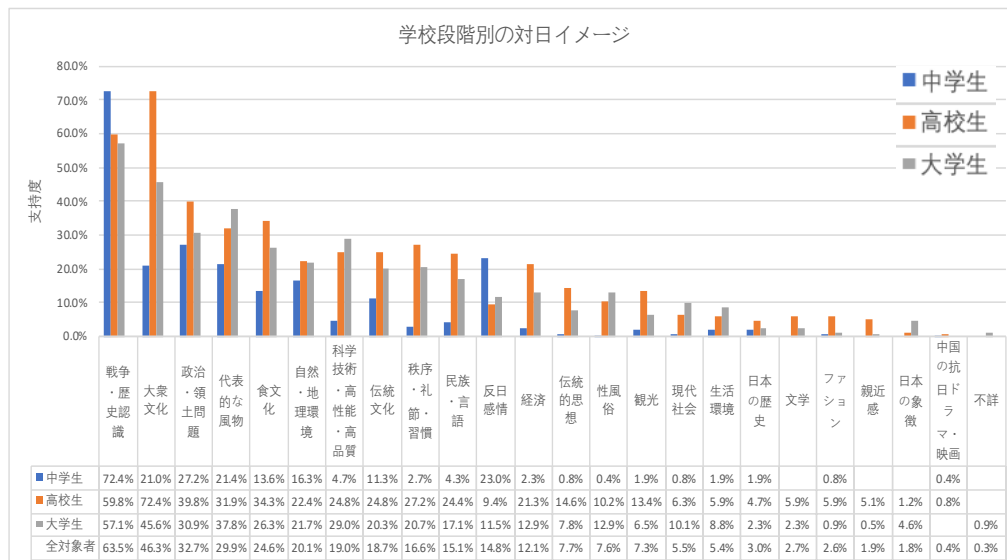


図 3-1 対日イメージの増減傾向

1) 支持度が減少傾向のカテゴリー

「戦争・歴史認識」は、学年が上がるにつれて、唯一支持度が減少しているカテゴリーである。まず、戦争そのものに関しては日中戦争に関する下位カテゴリーが非常に多かった。例えば、「中国八路軍は英雄だ、中国は日本に勝った、国の恥」という「中国の偉大さ」を表す表現や戦争に対する認識を表す表現がある。一方、それよりさらに多く書かれたのは、「ファシズム、日中戦争、南京大虐殺、盧溝橋事件、人体細菌実験、日本帝国主義」など中国の教科書で記述された日中戦争に関する内容や史実、あるいは、「日本鬼子、髭」など抗日映画でよく描かれている日本軍のイメージである。また、「残忍、血生臭い」など日本軍の残虐性を表す言葉がある。これらの言葉は戦争映画のシーンや教科書のなかで記述された内容に現れている言葉である。さらに、「史実を認めない、わざと歴史を歪曲する、靖国神社」という日中戦争に対する日本政府の態度なども挙げられる。それらは主に現在中国のニュースでよく報じられる日本の歴史認識に関する下位カテゴリーである。以上の全ては否定的イメージだと言えよう。特に、日中戦争に関する事柄は多岐かつ詳細に書かれている。対象者における「日中戦争」に対するイメージは、歴史的事件などの知識から、日本軍に対する具体的な描写の細部まで多岐にわたっている。このように、歴史教育と抗日映画・抗日ドラマ、ニュースに関わる「戦争・歴史認識」イメージは、中学段階では最も強く、支持度は 72.4%に及んだ。高校段階でも強く残っているが、中学段階よりは、大幅に減少している。そのような傾向が大学まで続いていくが、変化は穏やかになっている。

2) 支持度が増加傾向のカテゴリー

「代表的な風物」，「科学技術・高性能高品質」，「性風俗」，「現代社会」，「生活環境」，「日本の象徴」は，学校段階が上がるにつれて，支持度が増加している上位カテゴリーである。

支持度から見れば，増加する傾向が最も顕著なカテゴリーは「代表的な風物」と「科学技術・高性能高品質」という肯定的イメージである。この2カテゴリーのどれにおいても中学生と高校生の間の支持度の差が大きかった。「代表的な風物」の場合は，どの学校段階においても20%以上になっているが，「科学技術・高性能高品質」の場合は，中学生の支持度はわずか4.7%にとどまっている。また，カテゴリーの内容から見れば，「代表的な風物」に分類された「桜，富士山」は中国人が憧れる日本の観光スポットでもあるが，日本のシンボルであり，日本の代名詞といっても過言ではない。そのため，桜と富士山は単なる観光スポットのみならず，象徴的存在という特殊な意味を付与されているカテゴリーでもある。また，「桜」，「富士山」の前に「きれいな」，「美しい」という修飾語がつけられることが多い。「科学技術・高性能高品質」には，まず，「科学技術が発展している，品質の良いメガネ，建築の品質が高い」など科学技術への認識に関する表現がある。また，「トヨタ，本田，日産」などの自動車メーカー，「カメラ，ソニー，東芝，三菱，キヤノン，日立の冷蔵庫，腕時計，パイロット³⁶」などのハイテク関係，日常生活によく触れる事柄も書かれた。日本の科学技術と製品の高性能高品質は中国のみならず，世界にもよく知られている。現在の中国においては，経済の急激な発展に伴い，ハイテク製品の需要が増加する一方である。しかし，中国国内のメーカーがこの需要を満足させられない状況の下で，日本製品が中国人の注目を集めている。好奇心が強い若者は日本製品に対する関心度がさらに高いと考えられる。また，日常的に接触する製品も増えているため，日本のメーカーの日用品が中国人の生活に浸透しつつある。「代表的な風物」と「科学技術・高性能高品質」は異なるカテゴリーであるが，日本の美しさと近代化を表現できるカテゴリーであり，中国人が憧れる要素が含まれているという点は共通している。

「性風俗」，「現代社会」，「生活環境」も支持度が増加するカテゴリーであり，現代の日本における様々な側面を反映しているという特徴がある。それらの上位カテゴリーに

³⁶ 中国の学生に人気が集まっている日本のペンのブランドである。

含まれる下位カテゴリーは多種多様である。例えば、「性風俗」には「18禁、風俗業、成人向け映画」，「現代社会」には「オタク、やくざ、自殺率が高い、教育が中国と違う」，「生活環境」には「一戸建て、畳、自販機、混む地下鉄、海鮮が肉より安い、スイカが高すぎる、海辺の静かな生活」などがある。また、支持度の増加からも、学年が上がるにつれて、対象者が現代の日本に関心を持ち始めていると判断できる。しかし、支持度は全て10%程度にとどまっており、対象者にとって重要度がそれほど高くないイメージだと言えよう。それは対象者が生な日本社会に関する一次情報を容易に入手することができず、それらの情報が断片的なものにとどまっているからであると考えられる。

3) 高校生の支持度が最高のカテゴリー

支持度が最高のカテゴリーについて、高校生は15項目であり、24項目のカテゴリーのうちの62.5%も占めている。中学生の2項目、大学生の7項目より遥かに多かった。そのため「高校生の支持度が最高のカテゴリー」を取り上げて分析する。この結果からも、高校生の対日イメージの豊富さがうかがえる。そのうち、「大衆文化」，「政治・領土問題」と「食文化」は支持度が30%以上となっており、上位1位、3位と4位を占めた重要度の高いカテゴリーである。

「大衆文化」は他の学校段階との差が最も大きいカテゴリーで突出している。このカテゴリーにおいて、最も多くあげられたものは「アニメ・漫画」であった。詳しくは、「アニメ、漫画、アニメ産業が進んでいる、萌文化、『少年ジャンプ』、声優」などアニメ・漫画全体やそれに関わる事柄に対するイメージがある。そして、「アニメ・漫画」のジャンルから言えば、子ども向けの「ドラえもん、一休さん、ちびまる子ちゃん、鉄腕アトム、クレヨンしんちゃん」など、少女向けの「カードキャプターさくら」など、歴史劇系の「12国記、銀魂」など、スポーツ系の「スラムダンク、テニスの王子様」など、推理系の「名探偵コナン」など、耽美系の「黒執事」など、熱血系の「ワンピース、ブリーチ、ナルト」など、ホラー系の「空の境界、百鬼夜行」など、アニメ映画「千と千尋の神隠し」などの様々なジャンルがあり、作品として約40点が挙げられた。作品名のみならず、「宮崎駿」などの作者、天空の城ラピュタの挿入歌「君をのせて」（久石譲作曲）などの作品の中の音楽、音楽家、「セーラームーン、チョッパー」などの作品の中のキャラクター、キャラクターの特徴なども細かく記述された。それらの作品の多くは、中国のテレビで放送されておらず、インターネットを通じて見ることができるものである。また、この上位カテゴリーにおいて「アニメ・漫画」のほかに、下位カテゴリーとして推理小説、テレビドラマ、

ホラー映画なども挙げられた。これらも作品名のみでなく、作者や作品の主人公もあげられた。しかし、作品の点数はアニメより少ない。さらに、ポップミュージックや昔と現在の人気芸能人もあげられた。以上のように、「大衆文化」に含まれている下位カテゴリーの内容は非常に多様になっているが、そのうち特に「アニメ・漫画」に関わる内容が最も多く書かれていた。

「政治・領土問題」については、「尖閣諸島のための中日対立、尖閣諸島、尖閣諸島は中国の領土だ、日本は尖閣諸島を侵略した」などの尖閣諸島に関する下位カテゴリーが最も多く書かれた。次に、尖閣諸島とも関連しているが、「中日関係、中日の対立関係、将来の日中戦争、日本の政治、無責任な政府、右翼勢力、安倍晋三、政治家は憲法改正を通して軍国主義の道を図っている、日本とアメリカは結託している」など、全体的な日中関係や日米関係としてあげられた下位カテゴリーもあった。さらに、「原発事故、捕鯨、鯨」などの現問題も書かれた。2010年に起った尖閣諸島漁船衝突事件以後、尖閣諸島における一連の問題が深刻になり、中国のメディアで大きく扱われているため、「尖閣諸島」は最も多く挙げられた下位カテゴリーになっている。また、カテゴリー数は多くないが、尖閣諸島以外でも現在の日本に関わる様々な問題が中国の若者の注目を集めている。大衆文化と異なり、このカテゴリーにおける事柄の大部分は否定的イメージである。対象者、特に高校生の現代の日本政治のネガティブな側面に対する関心が示されている。

「食文化」に分類された下位カテゴリーは4種類である。まず、「日本料理、美味しい料理」という全体的な回答がある。また、「海鮮、神戸の牛肉、清酒、抹茶、寿司、うどん、ラーメン、お餅、おにぎり、たこ焼き」など日本の代表的な食材、料理名、飲料名が多く書かれた。さらに、「吉野家、不二家、北海道ミルクティー」という中国に進出した有名な料理店、食品のメーカーもある。最後に、「生ものは何でも食べる、氷入りのお水」という日本人の食習慣を述べるカテゴリーも挙げられた。このカテゴリーに分類できる事柄の種類は「大衆文化」と「政治・領土問題」より単純ではあるが、対象者に挙げられた下位カテゴリー数は比較的多い。「民は食を以て天と為す」という中国のことわざにあるとおり、この結果から、対象者、特に高校生は日本の食文化について多く知っており、食生活という不可欠な部分に対して高い関心を示している。

以上、高校生の支持度が最高のカテゴリーのうちの上位3位について分析してきた。そのうち、「大衆文化」と「政治・領土問題」は、肯定的イメージと否定的イメージの代表カテゴリーとして、他の学校段階の支持度との差が示された。また、「食文化」に分類さ

れた下位カテゴリーからわかるように、このカテゴリーにおける下位カテゴリーの多くは中立的イメージである。前述のように、高校段階は、対日イメージの最も多様化している段階であるとともに、二律背反のイメージが最も顕著な段階でもある。

また、高校生の支持度が最高で10%～30%のカテゴリーは「自然・地理環境」，「伝統文化」，「秩序・礼節・習慣」，「民族・言語」，「経済」，「伝統的思想」，「観光」がある。これらのカテゴリーの支持度は、中学生との差が大きく、大学生との差が中学生ほど大きくないという特徴がある。そして、このうちの上位5項目は全対象者の支持度10%～30%の項目と同様な結果になっている。この結果からも、中学生のイメージはそれほど豊富になっていないことがうかがえる。また、中学生に比べ、高校生は大学生と似たイメージを持っていることが明らかになった。

さらに、高校生が最高で支持度10%以下のカテゴリーは、「日本の歴史」，「文学」，「ファッション」，「親近感」，「中国の抗日ドラマ・映画」がある。支持度が低いカテゴリーではあるが、中学生あるいは大学生にはないカテゴリーも現れた。この結果も高校生における対日イメージの多様性をある程度証明しているといえるだろう。

3.2.2 対日情報源の実態

本節では、対日情報源について、カテゴリー抽出の結果、学校段階別の比較、カテゴリー別の分析に分けて述べる。

3.2.2.1 対日情報源のカテゴリー抽出

質問2の回答に対して分類した結果、上位カテゴリー27と下位カテゴリー130を確定した。上位カテゴリーと代表的な下位カテゴリーは表3-3のとおりである。

表 3-3 情報源の上位カテゴリーの定義と代表的な下位カテゴリー

上位カテゴリー		代表的な下位カテゴリー
1	中国の新聞	新聞、古い新聞
2	中国のニュース	メディア、ニュース、テレビニュース、ラジオニュース、CCTV、『新聞聯播』、国際事件に関する報道、政治に関するニュース、時事問題に関するニュース、軍事に関するニュース、電気製品に関するニュース、安倍晋三に関するニュース、尖閣諸島事件
3	中国のバラエティ番組	日本を紹介するテレビ番組、旅行番組
4	中国のポータルサイト・検索エンジン	パソコン、携帯電話、ウェブサイト、百度、インターネットで探した資料

5	中国の SNS・BBS	BBS, 微博 ³⁷ , 微信 ³⁸ , QQ ³⁹
6	中国の動画サイト	動画, ビリビリ
7	中国のダウンロードサイト	快播, 動画のダウンロード
8	中国の映画	映画, 戦争映画, 抗日映画
9	中国のテレビドラマ	テレビドラマ, 抗日ドラマ
10	中国の文学作品	文学作品, 小説
11	中国の書籍・雑誌（教科書以外）	書籍, 雑誌, 軍事雑誌, 学術論文, 百科全書, 『史記』, 史料, 歴史に関する書籍, 『菊と刀』, 『徳川家康』
12	中学校・高校の歴史の授業, 教科書	歴史教育, 歴史の授業, 歴史の知識, 歴史教科書, 先生の教授, 中国の歴史, 日中戦争に関する歴史, 日清戦争, 第二次世界大戦, 日中戦争, 南京大虐殺, 明治維新
13	中学校・高校の各科目の授業・教科書（歴史以外）	地理の授業
14	日本の映画	日本の映画, ホラー映画
15	日本のテレビドラマ	日本のドラマ
16	日本の文学作品	日本の文学作品, 日本の小説
17	日本のポップミュージック	音楽, 歌, AKB48, 浜崎あゆみ
18	日本のアニメ・漫画	アニメ, 漫画, Cosplay, 『名探偵コナン』, 『銀魂』, 『ワンピース』, 久石譲, 宮崎駿
19	日本のゲーム	ゲーム, 任天堂, PSP
20	家庭内の影響・教育（親, 祖母, 祖父など）	祖父母世代の話, 親戚の話, 祖母の話, 家族の話, 親との交流, 祖父母から聞いた日中戦争の話
21	日本での直接経験（旅行, 留学など）	旅行, 日本観光
22	中国での日本人との接触（日本人日本語教師, 日本人の友達など）	留学生, 日本人, 日本人の友人の話
23	旅行, 語学研修, 居住などの直接経験した人	日本にいる親戚の話, 日本に行ったことのある親戚の話, 日本で働いている親戚の話, 日本人と結婚した親戚の話, 日本に留学している友達からの手紙, 日本に行ったことのある友人の話, 日本に留学したことのある人の話, 日本に留学している友人の話
24	人の話	クラスメートの話, 友人の話, 人との交流, 友人との交流, クラスメートとの交流, 日本のファンとの交流, 日本語を勉強している同級生
25	記録映画	日中戦争に関する記録映画
26	大学の日本語授業	日本語の先生, 日本語学習
27	その他	地図, 日本製品, 電気製品, 雑貨, 自動車, パナソニック株式会社, 日本料理店, 日本料理, 観光情報, 武士道, 抗日の歌, 博物館見学, 抗日英雄記念館見学, 南京大虐殺記念館見学, 満州事変記念館見学, 知りたくない, 知らない, 知る必要がない, なし

³⁷ 微博（日本語：ウェイボー）とは、中国の新浪会社が運営するミニブログサイトである。Twitter に相当する。

³⁸ 微信（日本語：ウィーチャット）とは中国の大手 IT 企業テンセントが開発したインスタントメッセージングアプリである。日本でいう LINE に相当する。中国で最も普及しているコミュニケーションツールである。

³⁹ QQ とは、中国の大手 IT 企業テンセントが開発したインスタントメッセージングソフトである。中国で微信の次に普及しているコミュニケーションツールである。

3.2.2.2 学校段階別の対日情報源比較

本結果は質問項目 2 に対して中学生・高校生・大学生から得られた全ての回答を分析したものである。対象者の対日情報源としては、計 2105 のアイテムが収集された。上述のアイテムセット X の支持度の算出法によって、中学生・高校生・大学生・全対象者別に、27 の上位カテゴリーそれぞれのアイテムセットの支持度を算出し、全対象者の支持度の高い順に整理した結果は表 3-4 のとおりである。

表 3-4 対象者の対日情報源 (数字は%)

	情報源	中学生	高校生	大学生	全対象者
1	中国のニュース	56.0	62.0	65.9	61.0
2	中国のポータルサイト・検索エンジン	40.9	47.6	47.0	45.1
3	中国の SNS・BBS	24.9	32.3	33.2	29.9
4	中学校・高校の歴史の授業、教科書	42.4	25.2	18.9	29.4
5	中国の書籍・雑誌（教科書以外）	17.5	26.0	23.0	22.1
6	日本のアニメ・漫画	14.4	28.7	17.1	20.2
7	中国の新聞	11.7	15.4	16.6	14.4
8	中国のテレビドラマ	11.7	7.9	10.1	9.9
9	中国の映画	7.0	7.9	13.4	9.2
10	家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父等）	10.5	9.4	5.1	8.5
11	人の話	6.2	6.7	6.0	6.3
12	中国の動画サイト	2.7	6.3	3.2	4.1
13	旅行、語学研修、居住等の直接経験した人	—	6.3	6.0	4.0
14	中学校・高校の各科目の授業・教科書（歴史以外）	1.6	5.9	2.8	3.4
15	日本のテレビドラマ	1.6	4.3	3.2	3.0
16	その他	4.3	1.6	2.3	2.7
17	記録映画	1.2	3.1	3.7	2.6
18	中国のバラエティ番組	0.4	4.7	0.9	2.1
19	中国のダウンロードサイト	0.4	3.9	0.9	1.8
20	日本の文学作品	0.4	3.5	1.4	1.8
21	中国の文学作品	0.8	0.8	0.9	0.8
22	日本の映画	—	2.0	—	0.7
23	日本での直接経験（旅行、留学等）	—	2.0	—	0.7
24	日本のポップミュージック	0.4	0.4	0.9	0.5
25	大学の日本語授業			1.4	0.4
26	中国での日本人との接触 （日本人日本語教師、日本人の友達等）	—	0.4	0.9	0.4
27	日本のゲーム	—	0.8	—	0.3

中学生・高校生・大学生が利用する対日情報源を比較するために、 χ^2 検定を行った。その結果、カテゴリー間の度数は、中学生・高校生・大学生で有意に異なっていた。 $(\chi^2=154.124, df=52, p<0.001)$

全対象者における支持度 10%以上の上位カテゴリーを見ると、支持度の最も高いカテゴリーは「中国のニュース」61.0%で、次いで「中国のポータルサイト・検索エンジン」45.1%と上位2位のいずれも高い支持度であった。続いて「中国のSNS・BBS」29.9%、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」29.4%、「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」22.1%、「日本のアニメ・漫画」20.2%、「中国の新聞」14.4%までは全て10%台の支持度であり、4位から7位までのカテゴリーである。次いで、8位から10位までは「中国のテレビドラマ」9.9%、「中国の映画」9.2%、「家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父等）」8.5%であり、いずれも10%未満であった。

中学生からは671例、高校生からは809例、大学生からは625例のアイテムが得られた。支持度10%以上のカテゴリーを順番に見ると、中学生では、「中国のニュース」56.0%、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」42.4%、「中国のポータルサイト・検索エンジン」40.9%、「中国のSNS・BBS」24.9%、「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」17.5%、「日本のアニメ・漫画」14.4%、「中国の新聞」11.7%、「中国のテレビドラマ」11.7%、「家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父等）」10.5%という9項目となっている。高校生では、「中国のニュース」62.0%、「中国のポータルサイト・検索エンジン」47.6%、「中国のSNS・BBS」32.3%、「日本のアニメ・漫画」28.7%、「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」26.0%、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」25.2%、「中国の新聞」15.4%という7項目である。大学生では、「中国のニュース」65.9%、「中国のポータルサイト・検索エンジン」47.0%、「中国のSNS・BBS」33.2%、「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」23.0%、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」18.9%、「日本のアニメ・漫画」17.1%、「中国の新聞」16.6%、「中国の映画」13.4%、「中国のテレビドラマ」10.1%という9項目である。

中学生の場合は、上位カテゴリーから見れば、21種類の情報源が利用されている。そのうち、上位3位となる情報源の支持度は30%以上で特に多く利用されている情報源であり、新メディアと旧メディアの利用もあれば、学校教育も非常に重要な一部となっていることが明らかに見て取れる。また、支持度10%以上の情報源で、日本側の情報源として唯一挙げられたのは「日本のアニメ・漫画」である。それ以外に、わずかの支持度ではある

が、「日本のテレビドラマ」，「日本の文学作品」と「日本のポップミュージック」も挙げられている。最後に，先行研究ではほとんど触れられていない「家庭内の影響・教育（親，祖母，祖父等）」が中学生に見られることは特徴的である。

高校生の場合，利用されている情報源の種類は最も多く 26 種類となっている。しかし，支持度 10%以上のカテゴリーは 7 項目で最少であった。高校生の利用する情報源は多種多様になっているが，多く利用する情報源は中学生と大学生よりも特定のメディアに集中していると言えよう。支持度 30%以上の上位 3 位の情報源は新メディアと旧メディアのみであった。次いで支持度 28.7%に達した「日本のアニメ・映画」は上位 4 位となっており，中学生と同様に唯一日本側の支持度 10%以上の情報源である。また，支持度は 10%未満ではあるが，「日本のテレビドラマ」，「日本の文学作品」，「日本の映画」，「日本のゲーム」と「日本のポップミュージック」の 5 カテゴリーも日本側の情報源として挙げられている。さらに，学校教育の一部である「中学校・高校の歴史の授業，教科書」という中国側の情報源は「日本のアニメ・映画」ほど利用されていないことが特徴的である。

大学生の場合は，利用している情報源の種類は 24 種類となっている。支持度 30%以上の上位 3 位の情報源は新メディアと旧メディアという 2 種類のみであり，順位もカテゴリーも高校生と同様であった。また，「中学校・高校の歴史の授業，教科書」は 5 位と高い順位を占めているが，支持度は 20%未満であった。次いで 6 位となった「日本のアニメ・映画」は支持度が最も高い日本側の情報源である。また，中学生と大学生と同様な低い支持度であるが，「日本のテレビドラマ」，「日本の文学作品」と「日本のポップミュージック」も利用されている。さらに，大学生のみに見られる「中国の映画」は支持度が 10%以上になっている。

全体的特徴に関しては，まず，全対象者の上位 7 位となる「中国のニュース」，「中国のポータルサイト・検索エンジン」，「中国の SNS・BBS」，「中学校・高校の歴史の授業，教科書」，「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」，「日本のアニメ・漫画」，「中国の新聞」が全ての学校段階において支持度 10%以上のカテゴリーである。すなわち，全体的な傾向としては，どの学校段階においても対象者に利用されている情報源の種類が似ていることがわかる。また，それらの上位カテゴリーを整理すれば，「中国のニュース」，「中国の新聞」という中国の旧メディア関係，「中国のポータルサイト・検索エンジン」，「中国の SNS・BBS」という中国の新メディア関係，「中学校・高校の歴史の授業，教科書」，「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」という教育・教養関係，そして「日本のアニ

メ・漫画」という日本側の情報源と4種類に分けられる。さらに、「中学校・高校の歴史の授業、教科書（歴史以外）」は「中学校・高校の各科目の授業・教科書」と同じ教育関係のカテゴリーであるが、支持度が低い。それは対象者が歴史以外の学校教育から日本に関する情報をほとんど入手していないことを示している。最後に、先行研究でも本調査の結果でも示されたように、中国側の情報源は圧倒的多数利用されていることが明らかである。一方、全ての学校段階において、「日本のアニメ・漫画」は日本側の情報源として多く利用されている。その上、支持度はわずかではあるが、「日本のテレビドラマ」、「日本の文学作品」と「日本のポップミュージック」は全ての学校段階で利用されていることに注目すべきであろう。これは、「日本のアニメ・漫画」以外の情報源が若者に日本に関する情報を提供している可能性を示している。最後に、接触経験からみれば、「日本での直接経験（旅行、留学等）」、「中国での日本人との接触（日本人日本語教師、日本人の友達等）」という直接接触と「旅行、語学研修、居住等の直接経験した人」という間접接触のいずれもが低い支持度となっており、ハルビン在住の対象者の日本接触経験の欠如が証明されている。

次に、平均回答数（一人あたり記入した回答数）から見れば、全対象者は2.9例、中学生は2.6例、高校生は3.2例、大学生は2.9例であった。学校段階別に見るカテゴリー数からもわかるように、種類も量も、高校段階は対日情報源が最も豊富になっている学校段階であり、対日イメージほどの相違が顕著ではなかったものの、イメージと同様の傾向が見られた。すなわち、中学生と大学生の場合は、支持度10%以上のカテゴリー数は高校生より多いが、高校生ほど利用する情報源の数が多くなく、利用する情報源の種類も高校生より分散していることが明らかである。

3.2.2.3 カテゴリー別の対日情報源分析

学校段階別に情報源が利用される特徴を見るために、本節においては、イメージと同様に、減少傾向のカテゴリー、増加傾向のカテゴリーと高校生の回答が最多のカテゴリーに分け、中学・高校・大学生の対日情報源を分析する。図3-2は増減傾向を示すものである。

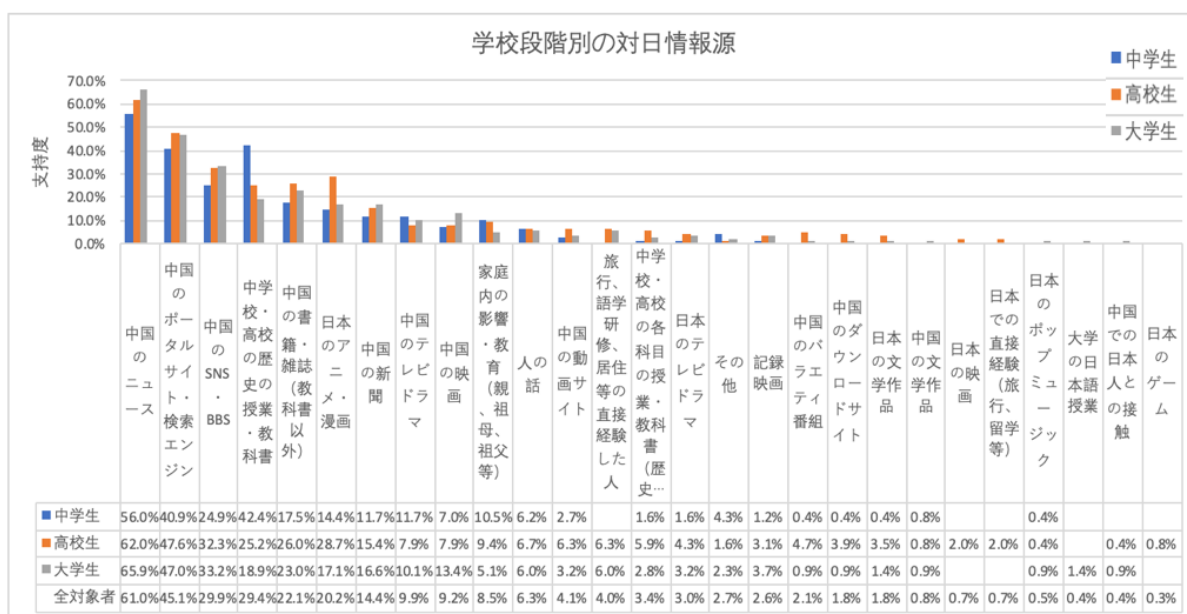


図 3-2 対日情報源の増減傾向

1) 支持度が減少傾向のカテゴリー

「中学校・高校の歴史の授業、教科書」と「家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父等）」は、学校段階が上がるにつれて、支持度が減少傾向のカテゴリーとして特徴的である。

まず、カテゴリーの内容から考えれば、上位カテゴリー「中学校・高校の歴史の授業、教科書」にある下位カテゴリーは歴史教育に関する概観的記述と歴史的イベントに関する具体的記述の2種類に分けられる。第一に、歴史教育に関する概観的記述には、「歴史教育、歴史の授業、歴史の知識、歴史教科書、先生の教え、中国の歴史」がある。第二に、歴史的イベントに関する具体的記述には、「日中戦争に関する歴史、日清戦争、第二次世界大戦、日中戦争、南京大虐殺、明治維新」が挙げられる。この上位カテゴリーにおいては、中学生から得られた下位カテゴリー数は12項目のうちの11項目を占めており、高校生と大学生に比べ最も多くなっている。その内容にも上述の2種類の記述が含まれている。実は、イメージの下位カテゴリーからわかるように、具体的な記述に関する下位カテゴリーには、イメージの上位カテゴリー「戦争・歴史認識」と重複するカテゴリーが含まれている。すなわち、中学生はイメージと情報源を混同することがある。一方、高校生からは6項目の下位カテゴリーが得られ、そのうち「南京大虐殺」と「明治維新」以外は全て概観的な記述であり、大学生から得られた4項目の下位カテゴリーの全ては概観的な記述であった。この結果から、学校段階が上がるのに伴い、対象者がイメージと情報源をはっきりと区別

できるようになることがうかがえる。また、支持度は中学生の 42.4%から高校生の 25.2%までと大幅に減少し、差が大きい。この結果から、日本に関する情報源として中学生は「中学校・高校の歴史の授業、教科書」への依存度は非常に高いが、高校段階に入ると、情報源の多様化に伴い、学校教育への依存度が減少していることが明らかになった。また、対象者の成長に伴い、その変化は高校段階ほど激しくないが、大学段階までも続いており、穏やかに変化する様相が示されている。以上のように、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」という情報の利用に関して、高校段階が重要な転換点となっている。

また、「家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父等）」には「祖父母世代の話、親戚の話、祖母の話、家族の話、親との交流、祖父母から聞いた日中戦争の話」という下位カテゴリーが挙げられる。下位カテゴリー数から見れば、中学生と高校生それぞれ 4 項目、大学生から 3 項目が得られ、それほど大きな変化は見られない。支持度については、中学生は唯一 10%以上になる学校段階ではあるが、11.7%とそれほど高くない。すなわち、全体的には、支持度が低い「家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父等）」は中学段階から減少傾向の情報源として、高校段階、大学段階まで低い水準を維持しており、顕著な変化は見られない。そのため、対日情報源として、「家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父等）」は、中学生にはある程度利用されているが、高校生と大学生が家庭から影響を受ける可能性は低いと言えよう。

2) 支持度が増加傾向のカテゴリー

「中国のニュース」、「中国の SNS・BBS」、「中国の新聞」、「中国の映画」、「記録映画」は、学校段階が上がるにつれて、支持度が増加傾向の上位カテゴリーである。それらはさらに「中国のニュース」、「中国の SNS・BBS」、「中国の新聞」というメディア関係と「中国の映画」、「記録映画」という映像関係に分類できる。またメディア関係は「中国のニュース」、「中国の新聞」という旧メディア関係と「中国の SNS・BBS」という新メディア関係に分けられる。

旧メディア関係については、第一に、「中国のニュース」には「メディア報道、ニュース、テレビニュース、ラジオニュース、CCTV、『新聞聯播』、国際事件に関する報道、政治に関するニュース、時事問題に関するニュース、軍事に関するニュース、電気製品に関するニュース、安倍晋三に関するニュース、尖閣諸島事件」という下位カテゴリーが挙げられた。これらはニュースを入手する媒体に関する記述とニュースの内容に関する記述に分けることができよう。中学生・高校生・大学生からそれぞれ 7, 10, 7 項目の下位カ

テゴリーの回答が得られた。そのうち、中学生は「国際事件に関する報道」と「尖閣諸島事件」、大学生は「軍事に関するニュース」以外、全てニュース入手の媒介に関して記述している。しかし、高校生の場合は、6項目のニュース入手の媒介に関する下位カテゴリーと「政治に関するニュース、時事問題に関するニュース、電気製品に関するニュース、安倍晋三に関するニュース」という4項目のニュース内容に関する下位カテゴリーが挙げられている。この結果は、中学生と大学生に比べ、高校生が利用するニュース内容がさらに具体的で明確であることを示している。そして、ニュース内容には政治・時事問題と関わるという特徴があるが、「電気製品に関するニュース」は唯一政治に関わることなく、人々の消費行動に関わるニュースとなっている。また、対象者からはニュース内容に関する記述のみが得られたため、そのニュース入手の媒体は不明であり、旧メディアと新メディアの両方が考えられる。さらに、中学生・高校生・大学生の支持度は、56.0%、62.0%、65.9%となっており、学校段階の変化に伴う変化は緩やかだが、支持度は全て高い水準を維持していることから、「中国のニュース」は対象者にとって非常に重要な情報源だと言える。第二に、もう一つの旧メディアとして挙げられた「中国の新聞」では「古い新聞、新聞」という2項目の下位カテゴリーがある。全体的には増加する傾向が見られたが、支持度は全て10%以上20%以下の水準にとどまっているため、「中国のニュース」と同じ旧メディアではあるが、ニュースに比較して重要な情報源であるとは言いがたい。

新メディアに関しては、それぞれの学校段階における「中国のSNS・BBS」の支持度は「中国のニュース」ほど高くないが、学校段階に応じて増加する傾向は「中国のニュース」と似ており、緩やかであった。また、下位カテゴリーには「BBS、微信、微博、QQ」がある。これらもメディアの一種であるが、微信、QQのようなSNSや微博のようなミニブログから入手できる情報は、ニュースと異なり、個人とのコミュニケーションツールを介して入手する情報である。すなわち、情報入手の媒介の変化とも関わっている。対象者は年齢が上がるにつれて、政府の管理下に置かれているメディアのみならず、個人的意見の伝播を主とするメディアも積極的に利用するようになる傾向が見られた。

映像関係の上位カテゴリーは「中国の映画」、「記録映画」が挙げられ、それぞれの下位カテゴリーは「映画、戦争映画、抗日映画」、「日中戦争に関する記録映画」であり、これらの下位カテゴリーの内容は全て戦争に関わっている。また、増加する傾向のカテゴリーではあるが、支持度10%以上のカテゴリーについては、大学生が利用している「中国の映画」のみが確認された。そのため、このカテゴリーにおける「物語の内容」は戦争に

関わるかどうかに関わらず、全ての対象者は映画関係の情報源を情報入手の手段として利用していないと言えよう。

3) 高校生の支持度が最高のカテゴリー

対象者の回答の支持度が最も高かった情報源については、高校生は最多であり、27 のカテゴリーのうちの 13 カテゴリーを占めている。支持度の高い順に、「中国のポータルサイト・検索エンジン」、「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」、「日本のアニメ・漫画」、「人の話」、「中国の動画サイト」、「中学校・高校の各科目の授業・教科書（歴史以外）」、「日本のテレビドラマ」、「中国のバラエティ番組」、「中国のダウンロードサイト」、「日本の文学作品」、「日本の映画」、「日本での直接経験（旅行、留学等）」、「日本のゲーム」となっている。しかし、そのうち、支持度が 10%以上のカテゴリーは、「中国のポータルサイト・検索エンジン」、「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」、「日本のアニメ・漫画」の 3 項目のみであった。また、支持度はわずか 1%～2%程度ではあるが、「日本の映画」、「日本での直接経験（旅行、留学等）」と「日本のゲーム」は高校生のみに利用されていることから、高校生が利用している情報源の種類の多さがうかがえる。以上の結果から、高校生に利用されている情報源が多様化しているとともに、「中国のポータルサイト・検索エンジン」、「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」、「日本のアニメ・漫画」の 3 つの情報源に集中している様相が示された。

まず、「日本のアニメ・漫画」については、高校生の支持度は 28.7%であり、中学生（14.4%）、大学生（17.1%）との差が大きい。「日本のアニメ・漫画」には 2 つの特徴がある。第一に、どの学校段階においても最も多く利用されている日本側の唯一支持度 10%以上の情報源である。その上、中学生と大学生と比較し、高校生に最も利用される確率の高い情報源である。第二に、「日本のアニメ・漫画」はイメージの上位カテゴリー「大衆文化」に入る下位カテゴリーであるため、このカテゴリーは、情報源とイメージという二重の性格を持っている。「大衆文化」は高校段階で支持度の最も高いカテゴリーであることから、情報源としての「日本のアニメ・漫画」ではイメージ形成に与える役割の大きさを捉えて取り出すことができる。

また、「中国のポータルサイト・検索エンジン」と「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」はそれぞれ新メディア関係と教養関係のカテゴリーに分類できる。利用手段から見れば、インターネットと書籍は異なる形の情報源ではあるが、どちらも「日本のアニメ・漫画」と同様に、対象者が主体的に情報を求めて探しに行くことができる情報源であるという特

徴がある。また、その二項目のカテゴリーは高校生での支持度が最も高くなっているが、「日本のアニメ・漫画」と異なり、高校生と大学生における差が非常に小さい。さらに、上述の増加傾向のカテゴリーを振り返ってみると、全対象者の支持度 10%以上のカテゴリーのうち、「中国のニュース」、「中国の SNS・BBS」、「中国の新聞」における高校生と大学生の間の差もわずかであった。

全体的に、「中国のニュース」、「中国の SNS・BBS」、「中国の新聞」という上位になる増加傾向の情報源と高校生の支持度が最高の情報源は、中学校から高校段階への移行段階では、支持度が変化する傾向が見られたが、高校から大学への移行段階では、変化は穏やかになっている。情報源利用の実態の相違は中学校段階と高校段階の間と比べ、高校段階と大学段階の間は顕著ではないことが明らかになった。

3.2.3 対日イメージと対日情報源の関連

対象者の情報源利用状況とイメージ形成の相関関係を明らかにするために、前節の相関ルール R の支持度の算出法によって、D⁴⁰の中イメージ X と情報源 Y を同時に書いた対象者数の割合を算出した。最少支持度 30%を基準にイメージと情報源の頻出アイテムセットを抽出した。

その結果、中学生の場合は、「戦争・歴史認識&中国のニュース⁴¹」40.1%、「戦争・歴史認識&中学校・高校の歴史の授業、教科書」35.8%、「戦争・歴史認識&中国のポータルサイト・検索エンジン」30.7%という3つの頻出アイテムセットが抽出された。この結果は、日本に対して「戦争・歴史認識」というイメージを持っている中学生は、「中国のニュース」、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」、「中国のポータルサイト・検索エンジン」という3カテゴリーの情報源を利用することが多いことを説明している。すなわち、「戦争・歴史認識」のイメージは、何らかの限定された情報源からではなく、政府の宣伝方針の指導のもとで行われたニュース報道、体系的な学校教育、対象者が能動的に利用できるインターネットなどの情報源を総合的に利用することによって得られたのである。また、支持度から見れば、能動的に利用できる「中国のポータルサイト・検索エンジン」より、「戦争・歴史認識、中国のニュース」、「戦争・歴史認識、中学校・高校の

⁴⁰ D=中学生の学生数・高校生の学生数・大学生の学生数・全対象者の対象者数

⁴¹ 算出した頻出アイテムセットは「イメージ&情報源」で表記する。

歴史の授業、教科書」という受動的に利用している情報源の方が高かった。このことから、中学生は主に受動的な情報入手手段を通じて「戦争・歴史認識」イメージを得ていることがうかがえる。

高校生の場合は、「戦争・歴史認識&中国のニュース」40.1%、「大衆文化&中国のポータルサイト・検索エンジン」34.3%、「戦争・歴史認識&中国のポータルサイト・検索エンジン」30.7%という3つの頻出アイテムセットが抽出された。4.1の結果が示したように、高校生の対日イメージにおいて、「大衆文化」と「戦争・歴史認識」の支持度が最も高かった。そのため、この2項目のイメージを中心とする特徴的な頻出アイテムセットも抽出された。この結果から、第一に、日本について「戦争・歴史認識」というイメージを持っている高校生は、「中国のニュース」、「中国のポータルサイト・検索エンジン」という2カテゴリーの情報源を利用することが多いと判断できる。すなわち、「戦争・歴史認識」イメージの形成に関わる情報源は旧メディアと新メディアの2種類ある。また、支持度から見れば、中学生と同様に、高校生も「中国のポータルサイト・検索エンジン」より、「中国のニュース」から影響を受けている。すなわち、「戦争・歴史認識」イメージの形成にあたっては、能動的な情報入手手段より、受動的な情報入手手段のほうが強く影響している。第二に、「大衆文化」イメージを持っている高校生は「中国のポータルサイト・検索エンジン」を多く利用していることが確認された。「戦争・歴史認識」に関わる情報源の多様性と異なり、「大衆文化」イメージ形成に関わる情報源は能動的に利用できる新メディアに限定されているという特徴がある。また、否定的な「戦争・歴史認識」と肯定的な「大衆文化」という二項目のイメージの形成には「中国のポータルサイト・検索エンジン」という共通する情報源がある。つまり、同一の情報源が評価要素の異なるイメージに影響を与えているのである。

大学生の場合は、「戦争・歴史認識&中国のニュース」41.5%という中学生と高校生でも頻出するアイテムセットのみが抽出された。この結果から、日本に対して「戦争・歴史認識」というイメージを持っている大学生は、「中国のニュース」という情報源を利用することが多いことが明らかである。中学生や高校生と比較すれば、大学生から抽出された頻出アイテムセットが最も少ないことが特徴的である。すなわち、支持度が突出している項目がないことから、大学生は、イメージの形成と情報源の利用のどちらにおいても極端な状態ではなく、様々な情報源を平均的に利用することにより、対日イメージを形成していることが分かる。

最後に、全対象者の場合も大学生の結果と同様に、「戦争・歴史認識&中国のニュース」40.7%という頻出アイテムセットのみ抽出された。上述の結果も示すように、「戦争・歴史認識&中国のニュース」はどの学校段階においても抽出された唯一の頻出アイテムセットである。すなわち「中国のニュース」情報源は、どの学校段階の学生における「戦争・歴史認識」イメージの形成にも影響を与えている。また、中学生の「戦争・歴史認識」イメージ形成に役割を果たしている情報源は、高校生と大学生よりさらに多種多様であることも明らかになった。そのうち「中学校・高校の歴史の授業、教科書」が特殊なカテゴリーであることも確認できた。それに対して、高校生の場合は「戦争・歴史認識」のみならず、「大衆文化」に影響を与える情報源も確認された。各学校段階で抽出された頻出アイテムセットのうち、高校段階のみでこのイメージが抽出された。以上のように、本調査では、24 項目のイメージ上位カテゴリーと 27 項目の情報源上位カテゴリーが抽出されたにも関わらず、最少支持度 30%を基準に算出した結果、全ての学校段階を合わせた頻出アイテムセットには 2 項目のイメージと 3 項目の情報源のみが含まれていた。そのため、多種多様なイメージと情報源における相関関係はパターン化されなかった。

3.3 考察

3.3.1 対日イメージの実態

対日イメージについて、中国の中学・高校・大学生の対日イメージについて自由回答法を用いて検討し、対象者の対日イメージの内容を整理した。イメージの内容は、代表的な風物、観光名所、大衆文化など現代的な事柄から、日本の歴史、礼節・習慣、伝統文化など伝統的な事柄まで幅広く及んでいる。そのみならず、「戦争・歴史認識」，「政治・領土問題」，「現代社会」など中国と深く関わる事柄やより内面的な事柄も示された。

それらのイメージを肯定的、中立的、否定的に分けると、肯定的イメージには、「大衆文化」，「経済」，「科学技術・高性能高品質」，「親近感」，「秩序・礼節・習慣」，「ファッション」がある。それに対して、否定的イメージは「戦争・歴史認識」，「政治・領土問題」，「反日感情」のみである。カテゴリー数は肯定的イメージのほうが明らかに多い。また、中立的イメージは最も多く、カテゴリー数の半分を占めている。これは対象者が日本に対してある程度理性的に理解していることを反映していると考えられる。しかし小林（2008）は、中国人の日本に対する具体的なイメージには否定的イメージと肯定的イメージが併存しており、各世論調査において「歴史認識問題」などは否定的事柄として

大きな部分を占めていると指摘している。本調査においても、中立的イメージのカテゴリー数が多くを占めているが、上位カテゴリーの「戦争・歴史認識」における下位カテゴリーは 46 点に達している。この結果から、イメージが多様化しているにもかかわらず、「戦争・歴史認識」という否定的イメージは強調されやすいと言えよう。それが形成された背景は、見城・三村（2010）によれば、戦争被害に関する記憶は教科書やテレビからの影響が極めて大きいという。一方、上位カテゴリーの「大衆文化」の中のアニメについての下位カテゴリーは 69 点、アニメ以外のカテゴリーは 35 点に及ぶ。魏（2014）によると、アニメなどの大衆文化に対する「関心が高ければ高いほど、日本に対する好意的イメージも強まっていく」ことがわかった。そのため、本調査で検証された大衆文化における多方面の事柄が中国の若者に与える肯定的な影響についてさらに注目すべきであろう。従来の先行研究においては、国際関係論にせよ、日本語教育の分野にせよ、なにが相互理解を疎外するかに論点が置かれていたので、否定的なイメージを対象とする研究が多かった。しかし、若者たちがアニメなどの「大衆文化」に持つ肯定的イメージは関係を促進するのに有効であることから、若者たちが肯定的イメージを持つものに対する認知の内容の詳細を分析することには意義がある。また、対象の若者たちにおいては、中立的イメージが多数を占め、対象者がある程度客観的に日本を見ている態度が見て取れるにも関わらず、カテゴリー数が最も多くを占めている中立的イメージは、先行研究では研究対象とされてこなかった。本調査では、否定的イメージ、肯定的イメージだけではなく、さらに中立的イメージが併存していることが確認された。範（2007）は「中国の日本に対するイメージが統一されたものではなく」、「多くのバリエーションがある」と指摘しているが、本調査によって、中国の若者における対日イメージの全体像の「多くのバリエーション」について具体的に示すことができたといえる。

また、それぞれの発達段階における対象者の対日イメージの特徴も明らかとなった。中学段階では、否定的な「戦争・歴史認識」イメージに集中している。高校段階に入ると、「戦争・歴史認識」が弱まる一方、「大衆文化」を代表とする様々な側面の支持度の増加に伴い、対日イメージは一層多様化する。さらに、大学段階に入り、多様化の傾向がやや緩和するが、全体的には高校段階と比べて大差ない。すなわち、対象者の対日イメージは、中学生から高校生への移行段階では大きな相違が認められたが、高校生から大学生への移行段階では定着していく様相が見て取れる。

さらに、カテゴリー分けしたイメージ分析を行った結果、減少傾向のカテゴリーが「戦争・歴史認識」のみであり、増加する傾向が最も顕著なカテゴリーは「代表的な風物」と「科学技術・高性能高品質」であることが明らかになった。すなわち、対象者における戦争に関わる否定的なイメージが減少するとともに、日本に対する憧れを示す肯定的イメージが増加する。その特徴は特に中学校から高校への移行段階で顕著である。そして、高校生の場合は、支持度が最高のカテゴリーが最も多かったが、特に「大衆文化」、「政治・領土問題」と「食文化」の併存は、高校生の現代の日本に関する文化のポジティブな側面と政治のネガティブな側面に対する関心を示しており、二律背反な対日イメージが見て取れる。全体的には、中学生の単純化したイメージ、高校生の多様化したイメージ、大学生の安定化したイメージが、学校段階別の対日イメージの特徴であるといえる。

3.3.2 対日情報源の実態

対日情報源について、本章では、中国の中学・高校・大学生の対日情報源について自由回答法を用いて調査し、対象者の対日情報源の内容を整理した。その結果に基づき、頻出アイテムマイニングによる量的分析を行った。イメージの内容と同様に、情報源の内容も多種多様になっており、①メディア（旧メディア、新メディア）、②教育・教養、③映画・文学、④接触経験、⑤日本側の情報源という5種類に分けることができる。

①メディアは、「中国の新聞、中国のニュース、中国のバラエティ番組」という旧メディアと「中国のポータルサイト・検索エンジン、中国のSNS・BBS、中国の動画サイト、中国のダウンロードサイト」という新メディアに分けられる。

②教育・教養には、「中学校・高校の歴史の授業、教科書、中学校・高校の各科目の授業・教科書（歴史以外）、中国の書籍・雑誌（教科書以外）、家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父等）、大学の日本語の授業」がある。

③映画・文学に分類できるのは「中国のテレビドラマ、中国の映画、記録映画、中国の文学作品」である。

④接触経験には「日本での直接経験（旅行、留学など）、中国での日本人との接触（日本人日本語教師、日本人の友達など）、旅行、語学研修、居住などの直接経験者、人の話」が分類されている。

⑤日本側の情報源には、「日本のアニメ・漫画、日本の映画、日本のテレビドラマ、日本の文学作品、日本のポップミュージック、日本のゲーム」がある。

カテゴリーの内容は多岐にわたっているが、どの学校段階においても支持度 10%以上のカテゴリーは 10 項目以内になっており、重要度の高いカテゴリーは限定される。また、順位には差があるが、異なる学校段階における上位カテゴリーは重なることが多く、限られたカテゴリーに集中している。具体的には、全対象者における支持度 10%以上の情報源はどの学校段階においても上位 7 位に入るカテゴリーである。そのうちの 6 項目は中国側の情報源であり、圧倒的多数を占めているが、「日本のアニメ・漫画」である。これは唯一上位を占める日本側の情報源であり、特徴的といえる。「日本のアニメ・漫画」以外の日本側の情報源は支持度が低いが、先行研究でほとんど注目されていない対日情報源の要素が掘り出されている。また、先行研究では、接触経験は対日イメージにポジティブな影響を及ぼすことが確認されたが、全ての学校段階において、接触経験に分類されたカテゴリーの支持度は 7%以下にとどまっている。接触経験の欠如は中国の若者のみならず、中国人全体における対日情報源の実情を反映していると言えよう。

学校段階別に見ると、中学生にとって、「中国のニュース」と「中学校・高校の歴史の授業、教科書」という自由度の低いカテゴリーに置かれている情報源が主な情報入手手段であった。特に、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」は 2 位となる高頻出の情報源である。高校段階に入り、「中国のニュース」の利用頻度は変わっていないが、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」の代わりに、「中国のポータルサイト・検索エンジン」という新メディア関係の情報源の利用頻度が上位になり、増加する傾向にある。この段階においては、情報源は最も多様化しているとともに、高頻出の情報源が最も集中しているという特徴がみられる。また、日本側の情報源である「日本のアニメ・漫画」は 4 位で、支持度が 30%近くに達しており、突出した情報源である。さらに、高校生における支持度が 30%以上のカテゴリーとその順位も、そして支持度が 10%以上のカテゴリーも大学段階まで維持されており、高頻出の情報源が安定化する傾向が見られる。すなわち、異なる学校段階で利用されている情報源は共通している。中学生から高校生への移行段階においては、全体的に穏やかな傾向ではあるが、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」の利用について顕著な相違が見られ、高校生から大学生への移行段階では、「日本のアニメ・漫画」が特に突出しており注目すべきである。そのほか、対日イメージの形成と同様に、情報源の利用は特に顕著な相違が見られず、固定化する様相が見て取れる。

さらに、カテゴリー別の情報源分析を行った結果、以下のことがわかった。減少傾向のカテゴリーは「中学校・高校の歴史の授業、教科書」と「家庭内の影響・教育（親、祖母、

祖父等)」であり、増加傾向のカテゴリーは「中国のニュース」、「中国の SNS・BBS」、「中国の新聞」、「中国の映画」、「記録映画」であった。そして、支持度が最多であったカテゴリーは高校生が大多数を占めていた。特に「日本のアニメ・漫画」、「中国のポータルサイト・検索エンジン」と「中国の書籍・雑誌（教科書以外）」はそれぞれ日本側と中国側の情報源であるが、対象者が主体的に情報を求めて探しに行くことのできる情報源という特徴がある。総じて言えば、中学生の限定的な情報源、高校生の多種多様な情報源と大学生の安定的な情報源という構図が学校段階別の対日情報源の特徴である。

3.3.3 対日イメージと対日情報源の関連

対象者における対日イメージと対日情報源の相関関係を明らかにするために、頻出パターンマイニングにより、支持度 30%以上のイメージと情報源の頻出アイテムセットを抽出した。

その結果、第一に、全対象者から、「戦争・歴史認識&中国のニュース」という、どの学校段階においても支持度が最高の頻出アイテムセットが抽出された。第二に、中学生と高校生からは「戦争・歴史認識&中国のポータルサイト・検索エンジン」が抽出された。第三に、中学生のみから「戦争・歴史認識&中学校・高校の歴史の授業、教科書」、高校生のみから「大衆文化&中国のポータルサイト・検索エンジン」という頻出アイテムセットが抽出された。

上述の結果から、まず、「戦争・歴史認識」は減少傾向のイメージであるのに対して、「中国のニュース」はそれと逆の増加傾向の情報源であり、どちらにおいても学校段階別に相違が見られた。それにもかかわらず、どの学校段階においても、「戦争・歴史認識」イメージを持っている対象者は「中国のニュース」を利用する頻度が非常に高いことがわかる。また、「戦争・歴史認識」イメージと強い相関関係がある情報源は、「中国のニュース」のみならず、高校生の支持度が最高の「中国のポータルサイト・検索エンジン」も確認された。旧メディアの「中国のニュース」と異なり、新メディアの「中国のポータルサイト・検索エンジン」は、対象者が主体的に情報を求めて取捨選択し利用できる情報源である。さらに、「戦争・歴史認識」イメージと同様に減少傾向にある「中学校・高校の歴史の授業、教科書」情報源は、中学生のみから「戦争・歴史認識」との相関が確認された。このことから、「中学校・高校の歴史の授業、教科書」は「中国のニュース」と異なり、対象者の青年期全期に影響を与えているのではなく、対象者の成長に伴う利用頻度の減少により、その影響力も弱まっており、青年期初期の段階のみで対象者に高頻度を利用

されていると考えられる。中学生においては、3種類の異なる情報源が一種類のイメージに影響を与えていることが確認できた。最後に、高校生の支持度が最高の「大衆文化」イメージと「中国のポータルサイト・検索エンジン」情報源との相関関係も確認された。この情報源は否定的な「戦争・歴史認識」と肯定的な「大衆文化」イメージのどちらにも影響している。この結果から、評価要素からみたイメージの形成と情報源の利用における動的關係がうかがえる。

全体的には、まず、抽出されたイメージと情報源のカテゴリー数は多くなっているにもかかわらず、イメージと情報源に明確な相関関係がある頻出アイテムセットは非常に限られており、パターン化されていないことが明らかになった。また、「戦争・歴史認識」イメージの形成は、先に同一の受動的情報源によってイメージが形成され、その後、対象者は能動的に情報源を利用することによって、それに関する情報をさらに取り入れようとし、選択的情報入手をする可能性がある。一方、全ての情報源を同時に利用し、そのイメージを強化させているという可能性もある。つまり、情報源からイメージの形成に至るまでの経路については、まず、一つの情報源が様々なイメージの形成に役割を果たし、それとともに、一つのイメージは多様な情報源から得た情報によって形成されている。また、形成されたイメージはさらに別のイメージの形成に影響する。このように、情報源からイメージの形成に至るまでの経路は多様化している。

3.3.4 学校段階別に見る対日イメージの形成要因

中学段階においては、主に学校教育から日本に関する情報を入手している。しかし、これらの知識を認識するための思考能力は十分に備わっていない可能性がある。そのため、対日イメージは教科書などの記述や教師の教授に基づくものであり、その形成過程は単純化されていると言えよう。次に、高校段階に入り、年齢があがると共に生徒の思考能力も向上し、教科書やテレビによる日本に関する情報への依存のみならず、様々な情報源を通して能動的に情報を入手することができるようになる。例えば、能動的に利用できる情報源の一つはインターネットである。山谷（2008, p. 98）によると、中国の最大の検索サイトである「百度」では毎年の検索ワードランキングが発表されるが、そのうち、地名別ランキングでは、最も多く検索される外国の国名が日本であることが多く、中国人の日本に対する関心の高さが示されている。また、1.1で述べた中国のインターネット発展状況に

関する調査（2020）⁴²の年齢・職業別の結果からもわかるように、年齢層と職業の2つの側面から見て本研究の調査対象となる若者はネットユーザーの主力であると考えられる。彼らは能動的にインターネットを利用することにより、日本に関する新たな情報を入手できるようになる。それらの情報を通して日本に対する新たな認識も追加される。さらに、高校生から大学生への移行段階では、高校段階で蓄積した知識に基づき変化し定着した対日イメージが一層固定化されるのだろう。イメージの全体図にはそれほど大きな相違が見られなかったが、それぞれのイメージカテゴリーの支持度から考えると、高校生と異なり、大学生は新情報への好奇心が鎮まり、入手した情報をより理性的に選択し受け止めることができるようになると考えられる。

ピアジェの発達段階論によれば、11歳ごろから「形式的操作段階」すなわち「青年期」が開始し、子供は「具体的な現実から離れ、抽象的、仮説的に思考する形式的操作の能力を備える発達の最終段階」に入るという。ピアジェのようにこの青年期を一括りとして考えると、対象者の対日イメージは中学段階からすでに形成されているはずであるが、本調査の結果によれば、対日イメージの変化は中学校段階からではなく、中学から高校への移行段階に生じていることが明らかとなった。その要因については、対日情報源を比較することにより、情報入手する際に、主に歴史教科書や授業などの伝統的かつ受動的な手段に頼っている中学生が、高校段階に入り、情報入手手段の制限から開放され、積極的にかつ能動的に情報を入手していることが考えられる。さらに、高校から大学への移行段階では、イメージと情報源が多様化している実態は似ているが、両段階におけるイメージの相違と情報源の相違の程度から見れば、情報源よりもイメージの相違のほうが顕著である。そのため、この段階におけるイメージの相違は、情報源の種類の相違に由来するのではなく、イメージ形成の主体である対象者の情報源利用の実態に関連している可能性があり、頻出アイテムセットもパターン化されていないのである。高校から大学への移行段階では、対象者が高校段階で積み重ねた知識により変化し定着していく対日イメージは一層固定化される。大学生は新情報への好奇心が鎮まり、情報源の利用もある種の情報源に集中して

⁴² 中国互聯網絡信息中心(CNNIC). (2020). 第45回中国互聯網絡發展狀況統計報告.
<http://www.cac.gov.cn/2020-04/27/c_1589535470378587.htm>(2020年10月27日)

いる状態から、特定の情報源に偏らず様々な情報源から平均的に利用する状態に変わっており、日本に対してより理性的に理解することもできるようになることが見て取れる。

3.4 結論と課題

【研究 1】は、学校段階別に、対日イメージの実態、対日情報源の実態、その両者における関連について検証した。その結果、まず、イメージの形成に影響を与える外的要因から見て、中学生の対日イメージの否定的傾向に対する学校教育の影響が明らかになった。また、高校生の対日イメージと対日情報源の多様化が確認された。そのうち、特に「大衆文化」イメージと「日本のアニメ・漫画」情報源は突出しており、「大衆文化」と「日本のアニメ・漫画」を包含する関係が特徴的である。そして、唯一よく利用されている日本側の情報源としての「日本のアニメ・漫画」は、入手方法からすると、対象者に能動的に利用されている可能性がある。さらに、高校生から大学生への移行段階では、イメージと情報源の多様化している実態が似ていることから、大学生における対日イメージと対日情報源は安定化する傾向が見られた。この結果から、中学の段階で持っている対日イメージは高校段階から再構成されていくことがわかる。しかし、その「多様化する」様相は情報源よりもイメージのほうが顕著であることから、その相違の発生が対象者の情報源利用に関わる可能性が考えられる。

【研究 1】に残された課題としては、以下の 3 点があげられる。①イメージを形成する主体の視点から見て、中学段階の対日イメージの形成過程を考察する必要がある。②「日本のアニメ・漫画」は唯一よく利用されている日本側の情報源であるが、どのように認知されているかを明らかにする必要がある。③高校段階から多様化しているイメージの形成が何に影響を受けるか、そして両段階における情報源の利用の実態にはどのような相違があるかを明らかにするために、高校段階と大学段階別に、そのイメージの形成と情報源の因子構造と両者の間における相関関係を調べる必要がある。

本研究では①と②の課題については【研究 3】として第六章で、③の課題については【研究 2】として次章で取り組むことにしたい。

第4章 【研究2】中国の若者の対日情報源の利用の実態

中国の若者の持つ対日イメージの形成に影響を及ぼす情報源の利用の実態を知ることが目的とした【研究2】では、アンケートによる量的研究手法を用い、まず、高校生・大学生の多様化している対日イメージと対日情報源の因子構造を調べる。またその結果に基づき、両者における対日イメージに与える対日情報源の影響の特徴を明らかにすることを研究課題とする。

4.1 研究方法

4.1.1 質問紙の作成

【研究2】で使用した質問紙は、フェイスシート、対日イメージと対日情報源の3つの部分から成る。本節では、質問紙の構成と内容について詳述する。

(1) フェイスシート

フェイスシートは、対象者の生年月日、性別、所属する大学（大学生のみ）、高校の所在地、日本語学習歴の有無と訪日経験の有無を問う質問で構成した。

(2) 対日イメージ

対日イメージについて、設問「下記の日本に関する事柄はあなたにどのような対日イメージを与えていますか。それぞれの項目に対して、下記の選択肢から最も当てはまるものを1つ選んでください。」、選択肢「1 非常に悪いイメージ、2 悪いイメージ、3 どちらかといえば悪いイメージ、4 どちらかといえばよいイメージ、5 よいイメージ、6 どちらかといえばよいイメージ」を設定し、6件法で回答を求めた⁴³。【研究1】の自由記述の調査結果に基づいて、43項目の対日イメージ尺度を作成した結果、対日イメージに関する先行研究の尺度では扱っていない以下の項目が得られた。

伝統的思想：武士道や男女地位差など日本人の代表的な伝統的な思想に関するもの

性風俗：成人向け映画、風俗業に関わるもの

社会環境：日本の現代社会で優れている面

社会問題：社会問題を表すもの

抗日ドラマ・映画：主に日中戦争に関するテレビドラマ・映画

⁴³ 6件法とした理由は、真ん中の「どちらともいえない」に回答が集中するリスクを避けるためである。

(3) 対日情報源

対日情報源については、設問「以下の情報源から、あなたは日本に関する情報をどれくらい得ていますか。それぞれの項目に対して、下記の選択肢から最も当てはまるものを1つ選んでください。」，選択肢「1 非常に少ない，2 少ない，3 どちらかと言えば少ない，4 どちらかと言えば多い，5 多い，6 非常に多い」を設定し，(2)と同様に6件法⁴⁴で回答を求めた。【研究1】の自由記述の調査結果に基づいて，31項目の対日イメージ尺度を作成した結果，情報源に関する先行研究の尺度では現れていない以下の項目が得られた。

中国のインターネットニュース

中国のSNS

中国の動画サイト

中国のダウンロードサイト

4.1.2 調査概要と分析方法

【研究1】の調査対象者は，中学生・高校生・大学生としたが，前章の調査結果から，対象者の対日イメージは高校段階から変わっていることが明らかになったため，本章では，高校生と大学生を対象とする。

2014年12月から2015年1月にかけて⁴⁵，中国黒竜江省ハルビン市に居住する高校生と非日本語専攻の大学生を対象に，8校（高校5校，大学3校）に依頼し，対日イメージ及びその情報源に関する質問紙調査を実施した。質問紙の配布と回収は調査者が行い，回答に不備（無記入，重複記入等）を発見した場合は，その場で修正を求めた。調査対象となった学生は計824名である。記入漏れなどの欠損値が含まれるデータを除外した結果，769名のデータが分析対象となった。表4-1は対象者の性別・学校段階別構成である。

表 4-1 対象者の性別・学校段階別構成

教育機関	男子	女子	合計
高校	216 名	209 名	425 名
大学（非日本語専攻）	166 名	178 名	344 名
合計	382 名	387 名	769 名

⁴⁴ 「どちらもしゃいない」に回答が集中するリスクを避けるため，6件法を設けた。

⁴⁵ 中国の中等・高等教育は，9月に開始し，7月に終了する。

【研究 2】では、以下の手順で分析(SPSS version20.0 使用)を行う。質問紙調査の結果に対し因子分析を行い、対日イメージと対日情報源の構造を明らかにする。また、それらの結果に基づき、相関分析を行い、情報源が対日イメージに与えている影響を検討し、高校と大学の相違を調べる。

- (1) 質問紙調査実施
- (2) 高校生、大学生別の因子分析
- (3) 因子構造の比較
- (4) 因子間相関の比較
- (5) 考察

4.2 結果

4.2.1 記述統計量

4.2.1.1 対日イメージの記述統計量

結果について、高校生と大学生に分けて述べる。まず、高校生と大学生の対日イメージのデータを基にそれぞれ記述統計量（表 4-2）を算出し、天井効果と床効果について調べた。高校生においては、平均(M)と標準偏差(SD)の和が 6.00 以上である「アニメ・漫画」は天井効果が見られ、平均(M)と標準偏差(SD)の差が 1.00 以下である「日本のアダルトビデオ」、「領土問題」、「首相・政治家」、「右翼勢力」、「日本の歴史認識」、「男尊女卑、亭主関白」、「武士道」、「日中戦争、日清戦争」には床効果が見られた。一方、大学生においては、天井効果が見られなかったが、平均(M)と標準偏差(SD)の差が 1.00 以下である「原発事故」、「動物保護問題」、「日中関係」、「領土問題」、「平和憲法」、「首相・政治家」、「右翼勢力」、「日本の歴史認識」、「男尊女卑・亭主関白」、「武士道」、「日中戦争・日清戦争」には床効果が見られた。

表 4-2 対日イメージ記述統計量

対日イメージの項目	高校生		大学生	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
01日本の国旗（日章旗）	2.55	1.194	2.39	1.291
02日本の象徴（桜、富士山等）	4.42	1.329	4.21	1.29
03自然環境（地震、火山、津波等）	3.20	1.611	2.9	1.473
04地理環境（四面環海、島国、日本地図等）	3.64	1.478	3.43	1.51
05観光（東京タワー、北海道、温泉等）	4.48	1.395	4.28	1.285

06日本料理（寿司，刺身，抹茶，たこ焼き等）	4. 61	1. 387	4. 27	1. 418
07日本語（仮名，かわいい，の等）	3. 59	1. 469	3. 36	1. 468
08原発事故	2. 11	1. 408	2. 05	1. 364
09生活環境（一戸建て，自販機，量，空気・水の質等）	4. 39	1. 455	4. 15	1. 396
10社会環境（街の衛生面，自然環境を守る意識，交通秩序等）	4. 58	1. 406	4. 27	1. 422
11社会問題	3. 10	1. 596	2. 91	1. 519
12動物保護問題（捕鯨問題等）	2. 51	1. 500	2. 3	1. 498
13日中関係	2. 05	1. 045	2. 05	1. 141
14反日感情（反日デモ，日本製品不買運動，小日本等）	3. 11	1. 581	3. 03	1. 51
15中国のテレビドラマ，映画，テレビ番組の中の日本・日本人 （『愛情公寓』の関谷，映画『狙った恋の落とし方』など）	4. 37	1. 280	3. 92	1. 235
16中国の抗日テレビドラマ（『亮剣』，『雪豹』等）	3. 97	1. 715	3. 98	1. 622
17中国の抗日映画（『地道戦』，『举起手来』，『南京！南京！』， 『金陵十三の簪』等）	3. 80	1. 740	3. 99	1. 656
18日本のテレビドラマ・映画（『大奥』，『東京ラブストーリー』， 『のだめカンタービレ』，『おくりびと』等）	3. 31	1. 502	3. 43	1. 459
19俳優（山下智久，上野樹里，長澤まさみ，木村拓哉等）	3. 29	1. 547	3. 32	1. 4
20歌手（AKB48，倉木麻衣，小田和正，嵐等）	3. 42	1. 562	3. 44	1. 4
21日本のアダルトビデオ（AV，蒼井そら，小澤マリア等）	2. 68	1. 715	3. 06	1. 749
22アニメ・漫画（コナン，ドラえもん，ブリーチ，宮崎駿等）	4. 83	1. 377	4. 37	1. 529
23ゲーム（PSP，三国無双，任天堂，モンスターハンター等）	3. 98	1. 711	3. 67	1. 593
24ファッション（学校の制服，ブランド洋服，メイク等）	4. 25	1. 549	3. 89	1. 526
25領土問題	1. 56	. 881	1. 69	1. 114
26首相・政治家	1. 69	1. 013	1. 73	1. 114
27中日文化交流・学生交流	3. 09	1. 482	3. 07	1. 484
28平和憲法	2. 64	1. 475	2. 3	1. 357
29右翼勢力	1. 95	1. 170	1. 73	1. 098
30日本の歴史認識	2. 07	1. 285	1. 71	1. 138
31日本人の礼節	3. 97	1. 583	4. 06	1. 453
32日本人の仕事に対する態度	4. 15	1. 519	4. 26	1. 408
33日本人男性	2. 70	1. 480	2. 67	1. 496
34日本人女性	3. 27	1. 632	3. 48	1. 62
35男尊女卑，亭主関白	2. 05	1. 332	2. 17	1. 39
36武士道（日本刀，武士，切腹等）	2. 41	1. 629	2. 26	1. 494
37伝統文化（和服，歌舞伎，茶道，相撲等）	3. 67	1. 562	3. 54	1. 452
38日本文学（『源氏物語』，夏目漱石，川端康成，村上春樹等）	3. 71	1. 617	3. 9	1. 489
39日本の歴史（日清戦争以前）（遣唐使，明治維新等）	2. 63	1. 559	2. 54	1. 409
40日中戦争・日清戦争	1. 92	1. 344	1. 99	1. 331
41科学技術（自動車，電化製品，カメラ，腕時計等）	4. 40	1. 371	4. 25	1. 465
42経済（先進国，高層ビル等）	4. 32	1. 450	4. 2	1. 482
43あなたの日本に対する全体的なイメージはどうか。	3. 07	1. 345	2. 99	1. 238

（網掛けは天井効果，床効果のため削除する項目）

まず、高校生については、天井効果が見られた「アニメ」が平均値の最も高い項目である。【研究1】では、「アニメ」に関するイメージも多く収集されたため、このイメージは量的に上位を占めるのみならず、質的にも対象者にポジティブな対日イメージを与えていると言えよう。また、「原発事故」、「政治・領土問題」、「首相・政治家」、「右翼勢力」、「日本の歴史認識」、「男尊女卑・亭主関白」、「武士道」、「日中戦争・日清戦争」という8の項目は、高校生と大学生ともに床効果が見られた。高校生も大学生においても、これらの項目は得点が低い方へ寄っている。【研究1】において、「戦争・歴史認識」は高校生では2位、大学生では1位であり、「政治・領土問題」は高校生では3位、大学生では4位と上位であった。すなわち、それらの事柄にかかわる項目は量的に多く、質的には対日イメージにネガティブな影響を与えていることが明らかである。

以上のように、因子分析では、高校生では10項目を除外し、32項目で分析を行った。大学生では11項目を除外し、31項目で分析を行った。

4. 2. 1. 2 対日情報源の記述統計量

全対象者の対日情報源のデータを基に平均値と標準偏差（表 4-3）を算出したところ、1点未満の床効果が見られた。高校生と大学生においては、天井効果が見られなかったが、共通で平均(M)と標準偏差(SD)の差が 1.00 以下である「日本の新聞」、「日本のテレビニュース」、「日本のバラエティ番組」、「日本のインターネットニュース（ヤフーなど）」、「日本の SNS・BBS（ツイッター、ライン等）」、「日本のテレビドラマ」、「日本の書籍・雑誌」、「家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父など）」、「日本での直接経験（旅行、留学など）」、「中国での日本人との接触（日本人日本語教師、日本人の友達など）」、「直接経験（旅行、語学研修、居住等）した人・日本に詳しい人」には床効果が見られた。一方、「日本の映画」、「日本の文学作品」は高校生のみに、高校生に測定しなかった「大学の日本語の授業」は大学生のみに床効果が見られた。

以上のように、対日情報源について、高校生では14項目を除外し、16項目で分析を行った。大学生には13項目を除外し、18項目で分析を行った。

表 4-3 対日情報源記述統計量

対日情報源の項目	高校生		大学生	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
01 中国の新聞	2.78	1.413	2.72	1.245
02 中国のテレビニュース	3.4	1.459	3.42	1.262
03 中国のバラエティ番組（『天天向上』，『東京印象』など）	2.98	1.451	3.11	1.346
04 中国のインターネットニュース（新浪，搜狐，百度等）	3.54	1.501	3.76	1.341
05 中国の SNS・BBS（微信，微博，QQ，論壇，貼バ等）	3.61	1.573	3.65	1.433
06 中国の動画サイト（土豆网，優酷網，愛奇芸，芒下網等）	3.18	1.553	3.41	1.288
07 中国のダウンロードサイト（人人影視，豚豚，光合社，日菁等）	2.71	1.402	3.12	1.305
08 中国の映画	3.78	1.42	3.54	1.313
09 中国のテレビドラマ	3.96	1.461	3.62	1.378
10 中国の文学作品	3.44	1.488	3.28	1.345
11 中国の書籍，雑誌（教科書以外）	3.16	1.444	3.18	1.41
12 中学高校の歴史の授業，教科書	3.81	1.397	3.83	1.373
13 中学高校の各科目の授業，教科書（歴史以外）	3.11	1.446	3.33	1.412
14 大学の日本語の授業	—	—	2.13	1.424
15 日本の新聞	1.63	1.065	1.81	1.226
16 日本のテレビニュース	1.62	1.056	1.8	1.198
17 日本のバラエティ番組	1.72	1.205	1.86	1.181
18 日本のインターネットニュース（ヤフーなど）	1.67	1.155	1.79	1.148
19 日本の SNS・BBS（ツイッター，ライン等）	1.73	1.175	1.89	1.271
20 日本の映画	2.24	1.528	2.56	1.541
21 日本のテレビドラマ	1.99	1.342	2.26	1.437
22 日本の文学作品	2.19	1.496	2.51	1.461
23 日本の書籍，雑誌	2.07	1.427	2.22	1.338
24 日本のポップミュージック	2.62	1.612	2.65	1.475
25 日本のアニメ・漫画	3.75	1.76	3.58	1.808
26 日本のゲーム	2.96	1.843	2.74	1.72
27 家庭内の影響・教育（親，祖母，祖父など）	2.48	1.557	2.39	1.492
28 日本での直接経験（旅行，留学など）	1.35	0.822	1.65	1.169
29 中国での日本人との接触（日本人日本語教師，日本人の友達など）	1.51	1.013	1.82	1.216
30 直接経験（旅行，語学研修，居住等）した人・日本に詳しい人	1.71	1.205	1.96	1.372
31 その他（ ）	1.67	1.181	2.5	1.567

（網掛けは天井効果，床効果のため削除する項目）

4.2.2 対日イメージの因子分析結果

4.2.2.1 高校生

高校生の対日イメージ尺度 32 項目に対して主因子法による因子分析（表 4-4）を行った。固有値の変化は 10.86，2.26，1.98，1.53，1.37，1.22...というものであり，4 因

子構造が妥当であると考えられた。そこで 4 因子を仮定して主因子法・Promax 回転⁴⁶による 2 回目の因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量（.30 以下）を示さなかった 2 項目（「中国のテレビドラマ、映画、テレビ番組の中の日本・日本人（『愛情公寓』の関谷、映画『狙った恋の落とし方』など）」、「自然環境（地震、火山、津波等）」）を分析から除外し、主因子法・Promax 回転による 3 回目の因子分析を行った結果、因子負荷量を.30 以上持つ 30 項目による 4 因子を抽出した。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 4-4 に示す。なお、回転前の 4 因子の説明率はそれぞれ 33.81%, 6.54%, 4.78%, 3.53%で 30 項目の全分散を説明する割合は 48.66%であった。

表 4-4 高校生の対日イメージの因子分析

高校生の対日イメージ項目	因子			
	1	2	3	4
第 1 因子：日本の社会と文化 $\alpha=.926$				
42 経済（先進国、高層ビル等）	0.862	-0.027	-0.14	0.023
41 科学技術（自動車、電化製品、カメラ、腕時計等）	0.855	-0.085	-0.078	0.072
10 社会環境（街の衛生面、自然環境を守る意識、交通秩序等）	0.794	-0.13	0.011	0.034
05 観光（東京タワー、北海道、温泉等）	0.74	0.048	0.008	-0.091
32 日本人の仕事に対する態度	0.719	0.044	0.004	0.036
09 生活環境（一戸建て、自販機、量、空気・水の質等）	0.694	-0.114	0.109	0.032
06 日本料理（寿司、刺身、抹茶、たこ焼き等）	0.668	-0.108	0.113	-0.121
31 日本人の礼節	0.645	0.105	-0.006	-0.006
02 日本の象徴（桜、富士山等）	0.572	0.197	0.003	-0.063
24 ファッション（学校の制服、ブランド洋服、メイク等）	0.511	-0.194	0.344	0.058
37 伝統文化（和服、歌舞伎、茶道、相撲等）	0.499	0.255	0.036	0.032
04 地理環境（四面環海、島国、日本地図等）	0.484	0.274	-0.133	-0.048
38 日本文学（『源氏物語』、夏目漱石、川端康成、村上春樹等）	0.427	0.244	0.159	-0.04
07 日本語（仮名、かわいい、の等）	0.328	0.061	0.313	-0.086
第 2 因子：日本の政治 $\alpha=.804$				
28 平和憲法	0.024	0.759	-0.107	0.027
13 日中関係	-0.239	0.745	-0.023	0.058
27 中日文化交流・学生交流	0.109	0.653	0.002	-0.027
01 日本の国旗（日章旗）	-0.027	0.554	0.065	-0.014
39 日本歴史（日清戦争以前）（遣唐使、明治維新等）	-0.024	0.537	0.14	-0.017
33 日本人男性	0.092	0.495	0.099	0.061

⁴⁶本論文においては、先行研究（江 2014a, 2014b）と比較するため、同じ分析手法（主因子法・Promax 回転）を用いた。

11 社会問題	0.253	0.355	-0.023	0.061
12 動物保護問題（捕鯨問題等）	0.046	0.326	0	0.026
第3因子：日本のポップカルチャー $\alpha=.823$				
20 歌手（AKB48, 倉木麻衣, 小田和正, 嵐等）	-0.08	0.037	0.911	0.01
19 俳優（山下智久, 上野樹里, 長澤まさみ, 木村拓哉等）	-0.073	0.082	0.866	-0.034
23 ゲーム（PSP, 三国無双, 任天堂, モンスターハンター等）	0.108	-0.127	0.664	0.032
18 日本のテレビドラマ・映画（『大奥』, 『東京ラブストーリー』, 『のだめカンタービレ』, 『おくりびと』等）	0.077	0.176	0.442	0.063
34 日本人女性	0.152	0.083	0.364	0.054
第4因子：中国にある日本 $\alpha=.758$				
17 中国の抗日映画（『地道戦』, 『拳起手来』, 『南京！南京！』, 『金陵十三の簪』等）	0.011	0.021	-0.012	0.964
16 中国の抗日テレビドラマ（『亮剣』, 『雪豹』等）	0.035	-0.01	0.024	0.912
14 反日感情（反日デモ, 日本製品不買運動, 小日本等）	-0.059	0.107	0.041	0.336
累積寄与率（%）	33.81	40.35	45.13	48.66
因子間相関	.622			
	.652			
	.598			
				-.044

第1因子の項目は2つの種類に分けられる。まず、「42経済（先進国, 高層ビル等）」, 「41科学技術（自動車, 電化製品, カメラ, 腕時計等）」, 「10社会環境（街の衛生面, 自然環境を守る意識, 交通秩序等）」, 「05観光（東京タワー, 北海道, 温泉等）」, 09生活環境（一戸建て, 自販機, 畳, 空気・水の質等）」, 「04地理環境（四面環海, 島国, 日本地図等）」という現在の日本社会に関わる事柄がある。また, 「32日本人の仕事に対する態度」, 「06日本料理（寿司, 刺身, 抹茶, たこ焼き等）」, 「31日本人の礼節」, 「02日本の象徴（桜, 富士山等）」, 「24ファッション（学校の制服, ブランド洋服, メイク等）」, 「37伝統文化（和服, 歌舞伎, 茶道, 相撲等）」, 「38日本文学（『源氏物語』, 夏目漱石, 川端康成, 村上春樹等）」, 「07日本語（仮名, かわいい, の等）」という日本文化に関する事柄が多く含まれている。そのため, 第1因子を「日本の社会と文化」と命名した。

第2因子の項目は「28平和憲法」, 「13日中関係」, 「27中日文化交流・学生交流」, 「01日本の国旗（日章旗）」, 「39日本歴史（日清戦争以前）（遣唐使, 明治維新等）」, 「33日本人男性」, 「11社会問題」, 「12動物保護問題（捕鯨問題等）」からなっている。そのうち, 現在と昔の日本の政治に関わる項目の負荷量が高いため, 「日本の政治」と命名した。

第3因子の項目は、「20歌手（AKB48，倉木麻衣，小田和正，嵐等）」，「19俳優（山下智久，上野樹里，長澤まさみ，木村拓哉等）」，「23ゲーム（PSP，三国無双，任天堂，モンスターハンター等）」，「18 日本のテレビドラマ・映画（『大奥』，『東京ラブストーリー』，『のだめカンタービレ』，『おくりびと』等）」，「34日本人女性」からなっている。そのうち，現代の日本で流行しているポップカルチャーに関する項目の負荷量が高いため，「日本のポップカルチャー」と命名した。

第4因子の項目は，「17 中国の抗日映画（『地道戦』，『举起手来』，『南京！南京！』，『金陵十三の簪』等）」，「16中国の抗日テレビドラマ（『亮劍』，『雪豹』等）」，「14 反日感情（反日デモ，日本製品不買運動，小日本等）」という3項目からなっている。いずれも中国にある日本に関する項目であるため，「中国にある日本」と命名した。

それぞれの因子の信頼性を確認するため，因子ごとにChronbachの α 係数を求めたところ，第 1 因子 $\alpha=.926$ ，第 2 因子 $\alpha=.804$ ，第 3 因子 $\alpha=.823$ ，第 4 因子 $\alpha=.758$ と，それぞれに整合性が認められた。

4. 2. 2. 2 大学生

大学生の対日イメージ尺度 31 項目に対して主因子法による因子分析（表 4-5）を行った。固有値の変化は 10. 27，2. 48，1. 96，1. 73，1. 37，1. 22，...というものであり，4 因子構造が妥当であると考えられた。そこで4 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による 2 回目の因子分析を行った。その結果，十分な因子負荷量（.30 以下）を示さなかった 3 項目（「社会問題」，「日本人男性」，「日本歴史」）を分析から除外し，主因子法・Promax 回転による 3 回目の因子分析を行った。その結果，因子負荷量を.30 以上持つ 28 項目による 4 因子を抽出した。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 4-5 に示す。なお，回転前の 4 因子の説明率はそれぞれ 33. 11%，7. 23%，5. 05%，4. 35%で 28 項目の全分散を説明する割合は 49. 74%であった。

表 4-5 大学生の対日イメージの因子分析

大学生の対日イメージの項目	因子			
	1	2	3	4
第1因子：日本の社会と文化 $\alpha=.924$				
41 科学技術（自動車，電化製品，カメラ，腕時計等）	0. 887	-0. 120	-0. 075	-0. 126
42 経済（先進国，高層ビル等）	0. 856	-0. 090	-0. 030	-0. 095
32 日本人の仕事に対する態度	0. 830	0. 001	-0. 162	-0. 003

31 日本人の礼節	0.805	0.060	-0.159	-0.026
10 社会環境（街の衛生面，自然環境を守る意識，交通秩序等）	0.790	-0.048	-0.158	0.054
38 日本文学（『源氏物語』，夏目漱石，川端康成，村上春樹等）	0.790	0.030	-0.079	0.086
09 生活環境（一戸建て，自販機，量，空気，水の質等）	0.727	0.013	-0.111	0.060
37 伝統文化（和服，歌舞伎，茶道，相撲等）	0.598	0.115	0.030	-0.066
05 観光（東京タワー，北海道，温泉等）	0.509	-0.181	0.508	0.003
02 日本の象徴（桜，富士山等）	0.482	-0.199	0.462	-0.015
24 ファッション（学校の制服，ブランド洋服，メイク等）	0.471	0.367	-0.067	0.000
06 日本料理（寿司，刺身，抹茶，たこ焼き等）	0.453	-0.102	0.395	-0.070
22 アニメ，漫画（コナン，ドラえもん，ブリーチ，宮崎駿等）	0.431	0.369	-0.078	0.093
27 中日文化交流，学生交流	0.418	0.184	0.040	-0.013
18 日本のテレビドラマ・映画（『大奥』，『東京ラブストーリー』，『のだめカンタービレ』，『おくりびと』等）	0.374	0.146	0.091	0.206
第2因子：日本のポップカルチャー $\alpha=.821$				
23 ゲーム（PSP，三国無双，任天堂，モンスターハンター等）	0.069	0.734	-0.015	-0.022
21 日本のアダルトビデオ（AV，蒼井そら，小澤マリア等）	-0.228	0.715	-0.046	-0.032
20 歌手（AKB48，倉木麻衣，小田和正，嵐等）	0.133	0.643	0.139	0.060
19 俳優（山下智久，上野樹里，長澤まさみ，木村拓哉等）	0.175	0.610	0.152	-0.025
34 日本人女性	0.207	0.471	0.014	-0.015
第3因子：日本の独自性 $\alpha=.674$				
04 地理環境（四面環海，島国，日本地図等）	-0.038	0.029	0.709	0.083
03 自然環境（地震，火山，津波等）	-0.307	-0.014	0.669	0.045
01 日本の国旗（日章旗）	-0.240	0.202	0.545	-0.053
07 日本語（仮名，かわいい，の等）	0.185	0.304	0.367	-0.105
第4因子：中国にある日本 $\alpha=.742$				
17 中国の抗日映画（『地道戦』，『举起手来』，『南京！南京！』，『金陵十三の簪』等）	0.038	-0.082	-0.032	0.864
16 中国の抗日テレビドラマ（『亮剣』，『雪豹』等）	-0.061	-0.039	0.061	0.787
14 反日感情（反日デモ，日本製品不買運動，小日本等）	-0.130	0.071	-0.012	0.507
15 中国のテレビドラマ，映画，テレビ番組の中の日本・日本人（『愛情公寓』の関谷，映画『狙った恋の落とし方』など）	0.223	0.019	0.085	0.429
累積寄与率（%）	33.11	40.33	45.38	49.74
因子間相関	.597			
	.552			
	.071			
	.433			
	.065			
	.156			

第1因子の項目は，高校と同様に2つの種類に分けることができる。まず，「41科学技術（自動車，電化製品，カメラ，腕時計等）」，「42経済（先進国，高層ビル等）」，「10社会環境（街の衛生面，自然環境を守る意識，交通秩序等）」，「09生活環境（一戸建て，自販機，量，空気・水の質等）」という現在の日本社会に関わる項目がある。また，「32日本人の仕事に対する態度」，「31日本人の礼節」，「38日本文学（『源氏物語』，夏目漱石，川端康成，村上春樹等）」，「37伝統文化（和服，歌舞伎，茶道，相撲等）」，「05

観光（東京タワー、北海道、温泉等）」，「02日本の象徴（桜、富士山等）」，「24ファッション（学校の制服、ブランド洋服、メイク等）」，「06日本料理（寿司、刺身、抹茶、たこ焼き等）」，「22アニメ、漫画（コナン、ドラえもん、ブリーチ、宮崎駿等）」，「27中日文化交流、学生交流」，「18日本のテレビドラマ、映画（『大奥』，『東京ラブストーリー』，『のだめカンタービレ』，『おくりびと』等）」など日本文化に関する項目がある。これらの項目が高い正の負荷量を示していた。そのため，「日本の社会と文化」と命名した。

第2因子の項目は，「23ゲーム（PSP、三国無双、任天堂、モンスターハンター等）」，「19俳優（山下智久、上野樹里、長澤まさみ、木村拓哉等）」など現代日本のポップカルチャーに関わる項目が高い正の負荷量を示していたため，「日本のポップカルチャー」と命名した。

第3因子の項目は「04地理環境（四面環海、島国、日本地図等）」，「03自然環境（地震、火山、津波等）」，「01日本の国旗（日章旗）」，「07日本語（仮名、かわいい、の等）」という地理的及び文化的に日本に特有な項目が高い正の負荷量を示していたため，「日本の独自性」と命名した。

第4因子の項目は，「17 中国の抗日映画（『地道戦』，『举起手来』，『南京！南京！』，『金陵十三の簪』等）」，「16中国の抗日テレビドラマ（『亮剣』，『雪豹』等）」，「14反日感情（反日デモ、日本製品不買運動、小日本等）」，「15中国のテレビドラマ、映画、テレビ番組の中の日本・日本人（『愛情公寓』の関谷、映画『狙った恋の落とし方』など）」という4項目が高い正の負荷量を示していた。いずれも中国にある日本に関する項目であるため，「中国にある日本」と命名した。

それぞれの因子の信頼性を確認するため、因子ごとにChronbachの α 係数を求めたところ、第1因子 $\alpha=.924$ 、第2因子 $\alpha=.821$ 、第3因子 $\alpha=.674$ 、第4因子 $\alpha=.742$ と、第3因子の信頼性がやや低いものの、それ以外は信頼性が認められた。

4.2.2.3対日イメージの因子構造の比較

本節では，「日本の社会と文化」，「日本のポップカルチャー」，「中国にある日本」という大学生と高校生の間で共通する三つの因子の項目を比較し，両学校段階における因子間の共通点と相違点を明らかにする。

1) 「日本の社会と文化」の項目比較

表 4-6 「日本の社会と文化」の項目比較

高校生の「日本の社会と文化」イメージ	大学生の「日本の社会と文化」イメージ
42経済 （先進国、高層ビル等） 41科学技術 （自動車、電化製品、カメラ、腕時計等） 10社会環境 （街の衛生面、自然環境を守る意識、交通秩序等） 05観光 （東京タワー、北海道、温泉等） 32日本人の仕事に対する態度 09生活環境 （一戸建て、自販機、畳、空気・水の質等） 06日本料理 （寿司、刺身、抹茶、たこ焼き等） 31日本人の礼節 02日本の象徴 （桜、富士山等） 24ファッション （学校の制服、ブランド洋服、メイク等） 37伝統文化 （和服、歌舞伎、茶道、相撲等） 04地理環境 （四面環海、島国、日本地図等） 38日本文学 （『源氏物語』、夏目漱石、川端康成、村上春樹等） 07日本語 （仮名、かわいい、の等）	41科学技術 （自動車、電化製品、カメラ、腕時計等） 42経済 （先進国、高層ビル等） 32日本人の仕事に対する態度 31日本人の礼節 10社会環境 （街の衛生面、自然環境を守る意識、交通秩序等） 38日本文学 （『源氏物語』、夏目漱石、川端康成、村上春樹等） 09生活環境 （一戸建て、自販機、畳、空気、水の質等） 37伝統文化 （和服、歌舞伎、茶道、相撲等） 05観光 （東京タワー、北海道、温泉等） 02日本の象徴 （桜、富士山等） 24ファッション （学校の制服、ブランド洋服、メイク等） 06日本料理 （寿司、刺身、抹茶、たこ焼き等） 22アニメ、漫画 （コナン、ドラえもん、プリーチ、宮崎駿等） 27中日文化交流、学生交流 18日本のテレビドラマ・映画 （『大奥』、『東京ラブストーリー』、『のだめカンタービレ』、『おくりびと』等）

（太字は高校生と大学生の共通項目）

表 4-6 に示したように「日本の社会と文化」因子は、高校生と大学生で相違のある項目が少なく、共通する項目が多かった。高校生のみに、四面環海、島国、日本地図等の「地理環境」と仮名などの「日本語」の 2 つの項目が高い負荷量を示していた。それに対して、大学生のみに、「アニメ・漫画」と「日本のテレビドラマ・映画」は第 1 因子に負荷量が高かった。渋谷ほか（2011）はドラマによる現実的な場面の再現によって異文化接触の直接体験に近い疑似体験ができると指摘している。そのような作品の中で、日本の社会と文化を間接接触によりリアルに認識すると言えよう。また、「中日文化交流、学生交流」がこの因子に入ることは、日本を理解するための人的コミュニケーション、対面コミュニケーション等の重要性を示していると言えよう。

2) 「日本のポップカルチャー」の項目比較

表 4-7 「日本のポップカルチャー」の項目比較

高校生の「日本のポップカルチャー」イメージ	大学生の「日本のポップカルチャー」イメージ
20歌手 （AKB48、倉木麻衣、小田和正、嵐等） 19俳優 （山下智久、上野樹里、長澤まさみ、木村拓哉等） 23ゲーム （PSP、三国無双、任天堂、モンスターハンター等） 18 日本のテレビドラマ・映画 （『大奥』、『東京ラブストーリー』、『のだめカンタービレ』、『おくりびと』等） 34日本人女性	23ゲーム （PSP、三国無双、任天堂、モンスターハンター等） 21日本のアダルトビデオ （AV、蒼井そら、小澤マリア等） 20歌手 （AKB48、倉木麻衣、小田和正、嵐等） 19俳優 （山下智久、上野樹里、長澤まさみ、木村拓哉等） 34日本人女性

（太字は高校生と大学生の共通項目）

表4-7に示したように、高校生の第3因子と大学生の第2因子「日本のポップカルチャー」においては、「20歌手」、「19俳優」、「23ゲーム」、「34日本人女性」という4つの項目は重複している。「18日本のテレビドラマ、映画」は、高校生では、この第3因子に負荷量が高いのに対して、大学生では、第1因子「日本の社会と文化」に高い負荷量を示していた。また、高校生において床効果で削除された、中国で禁じられている「日本のアダルトビデオ」は、大学生の第2因子に入った。さらに、江（2014a）は中国人の日本人男性の人間性に対してネガティブな評価をしているのに対して、日本人女性に対してはポジティブな評価が際立っていることが検証された。本研究の結果から、日本人女性と言えば、男性に比較し、比較的単純なポジティブなイメージ以外に、日本のアダルトビデオの女優と関連させる場合があるため、「日本人女性」という項目は高校生でも大学生でも「日本のポップカルチャー」因子に入ったことが言えるだろう。

3) 「中国にある日本」の項目比較

表 4-8 「中国にある日本」の項目比較

高校生の「中国にある日本」イメージ	大学生の「中国にある日本」イメージ
17 中国の抗日映画（『地道戦』、『举起手来』、『南京！南京！』、『金陵十三の簪』等）	17中国の抗日映画『地道戦』、『举起手来』、『南京！南京！』、『金陵十三の簪』等
16中国の抗日テレビドラマ（『亮剣』、『雪豹』等）	16中国の抗日テレビドラマ（『亮剣』、『雪豹』等）
14反日感情（反日デモ、日本製品不買運動、小日本等）	14反日感情（反日デモ、日本製品不買運動、小日本等）
	15中国のテレビドラマ・映画、テレビ番組の中の日本・日本人（『愛情公寓』の関谷、映画『狙った恋の落とし方』など）

（太字は高校生と大学生の共通項目）

表 4-8 に示したように、高校生と大学生において唯一異なる項目は「中国のテレビドラマ・映画、テレビ番組の中の日本・日本人」（これを「中国にある日本人」とする）。である。このような因子は、他の因子と異なり、日本に存在する事柄ではなく、中国の媒体を通して読み取った日本である。

高校生では、これは第1因子「日本の社会と文化」に入った項目であった。平均値を見ると、高校生は 4.37、大学生は 3.92 となっており、この項目に対して高校と大学の得点差を t 検定により検討したところ、有意に異なっていた ($t=4.99, p<.001$)。

4.2.3 対日情報源の因子分析結果

4.2.3.1 高校生

高校生の対日情報源尺度16項目に対して主因子法による因子分析（表4-9）を行った。固有値の変化は5.53, 2.22, 1.51, 1.20, 1.02, 0.80, ...というものであり、4因子構造が妥当であると考えられた。そこで5因子を仮定して主因子法・Promax回転による2回目の因子分析を行った。その結果、因子負荷量を.30以上持つ16項目による4因子を抽出した。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表4-9に示す。なお、回転前の4因子で16項目の全分散を説明する割合は54.83%であった。

表 4-9 高校生の対日情報源の因子分析

高校生の対日情報源項目	因子			
	1	2	3	4
第1 因子：教育教養・映像作品と文芸作品 $\alpha=.849$				
08 中国の映画	0.784	0.168	-0.066	-0.101
09 中国のテレビドラマ	0.769	0.051	-0.053	-0.021
12 中学高校の歴史の授業，教科書	0.747	-0.239	0.061	0.137
10 中国の文学作品	0.603	0.181	-0.01	-0.079
13 中学高校の各科目の授業，教科書（歴史以外）	0.588	-0.014	0.022	0.062
11 中国の書籍，雑誌（教科書以外）	0.568	-0.028	0.076	0.12
第2 因子：視聴・交流 $\alpha=.788$				
06 中国の動画サイト（土豆网，優酷網，愛奇芸，芒果網等）	-0.008	0.832	0.042	-0.081
07 中国のダウンロードサイト（人人影視，豚豚，光合社，日菁等）	0.066	0.816	-0.041	-0.137
05 中国のSNS・BBS（微信，微博，QQ，論壇，貼バ等）	-0.06	0.584	0.046	0.208
03 中国のバラエティ番組（『天天向上』，『東京印象』など）	0.052	0.382	0.008	0.307
第3 因子：日本の大衆文化 $\alpha=.811$				
25 日本のアニメ・漫画	0.093	-0.091	0.87	-0.074
26 日本のゲーム	0.003	0.056	0.767	-0.053
24 日本のポップミュージック	-0.09	0.094	0.66	0.093
第4 因子：ニュース報道 $\alpha=.763$				
02 中国のテレビニュース	0.074	-0.082	-0.057	0.842
01 中国の新聞	0.017	-0.021	0.004	0.71
04 中国のインターネットニュース（新浪，搜狐，百度等）	-0.019	0.417	0.022	0.451
累積寄与率（%）	33.81	40.35	45.13	48.66
因子間相関	.524			
	.112			.491
	.314		.510	
	.130			

各因子は以下のように解釈できる。

第1因子は「08 中国の映画」，「09 中国のテレビドラマ」という物語を伝える映像メディア，「12 中学高校の歴史の授業，教科書」，「10 中国の文学作品」，「13 中学高校の各科目の授業，教科書（歴史以外）」，「11 中国の書籍，雑誌（教科書以外）」という学校教育，教養の習得に関わる項目が高い正の負荷量を示していた。そこで「教育教養・映像作品と文芸作品」と命名した。

第2因子は「06 中国の動画サイト（土豆網，優酷網，愛奇芸，芒果網等）」，「07 中国のダウンロードサイト（人人影視，豚豚，光合社，日菁等）」，「05 中国の SNS・BBS（微信，微博，QQ，論壇，貼吧等）」，「03 中国のバラエティ番組（『天天向上』，『東京印象』など）」インターネットやテレビを媒介として視聴できる情報源やコミュニケーションツールと関わる項目が高い正の負荷量を示していたため，「視聴・交流」と命名した。

第3因子は，「25 日本のアニメ・漫画」，「26 日本のゲーム」，「24 日本のポップミュージック」日本の大衆文化に関する日本側⁴⁷の項目からなっているため，「日本の大衆文化」と命名した。

第4因子は，「02 中国のテレビニュース」，「01 中国の新聞」，「04 中国のインターネットニュース（新浪，搜狐，百度等）」というニュース関係の項目が高い正の負荷量を示していた。そこで「ニュース報道」と命名した。

それぞれの因子の内的整合性を検討するために各下位尺度のChronbachの α 係数を算出したところ，「教育教養・映像作品と文芸作品」で $\alpha=.849$ ，「視聴・交流」で $\alpha=.788$ ，「日本の大衆文化」で $\alpha=.811$ ，「ニュース報道」で $\alpha=.763$ と十分な値が得られた。

4.2.3.2 大学生

大学生の対日情報源尺度18項目に対して主因子法による因子分析（表4-10）を行った。固有値の変化は5.52，2.59，1.83，1.24，0.96，0.87，...というものであり，4因子構造が妥当であると考えられた。そこで4因子を仮定して主因子法・Promax回転による2回目の因子分析を行った。その結果，因子負荷量を.30以上持つ18項目による5因子を抽出した。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表4-10に示す。なお，回転前の4因子で18項目の全分散を説明する割合は51.78%であった。

⁴⁷ 本研究では，「日本側」，「中国側」をコンテンツの製作拠点や情報の出所という意味で用いている。5章以降も同様。

表 4-10 大学生の対日情報源の因子分析

大学生の対日情報源項目	因子			
	1	2	3	4
第 1 因子：視聴・交流・ニュース報道 $\alpha=.853$				
04 中国のインターネットニュース（新浪，搜狐，百度等）	0.761	-0.049	0.022	0.013
05 中国の SNS・BBS（微信，微博，QQ，論壇，貼バ等）	0.705	-0.036	0.056	-0.017
02 中国のテレビニュース	0.693	-0.057	-0.239	0.277
06 中国の動画サイト（土豆網，優酷網，愛奇芸，芒果網等）	0.685	0.127	0.166	-0.111
03 中国のバラエティ番組（『天天向上』，『東京印象』など）	0.64	-0.02	0.085	-0.091
07 中国のダウンロードサイト（人人影視，豚豚，光合社，日菁等）	0.574	0.112	0.228	-0.202
01 中国の新聞	0.572	-0.034	-0.2	0.231
第 2 因子：日本の大衆文化と文芸作品 $\alpha=.777$				
24 日本のポップミュージック	0.029	0.783	-0.026	-0.036
20 日本の映画	-0.096	0.737	-0.015	-0.029
22 日本の文学作品	-0.059	0.679	0.007	0.056
25 日本のアニメ・漫画	-0.015	0.634	-0.05	0.166
26 日本のゲーム	0.22	0.431	-0.076	-0.041
第 3 因子：中国の映像作品と文芸作品 $\alpha=.823$				
08 中国の映画	0.016	-0.001	0.784	0.031
09 中国のテレビドラマ	-0.047	-0.111	0.767	0.141
10 中国の文学作品	0.116	-0.012	0.586	0.153
第 4 因子：教育教養 $\alpha=.804$				
13 中学高校の各科目の授業，教科書（歴史以外）	0.068	-0.029	0.018	0.734
12 中学高校の歴史の授業，教科書	-0.111	0.085	0.16	0.733
11 中国の書籍，雑誌（教科書以外）	0.064	0.071	0.211	0.568
累積寄与率（%）	28.12	39.70	47.37	51.78
因子間相関	.196			
	.482			.403
	.223			.062
	.437			

第 1 因子は 7 項目で構成されており，「04 中国のインターネットニュース（新浪，搜狐，百度等）」，「05 中国の SNS・BBS（微信，微博，QQ，論壇，貼バ等）」，「02 中国のテレビニュース」，「06 中国の動画サイト（土豆網，優酷網，愛奇芸，芒果網等）」，「03 中国のバラエティ番組（『天天向上』，『東京印象』など）」，「07 中国のダウンロードサイト（人人影視，豚豚，光合社，日菁等）」，「01 中国の新聞」インターネットやテレビを媒体として視聴できる情報源やコミュニケーションツール，ニュースと関わる項目が高い正の負荷量を示していたため，「視聴・交流・ニュース報道」と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「24 日本のポップミュージック」，「25 日本のアニメ・漫画」，「26 日本のゲーム」という日本の大衆文化に関する項目，「20 日本の映画」，「22 日本の文学作品」という物語を伝える伝統メディアや書籍に関する項目が高い因子負荷量を示していたため，「日本の大衆文化と文芸作品」と命名した。

第3因子は3項目からなっており，「08 中国の映画」，「09 中国のテレビドラマ」，「10 中国の文学作品」という物語を伝える映像メディアや書籍に関する項目が高い正の負荷量を示していた。そこで「中国の映像作品と文芸作品」と命名した。

第4因子も3項目からなっており，「12 中学高校の歴史の授業，教科書」，「13 中学高校の各科目の授業，教科書（歴史以外）」，「11 中国の書籍，雑誌（教科書以外）」という学校教育，教養の習得に関わる項目が高い正の負荷量を示していた。そこで「教育教養」と命名した。

それぞれの因子の内的整合性を検討するために各下位尺度のChronbachの α 係数を算出したところ，「視聴・交流・ニュース報道」で $\alpha=.853$ ，「日本の大衆文化と文芸作品」で $\alpha=.777$ ，「中国の映像作品と文芸作品」で $\alpha=.823$ ，「教育教養」で $\alpha=.804$ と十分な値が得られた。

4. 2. 3. 3 対日情報源の因子構造の比較

表 4-11 対日情報源の項目の比較

高校生の対日情報源	大学生の対日情報源
第1因子：教育教養・映像作品と文芸作品 $\alpha=.849$	第4因子：教育教養 $\alpha=.804$
08 中国の映画	13 中学高校の各科目の授業，教科書（歴史以外）
09 中国のテレビドラマ	12 中学高校の歴史の授業，教科書
12 中学高校の歴史の授業，教科書	11 中国の書籍，雑誌（教科書以外）
10 中国の文学作品	第3因子：中国の映像作品と文芸作品 $\alpha=.823$
13 中学高校の各科目の授業，教科書（歴史以外）	08 中国の映画
11 中国の書籍，雑誌（教科書以外）	09 中国のテレビドラマ
	10 中国の文学作品
第2因子：視聴・交流 $\alpha=.788$	第1因子：視聴・交流・ニュース報道 $\alpha=.853$
06 中国の動画サイト（土豆網，優酷網，愛奇芸，芒果網等）	04 中国のインターネットニュース（新浪，搜狐，百度等）
07 中国のダウンロードサイト（人人影視，豚豚，光合社，日菁等）	05 中国のSNS・BBS（微信，微博，QQ，論壇，貼バ等）
05 中国のSNS・BBS（微信，微博，QQ，論壇，貼バ等）	02 中国のテレビニュース
03 中国のバラエティ番組（『天天向上』，『東京印象』など）	06 中国の動画サイト（土豆網，優酷網，愛奇芸，芒果網等）
	03 中国のバラエティ番組（『天天向上』，『東京印象』など）
第4因子：ニュース報道 $\alpha=.63$	

02 中国のテレビニュース 01 中国の新聞 04 中国のインターネットニュース（新浪，搜狐，百度等）	07 中国のダウンロードサイト（人人影視，豚豚，光合社，日菁等） 01 中国の新聞
第3 因子：日本の大衆文化 $\alpha=.811$	第2 因子：日本の大衆文化と文芸作品 $\alpha=.777$
24 日本のアニメ，漫画 25 日本のゲーム 23 日本のポップミュージック	24 日本のポップミュージック 20 日本の映画 22 日本の文学作品 25 日本のアニメ・漫画 26 日本のゲーム

表 4-11 を見てわかるように，全体的には，高校生と大学生の対日情報源の因子内はほぼ共通する項目からなっている。

まず，高校生の「日本の大衆文化」と大学生の「日本の大衆文化と文芸作品」の間には相違が見られた。大学生の場合は，高校生の該当因子にある項目以外に，「日本の文芸作品」と「日本の映像作品」という 2 つの日本側の情報源がある。すなわち，高校生より，大学生の方が日本側の情報源を多く利用していると言える。

また，両学校段階の情報源因子がそれぞれ 4 因子抽出されたが，高校生の場合は，「教育教養」と「中国の映像作品と文芸作品」が一つの因子になっているのに対して，大学生の場合は，「教育教養」と「中国の映像作品と文芸作品」は個別の因子となっている。高校段階では，学生は「中国の映画，テレビドラマ，文芸作品」を単なる情報源として利用するのではなく，大学受験で知識を蓄積するための手段として利用する可能性があるため，「中国の映像作品と文芸作品」は「教育教養」と深く関連している。一方，大学生の場合は，受験のストレスがなく，それらを単純な情報源として利用することができるようになったと考えられる。

さらに，高校生の場合は，「視聴・交流」と「ニュース報道」がそれぞれ一つの因子になっているのに対して，大学生の場合は，「視聴・交流」と「ニュース報道」が個別の因子となっている。その理由も大学受験と関係していると思われる。高校生の「視聴・交流」には，「06 中国の動画サイト（土豆網，優酷網，愛奇芸，芒果網等）」，「07 中国のダウンロードサイト（人人影視，豚豚，光合社，日菁等）」，「05 中国の SNS・BBS（微信，微博，QQ，論壇，貼吧等）」というインターネットと関連している項目以外に，「03 中国のバラエティ番組（『天天向上』，『東京印象』など）」とインターネットを経由する手段ではない項目があるが，視聴・交流ができる情報源という共通の特徴を有してい

る。「ニュース報道」に入っている項目にもインターネットを経由する事柄や視聴する情報源はあるが、ニュース報道は内容的には社会、国際関係などとの関連が強い特徴があり、役割的には、大学受験のための情報入手手段ともなる。そのため、「視聴・交流」とは別の因子になっていると考えられる。それに対して、大学生は大学受験を前提として情報を入手する必要がなくなり、ニュースの内容に関係なく、「ニュース報道」をその他の「視聴・交流」手段と同一視することができるようになったとみられる。

4.2.4 対日イメージと対日情報源の相関関係

対日イメージと対日情報源の間の相関を検討するために、高校生と大学生別に、対日イメージと対日情報源の Pearson の相関係数を算出した。高校生の結果を表 4-12 に、大学生の結果を表 4-13 に示す。

表 4-12 対日イメージと対日情報源の相互相関（高校生）

高校相関	日本の社会と文化	日本の政治	日本のポップカルチャー	中国にある日本
視聴・交流	.257***	.174***	.276***	.085
日本の大衆文化	.443***	.409***	.591***	-.058
教育教養・映像作品と文芸作品	.225*	.098*	.097*	.091
ニュース報道	.241**	.173**	.152**	.046

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表 4-13 対日イメージと対日情報源の相互相関（大学生）

大学相関	日本の社会と文化	日本のポップカルチャー	日本の独自性	中国にある日本
視聴・交流・ニュース報道	.218***	.248***	.240***	.096
日本の大衆文化と文芸作品	.470***	.480***	.305***	.028
中国の映像作品と文芸作品	.167**	.080	.147**	-.028
教育教養	.155**	.149**	.155**	-.065

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

高校生の場合は、対日情報源「視聴・交流」と対日イメージ「日本の社会と文化」、「日本のポップカルチャー」の間にそれぞれ弱い正の有意な相関⁴⁸が見られた。また、対日情報源「日本の大衆文化」と対日イメージ「日本の社会と文化」、「日本の政治」、「日本のポップカルチャー」の間にそれぞれ比較的強い正の有意な相関がある。さらに、対日情報源「教育教養・映像作品と文芸作品」、「ニュース報道」と対日イメージ「日本の社会と文化」それぞれ弱い正の有意な相関が見られた。

⁴⁸ 相関係数の説明：.00～+.20 ほとんど相関がない；+.20～+.40 低い（弱い）相関がある；+.40～+.70 かなり（比較的強い）相関がある；+.70～+1.00 高い（強い）相関がある。

大学生の場合は、対日情報源「視聴・交流・ニュース報道」と対日イメージ「日本の社会と文化」、「日本のポップルチャー」、「日本の独自性」との間にそれぞれ弱い有意な正の相関が見られた。また、対日情報源「日本の大衆文化と文芸作品」は、対日イメージ「日本の社会と文化」、「日本のポップルチャー」との間にそれぞれ比較的強い有意な正の相関があり、対日イメージ「日本の独自性」との間に弱い有意な正の相関がある。

4.3 まとめと考察

4.3.1 記述統計量

4章の【研究2】では、中国の高校生と大学生の対日イメージ、対日情報源を量的に分析した。まず、高校生と大学生別にそれぞれのデータを基に対日イメージの天井効果及び床効果について調べた。その結果、高校生の「アニメ・漫画」イメージ以外には、特に肯定的な傾向に偏っている項目が見られなかった。一方、昔の日中戦争と現在の日本における戦争問題や伝統的な思想に関わる項目は、特に対象者の対日イメージに否定的な影響を与えていることが明らかになった。

次に、高校生と大学生別にそれぞれのデータを基に対日情報源の天井効果及び床効果について調べた。その結果、全ての対象者において天井効果が見られなかったが、床効果が見られた項目は二種類に分けることができる。第1に、日本側の情報源である。これらの情報源には日本語力が必要な事柄と中国で入手することが困難である事柄があるため、対象者に利用される頻度が非常に低いと考えられる。しかし、「日本のポップミュージック」、「日本のアニメ・漫画」、「日本のゲーム」は言語の壁があるにも関わらず、高校生と大学生にある程度利用されている。特に「日本のアニメ・漫画」は平均値がそれぞれ3.75と3.58であったため、多く利用されていると言えよう。また、「日本の映画」と「日本の文学作品」は、項目の平均値が高くなかったが、床効果が出た高校生のデータと比べ、大学生の方が多く利用していると言えよう。第2に、接触経験とコミュニケーションに関する情報源である。まず、接触経験には間接接触と直接接触に分けられるが、訪日経験のある対象者は[高校生4名(観光)、大学生7名(観光)]わずかであったため、どの形での接触経験でも対象者には少ない経験である。また、接触経験以外に、「家庭内の影響・教育」の平均値は高校生と大学生においていずれも2.5未満の低い値であった。これまでの研究では、家庭が対日イメージに与える影響に関するものがほとんどなされていないが、この結果からはある程度「家庭の影響」が低いことを説明できると考えられる。

4.3.2 因子分析の結果

高校生と大学生別にそれぞれのデータに基づき、対日イメージに関して因子分析を行った。高校生も大学生もそれぞれ4因子が抽出された。各因子間の相関については、高校生にも大学生にも、「中国にある日本」因子以外の三因子間においてそれぞれ比較的強い正の相関が確認された。すなわち、対日イメージの多種多様の内容は、実は一つの統合体となっている。一方、「中国にある日本」イメージは、中国の抗日テレビドラマ、中国の抗日映画、反日感情などの日本に関するネガティブな要素であるため、それ以外の因子との相関が見られなかった。高校生でも大学生でも、「中国にある日本」以外の因子には、現代日本や昔の日本の文化や近代史以前の日本の歴史などに関わる項目が含まれている。それに対しては、抗日映画、抗日ドラマと反日感情はいずれも日中戦争に関わっているという特徴がある。この日中間における歴史の記憶は対象者にとって特別なイメージであり、対象者は現代日本と日中戦争時の日本を区別して見ていると言える。

対日情報源に関して、高校生の場合は、4因子が抽出された。因子間の相関に関しては、まず、第1因子「物語・教育教養」と第2因子「視聴・交流」、第4因子「ニュース報道」の間に比較的強い正の相関が見られた。また、第2因子「視聴・交流」と第3因子「日本の大衆文化」の間は弱い正の相関、第4因子「ニュース報道」の間に比較的強い正の相関が確認された。第1、第2、第4因子の全ての項目は中国側の情報源であるという特徴がある。それぞれには弱い相関か比較的強い相関が見られた。一方、第3因子は唯一の日本側の情報源であり、第2因子とのみに弱い相関が見られた。その理由は日本のアニメ・漫画などの日本側の情報源はほとんど第2因子のインターネットに関連する情報源を通して利用することが可能になることからであると考えられる。

また、大学生の場合は、「視聴・交流・ニュース報道」、「日本の大衆文化と文芸作品」、「物語」、「教育教養」という4因子が抽出された。因子間の相関については、まず、第1因子「視聴・交流・ニュース報道」と第3因子「物語」、第4因子「教育・教養」の間、第3因子「物語」と第4因子「教育・教養」の間に比較的強い正の相関が見られた。高校生と同様に、これらの3因子は全て中国側の情報源という特徴が見られた。

4.3.3 相関関係の結果

高校生の場合は、第1因子「日本の社会と文化」イメージは全ての情報源因子との相関が確認されたが、第3因子「日本の大衆文化」情報源とのみ比較的強い正の相関関係が見られ、その以外の3因子とは弱い正の相関であった。「日本の社会と文化」因子は多種多様

な項目からなっており、4因子において唯一全ての情報源との相関が見られた因子であった。この因子に入った項目は平均値の得点が全て中央値3.5を上回っている。すなわち、肯定的なイメージである第1因子は限定された情報源ではなく、様々な情報源と関係している。そのうち、特に「日本の大衆文化」情報源との相関が強いことが明らかになった。第2因子「日本の政治」イメージは「日本の大衆文化」情報源のみと比較的強い正の相関が確認された。「日本の政治」の因子に入った項目は平均値の得点が全て理論的中点3.5を下回っているため、「日本の大衆文化」情報源は肯定的なイメージのみならず、否定的なイメージにも関与していることが言える。第3因子「日本のポップカルチャー」イメージは「視聴・交流」, 「日本の大衆文化」とそれぞれ弱い正の相関, 比較的強い正の相関が認められた。前述のように、インターネットに関する「視聴・交流」情報源は日本のアニメなど見る手段でもあるため、弱い相関ではあるが、「日本のポップカルチャー」と関わっていることが考えられる。また、「日本の大衆文化」情報源と「日本のポップカルチャー」イメージは実は相互包含関係にある特別な因子だと考えられる。両因子の種類は異なっているが、日本のゲームやポップミュージック、歌手などの共通する項目が含まれている。大学生の場合は、第1因子「日本の社会と文化」, 第2因子「日本のポップカルチャー」, 第3因子「日本の独自性」イメージは「視聴・交流・ニュース報道」, 「日本の大衆文化と文芸作品」情報源とそれぞれ正の相関が認められた。そのうち、「日本の大衆文化と文芸作品」情報源と第2, 第3のイメージ因子の間に比較的強い相関が確認され、それ以外は弱い相関であった。全体的な特徴は以下の3点にまとめられる。

第一に、高校生と大学生の対日イメージの構造には大きな相違が見られなかったが、「中国にある日本」というイメージは日本にないイメージ因子として注目すべきである。高校生においても大学生においても、それは唯一全ての情報源との相関が見られなかった因子である。このイメージ因子にある、両学校段階の共通するイメージ項目は2つの種類に分けられる。まず、日中戦争を背景に作られた抗日映画やテレビドラマの中の日本・日本人像である。日中戦争は実際にあったものであるが、映画やドラマの中で戦争を経験した日本人は実像にある日本・日本人ではなく、中国のメディアに作られたイメージである。第また、中国人の心の中にある反日感情である。この反日感情も日本に存在するものではなく中国人の心の中にある日本に対するネガティブな心情である。すなわち、「中国にある日本」因子にある項目は実際に中国にある（あった）事実や心情と関連しているが、実際に日本に存在していない「虚像」の対日イメージという特別な性質を持っていると考えら

れる。この「中国にある日本」イメージは対日情報源のいずれとも相関性が不定なものである。周（2013）の研究では、中国における反日感情に関する論述はネット言説と結びつけて解釈されることが多いと指摘されているが、本研究においては、それらの関連性が確認できなかった。

第二に、高校生と大学生では情報源利用の実態に相違が見られた。まず、高校生と大学生の間の因子構造の相違が確認された。その理由は、大学入学試験の有無による学習目標の変化の可能性が考えられる。また、高校生の場合は、「日本の社会と文化」イメージは内容が多様であり、多様な情報源と関係していることが明らかであった。一方、大学生の場合は、第1と第2の情報源のみにイメージ因子との相関が確認されたことも特徴的である。この結果から、「物語」、「教育・教養」という伝統的な情報源より、インターネットなどの新メディアや日本側の情報源の方が大学生の対日イメージに影響を与えている可能性がある。1.1 で述べた中国のインターネット発展状況に関する調査（2020）⁴⁹の年齢・職業別の結果からわかるように、本研究の調査対象となる大学生は年齢層と職業の2つの側面から見てネットユーザーの主力であると考えられる。高校生から大学生になり、全寮制生活を始めた大学生はテレビという伝統メディアを利用できる環境がなくなり、大学に入る前よりテレビ視聴が困難になることも新メディアの利用を促していることが考えられる。（朴，2016）は日本との直接接触ができた経験者はインターネットを通じて日本に関する情報の共有や拡散を行うと実証しており、日本との直接接触がない若者たちも、それによって真の日本にさらに接近できることが言えるだろう。

第三に、イメージ形成における日本側の情報源の役割については、高校生と大学生で共通する部分を確認された。高校生の場合は、「日本の大衆文化」情報源は日本側の唯一の情報源であるが、他の因子と比べ、「中国にある日本」のイメージ以外の3因子と最も強い相関が認められた。大学生の場合も高校生と同様に、「日本の大衆文化と文芸作品」は唯一の日本側の情報源因子で、イメージと強い相関が見られた唯一の情報源因子でなる。すなわち、「日本の大衆文化」情報源は中国側の情報源より対日イメージの形成に与えている影響が大きいと言える。日本の流行文化は中国の「80後，90後⁵⁰」の一部の若者の間で

⁴⁹ 中国互聯網絡信息中心(CNNIC). (2020). 第45回中国互聯網絡發展狀況統計報告.
<http://www.cac.gov.cn/2020-04/27/c_1589535470378587.htm>(2020年10月27日)

⁵⁰ 80後とは、国際社会学者達が社会発展について討論している中で生まれた用語であり、計画出産政策施行後に1980年代に生まれた世代の人たちを指す。その後、80後の派生語として「90後」という語が

高い人気を博している（楊・橋元，2010）。魏（2014）は、アニメは娯楽として楽しみ以上に、生活に日本の衣食住などの手本を提供していると述べた。アニメなどの大衆文化は旧メディアやインターネットと肩を並べるぐらいの重要な情報源となっているのである。また、アニメを見ることによって、政治・歴史とは別の次元で若者の持つ日本・日本文化に対する関心が引き出されている（楊・橋元，2010）との指摘のように、アニメに頻繁に描かれる日本料理、富士山、東京タワーなどの象徴的要素は、若者の日本認識にポジティブな役割を果たしている。このようなイメージは、アニメというフィクションによって形成された日本である。このアニメを始めとする日本側の情報源は多様な日本イメージの形成との相関が確認された。また、遠藤（2008）は中国の若者が日本のアニメを通して日本を知るようになり、日本に対する親近感が育まれると指摘した。アジア諸国に対する比較アンケート調査を行った園田（2020）の研究によれば、中国は唯一「日本のアニメやドラマ視聴の頻度が高ければ高いほど日本の影響への評価が高くなる」という明確なトレンドが見られる国であることが検証されている。このように他のアジア諸国と比べて、日本のアニメやドラマ視聴が中国における特別な位置づけにあることがわかる。これらの研究成果は、アニメなどの大衆文化が対日イメージにポジティブな影響を与えることを示している。一方、本調査で確認された大衆文化と否定的イメージの関連性は新たな知見といえるだろう。日本のアニメが対日イメージにポジティブな影響を与えることを証明する研究は多いが、実際にはアニメに現れる否定的要素も多い。例えば、『一騎当千』にある史実を歪曲する内容や『エルフェンリート』にある児童虐待のストーリー、残酷な描写などが挙げられる。対象者は能動的な情報利用によって多面的な日本に関連する情報を捉え、大衆文化にある否定的な情報も発見していると考えられる。

4.4 結論と課題

本章においては、まず、高校生と大学生における因子構造の類似性と、情報源利用実態の相違が確認された。また、「中国にある日本」イメージ因子と全ての情報源が無関係であるという特殊性と、イメージの形成に対する「日本の大衆文化」情報源因子の重要性が

作られ、90 後とは、1990 年代に生まれの世代を指す言葉である。この時代は中国の情報化の急発展を遂げた時代であるため、「90 後」の世代は情報化社会を先に体験した世代であると言われている。またその後も 10 年ごとに分かれて 00 後と 10 後という用語が派生された。

明らかになった。そのうち、「中国にある日本」と「日本の大衆文化」に含まれている項目には、それぞれ「中国の抗日ドラマ」、「中国の抗日映画」と「日本のアニメ・漫画」がある。その3つの項目にはイメージと情報源の両方のカテゴリーに含まれているという共通する特徴がある。一方、「中国にある日本」イメージ因子と「日本の大衆文化」情報源因子の間の相対的關係も確認された。「中国にある日本」イメージ因子に含まれている「中国の抗日ドラマ」、「中国の抗日映画」と「反日感情」項目は、実際に中国にある（あった）事実や心情と関連しているが、日本に存在していない「過去の日本の史実の中にある虚像」である。このイメージ因子は全ての対日情報源との相関が認められなかった。それに対して、「日本の大衆文化」情報源因子に含まれている「日本のアニメ・漫画」項目は実像ではない、ある種の作られたフィクションとして見られているが、対象者がそのフィクションのアニメから実際に日本に存在している「フィクションに見られる現在の日本の現実」を発見している。この情報源因子は対日イメージとの相関が最も強いことが認められている。したがって、両者の間の相対的關係は本章での大きな発見であると言えよう。

【研究2】に残された課題としては、以下の3点が挙げられる。第一に、【研究2】では、高校生と大学生の情報源利用実態の相違が確認された。しかし、主体の視点から見て、高校生・大学生の同一の対象者は、異なる学校段階でそれらの情報源から得た情報をどのように処理して自分のイメージにするかは不明である。第二に、主体の視点から見て、対象者は特殊な「中国にある日本」のイメージをどのように認識しているか、学校段階別に比較検討する必要がある。第三に、情報源としての「日本の大衆文化」の重要性が確認され、これに含まれる重要な部分である「日本のアニメ・漫画」は研究1と2に共通して残された課題に関わる。そのため、イメージかつ情報源となっている「日本のアニメ・漫画」について、対象者の視点から考察していく必要がある。

上述の一番目の課題に対しては、次章の【研究3】で高校生と大学生の対日イメージの形成過程を調べることによって答える。また、上述の二番目と三番目の課題を解明するためには、次章の【研究3】では、特に対象者の中国の抗日ドラマと日本のアニメに対する解釈に注目して考察する。

第5章 【研究3】中国の若者の対日イメージの形成過程

中国の若者の日イメージの形成過程を知ることが目的とする【研究3】では、自己認知と他者認知に注目して、中国の青年期の若者の認知の中での日本に関する情報の受容と対日イメージへの影響を調査し、発達の視点から、中学、高校、大学の各段階における彼らの中での思考や推論の在り方を探求する。

5.1 研究方法

5.1.1 調査概要

本調査では、2015年4月から5月にかけて、中国黒竜江省ハルビン市に居住する中学生・高校生・大学生計28名（中学生7名、高校生12名、大学生9名）を対象に、一人につき一回、個別の面接式にて半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。最終的に、中学生、高校生、大学生それぞれ3名選び出し分析対象とした。

インタビューの場所は、調査対象者の自宅もしくは学校で、プライバシーが守られる環境を設定し実施した。調査対象者一人に対するインタビューの所要時間は28分から85分であった。インタビュー内容は調査対象者の同意を得たうえで、全てICレコーダーに録音し、録音データは調査後、逐語録を作成した。なお、個人情報の取り扱いについては、調査時に対象者にインタビュー調査説明書の記載について説明した上で同意を得た。表5-1に調査対象者の基本的属性を示す。

表 5-1 対象者⁵¹リスト（インタビュー時）

対象者	若	飛	明	宇	雪	朋	相	越	亮
性別	女	男	女	女	女	男	男	男	女
学年	中2	中3	中3	高2	高1	高2	大3	大2	大2

調査対象者へのインタビュー内容は、①対日イメージの実態②対日情報源利用の実態③情報源からイメージの形成に至るまでのプロセス④成長過程に伴うイメージの変化などである。

⁵¹ 対象者の氏名は全て変名である。

5.1.2 分析方法

本研究は質的研究の手法を用いて分析を行った。分析方法としては、大谷(2008, 2011)が提唱した質的データ分析の手法である SCAT(Steps for Coding and Theorization)⁵²を参考にして概念化を行った。SCAT の手順を参考にした本研究の分析手順は以下のとおりである。まず、インタビューのトランスクリプトをセグメント化する。次に、(1) インタビューのテキストに基づくコーディングを行い、コードを書き出す。(2) コードを補うための補足の概念カテゴリーを書く。(3) テキストの前後の文脈とテキスト全体の内容に配慮し、コードと補足の概念カテゴリーに基づいて生成した概念キーワードを記入する。最後に、(4) 概念キーワードを用いて再文脈化する。

SCAT を参考にした理由は以下の通りである。通常、質的データ分析は分析者の主観または主体的解釈を積極的に用いるために、場合によっては手続きの不透明さなどによりきわめて恣意的なものになってしまう可能性もある(大谷, 2011)。これに対し SCAT のコーディングまでの手順は、4 つの分析ステップにより、SCAT 表に分析のプロセスが明示的に残され、「明示的で段階的な分析手続」示すことができるという特徴を有している(大谷, 2019, p. 271)。SCAT を参考にすることによって、分析手順を明記させ反証可能となる。ただし、本研究の目的は、イメージ形成の理論構築ではなく、インタビューのテキストを再文脈化することによって、イメージの形成過程を明らかにすることにある。そのため、本研究では、SCAT のコーディングまでの手順を参考にしてテキストの脱文脈化を行った後に、概念を生成し記述する手順を参考にして概念キーワードを組み合わせ、再文脈化した。以下、大学生相さんの分析の一部である表 6-2⁵³ (詳しくは付録 3. 1 を参照) を例に、分析手順を説明する。

聞き手の「あなたは日本に対する全体的な印象はどうですか。」という問い(番号 1)に、相さんは「まずは、経済大国だから。」と答えている(番号 2)。^①コーディング手順として、この文にある「経済大国」を言い換えて「先進国」を(1)に記入する。^②(1)で書いた「先進国」を補うための補足の概念カテゴリー「経済の発展」を付して(2)に書

⁵² SCAT は 4 つのステップにより質的データをコーディングと理論化する手法であり、グラウンデッド・セオリーをはじめとする質的研究法を背景に開発された分析手法である(大谷, 2008)。

⁵³ 手順を示すために、表中では「テキスト」には中国語を日本語に訳したが、実際の分析では、中国語原文のまま使用した。

く。③「まずは、経済大国だから。」というテキストの前後の文脈とテキスト全体の内容を配慮した上で、概念キーワード「経済面の先進性」を付して(3)に記入する。概念キーワードを生成するため、(3)はそしてできるだけ(2)も必ず名詞あるいは名詞句で書くようにしており、分析では、(2)と(3)は全て名詞あるいは名詞句で書く。

表 5-2 大学生相手の対日イメージの形成過程の分析手順（一部）

番号	発話者	テキスト	(1) コーディング	(2) 補足の概念カテゴリー	(3)> 概念キーワード
1	聞き手	あなたは日本に対する全体的な印象はどうですか。			
2	相さん	どちらかといえばよい印象を持っていると思う。 まずは、日本は経済大国だから。 また、生活の中で日本のものに触れるチャンスも少なくない。 例えば、いここは日本に留学しているから、いここから日本についてのことを聞いたりする。 そして、普段使っている日用品や電気製品の中で日本のメーカーもある。 でも、日本のマイナス面に関するニュースも見たりするから、 日本に対しては、アンビバレントな印象を持っていると思う。いい面もあれば、悪い面もある。でも、全体的に見れば、私やはり日本に対してはいい印象を持っていると思う。	ポジティブな感想 先進国 生活の中にある先進国日本の製品 日本と接点がある親戚、 日本に関するネガティブな情報 心の中に相反する気持ち 好きな気持ちが勝っている	日常の日本製品接触 経済の発展 身近な親しい人からの直接の意見 偏ったニュース報道 イメージの決定	日本製品接触が生み出された対日親近感 経済面における先進性 直接接触を介した間接接触によって入手した情報との親近感 消費行動による情報入手 日本に関するニュースによる否定的情報の獲得 二律背反の対日イメージ 肯定的イメージの優位性
再文脈化		相さんの日本経済に対するイメージ	国際貿易を専攻している相さんは <u>個人の専門分野による日本に関する知識の獲得</u> ができたため、相さんの日本に対する第一印象は <u>経済面における先進性</u> である。		

最後に、④(3)で記入した「経済面の先進性」のような概念キーワードを組み合わせ、テキストの再文脈化を行う。例えば、(3)の「経済面における先進性」を含めて再文脈化した文章は、「国際貿易を専攻している相さんは個人の専門分野による日本に関する知識の獲得ができたため、相さんの日本に対する第一印象は経済面の先進性である。」とする。概念キーワードを判別できるように下線を引く。1つのまとまりである概念キーワードを分解しないために、(4)で生成した概念キーワードを全て用いて、助詞などを補い、日本語としてできる限り自然な表現となるよう配慮したが、再文脈化によって生成された文章は、日本語としては、不自然な場合がある。

次に例を挙げて説明する。表 5-2 の「再文脈化」の行に「個人の専門分野による日本に関する知識の獲得ができた。」とある。概念キーワード「個人の専門分野による日本に関する知識の獲得」を用いて、再文脈を行う際に、「個人の専門分野によって、日本に関する知識を得ている」と書くと、書きやすくなるが、そうすれば、概念キーワードが解体されてしまうため、そのまま残すための再文脈化プロセスに配慮する必要がある。

5.2 結果

上記の手順で得られた分析の成果については、概念キーワードの一覧及び再文脈化した詳細な記述は付録 3.2 に掲載し、ここでは抽象度を高めた記述に基づく考察を述べる。

5.2.1 中学生の対日イメージの形成過程

5.2.1.1 若さんの場合

日本の話題の乏しい家庭に育った若さんは、小学校時代は祖父が視聴していた対日ドラマによって日本人イコール悪人という否定的イメージが形成されたが、間接的な情報であるため、そのイメージも漠然としたものであった。中学 2 年生の段階では、歴史に関する学習もまだ学校教育課程の中で始まっておらず、個人的に日本に対する関心もないため、知識を積極的に得ようという能動的な態度は見られない。歴史以外の授業から受動的に得た情報と、インターネットで偶然得たわずかな情報をもとに、少ない知識の中で可能な限りの推論をした結果、極端な傾向に走らず中立的な立場をとっている。現在は、父親の日本車に対する肯定的評価と、日本旅行をした親戚からの肯定的な評価を得て、対日イメージはやや改善してきている。以上のように、若さんが持っている対日イメージは「漠然」と「未熟」というキーワードで表される。

5.2.1.2 飛さんの場合

飛さんの祖父母世代は、さらに上の世代の戦争経験者の影響で、日本に対して強烈な恨みを持っているが、飛さんは祖父母に影響されなかった。幼稚園時代の飛さんにとって日中戦争は単なる名称であった。その後、小学生に上がり、抗日ドラマを通じて「残酷な日本人」というイメージが形成された。中学生になった飛さんは、中学受験の失敗を機に、読書をよくするようになり、学校の先生からの日本文学についての受動的情報入手に加えて、雑誌や日本の小説に親しみ、インターネットによる能動的情報入手も始めた。読書習慣は、学校の歴史の授業で習った日本に対する否定的イメージだけではなく、より幅広い視点を飛さんに与え、思考様式の転換をもたらした。飛さんは物事には両面があると理解

できるようになり、読書に加えて積極的にニュースから情報を得た結果、世論の反日感情も日本についての知識の欠如から生まれた一面的なものであり、ある種の恐怖感であると分析している。また、飛さんは自身の対日イメージも含めた自己反省を行い、自分の日本理解も未熟であると認識しているため、飛さんは自分のみならず、世論の対日イメージの改善に役立つ教育水準の向上も期待している。以上のことから、飛さんが持つイメージの形成過程のキーワードは「読書」と「転換」にまとめることができる。

5.2.1.3 明さんの場合

明さんは小さい頃に抗日ドラマを見て日本人に対して否定的イメージを抱くようになったが、中学生になって、インターネットを通じて日本のアニメに出会ってからは、アニメによって形成された肯定的イメージは全て、日本人の美德や現代日本社会の先進性などに関する肯定的イメージである。また、アニメ視聴を始めてから、否定的イメージを全て肯定的・中立的に理解しようとしている。

明さんは同級生の家庭との比較から、自分の家庭の教育理念の違いを発見した。明さんの家庭環境には「自由」というキーワードがある。特に、明さんの母親は高学歴であり、子供の嗜好を大切にし、かつ日本に対する関心があるため、他の子供たちの親のように受験を理由に明さんのアニメ接触を制限しないだけでなく、積極的に日本に関する情報を与え、明さんの対日情報源のひとつとして特別な役割を果たしている。また高学歴の祖父も日本に対する自分の批判的な心情を抑えて、孫の嗜好を優先している。そうした家庭環境がもたらす自由と視野の広さによって、明さんは二次情報に懐疑的である。新メディアであるインターネットを積極的に活用して情報収集に努めた結果、様々な情報を組み合わせて複眼的に解釈することによって日本に対する憧れが増している。

このイメージの形成過程においては、明さんの情報利用は「情報源の増加→能動的情報処理→知識の増加」とまとめることができる。それに伴い、能動的思考による「深層的な対日イメージの形成→日本に対する憧れの深層化→自己発見→自己成長」という明さんの成長過程も見られた。以上のように、明さんのイメージ形成においては「能動的」と「成長」が重要なキーワードである。

5.2.2 高校生の対日イメージの形成過程

5.2.2.1 宇さんの場合

宇さんの対日イメージの形成過程は、他の対象者と異なり、肯定的イメージからのスタートであった。その原点は父親の嗜好の影響であり、父の関心はそのまま宇さんの興味関

心ともなった。その後、文学作品による「戦前日本の経済発展」と「戦前中国の暗黒時代」の知識は日中戦争の背景を理解する助けとなり、肯定的対日イメージの一部となった。しかし、日中戦争に対しては「反抗期の受験勉強への反感」があり、表面的認知しか持っていなかった。

その後、宇さんは「抗日ドラマ」とニュース、及び自分が好きな韓国旅行をきっかけに、より深い思考を行うようになった。抗日ドラマについては、「史実が脚色されたドラマ」と「史実を再現するドラマ」を比較し、ドラマ視聴とイメージの関連性に言及するとともに、ドラマや映画の製作者をニュースの発生状況と比較し、それぞれの情報源における主観性と客観性を意識するようになった。その結果、日中戦争に対する「体験なき鈍感」と「残酷すぎるゆえの憤慨」という2つの異なる心情を感じている。さらに、宇さんは「戦争の歴史的必然性」を認識している一方、ドイツと比較して日本の戦争に対する態度に対しては否定的評価を下している。また、韓国と中国の日本に対する扱いを比較することで、自らもそうであった「体験無き鈍感」が、韓国のような過激な日本批判をしない中国の宣伝体制の問題であるとの結論を下した。現在の宇さんは自分の過去に対する反省を行うことにより、自分の対日イメージも好転に向かうようになったが、根本的に日本に対して無関心である宇さんの対日イメージは中立的である。

以上のように、宇さんは時代の比較、国家間の比較、情報源間の比較などにより、対日イメージを形成している。その過程は、家族（父）の影響による肯定的イメージから、と後に宇さんが「教育の欠如」と見なす中立的態度を経て、比較的思考により非常に否定的になったあと、総合的判断により再び好転する傾向が見られる。宇さんの情報の増加と自身の成長によるイメージの変化には相関関係が見られる。対日イメージは「日本車」や「韓国」など宇さん自身の興味関心と強く関連しているもので、そのイメージから個性的な部分が見られる。そのため、宇さんの対日イメージキーワードを「比較」、「興味関心」、「個性」とする。

5.2.2.2 雪さんの場合

雪さんの持つ対日イメージの原点は、抗日ドラマの影響で形成された幼年期の否定的イメージである。当時、雪さんは抗日ドラマの中の「残酷な」日本人像イコール現代の日本人像と思い込んでいた。しかし、その後、博学の親戚から政治や歴史の話を聞いたことがきっかけで、雪さんは能動的に情報入手し、戦争の両面性を発見した。日本の侵略行為に対して否定的な見方をするだけでなく、中国の国力の弱さが根本的な原因であると解釈し、

それとともに、否定的対日イメージを持っていた過去の自分を反省している。雪さんの否定的イメージにつながる情報は全てニュースや雑誌で得た日本の現代社会に関わる情報であるが、雪さんはそれらの情報に対して、否定的に評価するだけでなく、情報が歪められた可能性があることを発見し、自分の元々の否定的イメージを中立的に理解するように配慮している。それらの思考過程においては、「盲信的な自分」や「非客観的な自分」などの自己分析も行われている。

現在の雪さんの対日イメージには、肯定的イメージと否定的イメージが併存しているが、特に日本の教育の先進性を評価しているため、基本的にはポジティブな傾向にある。肯定的イメージは全て雪さんの好奇心から生まれたものである。雪さんは対象者のうち唯一聞き手になり、筆者に日本についての疑問を投げかけてきた。そこからも雪さんの日本に対する強い好奇心がうかがえる。

以上のように、雪さんの対日イメージの形成過程は、彼女の物事への認識と自己認識の成長過程を伴っている。特に「物事に存在する両面性」が中心的な認識となっており、雪さんの対日イメージの形成に影響を与えている。また、成長に伴う自我の発見によって、雪さんは「いまだに未熟な自分」という自己認識を持っている。以上のように、雪さんが持つイメージは「好奇心」、「両面性」と「自己認識」にまとめることができる。

5. 2. 2. 3 朋さんの場合

日本の話題が乏しい家庭に育った朋さんの対日イメージは、小学校時代の単なる「日本という国の存在認知」からスタートした。愛してくれる家族は自身が日本に対して無関心であり、反日感情を持っているにもかかわらず、朋さんの自由を尊重し、憎しみが忘れられるようにと期待していた。朋さんは読書の習慣に目覚めて日本の過去を知ったことで、比較的早くから客観的に日本に対峙できている。学校教育も例外ではなく、中学になってからは、歴史教科書などの記述の主観性を疑問視し、教科書の記述は99%が正しくても真理が残りの1%にある可能性も考慮に入れることができる。そうした観点を持つ朋さんにとっての学校教育は、単に受動的に情報を得る場ではなく、能動的に情報を入手し判断できる材料を提供してくれる場である。朋さんの親日的な態度は、友達のみならず教師からも売国奴と位置づけられてしまったが、高校生になった朋さんは、周囲の態度や世論から反日感情を冷静に分析し、数世代にわたる否定的イメージの継承によるステレオタイプ化、集団内の同調真理などを見抜き、日中間の誤解の解消と相互理解の実現を期待している。

アニメ愛好家の朋さんの情報源の利用の特徴は、アニメだけではなく、様々な情報源から肯定的イメージを得ていることである。抗日ドラマにさえ、日本兵士の美德を見て取っている。日本に関する知識欲は旺盛で、しかも機械的に情報を受信しているのではなく、多様な思考様式により、能動的に情報を処理しながら自分なりのイメージを熟成させ、「社会的他者⁵⁴」と対照しながら、「個人的他者⁵⁵」を作り、朋さん自身の「対日イメージ図」を描き出した。朋さんが持つ対日イメージのキーワードは「思考様式」、「社会的他者」、「個人的他者」、「対照的」である。

5.2.3 大学生の対日イメージの形成過程

5.2.3.1 相さんの場合

「日本を知らない幼稚園時代」を経験した相さんは、小学校時代に、抗日映画を通して日中戦争を知り、強い否定的イメージが形成された。その後も、中学校の歴史教育の影響で、日本に対して日中戦争のイメージしか持っておらず、日本軍の残酷な行為に対する憤慨は強く、対日イメージはさらに悪化した。高校時代に入ると、消費行動、間接接触などの情報源の多様化、そして知識量の増加と思考様式の多様化に伴い、相さんの対日イメージは無意識のうちに徐々にポジティブな方向へ変化していった。大学生になって、能動的に情報を入手したことで日本政府と日本国民に対する評価の間に「認知的不協和」が起こり、相さんは「認識の再構築」に努めた。それにより全体的な対日イメージが否定的から肯定的へと変化し、以来、日本の多方面の先進性を発見することもできた。

相さんの対日イメージの形成過程は「無知→否定→悪化→好転→肯定」というプロセスを経たが、情報処理の能動性が非常に活発に発揮されていることがうかがえる。また、客観的なイメージ形成のみならず、歴史教育にある客観性と主観性のように、相さんは自分の利用している情報源も客観的に見るように意識している。すなわち、相さんは能動性と客観性を常に念頭に置き、客観的対日イメージの形成に努めている。以上のように、相さ

⁵⁴ ある集団に属する「社会的他者」とは「日本人の、『やさしい』・『礼儀正しい』といった対人関係の在り方に関する態度や、『残忍的で好戦的』といった歴史的な背景から作られた観念」のことを指す(喬, 2014)。

⁵⁵ 上記の注 74 と対照的に、日本に関する情報量や内容が増加した結果、「一元的な日本認識に変化が見られ」、自らの体験や自身の価値観の変化によって、日本に対するイメージは「個人として認識される『個人的他者』」に変化する(喬, 2014)。

んが持つ対日イメージのキーワードは「能動性」，「客観性」，「認知的不協和」と「認識の再構築」である。

5.2.3.2 越さんの場合

対日イメージの形成に影響を与えない家庭環境で成長した越さんは、日本を知らない小学校時代を経て、中学校時代に歴史の授業で日中戦争を知り、日本を残酷な民族として認識していた。しかし、当時の対日情報源は学校教育のみで、受験目的で受動的に知識を詰め込んでいたため、習った日中間の歴史に対しては無感情であった。

高校に入ってから、越さんは歴史教科書の忠実的な記述に対して評価しているが、能動的情報入手によって入手した知識とのずれに気づいた。それをきっかけに、多様なメディアを積極的に利用するようになったが、それは中国社会の発展による情報の多様化が進展した時期と重なっており、越さんは知識を再構築することができた。

現在は大学生である越さんは、アメリカや日本の教育と中国の教育を比較して、中国の物質的発展と精神的発展の間の不協和を感じると同時に、教育水準の向上による中国人の精神的発展を期待している。対日イメージについても、偏見の形成には国民の低学歴が影響しており、その理由に中国の同調真理の元となる知識偏重型の教育観における個性の欠如、メディア・リテラシーの欠如があると考えている。現在の越さんの対日イメージには「個人と集団」と「過去と現在」という2種類の二項対立が存在し、日本に対する全体的なイメージも両面性のある中立的イメージである。

以上のように、越さんの対日イメージに大きな影響を与えているのは、受験が終わった後の大学教育と情報環境である。教育システムの変化によって生じた様々な変化は単なる「成長」でまとめられるものではなく、情報源と情報利用環境、また本人の思考様式の変化と密接に結びついている。そのため、「併存」，「教育」と「変化」が越さんのキーワードである。

5.2.3.3 亮さんの場合

日本の話題の乏しい家庭に育った亮さんは、小学校時代に父親と抗日ドラマを見ながら祖父の抗日戦争での経験を聞いたことがあっても、ほとんど記憶に残らず、日本を知らない幼年期～小学校時代を過ごした。中学校時代は、当時利用した唯一の対日情報源である歴史教育を通じて、日本人は残酷な民族というイメージしか持たなかった。この時期は反抗期で、教師や受験目的の知識学習への反感があり、イメージはあっても無感情であった。その後、中学校時代の終わり頃から、亮さんはストレス発散のために始めたアニメ視聴に

よって日本の実像を連想するようになり、多様な現代の日本文化を発見し、さらに関連情報を能動的に調べた。アニメは越さんの対日イメージを転換させた情報源であった。アニメのおかげで高校時代からは絵画も亮さんの趣味になり、親の理解もあって、大学では趣味を専攻にすることができた。学習第一で単純だった中・高時代から、多様な情報源を豊富に利用できる大学への学習生活の変化のおかげで、亮さんは様々な側面から統合的に思考し、日本に対する理解はさらに深まり、日本への憧れも一層高まった。

以上のように、複数の情報源が亮さんの各学校段階での対日イメージ形成に異なる役割を果たしている。そのうち、アニメは亮さんの成長にとって特別な意義がある。また、子供の趣味を支持する親の存在も、亮さんの対日イメージの形成に人間関係という環境条件を提供しており、亮さんの将来の自己実現を可能にしている。以上のことから、亮さんのキーワードは「アニメ」、「情報源の変化」と「成長」である。

5.3 考察

上記のように、対象者たちの持つ対日イメージには、「肯定的」、「否定的」、「中立的」、「無関心」という4つの評価要素に分けられることがわかった。本節では、その4つを評価要素とし、各対象者についてのイメージ形成過程を考察した上で、総合的な考察を行う。

5.3.1 中学生について

高校前までの十数年間の成長過程の中でも、子どもたちの対日イメージは変化する。対象者3人に共通するのは、就学前は日本を単なる名称として認知し、小学校時代に抗日ドラマによって日中戦争を知り、日本についての否定的なイメージと、日本人イコール悪人、残酷というイメージを持ったことである。しかし、3人の特徴は異なっている。

まず、若さんについて見ていこう。若さんの対日イメージはぼんやりとしており、若さんは日本にあまり関心がない「無関心」タイプであるが、歴史教育によるイメージの強化はされていない。ただし、小学校時代に抗日ドラマを見ていた祖父から得た日本の悪いイメージはそのまま持っている。張（2013）と喬（2014）は日本人との直接接触以外、渡日経験のある日本語教師も対日イメージ形成にポジティブな影響を与えると述べているが、渡日経験のある親戚を通じての間接接触によって対日イメージにはわずかな改善がある。若さんのケースは、日本語学習ではないが、私的空間にある間接接触が対日イメージ形成にポジティブな役割を果たす可能性を示している。また、若さんの対日イメージは、小林

(2009) が分析した世論の対日イメージと共通する部分が多いため、若さんは世論が示す一般的中国人の姿であると言える。一般的というのは、日本人との接触機会という点で、北京や上海のように日本との交流が盛んで周囲に日本についての情報が溢れているような大都会ではなく、抗日ドラマや歴史教育以外に日本に関連する情報が生活の中になく、という意味である。若さんのキーワードが示す「漠然」や「未熟」の意味するところは、すべてに受動的で、判断力が鈍いことである。若さんは日本に興味がなく、自分から情報を得ようとする積極的態度が見られない「無関心」であるが、自分が得た情報に対する全面的な信頼感が見られ、それは考える主体としての個人が育っていないことが主な理由だと思われる。

次に飛さんであるが、飛さんの中で、対日イメージの最も重要な部分は日中戦争には両面性があるという認識であり、それが肯定でも否定でもない「中立」の立場を選ばせている。その転換点は中学受験の失敗のショックをきっかけとした読書である。岡田（1979）は読書の大きな決定要因に「自己概念⁵⁶発展の欲求」や「知的欲求」などの心理的欲求の満足があると指摘しているが、飛さんも読書に心理的欲求の満足を求めたのだと思われる。学校の先生からの受動的情報入手に加えて、飛さんは雑誌、小説、そしてインターネットによる能動的な情報入手を通して、日中戦争についても「残酷な日中戦争」から「やむをえない戦争」へとイメージを転換した。転換された新たなイメージは、このような飛さんの個人的体験によって形成されたものである。飛さんは批判的思考力の育成のプロセスを経験し、自己認識も変化した。その結果、ニュースや歴史教育から得た情報を批判的及び客観的に捉えることができるようになり、自己成長を促す手段として利用できるようになった。飛さんは未熟である自分を発見することで、教育の重要性も認識した。

3人目の明さんは、同じ中学生でありながら上記の2人とは全く異なる成長過程を経ている。明さんの肯定的イメージの直接の情報源はアニメであるが、背景として重要な役割を果たしているのは、明さんが育てられてきた家庭環境である。高学歴の母親は親日家であり、中国の多くの家庭が受験を第一に考えてアニメの視聴を禁止する中、日本のアニメの視聴を禁止していない。否定的なイメージに関しては、その中心にある日中戦争イメー

⁵⁶ 自己概念とは、「個人の身体的特徴や性格・感情、社会文化的属性や価値観、役割や習得してきた技能など自らを構成するものとして自覚されているゲジュタルト的構造を持つ構成体」のことである。（青年心理学事典（久世・齋藤，2000，p. 120）による）

ジは田の中学生同様、明さんの対日イメージの重要な一部である。しかし、ここでも、明さんは日本の中国侵略を単純に否定的に評価することはせず、歴史の授業で学んだ知識を能動的に処理し、「歴史遡行的思考」と「アナロジー思考」により、日中戦争の発生要因を客観的に理解している。また、戦争時の一般人である日本国民に対する同情心が生まれ、日中戦争を「反省的思考」によって再認識しており、新たな自我の発見によって、他の中学生にない自己成長を遂げている。明さんは否定的イメージを肯定的・中立的に理解しようとしている。この年齢では他に見られない「深層的な対日イメージの形成→日本に対する憧れの深層化→自己発見→自己成長」のプロセスは、自由な家庭環境が可能にしたアニメの視聴と、それが生み出した知的好奇心がもたらす能動的情報収集と視野の広さのおかげであろう。

北京や上海のような外国との往来が多い都市と異なり、本研究のフィールドは日本人との接触機会が少ないハルビン市である。本調査では計7名の中学生に対してインタビューを行い、最終的に3人を選び出した。若さんを選んだ理由は、今回の分析対象として扱わなかった残りの4人の特徴をすべて備えていたからであり、そのイメージは、日中戦争や歴史認識に集中する単純化されたイメージである。これは【研究1】の結果の背後にある要因でもある。ぼんやりとしたイメージしか持たず、情報にも無関心な若さんに比較して、飛さんは受験の失敗という他の2人になく出来事をきっかけとした読書のおかげで、精神的な成長をとげ、一般的な「無関心」とは異なる道、「中立的なイメージ」形成の道を歩んだ。明さんは中学生の中での特殊例で、9名の対象者のうち唯一、家庭環境がイメージ形成の過程で大きな影響を与えている例である。小林(2009)の世論分析では、上海以外の地域の中国人は日本に対して厳しい対日感情を持っているとあるが、明さんに自由を与える、友だちのような関係の母親は、中国の一般的な親子関係からも、親日という意味からも例外的と言える。内藤・北村・鏡(2020, p.20)は、「子どもが知的好奇心を原動力にして環境に対して能動的に働きかけ、それに対して他者も含めた環境が反作用として応答する、という相互作用によって、認知の構造は変化してゆく」という主体性とアフォーダンス⁵⁷の相互作用を指摘しているが、明さんの家族は高学歴の祖父も両親も、明さんの趣味嗜好を妨げない自由な環境を作っており、それは明さんの好奇心を満たすことのできる空

⁵⁷ アフォーダンス (affordance) はアメリカの心理学者 James Jerome Gibson によって提唱された用語で、環境のさまざまな要素が人間や動物に影響を与え、感情や動作が生まれることである。

間を提供することで、明さんの発達的变化を促していると言える。明さんのケースは、対日ドラマや学校教育といった情報源よりも、知性が高い近親者や人間関係がもたらす影響が中学生の対日イメージの形成に大きな役割を果たすことを示している。

以上、3名の中学生には、対日イメージの単純化（若さんの日中戦争のイメージ）、対日イメージと対日情報源の相関関係の単純化（飛さんの一種の情報源から必ず一種の対日イメージが形成されるケース）、対日情報源の単純化（明さんのアニメ情報源）、という異なる側面の「単純化」が見られた。以下、対象中学生の対日イメージの形成過程を図5-1で示す。

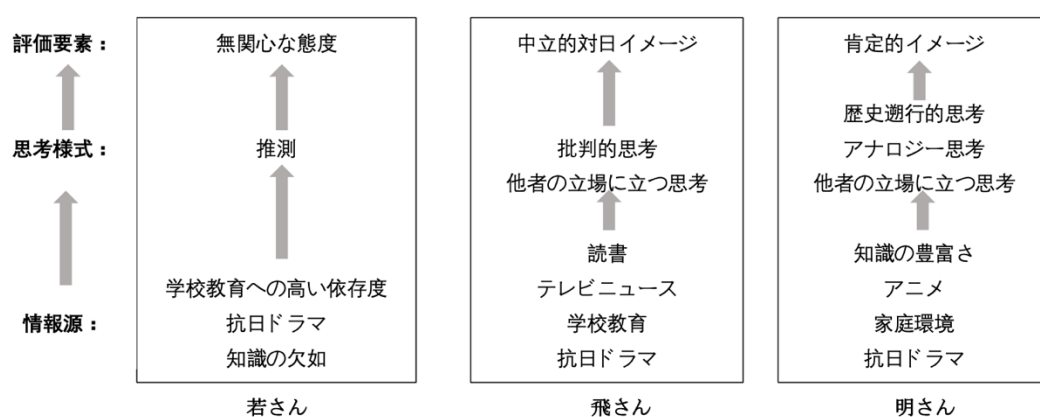


図 5-1 対象中学生の対日イメージの形成過程

5.3.2 高校生について

分析対象者としてこの3名の高校生を選び出した理由は、この3名の高校生が語る内容は豊富であり、残りの9名の対象者の語りと重なる部分が多く代表性を持つためである。高校生の対日イメージは、中学生同様、成長過程においても変化が生じている。高校時代からは、学校での本格的な歴史教育が始まり、それ以外にも日本に関する知識が増加し、抗日ドラマのもたらした否定的なイメージに拍車をかけるが、高校生では情報入手の手段は多様化する。評価要素から見る3人の対象者は「無関心」、「中立的」、「肯定的」という3つのタイプに分類できる。

宇さんは、最終的には日本に対して「無関心」な態度をとっている。しかし、宇さんの対日イメージは、中学生の若さんに見られた無知や未熟が原因の無関心ではない。父親、すなわち家族の影響による肯定的イメージから出発し、文学作品の読書による時代の比較、戦争背景の理解による中立的イメージ、ドイツとの比較による否定的イメージなど、宇さ

んの中では多様な情報が能動的に処理された結果、それでも無関心なのである。無関心ではあるが、宇さんの中には肯定的イメージも否定的イメージも明確に存在する。また、宇さんは韓国好きで、それが日本に興味がない一因でもあるが、自分も含めた世代の特徴である戦争の「体験なき鈍感さ」は、韓国の日本に対する態度との比較によって、中国の政策が原因であると冷静に自己分析をしている。宇さんは「比較思考」が顕著で、中学生の若さんのケースと比較すると、無関心な態度は若さんのような知識の欠如ではなく、個性の強調に関わる態度でもある可能性が考えられる。青年は、「青年期を通じて、しだいに個性化することになる(久世, 1978)」。宇さんの対日イメージの形成にあたっては、「個性化」という特徴が特に顕著であると考えられる。宇さんの場合は、日本に対する無関心な態度を持ちながら、日本に対する興味関心分野をはじめ一定程度の知識を有している。大平(1961, pp. 127-128)は「青年は自分の論理にたって考える」が、この論理は純粋に客観的ではなく、自己中心的に考えることがあり、「自己中心に考えるとは、自己を絶対標準とすることだ」と指摘している。宇さんの自分の興味関心を基準とした個性的ともいえる対日イメージの形成過程である。中学生が無知による無関心態度が形成され、一般的な中国の高校生は自己中心的な思考様式で安易に対日イメージを形成してしまう可能性があるが、宇さんは能動的な情報処理によって自分を相対化した上で無関心な態度を示している。

抗日ドラマを通して残酷な日本人のイメージを持っていた雪さんが、否定的イメージと肯定的イメージを併せ持った「中立的イメージ」を持つようになったきっかけは、博学な親戚から聞いた政治や歴史の話である。抗日ドラマの否定的なイメージは、新たな知識によって考え直すことを余儀なくされたが、ここでは親や学校教育だけでなく、近親者の影響が見られる。ここで能動的な情報入手に転じた雪さんは、学校の歴史教育も含め、過去ばかりではなく現在の情報に関しても歪められている可能性を知り、受け取る情報をそのまま信じていた自分を振り返り、自己分析を行うようになっていく。他者認識の転換が自己認識を促し、自己中心的から客観化への一步を踏み出しているといえる。大平(1961, pp. 143-144)によれば、興味は「子どもの活動や学習を動機づけるものとして、その教育的価値を高く評価されている」一方、興味は個人の知識や能力によって規定され、「全然知識のない対象に対しては、興味はおこらない」。まだ高校1年生の雪さんは他の2名と比べ、日本について十分な知識を持ってはいないが、一定の知識(ここでは日本の教育の先進性)に基づく日本への興味関心は肯定的な役割を果たし、彼女の日本に関する知識の

学習を動機づけている。雪さんは能動的に情報処理を行っており、それに伴って、自我の発見、自己評価や自己主張なども行っている。そのため、雪さんの対日イメージの形成過程は、反省的思考、弁証法的思考などの思考様式の変換に伴う自己認知の変遷過程であると言えるだろう。

朋さんも、小学校時代は日本について特定のイメージを持っていなかったが、読書の習慣がきっかけで様々なものの見方を学習し、特にアニメがきっかけで肯定的イメージを持つようになった一人である。中学校では友だちのみならず教師にまで売国奴のレッテルを貼られるほどの親日家になったが、それでも冷静に学校の教育内容を分析できる客観性を身につけた。朋さんは日本に対して「言語化できない特別な感情」を持っており、特に近現代の経済発展に関心を持っている日本愛好家である。高校生になってからは、反日感情の生成に対する新たな知見として、朋さんは数世代にわたる否定的イメージのステレオタイプ化と「同調心理」の可能性を推測するに至るほど、他者認知を深めている。親日家である朋さんは日中両国民の確実な相互理解を期待している。朋さんは様々な情報源から大量な情報を得ており、それら全ての情報が肯定的イメージにつながっているが、この情報処理のプロセスにおいては、大量の情報を処理する際に、「処理容量の限界」があるため、「情報処理のバイアス（検索しやすい情報へ注目するなど）を生⁵⁸」んだ可能性がある。「プライミング効果⁵⁹」が起これ、個性的とさえ言える極端に良い肯定的イメージが形成されている。

イメージの評価要素から見て、中学生と高校生の対日イメージともに3タイプに分けられたが、実際の対日イメージも対日情報源も、高校生の知識の増加や思考力の向上や情報処理能力の向上によって中学生より遥かに多様になっている。雪さんと朋さんは対日イメージには異なる部分があるが、知識欲が高い点では共通している。大平（1961）は「青年は多くの事物について広い知識を求め、しかも徹底的に追求しようとし」、「青年の思考の抽象性・論理性が、青年の旺盛な知識欲の有力な動力」であると言うが、確かに、雪さんと朋さんのケースから、この知識欲が旺盛となる時期は青年期初期の中学段階ではな

⁵⁸ （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 120）

⁵⁹ プレイミングとは、「先行するコンテキストによって後続する情報の解釈や検索に影響が及ぼされる認知的なプロセス」のことである（山田・北村・結城，2007，p. 132）。また、「プライミングによって活性化した知識や概念などが後続の情報処理に影響すること」はプライミング効果と呼ぶ（池田・唐沢・工藤・村本，2010，p. 28）。

く、青年期中期の高校段階であり、中学段階と高校段階で明らかな相違を示すことが実証された。以下、対象高校生の対日イメージの形成過程を図 5-2 で示す。

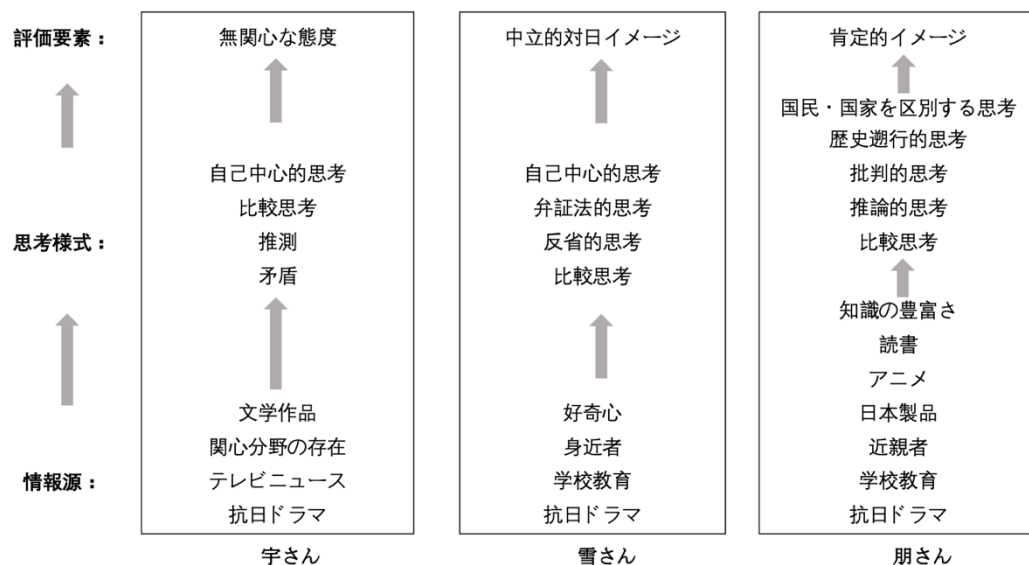


図 5-2 対象高校生の対日イメージの形成過程

5.3.3 大学生について

高校生と同様に、分析対象者としてこの3名の大学生生を選び出した理由は、この3名の大学生生が語る内容は豊富であり、残りの9名の対象者の語りと重なる部分が多く代表性を持つためである。大学生の対象者では、イメージの変遷過程は「日本を知らない→(日中戦争を知った後)イメージが悪化する→イメージが好転する→対日理解が深化する」過程としてまとめることができる。また、評価要素から見る大学段階の対日イメージは中学・高校段階と異なり、「無関心」がなく、「中立的」、「肯定的」という2つのタイプのみであった。

「中立的イメージ」を持つタイプに分類される対象者は相さんと越さんの2人である。この2名の対象者は、情報源も思考様式も共通する部分が多い。相さんにおいては、中学までの抗日映画、歴史教育による否定的イメージが、高校に入って好転した。相さんの現在の比較的客観的なイメージは、順調に形成されたのではなく、「感情的」思考から、日本製品、間接接触、情報源の多様化による知識と思考様式の多様化が年相応に起こった結果、「理性的」思考へのプロセスを歩むことになった。大学生になってからは経済学専攻のためさらに能動的な情報の入手を行い、認知的不協和が生じた場合は、積極的に対日イメージを再構築する努力もしている。この対日イメージの形成過程では、他者である日

本に対する理解と同時に反省的思考による自我の再発見ができた。高校以降の相さんのようにすでにメディア・リテラシーを有している大学生は、情報源をただ能動的に利用するのではなく、利用する前に、批判的に考え、まずその情報源にある問題点を見出し、その後、問題を解決するために、情報源から得た情報を処理し、自分なりの対日イメージを形成していくことが考えられる。

同じく中立的イメージを持つ越さんのイメージの形成過程は、小学校から高校までは相さんと同じ過程を経ている。越さんにおいては、大学教育が非常に重要な要素として、ポジティブな役割を果たしていることが特徴的である。越さんは一般中国人の対日イメージの形成を考える際に、教育の観点から各国を比較する傾向がある。例えば、反日感情の形成要因を中国国民の低学歴と同調心理にあると解釈している。越さんの中では、「個人と集団」や「過去と現在」のような二項対立による思考が行われることが多く、その結果、どちらにも与しない「中立」の立場を取ることになる。以上のように中立的イメージを持つ越さんと相さんの情報処理のプロセスにおいては、「他者の立場に立つ思考」と「国民・国家を区別する思考」、「アナロジー思考」などの思考様式が統合的に働いている。

「肯定的イメージ」を持つタイプに分類される亮さんにとっては、「好奇心」や「興味関心」につながる日本のアニメとテレビドラマが肯定的イメージ形成の主な情報源である。亮さんは、受験勉強や教師に対して反感を持ちながら高校時代の思春期を経験しており、その時の孤独感を克服する助けになったのはアニメであったため、アニメは亮さんの自己成長にとって特別な意義を持つ。また、大学入学後、学習環境と情報利用環境の変化により、対象者は自分の情報利用の自由度が高まり、思考様式を変化させた結果、自我の再発見ができており、現在、さらに日本留学によってさらなる自己実現をする方向に努めている。

評価要素から見て、大学生の対日イメージは、「無関心な態度」がなく、「中立的イメージ」と「肯定的イメージ」のみである。この中・高生との相違から、大学生では成熟による対日イメージの安定という特徴がうかがえる。また、学年が上がるにつれて、思考様式が多様化する傾向が見られる。以下、対象大学生の対日イメージの形成過程を図 5-3 で示す。

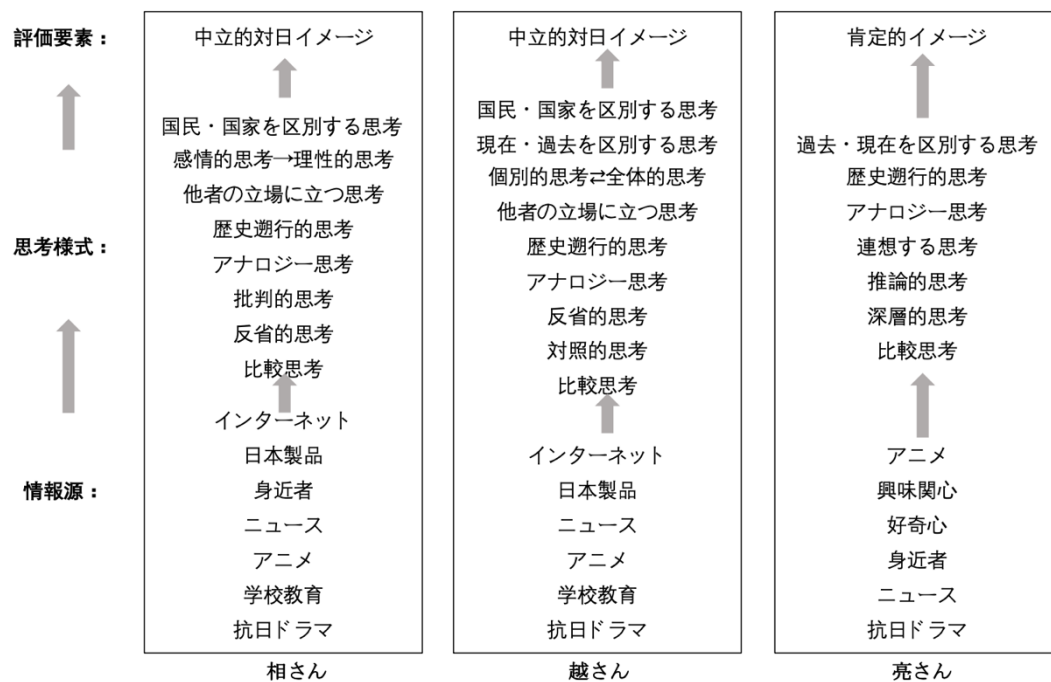


図 5-3 対象大学生の対日イメージの形成過程

以上のように、例外的な家庭環境を持った明さんを除いては、対象者は皆、「小学校時代の無関心→中学校の否定的イメージ→高校段階の情報の多様化による認識の多様化」という道を歩み、また中学と高校の間には明らかな差が見られた。また、すべての対象者において対日イメージが好転した共通のきっかけは日本のアニメである。遠藤 (2008, p. 52) は「ストーリーや登場人物のキャラクターに深みと多様性とがある」日本のアニメは若者の「精神形成上、とても大きな力を」持つと述べているが、本調査の分析結果からも、日本のアニメが中国の若者の対日イメージの形成にも重要な役割を果たしている可能性がある。

総じて言えば、中学校、高校、大学の学校段階で形成された対日イメージは、それぞれ「受動的情報処理による単純化イメージ」、「能動的情報処理による多様化イメージ」、「統合的情報処理による安定化イメージ」とまとめることができる。

第6章 総合考察

本章では、研究全体について総括し、次に、本研究から得られた知見を発達的視点と主体としての視点から論じ、最後に、本研究の限界と今後の課題を述べる。

6.1 本研究の要約

本研究は、対日イメージを形成する主体としての視点から、青年期における異なる3つの学校段階の相違を探求するものとして、以下の3点の研究目的を設定した。

研究目的1：中国の若者の対日イメージの形成年齢層を知ること。

研究目的2：中国の若者の持つ対日イメージの形成に影響を及ぼす情報源の利用の実態を知ること。

研究目的3：中国の若者の対日イメージの形成過程を解明すること。

第3章の【研究1】では、研究目的1のために研究課題1を設定し、自由回答法により得られた対日イメージと対日情報源のデータから、まずコーディング作業によりカテゴリーを抽出した。その後、頻出パターンマイニングによる量的処理を行い、対日イメージと対日情報源の実態、その両者の関連と学校段階別の相違について実証的に検証した。その結果、今まで「青年期」と一括りにされてきた発達段階のなかに、中学生と高校生の間にも差異があり、中学生の持つ対日イメージと高校生の持つ対日イメージは異なっていたことが明らかとなった。また、その要因を解明するために、中学生・高校生・大学生別の対日情報源を比較したところ、中学生の対日イメージの否定的傾向に対する学校教育の影響が明らかになった。また、高校生においては、対日イメージと対日情報源の多様化が確認された。さらに、大学生と高校生の間では、イメージと情報源が多様化している実態は似ていることがわかり、高校生から大学生への移行段階においては、対日イメージと対日情報源が安定化していく様相が見られた。このことから、中国の若者における対日イメージは主に高校段階から再構成されていくといえる。しかし、両段階におけるイメージの相違と情報源の相違の程度は、情報源よりもイメージの相違のほうが顕著である。したがって、両段階におけるイメージの相違は、情報源の種類の相違に由来したというより、イメージ形成の主体である対象者の情報源利用の実態に関わる可能性が考えられる。

第4章の【研究2】では，【研究1】の結果を受け，対象者の情報源利用の実態を知るために，研究課題2を設定した。まず，先行研究を参考に，【研究1】で抽出したカテゴリーを用いて質問項目を作成した。次に，選択肢式アンケート調査を行い，高校生・大学生の対日イメージと対日情報源について因子分析を行った。その上で，それぞれの対象者の持つ対日イメージと対日情報源の相関関係を調べ，両者の対日イメージに影響を与える対日情報源の特徴を明らかにした。その結果，まず，高校生と大学生のイメージ因子構造類似性と高校生と大学生の情報源利用実態の相違が確認された。次に，「中国にある日本」イメージ因子は全ての情報源と有意な相関が見られなかったという特殊性があり，またイメージの形成に対する「日本の大衆文化」情報源因子としての重要性が明らかになった。そのうち，「中国の抗日ドラマ」，「中国の抗日映画」と「日本のアニメ・漫画」という3つの項目はイメージと情報源の両方のカテゴリーに含まれるという共通の特徴がある。また，「中国にある日本」イメージ因子は対日情報源と相関関係の低い「過去の日本の史実をもとにした虚像」であるのに対して，「日本の大衆文化」情報源因子は唯一，イメージ因子との相関が高い情報源であるため，イメージの形成に最も重要な「フィクションの中にある現在の日本」に関する情報を提供しているといえる。両者における相対的關係は本章での大きな発見であると言えよう。

第5章の【研究3】では，【研究1】と【研究2】の結果を受け，対日イメージの形成過程を主体としての視点から詳しく探究することを目的とし，半構造化インタビュー調査を行い，得られた語りを質的に分析した。まず，中学生・高校生・大学生が，それぞれどのような思考や推論によって自分の対日イメージを確立したかを考察した。【研究2】では，高校生と大学生のイメージの形成過程には，「中国にある日本」イメージ因子と「日本の大衆文化」情報源因子の間の2つの特徴が共通して確認されたため，それらの中に含まれている典型的な項目に対する対象者の解釈をさらに詳しく考察した。その結果，中学段階では単純化されたイメージの形成から受動的情報処理のプロセス，高校段階では多様化したイメージの形成から能動的情報処理のプロセス，大学段階では安定化イメージの形成から統合的情報処理のプロセスが見られた。また，対象者が抗日ドラマに対する理解の深化過程と日本のアニメというフィクションから現代日本の現実を発見していることも明らかになった。

6.2 考察

本節では、学校段階別のイメージの相違から見るイメージの発達的变化と自己認知と他者認知に注目するイメージの形成過程に分けて考察する。

6.2.1 対日イメージの発達的变化について

【研究1】では、「家庭内の影響・教育（親，祖母，祖父等）」情報源は支持度が低かったが、対日イメージの形成に影響を与える可能性が確認された。【研究3】での対日イメージが多様化している中学生明さんのケースは特殊で一般化することが難しいが、中学生の単純化された対日イメージは学歴や視野の広い家族の影響で多様化する可能性を示唆しているとも考えられる。それと同時に、低学歴で視野の狭い両親はイメージの形成に影響を与えることなく、歴史教育からの影響にとどまると考えられる。中学段階は思春期に特有の「主観的特徴を示しやすい青年期前期⁶⁰」である。この段階はまだ批判的思考力が発達する初期であり、戦争に関わる対日イメージが大きな割合を占めている。批判的思考力とは、「ある事柄，主張，思想などに対して，それをそのまま鵜呑みにするのではなく，その意味をとらえ直したり，さまざまな条件に照らしてその正しさを吟味したりするような認知的能力⁶¹」のことである。批判的思考力を考える際に，1つの重要な問題は，「知識の源泉は何か」ということである。中学生は主に学校教育などの情報源から受動的に日本に関する情報を得ているため，この段階の対日イメージに関する「知識の源泉」は「教師や書物のように，社会的地位が高い人や社会的承認を受けやすいもの⁶²」である。すなわち，中学生は知識を総合的に認識するための思考能力が十分に備わっていないため，そのような人や者に無条件に従う「権威主義的態度⁶³」を取りやすい。結果的に，教科書などの記述や教師の教授に基づいた知識をそのまま受け取り，比較的単純化された対日イメージが形成されていると考えられる。しかし，大多数が単純化，一般化できる場合にも「外れ値」が存在し，それが日中関係というマクロな世界観にミクロな視点からポジティブな影響を与える可能性がある。明さんの場合がそうある。明さんの場合は，中学段階でも，

⁶⁰ （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 5）

⁶¹ （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 120）

⁶² （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 120）

⁶³ （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 120）

親日の母親、家庭の知的レベルが高くしかも子供に自由を認める例外的な家庭であった。この場合、教育やメディアの情報提供が果たす役割はどうかについては、更なる考察が必要である。

高校段階を見てみよう。この段階においては、対日イメージの認知要素と評価要素のどちらから見ても、対日イメージには「極端」という特徴がある。まず、【研究 1】の対日イメージの平均回答数（一人あたり記入した回答数）と具体的な「大衆文化」、「戦争・歴史認識」を表すイメージの支持度が極端に高いことが挙げられる。また、あるイメージの認知要素に対する評価は両極端な傾向がある。その理由については、【研究 3】で考察したとおり、この段階が情報入手手段の制限から開放されたばかりの段階であるためと考えられる。高校生は学校や家族などの「社会的環境と道具などの物理的環境といった認知的資源を活用して、知識やスキルを能動的に獲得していく⁶⁴」ため、大量な情報を入手している。すなわち、この段階では対日イメージに関する「知識の源泉」は、先述の教師や書物などにとどまらず、道具や社会的環境などの「現実や現象そのもの⁶⁵」も「知識の源泉」として加わる。情報源の増加により、高校生は「既成の知識にとらわれることなく事実や現象を直視し、それを実証的に理解しようとする（中略）合理主義態度⁶⁶」をとるようになり始める。このような変化は、中学生段階と比べ遥かに顕著であり、次に述べる大学段階に比べても特徴である。また、イメージと情報源の相関について、【研究 2】では以下の結果が得られた。高校生の日本に対する肯定的なイメージの形成は限定された情報源ではなく、多様な情報源に依拠している。そのうち、特に重要な役割を果たしているのは、中国で作られた情報ではなく、日本で作られたアニメなどの大衆文化である。一方、この日本側の情報源は肯定的イメージ形成だけではなく、否定的イメージ形成にも関係している。例えば、血生臭い、野蛮な暴力アニメは子供に悪影響を与え、日本人も同じように暴力であると思わせることがある。高校段階は「内面的世界の獲得、発見と展開⁶⁷」が生じる青年期中期であり、「形式的操作期」の中期でもある。この段階においては、高校

⁶⁴ （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 121）

⁶⁵ （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 120）

⁶⁶ （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 120）

⁶⁷ （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 5）

生の思考能力が向上するに伴い、教科書やテレビにおける日本に関する情報への依存のみならず、様々な情報源を通して能動的に情報を入手することができるようになる。

大学段階は「外界と内面の調和とアイデンティティ達成⁶⁸⁾」の青年期後期である。この段階では、高校生段階で積み重ねた知識により変化し定着していく対日イメージは一層固定化されるのが顕著に分かる。高校段階と比べて、大学段階での対日イメージには「極端」な特徴は見られないが、イメージの全体図に大きな相違は見られなかった。この段階における日本に関する「知識の源泉」は高校段階と同様な形ではあるが、大学生は新情報に対して高校生と異なる解釈ができようになっている。青年期中期の積極的で能動的情報処理の段階を経験した後、大学生は新情報に対する好奇心が鎮まり、入手した情報を自分の中で調和的に捉え、より理性的に選択し受容できるようになる。また、大学生の情報源の構造及びその利用実態に注目すれば、大学生の利用している情報源の種類に高校生との間には大きな相違は見られなかったが、情報利用の実態に関しては、高校生よりも大学生の方が日本側の情報源を多く利用している。そして、大学入学試験のストレスから解放されたため、大学生の学習目標も変化している。それゆえに、元々大学受験のための知識を蓄積するための手段として利用した情報源は、単なる日本に関する情報源に変わっている。さらに、より多く利用されている情報源も、特定の情報源に集中している状態から、偏りなく様々な情報源から平均的に利用する状態に変わっている。すなわち、学習形態と情報利用環境の変化によって、大学生の情報利用の実態にも変化が生じている。青年期は先述の批判的思考力の発達とともに、情報処理能力の発達も生じる。処理の負荷が低い情報処理方略で、大量かつ複雑な情報を処理した結果、検索しやすい情報への注目や感情などによる「情報処理バイアスを生む⁶⁹⁾」ことがある。それゆえ、高校生の対日イメージには「極端」という特徴が見られた。大学段階では、批判的能力はさらに発達することが考えられる。そのため、情報活用能力としての批判的思考能力が「適切な情報を収集・選択する能力、分析・統合する能力、活用・実践する能力に結びつく⁷⁰⁾」のである。大学生は外面と

⁶⁸⁾ (青年心理学事典, 久世・齋藤, 2000, p. 5)

⁶⁹⁾ (青年心理学事典, 久世・齋藤, 2000, p. 120)

⁷⁰⁾ (青年心理学事典, 久世・齋藤, 2000, p. 121)

内面を調和し、このような情報活用能力の発達によって安定化イメージが形成されていると考えられる。

6.2.2 対日イメージの形成過程について

5.5 で考察したように、イメージの評価要素から見て、中学段階と高校段階においては、「無関心な態度」、「中立的イメージ」、「肯定的イメージ」が形成された。先行研究では、評価要素は「否定的」、「中立的」、「肯定的」に分けられるのが一般的であるが、本論文の【研究3】では、「否定的イメージ」が浮上せず、「無関心な態度」が新たな評価要素として発見された。この「無関心な態度」は、「否定的」でも、「中立的」でも、「肯定的」でもなく、ある種「日本を評価できない」態度であり、それは日本に対する知識の欠如や「知ろうとしない」意欲の欠如に由来したものと考えられる。一方、中・高段階と対照的に、大学段階においては、「無関心な態度」がなく、「中立的」と「肯定的」のみであった。その理由の1つは前節で述べた主体の学習目標の変化と情報利用環境の変化である。大学生の分析結果の共通する特徴は学習環境の変化がもたらした情報利用環境の変化である。この変化は知識の増加を促した。大学生の場合は、高校生と異なり、増加した知識を能動的に処理するだけではなく、それらの知識を統合的に処理することによって、安定した対日イメージが形成された。すなわち、対日イメージの評価要素が減少するとともに、思考様式が多様化していることは、大学生の情報処理はより統合的であり、肯定、中立、否定を対比させながら認識を変化させ、イメージが安定化していくことを示している。したがって、この情報利用環境変化は大学生の「極端ではない」、「客観性に富んだ」対日イメージの形成に重要な意義がある。主体の学習目標の変化から見て、対象者の異なる学校段階での発達的变化は青年期を一括りとして対日イメージの変化を見るのではなく、学校段階別に見る必要性を示している。情報利用環境というイメージ形成の客観的な条件から見ても、対日イメージの変化を学校段階別に見る必要があると言えよう。

対象者の成長に伴うイメージの変化について言えば、中学、高校、大学の学校段階では、中国の若者には、幼稚園あるいは小学校時代の「ただ名称としての日本」から、それぞれ「受動的情報処理による単純化イメージ」、「能動的情報処理による多様化イメージ」、「統合的情報処理による安定化イメージ」が形成されている。また、イメージを形成する主体の思考は、「対日イメージの悪化」、「対日イメージの好転」と「対日理解の深化」のプロセスである。岡路・三宅 (1969, pp. 108-111)によれば、青年期は、心身の発達につれて自我意識も深まる時期であり、青年期前期、中期、後期における自我意識の特徴は以下の

ようにまとめられる。青年期前期は、自己主張に不安を感じるとともに「今までとは違った自我を示そうとする」自我の発見の時期であり、青年期中期は、自我の考えを大事にし「自我を主張するようになるばかりでなく、自我を高く評価する傾向になりやすい」時期である。青年期後期は、他我の考えも受け入れるようになり、自我が完成されるとともに理想我の追求もはじめ、最終的に現実我と理想我が統一された「社会的自我」になる時期である。本研究では、対象者の自己成長に伴って対日イメージの変化が生じているとともに、自己認知が変化していることも明らかとなった。青年期前期にいる中学生は「自我の発見」ができ、青年期中期の高校生になると、「自己主張」をするようになり、青年期後期の大学生になると、「自己実現に対する期待」のプロセスも経験している。しかし、まだ青年期が完成する段階に入っていないため、「社会的自我」までの形成は発見されなかった。以下、対象者の対日イメージの形成過程と自己成長の過程を図 6-1 で示す。

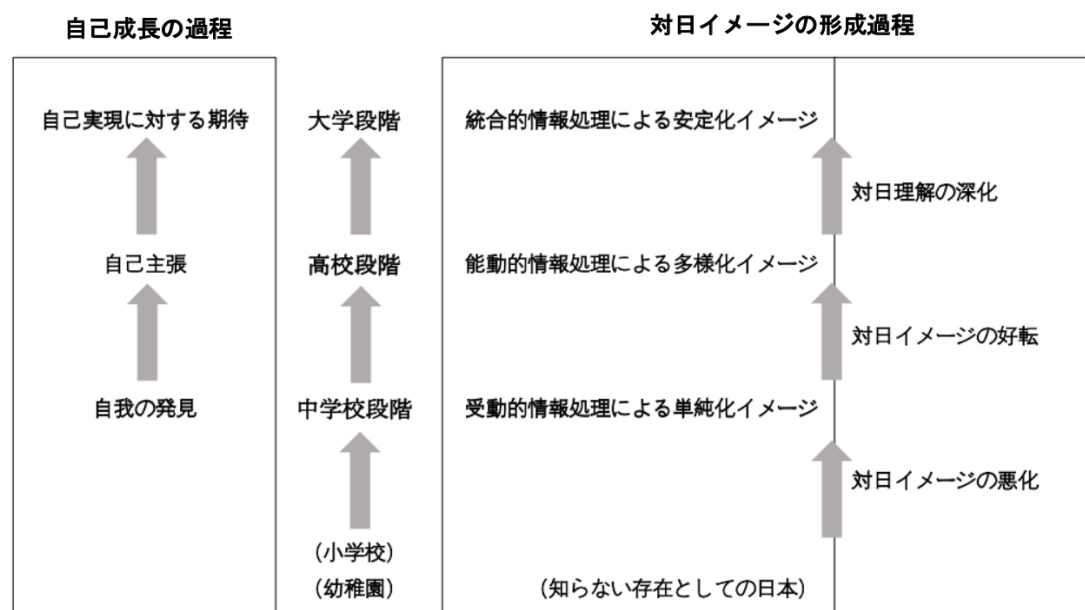


図 6-1 対象者の対日イメージの形成過程と自己成長の過程

6.2.3 本研究で得られた知見

本節では、本研究で得られた知見として、世論と個人の対日イメージ形成の相違、典型的な認知要素に見られる評価要素の変化、「日本の大衆文化」と「中国にある日本」の間の相互包含的・相対的關係という3つの部分に分けてまとめる。

6.2.3.1 世論と個人のイメージ形成の相違

世論を扱った先行研究では、一般中国人の対日イメージは中国国内の社会、思想状況や国際情勢、日中関係によって左右されやすく、常に変化する可能性がある指摘されている（王，2003；小林，2009）。すなわち、世論の対日イメージは日中関係などの大きな社会背景の中で動的に変化する。しかし、発達的に見た対日イメージに目を向け、個人の認識に焦点を当てた本研究では、青年期における対日イメージは、社会背景の影響を受けるとしても、一時的な影響にとどまることが分かった。対日イメージはマクロな社会背景よりも個人の発達に伴い変化する。これは本研究の新たな知見である。

発達的に見て、対象者の青年期前期・中期・後期における対日イメージは、全員に共通して、最初の単純化の中学時代（「受動的情報処理による単純化イメージ」）から多様化の高校時代（「能動的情報処理による多様化イメージ」）を経て、安定化の大学時代（「能動的情報処理による多様化イメージ」）として定着している。これまで青年期（思春期青年期）」と一括りにされてきた発達には、より細かく区切った学校段階別の相違がある。これも本研究の新たな知見であると考えられる。

6. 2. 3. 2 認知要素に見られる評価の多様化

本研究で扱ったイメージの概念を再確認しておこう。本研究では、中国の若者が抱く対日イメージとは、中国の若者が日本国・日本人に対して持つ認知要素・評価要素から構成された複合体であると定義した。そこで、イメージの形成過程における対日イメージに注目すると、どの学校段階においても、対象者の対日イメージには「戦争・歴史認識」に関わる限定的なイメージが存在している。認知要素から見た場合は、この戦争・歴史認識に関わるイメージは、対象者の青年期全期間における典型的なイメージの認知要素として、高い割合で常に存在し続ける。しかし、評価要素から見た場合、その「戦争・歴史認識」に対する評価は、必ずしも全ての学校段階で否定的評価につながるものではなく、対象者の成長に伴って、否定的評価に肯定的評価が加えられ、単純な否定的評価から両義的な評価へと変化することも認められた。すなわち、若者の成長過程全体にわたって存在し続ける認知要素としての典型的イメージに対する評価は、対象者の成長に伴い変化することがあり得るのである。

先行研究では、しばしばイメージの認知要素と評価要素の関連性が論じられているが、一つの認知要素を否定的評価、中立的評価、肯定的評価のどれか一種類のみに関連づけて論じる研究（例えば、江，2014a；王，2012）が多い。その評価の対象としては、【研究2】の43の対日イメージの測定項目の平均値の結果からも分かるように、平均値が中央値

に近い項目（例えば、「伝統文化」、「日本文学」、「日本語」、「地理環境」など）が最も多くを占めている。このことから、ある認知要素に対して多面的な評価をしている可能性がうかがえる。すなわち、様々な認知要素の複合体としての対日イメージに対する評価と、それを構成する認知要素に対する評価が必ずしも一定ではなく、一つの認知要素に対しては、否定的、中立的、否定的という多面的な評価も同時に存在している可能性がある。これは「イメージ形成過程にある典型的な認知要素に対して見られる評価の多様化」であり、本研究で得られた新たな知見であると考えられる。

6.2.3.3 「日本の大衆文化」と「中国にある日本」に対する解釈

高校生と大学生の対日イメージには「中国にある日本」、対日情報源には「日本の大衆文化」がある。【研究2】では、高校生と大学生のどちらにおいても「中国にある日本」のイメージは全ての情報源との相関が確認されなかったのに対し、「日本の大衆文化」情報源は「中国にある日本」以外の全てのイメージと相関が確認された。

「中国にある日本」因子には「抗日ドラマ・映画」、「反日感情」という高校生と大学生に共通する項目が含まれている。まず、抗日ドラマは現代中国人に歴史を伝えるための政策を背景に、中国人が「日中戦争」という史実をもとに造り上げたフィクションである。この日中戦争に基づいて作られた抗日ドラマは「史実を再現する抗日ドラマ」と「史実が脚色された抗日ドラマ」に分けられる。対象者は「史実を再現する抗日ドラマ」から日本兵の残酷さと善良さという両面性を見出し、この種のドラマを肯定的に評価している。それに対して、視聴率を上げるために日本兵を「鬼畜」として描くなど、抗日ドラマは「史実が脚色された抗日ドラマ」として製作されている。対象者はこの種類のドラマで描かれた日本人について、最初は事実を脚色した、表面的な、造り上げられた虚像を信じるが、情報の増加や自己成長につれて4つの段階を経て理解が変化している。第一段階として、ドラマの中の日本人像はそもそもねつ造であり、実像は他にあるのではないかと懐疑的に捉え、史実からかけ離れた虚像に対する不信感を持つ。第二段階として、犠牲者は中国人だけではなく、戦時中の日本人も被害者であると理解し、戦争そのものに対する見方が深まる。第三段階として、歴史の中で中国も侵略行為をしたことがあるという事実に基づき、日本人の侵略行為を「国のための止むを得ない行為」として相対化する。第四段階として、このような日中戦争に対する理解の深化を通して、物事に対する多面的な見方の重要性を深く認識するようになる。

また、反日デモなどの実際に存在している形で一般民衆に表面化された反日感情も「中国にある日本」のイメージの一部である。その反日感情は、実際に「身近な他者によるネガティブな思想の影響」と「同調心理のプレッシャー」によって表面化せざるを得ない感情であるという可能性を、対象者自信が深層的思考により推測している。すなわち、「抗日ドラマ・映画」と「反日感情」の2項目は、史実や中国人に存在する心情と関連しているものの、そのものは虚像であるという特別な性質がある。

「日本の大衆文化」因子に含まれる項目のうち、日本のアニメは最も多く利用されている情報源である。アニメは、日本人が創作したフィクションであるが、抗日ドラマと対照的に、「日中戦争」という特定の史実に基づくものではなく、完全なフィクションであり、サブカルチャーの一種としての芸術作品でもある。対象者はアニメの中にある「真実」と「現実」を発見している。ここでいう「真実」とは、人間の普遍的な側面である。対象者はアニメの中に日本人の生活環境や心情などの真実を読み取る。対象者によってはこれを「日本人の美德」と解釈するが、実は中国人にも共通する人類に普遍的な側面である。こうした側面を表現する媒体としては、人類の歴史の中で古くは詩や演劇が、19世紀以降は小説が機能しており、アニメは最も新しい媒体の1つである。中国の情報化の発展に伴い、日本のアニメはインターネットなどを通じて入手しやすくなった。また、言語を用いて表現される媒体であれば必須の語彙知識や読解力がアニメならば必要とされず、演劇とも異なりもともと子供向けであったことから、誰でもわかるように作成されており、中国の若者にも受容されやすいと思われる。

また、ここでいう「現実」とは、アニメ製作者としての日本人の姿である。対象者はアニメに作られたフィクションを現実と区別して見ているが、アニメ視聴を通して日本の優れたアニメの製作技術を発見し、アニメの製作者に対する敬意を持ち、それを支える日本人に感銘を受け、肯定的に評価している。あのような精緻なアニメを製作する技術、一つ一つ仕上げていく勤勉さといった日本人の姿である。以上のように、アニメとその「真実」と「現実」の関係に対する見方にかかわらず、対象者は日本のアニメという「フィクション」から「真実・現実」の日本を発見している。このアニメを通じて発見した「真実・現実」の日本は、「フィクションの中にある真実・現実」としてみなされる。

6.3 今後の課題

本研究の結びとして、今後の課題について以下の3点を述べる。

第一に、イメージの行動要素と認知要素・評価要素・感情要素の関連性である。外国イメージの構成成分である「認知要素、評価要素、感情要素、行動要素」から考えると、本研究では、先行研究での対日イメージのうちの感情要素の考察を踏まえて、主にイメージの認知要素とそれに関連する評価要素の全体像を明らかにした。先行研究（江 2014a）で指摘しているように、認知要素と評価要素は行動要素の前提であるとともに、三者の間に強い相関を持っている。イメージの行動要素を明らかにしない限り、対日イメージの全体像を描いたとは言いがたい。そのため、中国の若者の成長過程における行動要素の検討とそれと感情・認知・評価の相関関係の関連性の考察は、今後の課題である。

第二に、ステレオタイプ化されたイメージの判断基準である。先行研究（片桐, 2002）では、日本人大学生との比較によって、中国人大学生の日本人イメージのステレオタイプの存在が指摘されている。これまでに否定的イメージがステレオタイプになっていると主張する研究が多かった。本研究では、自由回答式のアンケート調査により、中学生の限定的対日イメージ、高校生と大学生のアンビバレントな対日イメージがあることが明らかになった。また、インタビュー調査によって、対象者は「客観的に日本を見ている」、「イメージには両面性・多面性がある」などのような自己認識をしているにもかかわらず、実際に対象者の中で日本に対して極端に悪いイメージあるいは極端に良いイメージを持っている者が存在していることが明らかになった。この「極端に良いイメージ」に当たる肯定的イメージのステレオタイプ化についてはほとんど考察されていない。ステレオタイプ研究の一つの問題点はステレオタイプの判断基準の問題だと考えられている。先行研究では、日本人の持っているイメージと比較する研究デザインが考案されている。また、先行研究では地域別・年齢別の相違が大きいことが指摘されていたが、本研究も、日本・日本人との接触機会の少ないハルビン市に限っての研究であり、一般化できない。そのため、国別の調査に中国の他地域別と年齢別の調査に加え、ステレオタイプの判断基準を定めた上で、肯定的ステレオタイプの形成をさらに詳しく考察する必要がある。

第三に、学校教育におけるメディア・リテラシー教育の問題がある。本研究で探求した対日イメージの形成過程には中国の学校教育の問題も関わっている。認知発達の視点から見れば、青年期の若者の情報処理能力は適応的に発達していくとともに、個性化していく

71。急速に情報化が進む中国社会においては、情報入手手段の増加に伴い、若者たちは、能動的かつ探索的に入手した大量の情報を自分なりの方法で処理していると言えよう。その結果、多様な情報を入手している若者は日本についての知識が豊富になるが、それらの知識が必ずしも正しいとは限らない。つまり、若者が持っている知識には量と質のギャップが存在している可能性がある。同じ情報であっても、人によって情報処理の方法が異なる。本研究では、高校段階から対日イメージが形成される理由としては、異なる情報源の影響ではなく、対象者の能動的な情報処理によるものであることが明らかとなった。したがって、若者の対日イメージの形成にとっては、正確な情報であることに加え、適切な情報処理の方法も重要である。情報処理の方法に関わる能力を十分身につけていなければ、結局は実際とかけ離れた「誤ったイメージ」を形成し、それが修正される機会がないまま放置され固定化される危険性も生じる。それゆえ、情報化した現代の中国社会において、メディア・リテラシーの育成は社会全体の発展のために不可欠な重要課題といえる。

しかし、現在の中国における学校教育の現場では、受験を重視した知識偏重型の教育が行われており、この教育システムは対外国イメージ形成にネガティブな影響を与える可能性がある。社会の情報化や国際化に伴い、中国の教育システムも対外国戦略のために進化し、多様化している。このような社会背景の中で、メディア・リテラシー教育のような効果が目に見えにくい教育も徐々に重視されつつある。しかし、実際に行われている教育の内容は、北京のように中央政府に近い都市、外国との往来や外国人との接触機会の多い沿岸部の経済発展都市、地方や内陸部の農村などで大きく異なる。ハルビン市のような地方都市では、形ばかりのメディア・リテラシー教育が行われており、さらに改善の余地がある。喬（2014）の研究では、大学の「日本語学習」の過程は「イメージ再構築の場」として捉えられているが、本研究では、イメージが再構成される段階は大学ではなく、高校であることが明らかになった。高校の教育現場は大学で日本語を専攻しない生徒の「イメージの再構築」にどのような役割を果たす可能性があるのだろうか。現在の知識偏重の教学システムにある対外国イメージ形成の問題はいかに解決できるか。今後、高校のメディア・リテラシー教育の在り方について検討していく必要がある。

71 （青年心理学事典，久世・齋藤，2000，p. 120）

引用文献

1. Agrawal, R. , Imielinski, T. , & Swami, A. (1993). Mining association rules between sets of items in large databases. *Acm Sigmod Record*.
2. Boulding, K. E. (1980). ザ・イメージ:生活の知恵・社会の知恵(大川信明,訳). 東京:誠信書房. (Boulding, K. E. (1956). *The image knowledge in life and society*. Ann Arbor: The university of Michigan Press.)
3. Creswell, J. W. , & Plano Clark, V. L. (2010). 人間科学のための混合研究法:質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン(大谷順子,訳). 京都:北大路書房. (Creswell, J. W. , & Plano Clark, V. L. (2006). *Designing and conducting mixed methods research*. New York: Sage Publications.)
4. Piaget, J. , & Inhelder, B. (1969). 新しい児童心理学 (波多野完治・須賀哲夫・周郷博,共訳). 東京:白水社. (Piaget, J. , & Inhelder, B. (1966). *La psychologie de l'enfant*. Paris: Presses Universitaires de France.)
5. 足立自朗. (1994). 認知革命とピアジェの発達心理学. *心理科学*, **16**(2), 22-44.
6. 青木香代子・安 龍洙. (2019). 日本社会における中国人交換留学生の異文化理解に関する一考察. *茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究*, **2**, 13-27.
7. 青木 保・梶原景昭(編). (1999). *情報社会の文化1:情報化とアジア・イメージ*. 東京:東京大学出版会.
8. 朴 香花. (2016). 日本観光は中国人の対日イメージを変えたのか. *情報文化学会誌*, **23**(2), 59-66.
9. 張 勇. (2013). 中国人日本語学習者の異文化態度形成に関する研究. 政策研究大学院大学国際交流基金日本語国際センター日本語教育研究. 東京:政策研究大学院大学.
10. 遠藤 誉. (2008). *中国動漫新人類:日本のアニメと漫画が中国を動かす*. 東京:日経 BP 社.
11. 魏 然. (2014). 中国の若者における日本ポピュラーカルチャーの受容と対日イメージ:青少年に対するアンケート調査を手がかり. *政治学論集*, **27**, 33-56.
12. 範 士明. (2007). 中国の対日イメージの現状についての一考察:2005年8月の日中共同調査を手がかりに(真水康樹,訳). *法制理論*, **39**(3), 327-340.
13. 井田仁康. (1997). 中国上海児童・生徒の対日イメージ—地理教育の観点から. *教育学系論集*, **21**(2), 1-9.

14. 石井健一.(2006). 2005 年反日デモと対日意識・愛国心. *日中社会学会ワーキングペーパー集, 創刊号*,1-10.
15. 加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃・朴 志仙・沈 貞美.(2008). 韓国における小・中・高・大学生の対日イメージの形成過程:9 分割統合描画法による分析から. *異文化間教育*,28,60-73.
16. 片桐雅義.(2002). 日本人のイメージ:日中大学生の比較. *宇都宮大学国際学部研究論集*,14,1-8.
17. 見城悌治.(2007). 現代中国における日本語専攻大学生の「日本」イメージ. *国際教育*,1,1-20.
18. 見城悌治・三村達也.(2010). 現代中国における大学生の「日本」イメージ:日本語専攻生, 日本語学習生, 日本語非学習生の比較. *国際教育*,3,1-38.
19. 小林良樹.(2008). 中国における「対日感情」に関する考察:各種世論調査結果の複合的分析. *アジア研究*,54(4),87-108.
20. 小林良樹.(2009). 「中国における対日感情」の実態と悪化要因に関する研究:1988 年-2008 年の各種世論調査結果の複合的分析を中心に. 早稲田大学アジア太平洋研究科. 東京:早稲田大学.
21. 江 暉.(2014a). 中国における対日イメージ及びその構造モデルに関する検討:2012 年中国全国調査の結果に基づく考察. *情報学研究・調査研究編*,29,221-249.
22. 江 暉.(2014b). 現代中国人が抱く対日イメージの形成における情報源の役割. *情報学研究・調査研究編*,87,53-70.
23. 小城英子・萩原 滋・村山 陽・大坪寛子・渋谷明子・志岐裕子.(2010). 集合的記憶とテレビ:ウェブ・モニター調査(2009 年 2 月)の報告(2). *メディア・コミュニケーション*,60,29-47.
24. 久世敏雄.(1978). *青年の心理*. 東京:福村出版.
25. 姜 茜.(2017). *中国青年学生心目中的日本形象:以北京的三所学校的学生為例 (中国人青年の対日イメージ:北京の 3 つの教育機関の生徒・学生を例に)*. 中国青年政治学院青少年工作系. 北京:中国青年政治学院.
26. 松田勇一・安 龍洙.(2018). 日本社会における中国人交換留学生の異文化理解に関する一考察. *茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究*,1,69-83.

27. 中橋真穂・潘 英峰・義永美央子.(2015). 中学生は他国をどう見ているのか:日本・中国・米国の中学生に対するアンケート調査結果報告. *国際理解教育*,**21**,71-76.
28. 内藤佳津雄・北村世都・鏡 直子(編).(2020). *発達と学習 第2版*. 東京:弘文堂.
29. 御堂岡潔.(1992). 文化集団のイメージ:マス・レベルにおける文化理解. 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編),*社会心理学パースペクティブ 3—集団から社会へ*(pp. 263-288). 東京:誠信書房.
30. 大平勝馬(編).(1961). *青年心理学:青年指導の基礎的理解*. 東京:日本文化科学社.
31. 大西由美.(2014). *日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究:日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に*. 北海道大学院国際広報メディア・観光学院. 札幌:北海道大学.
32. 大谷 尚.(2008). 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案:着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)*,**54**(2),27-44.
33. 大谷 尚.(2011). SCAT:Steps for Coding and Theorization:明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. *感性工学*,**10**(3),155-160.
34. 大谷 尚.(2019). *質的研究の考え方:研究方法論から SCAT による分析まで*. 名古屋:名古屋大学出版会.
35. 王 中忱.(2003). 戦後中国の思想的変遷と日本イメージ. *学術の動向*,**8**(9),63-66.
36. 王 星宇.(2012). 中国大学生対日認知に関するアンケート調査:データと分析. *日本学刊*,**5**,125-140.
37. 劉 志明.(1995). 中国人の対日イメージと中日関係. *国際協力論集*,**3**(2),39-60.
38. 劉 志明.(2003). 中日相互世論の変遷与媒体作用. 劉志明(編),*中日関係新思維与世論* (pp. 155-182). 北京:NICCS.
39. 劉 志明.(2005). 日中コミュニケーションギャップと情報発信. 高井潔司・日中コミュニケーション研究会(編),*日中相互理解のための中国ナショナリズムとメディア分析* (pp. 106-131). 東京:明石書店.
40. 岡田 明.(1979). 読書趣味研究の展望. *野間教育研究所紀要*,**31**,9-47.
41. 岡路市郎・三宅和夫.(1969). *青年心理学*. 東京:川島書店.
42. *青年心理学事典*. (2000). 久世敏雄・齋藤耕二(監修). 東京:福村出版.

43. 渋谷明子・テーシャオブン・李 光鎬・上瀬由美子・萩原 滋・小城英子.(2011). メディア接触と異文化経験と外国・外国人イメージ:ウェブ・モニター調査(2010年2月)の報告(2). *メディア・コミュニケーション*, **61**, 103-125.
44. 園田茂人.(2020). *アジアの国民感情:データを明かす人々の対外認識*. 東京:中央公論新社.
45. 朱 爾澄.(1995). 中国の中学・高校生の日本観. 日高六郎(編), *日本と中国:若者たちの歴史認識*(pp. 35-48). 東京:梨の木舎.
46. 周 菲菲.(2013). 反日感情と北海道の地域イメージ:来道中国人観光者を中心に. *北海道民族学*, **9**, 30-45.
47. 喬 穎.(2014). *中国の日本語教育と大学日本語専攻生の対日認識の形成に関する研究:日本語教育における「個人」の意義*. 早稲田大学大学院日本語教育研究科. 東京:早稲田大学.
48. 陳 志嘉.(1995). 中国の高校生にとって日本とは. 日高六郎(編), *日本と中国:若者たちの歴史認識*(pp. 16-25). 東京:梨の木舎.
49. 杜 麗文.(2017). *大学生日本観変化過程研究:以北京市在校生為例 (大学生の対日イメージの変遷過程に関する研究:北京市の学生を例に)*. 中国青年政治学院青少年工作系. 北京:中国青年政治学院.
50. 辻 新六・有馬昌宏.(2006). *アンケート調査の方法:実践ノウハウとパソコン支援*. 東京:朝倉書店.
51. 筒井真優美・江本リナ・関根弘子・太田由美・甲斐恭子・中村明子・渡邊久美子.(2005). 日本における研究手法の変遷:量的研究・質的研究・トライアングレーション. *インターナショナルナーシングレビュー*, **28**(2), 37-46.
52. 鷲尾 隆.(2007). データインテンシブコンピューティング:その 1 離散構造マイニング. *人工知能学会誌*, **115**(20), 41-46.
53. 山田一成・北村英哉・結城雅樹(編).(2007). *よくわかる社会心理学*. 京都:ミネルブア書房.
54. 山谷剛史.(2008). *新しい中国人:ネットで団結する若者たち*. 東京:ソフトバンク.
55. 横田 葉・Fhristopher Hennessy.(2012). 中国人留学生が抱く「2012・日本」のイメージ:韓国人留学生・欧米系留学生との比較を通して. *第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム*.

56. 楊 霜・橋元良明. (2010). 中国におけるメディアの多元化と日本人イメージの変化: その変化に内在する「人間本位」意識の在り方を中心に. *東京大学大学院情報学環紀要*, **79**, 47-63.

参考文献

1. Allport, G. W. (1935). Attitudes. In C. M. Murchison (Ed.), *Handbook of social psychology, vo. 2.* (pp. 798-844). Worcester: Clark Univ. Press.
2. Festinger, L. (1965). *認知的不協和の理論*(末永俊郎, 訳). 東京: 誠信書房. (Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance.* Row: Peterson.)
3. Heider, F. (1978). *対人関係の心理学*(大橋正夫, 訳). 東京: 誠信書房. (Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations.* New York: Wiley.)
4. Kelman, H. C. (Ed.). (1965). *International behavior: A social psychological approach.* New York: Holt Rinehart and Winston.
5. 市川伸一(編). (1996). *認知心理学*. 東京: 東京大学出版会.
6. 池田謙一・唐沢 穰・工藤恵理子・村本由紀子. (2010). *社会心理学*. 東京: 有斐閣.
7. 石井 敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人. (2013). *初めて学ぶ異文化コミュニケーションー多文化共生と平和構築に向けて*. 東京: 有斐閣.
8. 川口俊明. (2011). 教育学における混合研究法の可能性. *教育学研究*, **78**(4), 386-397.
9. 川島 真. (2006). 歴史対話と史料研究. 劉 傑・三谷 博・楊 大慶(編), *国境を越える歴史認識: 日中対話の試み* (pp. 347-366). 東京: 東京大学出版社.
10. 小塩真司. (2005). *研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析*. 東京: 東京図書株式会社.
11. 呉 正培. (2007). *韓国人大学生の日本人イメージに関する社会心理学的研究: 日本語学習の影響を中心に*. 東北大学大学院文学研究科. 仙台: 東北大学.
12. 中村勇太・崔 恩濤・吉田則裕・春名修介・井上克郎. (2015). *パターンマイニング技術を用いた C 言語プログラムからのコーディングパターン抽出*. *電子情報通信学会技術研究報告*, **22**(2), 263-271.
13. 中沢和子. (1987). *イメージの誕生: 0 歳からの行動観察*. 東京: 日本放送出版協会.
14. 佐藤郁哉. (2005). *トライアングレーション(方法論的複眼)とは何か? . インターナショナルナースィング レビュー*, **28**(2), 30-36.

15. 杉江聡子. (2016). 中国語ブレンド型学習の実践と混合研究方法による評価:遠隔交流が創る学びの経験を学習者視点で解釈する. 北海道大学院国際広報メディア・観光学院. 札幌:北海道大学.

引用ウェブサイト

1. 言論 NPO. (2019). 第 15 回日中共同世論調査.
<<https://www.genron-npo.net/pdf/15th.pdf>>(2020 年 3 月 20 日)
2. ハルビン市人民政府. (2019). ハルビン統計年鑑 2019. <<http://www.harbin.gov.cn/col/col39/index.html>>(2020 年 12 月 20 日)
3. 国際交流基金日本語国際センター. (2019). 中国 (2019) 日本語教育国・地域別情報.
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/china.html#KEKKA>> (2021 年 2 月 01 日)
4. 日本外務省. (2020). 海外在留邦人数調査統計統計表一覧 (令和元年 (2019 年) 以前).
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_003338.html>(2020 年 12 月 20 日)
5. 日本学生支援機構. (2018). 外国人留学生在籍状況調査. <http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html>(2019 年 12 月 21 日)
6. 日本政府観光局(JNTO). (2018). 訪日外客数の動向.
<http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/pdf/2013_15_tourists.pdf>
(2019 年 12 月 21 日)
7. 搜狐. (2020). 2020 年中国省都 GDP ランキング. <https://www.sohu.com/a/402679416_120607879>(2020 年 12 月 20 日)
8. 中国互聯網絡信息中心(CNNIC). (2016). 中国互聯網絡發展狀況統計報告.
<<http://www.cnnic.net.cn/hlwfzyj/hlwxxzbg/hlwtjbg/201601/P020160122444930951954.pdf>> (2016 年 1 月 21 日)
9. 中国互聯網絡信息中心(CNNIC). (2020). 第 45 回中国互聯網絡發展狀況統計報告.
<http://www.cac.gov.cn/2020-04/27/c_1589535470378587.htm>(2020 年 10 月 27 日)

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々よりご支援とご指導を賜りました。

はじめに、指導教員であった北海道大学名誉教授の野澤俊敬先生には、修士課程よりお世話になりました。野澤俊敬先生は、研究のみならず、私自身の成長を温かく見守ってくださいました。先生から受けた学恩に対しまして感謝申し上げます。つづいて、野澤俊敬先生の定年退職に伴い、指導教員としてご指導をいただいた北海道大学教育学院の寺田龍男先生に深く感謝の意を申し上げます。寺田龍男先生は、引用文献の表記方法や使用語彙の厳密さなど細部へも気を配り、常に謙虚な姿勢で研究に臨むようにとご指導くださいました。最後に、指導教員として本論文の主査を務めていただいた北海道大学教育学院の長野督先生に、心より感謝の意を申し上げます。長野督先生は最初、副指導教員としてご指導ご鞭撻くださり、大変貴重なアドバイスをくださったおかげで、博士論文の完成を成し遂げることができました。論文の修正にあたり、素晴らしい指導教員として親身になり力を尽くしてくださったお姿を一生忘れることはありません。私が論文の執筆を断念しかけた時には、暖かく応援して励ましてくださいました。私にとって長野督先生は、博士論文の指導教員のみならず、私の人生観を形成してくださった指導教員でもあります。

ならびに、本論文の副査を引き受けてくださった東京大学大学院情報学環・学際情報学府の青山和佳先生に深く感謝いたします。博士課程に在学する最初の段階から、青山和佳先生は副指導教員としてご指導をくださり、東京大学に移られた後も、文献の探し方から研究者としてのあるべき姿勢、人生の在り方まで、大変貴重なご助言やご指導をくださいました。また、本論文の副査を引き受けてくださった札幌国際大学観光学部国際観光学科の杉江聡子先生に心より感謝の意を申し上げます。杉江聡子先生からは、研究面での知識はさることながら、先生の非常に丁寧な論文修正意見との「対話」を通して、研究者として備えるべき能力についても貴重な知見を得ることができ、私自身も自身の成長を実感することができました。最後に、論文審査開始の直近にも関わらず、快く本論文の副査を引き受けてくださった北海道大学教育学院の加藤弘通先生に心より感謝の意を申し上げます。加藤弘通先生には、日本語表現の適切さをはじめ、統計分析の厳密さ、発達心理学の理論に対する理解など貴重なご意見をいただいたおかげで、論文の到達点をより一層高めることができました。先生方がご指摘くださった今後の課題

を研究目標として、先生方のご期待にお応えできるよう、これからの研究、そして人生の道を歩んでいきたいと考えております。

そして、私自身の都合で博士課程を長引かせてきましたが、同時に、長く在学したおかげで、北海道大学教育学院国際多元文化教育論講座の先生方から見守っていただくことができ、自分の青春時代は「多元の大家族」に恵まれた青春時代となりました。それが多元の学生の一員としての幸せです。北海道大学教育学院国際多元文化教育論講座の先生方、先輩後輩の皆様に深く感謝いたします。

本論文を作成するにあたり、研究にご協力くださった当時の子供、今はすでに大学生や社会人になった若者の皆様に心より感謝いたします。また、調査の実施にあたってご尽力くださった各教育機関の先生方にも感謝いたします。日本語の修正からデータ処理、分析方法、論文の構成など様々な側面からコメントをしてくれた親戚や親友の皆に感謝いたします。研究面のみならず、精神面からもご支援とご協力をいただきながら、東北林業大学日本語学部の同僚をはじめ、ここにお名前を記すことができなかった多くの方々にも心より感謝申し上げます。

最後に、精神的に常に私を支えてくれた両親に感謝します。本論文を執筆中に亡くなった二人の祖父と母方の祖母に捧げます。

付録1【研究1】中国の若者の対日イメージの形成年齢層

1.1 自由回答式アンケート質問紙（中国語）

调查许可书

感谢您在百忙之中接受关于“对日本的印象”的问卷调查。

此项调查将问及您的生日、学年等内容，但本人不会用于研究以外的任何情况。另外，所有调查结果均将进行统计学处理，绝不会透露您的个人信息。

如同意以上内容，请签字。

____年____月____日 签字:_____

如有任何疑问请与我联系。

北海道大学教育学院博士研究生 文慧超

E-mail: aurorawhc@gmail.com

您的个人信息

出生年月日____年____月____日 性别 男____ / 女____

所在学校_____ 年级_____

日语学习经历 无・有（____年____个月） 日语能力测试____级合格

赴日经历 无・有（旅游・留学・其他_____）

请回答以下问题

1. 提到你对日本的印象，你能想到什么？（答案越多越好）

2. 你主要通过哪些途径了解日本（的人和事）？

1.2 自由回答式アンケート質問紙（日本語）

調査許可書

「対日イメージ」に関するアンケート調査をご回答いただきどうもありがとうございます。

このアンケート調査はあなたの生年月日、学年などの個人情報をお聞きしますが、研究以外の目的には決して使いません。また、結果は全て統計的に処理致しますので、個人の回答をそのまま使用することもしません。

以上ご同意の上、ご署名よろしくお願ひします。

____年 ____月 ____日 署名: _____

なお、本調査に関してご意見やご質問がございましたら、下記までご連絡ください。

北海道大学教育学院大学院博士課程 文慧超

E-mail: aurorawhc@gmail.com

個人情報

生年月日 _____年 ____月 ____日 性別 男 ____ / 女 ____

所属学校 _____ 学年 _____

日本語学習歴 無・有り（ ____年 ____ヶ月） 日本語能力試験 ____級合格

渡日経験 無・有り（観光・留学・その他 _____）

以下の質問にお答えください。

1. あなたが「日本」と聞いてイメージするものを自由に書いてください。（回答は多ければ多いほどよい。）

2. あなたは主にどのような手段を通して日本についての情報を得ていますか。

付録2【研究2】中国の若者の対日情報源の利用の実態

2.1 選択肢式アンケート質問紙（中国語）

1

调查许可书

感谢您在百忙之中接受关于“对日本的印象”的问卷调查。

此项调查将问及您的生日、学年等内容，但本人不会用于研究以外的任何情况。另外，所有调查结果均将进行统计学处理，绝不会透露您的个人信息。

如同意以上内容，请签字。

____年 ____月 ____日 签字：_____

如有任何疑问请与我联系。

北海道大学教育学院博士研究生 文慧超

E-mail: aurorawhc@gmail.com

2

您的个人信息

出生年月日____年____月____日 性别 男____ / 女____

所在学校_____ 年级_____

日语学习经历 无・有（____年____个月） 日语能力测试____级合格

赴日经历 无・有（旅游・留学・其他_____）

3

以下与日本相关的事物会让你对日本产生怎样的印象？

请在符合你想法的选项上打“✓”。

非常差的印象
差印象
相对较差的印象
相对较好的印象
好印象
非常好的印象

1	日本国旗（太阳旗）						
2	日本的象征（樱花、富士山等）						
3	自然环境（地震、火山、海啸等）						
4	地理环境（四面环海、岛国、日本地图等）						
5	旅游观光（东京塔、北海道、温泉等）						
6	日本料理（寿司、生鱼片、抹茶、章鱼小丸子等）						
7	日语（假名，卡哇伊、の等）						
8	核泄漏事件						
9	生活环境（独门独院的小楼、自动售货机、榻榻米、空气 / 水的质量等）						
10	社会环境（街道环境卫生、环保意识、交通秩序等）						
11	社会问题						
12	动物保护问题（捕鲸问题等）						
13	中日关系						
14	反日情绪（反日游行、抵制日货、小日本等）						
15	中国的 <u>非</u> 抗日题材的影视节目中的日本或日本人（《爱情公寓》关谷、电影《非诚勿扰》等）						
16	抗日题材的中国电视剧（抗日神剧、《亮剑》、《雪豹》等）						
17	抗日题材的中国电影（《地道战》、《举起手来》、《南京！南京！》、《金陵十三钗》等）						
18	日本电视剧、电影（《大奥》、《东京爱情故事》、《交响情人梦》、《入殓师》等）						
19	演员（山下智久、上野树里、长泽雅美、木村拓哉等）						
20	歌手（AKB48、仓木麻衣、小田和正、嵐等）						
21	日本的成人电影（AV、苍井空、小泽玛利亚等）						
22	动漫、漫画（柯南、哆啦A梦、死神、宫崎骏等）						
23	游戏（psp、任天堂、三国无双、怪物猎人等）						
24	时尚（校服、品牌服装、化妆等）						
25	领土问题						
26	首相·政治家						
27	中日文化交流·学生交流						
28	和平宪法						
29	右翼势力						
30	日本的历史认识						
31	日本人的礼节						
32	日本人的工作态度						
33	日本男性						
34	日本女性						
35	男尊女卑、大男子主义						
36	武士道（武士、武士刀、切腹自尽等）						
37	传统文化（和服、歌舞伎、茶道、相扑等）						
38	日本文学（《源氏物语》、夏目漱石、川端康成、村上春树等）						
39	日本的历史（甲午中日战争前）						
40	抗日战争、甲午中日战争						
41	科技（汽车、电子产品、照相机、手表等）						
42	经济（发达国家、高楼大厦等）						
43	你对日本的整体印象怎么样？						

4

通过以下途径，你获取的与日本相关的信息量有多少？

请在符合你的想法的选项上打“✓”。

		非常少	少	相对较少	相对较多	多	非常多
1	中国的报纸						
2	中国的电视新闻报道						
3	中国的电视娱乐节目（《天天向上》、《东京印象》等）						
4	中国的网络新闻（新浪、搜狐、百度等）						
5	中国的网络交流平台（微信、微博、QQ、论坛、贴吧等）						
6	中国的在线视频网站（土豆网、优酷网、爱奇艺、芒果网等）						
7	中国的网络下载平台（人人影视、猪猪、光合社、日菁等）						
8	中国的电影						
9	中国的电视剧						
10	中国的文学作品						
11	中国的书籍、杂志（学校的教科书除外）						
12	初中、高中的历史课、历史教科书						
13	初中、高中的各个科目的学习、教科书（历史除外）						
14	大学的日语课						
15	日本的报纸						
16	日本的电视新闻报道						
17	日本的电视娱乐节目						
18	日本的网络新闻（日文雅虎等）						
19	日本的网络交流平台（Twitter、Line 等）						
20	日本电影						
21	日本的电视剧						
22	日本的文学作品						
23	日本的书籍、杂志						
24	日本的流行音乐						
25	日本的动漫、漫画						
26	日本的游戏						
27	家人的影响和教育（父母、爷爷奶奶、外公外婆等）						
28	在日本的亲身经历（旅游、留学等）						
29	在中国和日本人的接触（日籍教师、日本朋友等）						
30	有在日本（旅游、留学、生活等）的亲身经历的人、对日本很了解的人						
31	其他（ ）						

以上是调查问卷的全部内容。谢谢您的合作！

2.2 選択肢式アンケート質問紙（日本語）

1

調査許可書

「対日イメージ」に関するアンケート調査をご回答いただきありがとうございます。

このアンケート調査はあなたの生年月日、学年などの個人情報をお聞きしますが、研究以外の目的には決して使いません。また、結果は全て統計的に処理致しますので、個人の回答をそのまま使用することもしません。

以上ご同意の上、ご署名よろしくお願ひします。

____年 ____月 ____日 署名：_____

なお、本調査に関してご意見やご質問がございましたら、下記までご連絡ください。

北海道大学教育学院大学院博士課程 文慧超

E-mail: aurorawhc@gmail.com

2

個人情報

生年月日 _____年 ____月 ____日 性別 男 ____ / 女 ____

所属学校 _____ 学年 _____

日本語学習歴 無・有り（ ____年 ____ヶ月） 日本語能力試験 ____級合格

渡日経験 無・有り（観光・留学・その他 _____）

3

下記の日本に関する事柄はあなたにどのような対日イメージを与えていますか。

あなたの考えに合っているものを選んで“✓”を入れてください。

		非常に悪いイメージ	悪いイメージ	どちらかと言えば悪いイメージ	どちらかと言えば良いイメージ	良いイメージ	非常に良いイメージ
1	日本の国旗（日章旗）						
2	日本の象徴（桜、富士山等）						
3	自然環境（地震、火山、津波等）						
4	地理環境（四面環海、島国、日本地図等）						
5	観光（東京タワー、北海道、温泉等）						
6	日本料理（寿司、刺身、抹茶、たこ焼き等）						
7	日本語（仮名、かわいい、の等）						
8	原発事故						
9	生活環境（一戸建て、自販機、畳、空気・水の質等）						
10	社会環境（街の衛生面、自然環境を守る意識、交通秩序等）						
11	社会問題						
12	動物保護問題（捕鯨問題等）						
13	日中関係						
14	反日感情（反日デモ、日本製品不買運動、小日本等）						
15	中国のテレビドラマ、映画、テレビ番組の中の日本・日本人（『愛情公寓』の関谷、映画『狙った恋の落とし方』など）						
16	中国の抗日テレビドラマ（『亮剣』、『雪豹』等）						
17	中国の抗日映画（『地道戦』、『举起手来』、『南京！南京！』、『金陵十三の簪』等）						
18	日本のテレビドラマ・映画（『大奥』、『東京ラブストーリー』、『のだめカンタービレ』、『おくりびと』等）						
19	俳優（山下智久、上野樹里、長澤まさみ、木村拓哉等）						
20	歌手（AKB48、倉木麻衣、小田和正、嵐等）						
21	日本のアダルトビデオ（AV、蒼井そら、小澤マリア等）						
22	アニメ・漫画（コナン、ドラえもん、ブリーチ、宮崎駿等）						
23	ゲーム（PSP、任天堂、三国無双、モンスターハンター等）						
24	ファッション（学校の制服、ブランド洋服、メイク等）						
25	領土問題						
26	首相・政治家						
27	中日文化交流・学生交流						
28	平和憲法						
29	右翼勢力						
30	日本の歴史認識						
31	日本人の礼節						
32	日本人の仕事に対する態度						
33	日本人男性						
34	日本人女性						
35	男尊女卑、亭主関白						
36	武士道（日本刀、武士、切腹等）						
37	伝統文化（和服、歌舞伎、茶道、相撲等）						
38	日本文学（『源氏物語』、夏目漱石、川端康成、村上春樹等）						
39	日本の歴史（日清戦争以前）						
40	日中戦争・日清戦争						
41	科学技術（自動車、電化製品、カメラ、腕時計等）						
42	経済（先進国、高層ビル等）						
43	あなたの日本に対する全体的なイメージはどうですか。						

4

以下の情報源から、あなたは日本に関する情報をどれくらい得ていますか。

あなたの考えに合っているものを選んで“✓”を入れてください。

		非常に少ない	少ない	どちらかと言えば少ない	どちらかと言えば多い	多い	非常に多い
1	中国の新聞						
2	中国のテレビニュース						
3	中国のバラエティ番組（『天天向上』、『東京印象』など）						
4	中国のインターネットニュース（新浪、搜狐、百度等）						
5	中国のSNS・BBS（微信、微博、QQ、論壇、貼バ等）						
6	中国の動画サイト（土豆網、優酷網、愛奇芸、芒果網等）						
7	中国のダウンロードサイト（人人影視、豚豚、光合社、日菁等）						
8	中国の映画						
9	中国のテレビドラマ						
10	中国の文学作品						
11	中国の書籍、雑誌（教科書以外）						
12	中学高校の歴史の授業、教科書						
13	中学高校の各科目の授業、教科書（歴史以外）						
14	大学の日本語の授業						
15	日本の新聞						
16	日本のテレビニュース						
17	日本のバラエティ番組						
18	日本のインターネットニュース（ヤフーなど）						
19	日本のSNS・BBS（ツイッター、ライン等）						
20	日本の映画						
21	日本のテレビドラマ						
22	日本の文学作品						
23	日本の書籍、雑誌						
24	日本のポップミュージック						
25	日本のアニメ・漫画						
26	日本のゲーム						
27	家庭内の影響・教育（親、祖母、祖父など）						
28	日本での直接経験（旅行、留学など）						
29	中国での日本人との接触（日本人日本語教師、日本人の友達など）						
30	直接経験（旅行、語学研修、居住等）した人・日本に詳しい人						
31	その他（ ）						

以上で質問は終わりです。ご協力どうもありがとうございます。

注：上記の14番の項目は大学生のみに尋ねた。

付録3【研究3】中国の若者の対日イメージの形成過程

3.1 データの分析手順の例

手順を示すために、表中では「テキスト」には原文の中国語を日本語に訳したが、実際の分析では、中国語原文のまま使用した。

番号	発話者	テキスト	(1) 生成コーディング	(2) カテゴリー化	(3) 概念キーワード
1	聞き手	まず、日本についての印象を教えてください。			
2	相さん	どちらかといえばよい印象を持っていると思う。 まずは、日本は経済大国だから。 また、生活の中で日本のものに触れるチャンスも少なくない。 例えば、いここは日本に留学しているから、いここから日本についてのことを聞いたりする。 そして、普段使っている日用品や電気製品の中で日本のメーカーもある。 でも、日本のマイナス面に関するニュースも見たりするから、日本に対しては、アンビバレントな印象を持っていると思う。いい面もあれば、悪い面もある。でも、全体的に見れば、私やはり日本に対してはいい印象を持っていると思う。	ポジティブな感想 経済の発展 生活の中にある先進国日本の製品 日本と接点がある親戚、 日本に関するネガティブな情報 心の中に相反する気持ち 好きな気持ちが勝っている	日常の日本製品接触（原因） 身近な親しい人からの直接の意見(原因) 偏ったニュース報道(原因) イメージの決定（結果）	日本製品接触が生み出された対日親近感 経済面における先進性 直接接触を介した間接接触によって入手した情報との親近感 消費行動による情報入手 日本に関するニュースによる否定的情報の獲得 二律背反の対日イメージ 肯定的イメージの優位性
3	聞き手	つまり、良くないイメージより、いいイメージのほうが多いということだね。先ほど、日本の経済についてお話ししたんだけど、これについては、どうやって知ったんですか。相さんのご専攻は国際貿易ですね。それとは関係ありますか。			
4	相さん	経済面においては、中国と日本はお互いに補い合っていると思う。例えば、中国の原材料や半製品や農産品などが日本に輸出されている。一方、日本では、それらが加工され、工業製品として中国で販売されている。だから、私は国際貿易を専攻しているから、専門的に言えば、中日間の経済関係は緊密そして相互依存的だと言えるでしょう。 でも、それと同時に、中日間における「政冷経熱」（注：政治分野では冷却しているが、経済分野では過熱している）という現象が気になる。実は、中日間の政治関係はあまり良くないと思う。それは少し経済にも影響していると思うけど、それほど大きな影響がないだろう。なぜかというと、私たちは日本政府の歴史に対する態度を信じなくてもいいけど、日本の科学技術が私たちの日常生活に恩恵をもたらした力を信じなくてはいけないからだ。	日中における経済の緊密な関係 個人の有する専門知識 中国の一次産業製品 日本製品 密接で持ちつもたれつ 政治的にはよくないが経済的にはうまくいっている 政府の歴史に対する態度への否定的評価 科学技術に感謝	日中の輸出入の内情 専門知識による日中間の経済関係に対する解釈 歴史解釈の問題 歴史面での日本政府への不信任感、 日本の科学技術への肯定的評価 現在の生活の優先的選択（結果）	日中両国の経済面での相互依存的関係 専門知識を通してできた日中両国の経済関係に対する理解の必然性 政治よりも大きい経済の重要性 日本政府に対する不信任感 日本の科学技術に対する信頼感 科学技術の発展のもたらした生活水準の改善への感謝する心情

5	聞き手	日本の経済に詳しいですね。経済についてのことは、どう知ったのですか。			
6	相さん	大学の授業で、アメリカやEUが中国との貿易以外、中日間における貿易も重要な部分です。 それ以外、インターネットやテレビのニュース報道も一つの情報源です。	教育、 日本と中国の貿易 マス・メディア、マルチメディア	専門分野による情報接触 情報源の多様化	個人の専門分野による日本に関する知識の獲得 新メディア（インターネット）と旧メディア（テレビ）の双方の利用
7	聞き手	じゃ、相さんの関心を持っている部分は、経済に関するニュースですか、あるいは、日本に関する経済のニュースですか。			
8	相さん	やはりまずは、経済に関するニュースですね。 そのうち、日本に関するニュースがたくさんある。やはり隣国だから。	ニュースの量 関係の親密さ	日中間における距離の関係 多数の経済ニュース	日中間の距離的な親密性 中国のメディアの中での日本経済に関する報道の豊富性 日本経済に関する情報入手の偶然性
9	聞き手	特に日本についてのニュースに注目することはないですか。			
10	相さん	経済に関する以外はほとんどないですね。たまにあるといっても、マイナス面のものが多かったです。 例えば、安倍さんはリー・クアンユー氏の国葬で居眠りしていたとか、内閣の議員の間けんかしていたとかですね。「新聞聯播」（注：中国中央テレビ局のニュース番組ネットニュース）以外は、ほとんどないですね。でも、「新聞聯播」で放送されるのはマイナス面の報道がほとんどです。	特定な記事に目を向く 中国中央テレビ局のニュース番組ネットニュース ネガティブ報道	専門記事の選択 特定の情報源と情報の性質の関係	自分の専門分野に関する知識の選択 情報入手 ニュース情報源と否定的情報の関係性
11	聞き手	じゃ、こうしたニュースどうやって知ったんですか。			
12	相さん	主にインターネットですね。例えば、テンセントニュースやwechatのモーメント（注：LINEのタイムラインみたいな機能）やなどで色々なニュースがどんどん広げられているから、すごく目立つから、やはり見てみたいです。もちろん、マイナス面の報道はほとんどです。	主要な情報源 批判的な言説	新メディアの利用 無意識的に批判的な言論への注目	主要な情報入手手段となる新メディア 新メディアの利便性 新メディアによる日本への批判的言論の伝播の迅速性と広範性 批判的言論への無意識的な注目
13	聞き手	このようなニュースもわざわざ検索しないですね。			
14	相さん	そう、ちょうど出てきたらクリックして読むくらいです。			
15	聞き手	こうしたマイナス面の報道に対して、相さんはどう思いますか。			
16	相さん	報道されたことは実際にあったことに違いないと思う。 靖国神社参拝とか、政府の歴史認識とか、安倍さんの居眠りとか、こういうのはすべて日本という国についてのマイナス面の報道だと思う。マイナス面の報道であっても、報道さえされれば、きっとその背後に理由があると思う。 やはり日本側はきっと何か間違ったことをしたでしょう。	報道されたことに対する信頼的態度 否定的報道の背後ある理由の確信 日本側の責任であるという考え	情報の信憑性に対する態度 報道の内容の是非とその出来事の原因帰属の関係性	情報の真実性に対する確信的理解 報道された情報の是非に基づくその原因帰属の判断
17	聞き手	マイナス面の報道に対して、その信憑性を疑うことがありますか。			

18	相さん	あまりにも事実を離れるような文章でなければ、疑わない。 中国のニュース報道のほとんどは、真実をそのままみんなに伝えるだけです。 そして、文字だけではなく、写真もつくことも多い。写真を実際に見れば、そういった報道が間違いなく事実だってわかる。もし文字だけだったら疑うかもしれない。例えば、さっき話した靖国神社参拝や、安倍さんの居眠りや、憲法改正など、文字だけではなく、写真も全部見れた。そして、動画もあった。だから、それらは間違いなく、全部事実です。	確信 信憑性 メディア	複数メディア（文字、写真、動画）の補完性、真実と事実の違い メディアリテラシーの主要性	インターネット上の異なる（文字、写真、動画）メディアコンテンツの利用による情報の信憑性の確認 メディア・リテラシーの重要性
19	聞き手	つまり、色々な角度からその信憑性を判断するんですね。			
20	相さん	そうです。それに、中国でもたった一つのニュースサイトやテレビ局で報道されたのではなく、いろんなメディアが違う角度から報道したからね。	異なるメディアによる同一情報に対する報道	多角的視点による情報の信憑性の確認	多様な情報源による同一内容の情報の信憑性の確認
21	聞き手	同じニュースだけど、違うニュースサイトなどによって違う角度から報道されたこともありますね。何か具体例がありますか。			
22	相さん	例えば、安倍さん居眠りのニュースですけど、「テンセントニュース」というニュースサイトで安倍さんだけが撮られた大きい写真が載せられた。写真の中で、安倍さんは頭が下げて目が閉じていた。それを見て安倍さんが確かに居眠りしていたってわかった。 また、香港フェニックスも同じ事件を報じた。写真の中には居眠りしていた安倍さんだけではなくて、他の国の首相がまじめに聞いていた様子もあった。 記事の内容から言えば、テンセントニュースのほうはすごく中立的でただ事実を述べただけの感じだったが、香港フェニックスのほうは明らかに皮肉的な口調で報じた。いずれにしても、安倍さん居眠りということは確かな事実ですね。眠たいだろうってわかるけど、なくなった人に対してあまりに失礼なことだから、良くないと思う。	同一情報に対する異なる情報源の事実呈示の相違、	複数メディアによる情報解釈の角度の違い	異なる情報源の同一内容の情報に対する描写及び解釈の相違
23	聞き手	安倍さんは日本の首相だから、安倍さんに関する報道は相さんの日本に対するイメージには影響していますか。日本という国や政府あるいは、普通の国民を安倍さんの行動と関連づけて理解しますか。	代表的人物の行動、その国全体のイメージ		
24	相さん	もちろん。簡単な例で言えば、あるクラスのクラス長はクラスの代表人物ですね。もしも彼でもカンニングをしちゃったら、やはりそのクラスの全員もあまり信頼されなくなるかもしれないね。同じように、安倍さんはこんなに基本的な礼儀さえ知らないから、じゃ、彼はどうやって自分の国と政府のイメージをよくさせるのだろう。	代表者、構成員、不正行為、不信任、最低限の対人行為	民主主義による代表の選出 民意のありか、	一個人による構成員の総意の代表性 国家リーダー像先行論
25	聞き手	じゃ、これは日本政府を安倍さんの行動と関連づけて理解してる例ですね。普通の日本国民に対してどう思うでしょうか。			

26	相さん	ぼくの知っているところでは、普通の日本人はすごく礼儀正しいです。そして、自然環境を守る意識もすごく高いです。中国人と比べてすごく意識が高い民族だと思う。 でも、多かれ少なかれ、安倍さんの行動で日本国民に対して理解もちょっと疑問に思うようになったような気がする。こんなに意識が高い日本人たちはこんな失礼なこともしちゃった首相を選んだからね。	個人的経験、理念をよく理解している、 恥ずかしい代表者の選択 認識間違い	メディアの情報の影響の大きさ 比較思考の働き 首相を国民代表する理解 認知的不協和	日本人の民度の高さに対する認識 自国との比較思考 個人的な印象を凌駕するメディアによる影響 日本国民に対するあんな人を「選んじやった」感 認知的不協和による認識の揺れ
27	聞き手	じゃ、やはり日本人に対するイメージにマイナスな影響があるね。			
28	相さん	そう。ほんのちょっとだけだけど。			
29	聞き手	疑う			
30	相さん	そう			
31	聞き手	日本人は意識が高いという点については、どのように知ったんですか。			
32	相さん	例えば、いとは日本に留学しているから、よく彼女から聞いたりする。 また、ネットでも日本人の意識の高さについての記事をよく読んでいます。日本人だけではなくて、アメリカ人やヨーロッパ人は自然環境を守る意識が高いとか、教育レベルが高いとかも知っている。そういった面中国より少なくとも10年以上進んでいると思う。	親戚からの情報 ネットからの情報 自国より優れている先進国	身近な親しい人からの直接の意見 新メディアの内容の多様性 比較による高評価（結果）	他者からの情報入手 新メディアによる多角的情報の入手 自国との比較思考
33	聞き手	じゃ、やはりこういった先進国の国民意識の高さに興味があるんですか。			
34	相さん	そうです。やはり中国は人口が多いから、国民意識の高さが欠けていると、国の発展には良くないと思って、先進国に見習うべき点が多いですね。	自国の欠点に対する批判的な態度 先進国に対する高評価	自国に対する反省的な認識 自国に対する期待 先進国に対する謙虚な態度	自国に対する期待が生み出された反省的思考 見習うべき日本の先進性
35	聞き手	自分で積極的に調べたりしますか。			
36	相さん	いいえ、でも、ネットでこういった記事があったら、必ずクリックして詳しく読む。	ネット情報を入手する経緯	情報入手の必然性 情報の多さ 日本に対する好奇心	好奇心による情報入手の偶然性 情報入手の偶然性から必然性への転換
37	聞き手	じゃ、相さんはこういった内容の記事に注目しているんですね。			
38	相さん	そうです。			
39	聞き手	先ほど、日本製品についてのお話をしましたね。日常生活の中で、日本製品に接するチャンスがありますか。			
40	相さん	あります。例えば、クラスメイトは、日本のゲームが好きな人がいる。日本のゲームの画質やデザインが中国よりずっとよくできている。細かいところまでよく工夫をしているんだね。でも、中国のゲームはやはりどうやって儲かるかを重視している。 そして、日本の消せるペンも買ったことがある。中国のよりちょっと高いけど、品質は日本のほうがずっと優れている。	友人の話による肯定的情報 日本製品に対する肯定的評価 日本製と中国製の比較	身近な親しい人からの直接の意見 日本製品接触によって形成された比較思考 比較による高評価	他者からの情報入手 多様な情報源の利用 自国との比較思考 使用体験に基づいた日本製品に対する肯定的認識

		それと、日本の自動車ですね。品質いいし、値段も高くないし、国産より丈夫ですし。			
41	聞き手	日本製品を使うことで、日本人に対してもっと理解できたということがありますか。	日本製品と日本人との関連性の確認		
42	相さん	あります。例えば、日本製品を通して、日本の国民の仕事に対する態度を理解できた。実は、中国には偽物が多いですから、たまに信頼できないけど、日本製品なら、もっと信頼できる。実際に使っている日本製品からもその品質の良さを実感できる。それを通して日本人は仕事に対するまじめな態度も理解できた。 中国では、「適当でいい」って良く耳をするんですね。この細部に対する態度は中国製品と日本製品に差が出る理由じゃないか。	日本製品と日本人と関連させて考える 中国製に対する不信感 日本製に対する信頼感	日本製品と日本人の関連性 中国製に対する不信感 日本製に対する信頼感	製品の品質による日本人の国民性に対する認識の深化 「適当な」中国製と「真面目な」日本製という評価 日本製品への信頼感
43	聞き手	つまり。日本人の仕事に対する態度は、日本製品を使って感心したことですね。	日本製品と日本人との関連性の確認		
44	相さん	そうですね。	肯定的な回答		
45	聞き手	その他に、何か日本人のまじめな態度を知る手段がありますか。			
46	相さん	ニュースで分かったことはやはり日本の車には何か問題があったっていうマイナス面の報道のほうが多いですから、日本製品の良さについては、やはり日本製品を使った周りの人から聞いた話のほうが多いです。	マイナス面のニュース報道 周囲の人からの日本製品に関する情報	情報源の異同による同一情報に対する認識の違い	異なる情報源の同一情報に対する評価の不一致 ニュース報道の否定的傾向 周囲の言論の肯定的傾向
47	聞き手	ほかに、何か日本についてのイメージがありますか。			
48	相さん	うんん... プラス面といえば、科学技術、経済発展、教育レベル、民族精神かな。	日本における優れている面	日本に対するイメージの多様化（結果）	多様化している肯定的対日イメージ
49	聞き手	民族精神については、どうやって知ったのですか。			
50	相さん	マイナス面のニュース報道以外、日本人がコミュニケーションするとき、すごく礼儀正しいということもテレビを見て分かったことです。彼らは話しているときあるいは謝る時に深くお辞儀をしますね。	プラスのイメージ	テレビによる情報入手	テレビを通じた積極的情報発見
51	聞き手	じゃ、こういうのはどのテレビ番組を通して分かったんですか。			
52	相さん	抗日ドラマだよ。そして、彼らは辛抱強いですね。また、冷静に物事を考えます。例えば、彼らは白兵戦をするとき、まず銃弾を全部捨てる。中国人の考え方では、もし銃弾が入っている銃を手に入れたら、必ずそれを使って敵と戦いますね。でも、日本人はそういったずるいことをしないです。 そこから彼らの民族精神がわかりますね。	抗日ドラマから見られるに日本人の民族精神	固定観念に対する挑戦 情報理解側の能動的な働きによるイメージ形成の実現	固定観念に対する挑戦 抗日ドラマによる日本人の民族精神への認識 情報受け手の能動的な情報処理によるイメージ形成
53	聞き手	これは主に抗日ドラマを通して分かったんですか。			
54	相さん	歴史教科書にも書かれている。戦後一時期日中関係はすごくよかった。例えば、日本の専門家は中国の経済発展を助けにきてくれたことがある。そして、日本国民も中国に対して親しく感じていた。 しかし、今の日本政府（中国に対する態度）は当時と比べてやはり差が	主要な情報源としての歴史教科書 ハニームーン期の日中関係 現在と当時の日中関係の比較	歴史教科書が提供している情報に対する能動的な理解 経済面における見習うべき日本	過去の友好的日中関係の認識 現在の日本政府に対する批判的見方 先進国モデルとしての日本 教科書に基づく日本の発展に対する

		あるね。でも、人口が少なく、国土面積が小さく、資源が少ない日本は、アジア最も発展している国ですね。日本はよく西洋の先進的な思想や技術を見習い、今の先進国になったわけです。そして、中国の経済学者によれば、今の中国経済はまさに40年ぐらい前の日本ですね。バブルや偽物や改革などいろんな我々直面しないといけない問題がある。こういった時期に、日本の経験をよく見習わなければならないと思います。以上は私の日本に対するプラス面のイメージですね。でも、もちろん抗日ドラマや歴史教科書には、マイナス面の内容もある。	日本の経済発展の経験 中国の見本としての日本経済発展 抗日ドラマ・歴史教科書にマイナス面の内容の存在	自国との比較による日本に対する高評価鏡としての存在の日本	歴史廻行的理解 抗日ドラマにある日本（人）像の両面性
55	聞き手	じゃ、抗日ドラマと歴史教科書は、あなたの日中戦争に対する認識どう影響しているのですか。			
56	相さん	まず、抗日ドラマについてですけど、今は大学生ですけど、中学校時代の抗日ドラマはまだ客観的に当時の史実を再現したものが多かったと思います。中国と日本は悪戦苦闘して、最終的に勝利を迎え、日本は降伏した。こうのように、「全国人民がいろんな苦難を経験しながら協力して、侵略者を中国から追い出した」というストーリーはメンでした。これはすごく良かったと思う。でも、それらのドラマを通して、日本軍国主義はどれほど残酷なのもある程度わかったから、多かれ少なかれ、日本に対するイメージにマイナスの影響を与えていると思う。でも、ここ数年の抗日ドラマは前と違って、「素手で日本鬼子（日本兵のこと）の体を両断したりして、一人で一個連隊の日本鬼子を全部殺したとか、こうした荒唐無稽なアクションが数多く出てきた。こうしたドラマは当初の抗日ドラマの意義が失っているから、このドラマに対する関心もなくなっている。このようなドラマは出てきたからこそ、日本軍国主義に対するマイナスのイメージまだあると思うけど、前よりは薄らいできた。時間の経つにつれて、恨みも忘れられてきている。また、世界平和のために、過去の恨みを許してあげるべきだと思う。一方、ドラマはどのように史実を再現するかには関係なく、侵略戦争は確かにあったことです。戦争がもたらした物質的と精神的な損失は、今の世帯にも影響を与えている。もちろん、こういった影響も少しずつ薄らいでいくだろう。許してあげるべきだけど、忘れてはいけない。	史実を再現している中学校時代のドラマ 対日イメージへの負の影響を導く中学校時代のドラマ 荒唐無稽なアクションになった最近のドラマ マイナスのイメージの弱化 歴史に対する態度	時代に伴うドラマの性質の変化 ドラマの変化とイメージの変化の関係 真実への要求 客観的に歴史を認識する態度	史実を再現するドラマによる中学校時代の否定的イメージ 史実を再現するドラマから史実が脚色されたドラマへの転換 抗日ドラマの変化がもたらした否定的イメージの弱化 情報に対する峻別的思考 許してあげるべき過去と忘れてはいけない過去
57	聞き手	やはり抗日ドラマはあなたの日本に対するイメージに影響を与えていますね。			
58	相さん	そうですね。かなり大きな影響ですね。次は、歴史教科書についてですけど、小学校時代から中学校時代、高校時代まで、日本侵略者の色々な残虐な行為を教科書にある写真や先生が作ったpptで勉強した。	学校教育を一貫する歴史教育に与えられている残虐な日本侵略者のイメージ	子供の成長を貫いている歴史教育 固定化された日本侵略に関するイメージ 学校教育という情報源	異なる学校段階における日中戦争の教育内容の不変性 体系的歴史教育によって形成された残虐な日本侵略者のイメージ イメージ形成に対する歴史教育の影

					響の両面性 教育内容の重複によるイメージ強化
59	聞き手	抗日ドラマの影響が結構大きいですね。やはりマイナスの印象ですか。			
60	相さん	そうです。マイナスの印象以外、日本人の人間性も見える。日本兵も命令に従って戦場に來たわけですね。かれらも帰国したいし、きっと死にたくないし、向こうには待っている家族もいるだろう。仕方がなく上司の命令に従うこともあるだろう。 もちろん、虐殺を趣味としてやっている悪い人もいた。こういう人は極悪非道です。 でも、要するに、戦争は両国の国民に苦難をもたらしている。	日本人の苦痛から見た日本人の人間性 日本人の極悪非道の非人間的な一面 両国民の苦難という戦争に対する理解	日本人の人間性に対する正反対の理解 両者の立場に立つ戦争に対する理解	抗日ドラマによる日本人の人間性への相対的理解 戦争に対する普通の日本国民の止むを得ない感 日本兵の行為の「極悪非道」性 他者の立場に立つ思考 「戦争＝両国の苦難」論
61	聞き手	抗日ドラマの中で、誇張して表現される部分と真実そのまま呈示してくれる部分はそれぞれのぐらい占めていると思いますか。			
62	相さん	50%ずつかな。 ぼくはすごくおもしろい抗日ドラマスタイルをまとめたんだ。敵がどれくらいいるとは関係なく、もしその人が共産党員であれば、必ず最後まで生きてる。死んだのは必ず脇役か悪い人です。そして、あらゆる武器に負けず、日本兵を倒せたり、普通の人民も助けにきてくれたりするから、みんなで日本鬼子を包囲討伐できて、勝利を迎えた。いい嫁をもらって、出世してお金持ちになった。こんなスタイルです。だから、こういった誇張な表現が用いられたドラマを見た時、まずはそれは冗談じゃないかって思った。 でも、監督はこういった手法を使って日本軍の邪悪と中国人の頑強と超人的な勇気を表現したがついていることがわかる。ただちょっとやりすぎですが、ある程度理解できる。侵略されたという事実があって、我々は努力と重い代価で勝利を迎えることができたわけだから。これは監督が使った手法にすぎない。深く考える必要がない。 偽りのものはあると思う。一人でそんなにたくさんの鬼子を殺したわけではないですね。そうすると、なんで十年もかかったの？十日間で戦争を終わらせたでしょう。多分それも我々が自信がないことを反映しているだろう。当時のことをすべてありのままを再現させることができないけど、80%以上を客観的に呈示してくれるだろう。たとえば、どの戦が負けたか、どの戦が勝ったか、どうやって勝ったかなど。このようなドラマだったら、もっと真実を反映できるから、いいと思う。	誇張と真実が同時に存在する 抗日ドラマ 監督の用いる誇張手法への解釈 いいドラマの例を詳しくして呈示する	抗日ドラマを客観的に評価しようという意識 抗日ドラマにおける誇張手法と事実呈示の矛盾 抗日ドラマの在り方	抗日ドラマを客観的に評価する意識 抗日ドラマでの滑稽性と史実再現性の併存する実態 忠実に史実を再現する理想的なドラマ像への期待
63	聞き手	つまり、もっと真実が再現されるドラマを望ましいですね。			
64	相さん	そうそうそう。そうしたら、民衆にももっと認めてくれますね。	大衆の抗日ドラマに対する肯定的評価の可能になる条件	受け入れ側への配慮	抗日ドラマの史実再現性につながるそれに対する大衆の肯定的態度
65	聞き手	抗日戦争に対してどう思いますか。			

66	相さん	これは歴史教科書で大きな割合を占めている。10年間ですけど、この10年間に對する記述は歴史上の他の10年間よりずっと詳しくて意味深いです。 この歴史は中国の恥です。そして、世界中すべてファシズムの侵略に遭った人民の恥です。 銘記すべきだ。 戦争があったからこそ、現在の平和の生活を大事にすべき。 再びそのような悲惨な戦争が起ることを避けるべき。また起こったら、苦難を負うのは私たちだから、でも正義なるほうは必ず勝つ。 抗日戦争が私に与える影響といえば、後れるとなぐられるという。強くなるために色々努力しないといけない。強い人になっても弱い人いじめでは行けない。弱い人を助けながらともに強くなるべき。国の発展や人間の発展から見て非常に大事だ。 自分は優れていなくても、社会へのサービス精神を持ってないといけない。国のためになにかを貢献すべき。だから、抗日戦争のことを勉強して自分の民族に対する思いも強く感じるようになった。昔侵略されて裂け目があつた国だから、もっともっとよく団結して、中華民族の偉大な復興のために力を尽くす。	歴史教科書における詳細な日中戦争についての記述 国辱の日中戦争 覚えるべき日中戦争 戦争と平和の関係 悲惨な戦争の再発防止 日中戦争を銘記する必要性 強者と弱者との助け合い 歴史の勉強につなぐ自国に対する認識 自己実現 国に貢献しようという愛国心	体系的歴史教育が提供する日中戦争に関する体系的知識 日中戦争＝国辱 日中戦争を銘記する重要性 平和の重要性に対する認識 戦争防止の重要性 強者と弱者における関係性 歴史教育による自国認識の実現 自己責任 愛国心	体系的歴史教育 体系的日中戦争の知識 日中戦争に対する国辱の認識 戦争の教訓性に基づいた平和の重要性への理解 「戦争＝両国の苦難」論 強者と弱者にあるべき共同発展の関係の重要性 歴史に対する反省的思考 歴史の鏡効果による自国への再認識 自国の発展の力になるための自己実現への希望
67	聞き手	じゃ、こういう自分の感想はどうやって出来たんですか。			
68	相さん	まずは、先生が客観的に歴史を認識するという指導があつて、それに自分のまとめと考えを加えた。 先生の教えたことはやっぱり教科書の内容のほうが多い。多くの感想は自分の理解と思考が必要ですね。	教師の客観的な教え方 自身の知識整理 教師の教えと自我の知識整理の統合 主要な役割としての自分	教授法の客観性 自我の情報処理能動性 知識整理による理解 個人による情報処理の必要性	教師の教授法の客観性 教師からの知識の加工処理 教師の教授内容 情報受け手の主導的情報処理の必要性
69	聞き手	まとめてみたら、日本に対する肯定的なイメージは、主に民度が高いこと、経済、科学技術ですね。じゃ、否定的なイメージは主に戦争とマイナス面のニュース報道ですね。尖閣諸島事件に対してどう思いますか。			
70	相さん	最初はある議員が島に上陸した。その後、中国と何回交渉したが、やはりそれが日本の領土だと主張した。などなど。でも、日本のやったことは尖閣諸島の所有権に影響を与えないと思う。それは中国の固有の領土だから。それは安倍政権の支持を得るための非常に非理性的な政治行動だと思う。 安倍さんは中国人そして日本が侵略したことがある国の気持ちを考えていない。 安倍内閣の利益のために、世論の目をひくことをやったと思う。安倍さんは自分が間違つたって認識していないから、多くの人に傷ついた。こういう人が首相になったのは国の発展に不利を与えると思う。 かれは自分の個人的な考えばかり重視して、多くの民衆の気持ちを配慮していない。	安倍内閣の行為への否定 安倍内閣への不満	日本政府と対日イメージの関係 愛国心がもたらす非理性的な情動 「政府」イコール不満の必然的関連性	歴史を無視する日本政府への否定的認識 原則的な問題に対する強い自己主張 尖閣諸島事件の日本政府の対応に対する情緒的な評価

		実は中国側はしばらくその問題を放置してともに開発するという提案も出したことがある。ですけど、安倍政権は尖閣諸島問題は非常に敏感な問題だと知っているが、でもそういった広い心を持ってないし、こんなピエロみたいな滑稽な行為は絶対に日本に恥をかかせることだ。			
71	聞き手	尖閣諸島問題に対する評価は主に安倍政権に対する評価で、日本あるいは日本国民に対する評価じゃないような気がしますね。			
72	相さん	そうです。実は、多くの報道は日本政府に関する報道ですね。日本民衆に対するマイナスの報道はほとんどないです。逆に日本民衆が尖閣諸島上陸に抗議する報道もあった。日本民衆はおそらく理性的だろうと思う	日本政府に関する報道の偏り 理性的な日本国民	ニュース報道の対象の特定性 報道による日本国民に対する認識の形成	日本に関するニュースの報道対象の 限定性 日本国民は理性的であるという認識 政府と国民を区別する思考
73	聞き手	どうやって尖閣諸島問題について色々知ることができたんですか。			
74	相さん	まず、長く尖閣諸島問題に注目している。また、テレビで評論家の報道です。かれらの話と自分の考えを合わせて今の結論をおろした。ちょうど上陸を公表したとき、支持率の統計期間だったから、それは明らかに支持率と注目度のためですね。	尖閣諸島事件への関心 専門家の評論を参考にする 専門家の評論と自分の考えの結合	(能動的) 興味関心による情報注目の喚起 (受動的) メディアによる情報入手 総合的思考	興味関心による選択的情報注目 旧メディアによって得た専門知識の整理 総合的思考
75	聞き手	じゃ、いろいろな情報を合わせて整理して自分の結論をまとめますね。			
76	相さん	そう。総合的に物事を見ています。	総合的な考え	思考の様式	総合的情報処理
77	聞き手	ほかに、何か日本に対して印象深いことがありますか。	イメージの引き出し		
78	相さん	最近見ていないですけど、前日本のアニメも見たことがあります。見たときには、日本のアニメは中国のよりずっと優れているって強く感じていた。 そういえば、最近中国では日本の一部のアニメは配信が禁止されるようになったよね。これは中国は国産アニメに自信がないからだろう。技術的には、確かに日本のほうがずっと優れている。でも、なぜこの問題に直面しないの？日本のアニメを積極的に配信させることは、まさに中国のアニメ産業が強くなる原動力でしょう。	中国より優れている日本のアニメ 中国アニメのよくない品質	比較による高評価 アニメに対する批判的な考え 中国における国産アニメへの自信の貧乏性	自国との比較思考による日本アニメの長所発見 政府による外国アニメ視聴の規制 中国における国産アニメへの自信の貧乏性 反省的思考
79	聞き手	何のアニメを見ましたか			
80	相さん	ナルト、テガミバチ、ブリーチなど、このようなアニメを見るときは、すごく楽しいからリラックスできる。 クラスメイトの中で、好きな人も結構いる。周りの日本アニメファンも多い。絵のタッチや画質がすごくいいから。	アニメの具体例 周囲にいるアニメファン アニメに対する高評価	他者への高評価 アニメ愛好者 日本アニメの先進性	アニメ視聴 アニメへの肯定的評価 身近にいるアニメ愛好者の話
81	聞き手	じゃ、以上は主に日本のアニメの品質に対するイメージですね。日本のアニメはあなたの日本に対するイメージに影響がありますか。			
82	相さん	あまりないですね。漫画家はやはり仕事をして漫画を書いていると思います。これはやはり科学技術と独創性の力だと思う。だから、かれらの独創力は高い。でも、何本かのアニメで日本に対するイメージが変わることはない。それは偏った見方になっちゃうから。	アニメを書くことは漫画家の仕事である アニメの独創性	画家の独創力 アニメと現実の関連に対する否定的見方	アニメ作者の独創力に対する敬意 アニメと現実を区別する思考

			アニメと現実の関連を否定する		
83	聞き手	つまり、日本のアニメを娯楽として試していますね。他に何かありますか。			
84	相さん	そうです。テレビの旅行番組チャンネルがある。それを通して日本の綺麗な景色を知ることができた。例えば、桜、富士山、温泉などは、日本をアピールする名刺だと思う。うらやましいなあと思ったりする。	旧メディアの情報源 日本を代表する景色の発見 日本に対する羨む気持ち	旧メディアによる情報発見 羨ましい感	旧メディア（テレビの旅行番組）による情報入手 日本の自然美に対する憧れ 自然環境に恵まれた日本人に対する羨ましい感
85	聞き手	日本に行ってみたいですか。			
86	相さん	もちろん、チャンスがあれば、いろんなところへ旅行に行きたいです。日本や韓国やヨーロッパなど家族と一緒にいて見て視野を広げたいです。	海外旅行の希望 視野を広げることに対する期待	先進国への好奇心 自己向上	先進国に対する憧れ 先進国訪問による自己向上への期待
87	聞き手	ほかにありますか。			
88	相さん	日本の生活環境ですね。地震と福島原発事故があったから、かれらの生活環境確かに大変だと思う。やはり環太平洋火山帯にあるから、この国は大変ですね。	よくない生活環境	生活環境の厳しい一面 同情心	自然災害の多い日本に対する同情心
89	聞き手	じゃ、地震とかについては、ニュースで知ったんですか。			
90	相さん	そう。そのとき、原発事故については、中国のテレビニュースやネットニュースでたくさん報道された。主に、事故の原因や後の対処手段などですね。かれらの対処手段は良かったと思う。	ニュースによる原発に関する情報の入手 対処手段に対する高い評価	旧メディアと新メディアの利用 日本の災害処理方法に対する評価	旧メディア（テレビ）と新メディア（インターネット）の総合利用 日本の災害処理方法に対する肯定的評価
91	聞き手	じゃ、あなたの主な日本に関する情報源はなんですか。まとめてみてもいいですか。			
92	相さん	主にネットニュースとテレビニュースです。それから教科書、使っている日本製品の実感もあります。	ネットニュースとテレビニュースという主な情報源 教科書という情報源 日本製品の使用体験	主要な情報源としてのニュース 旧メディア（テレビ）と新メディア（インターネット）の総合利用 教科書という情報源	主要な情報源 旧メディア（テレビ）と新メディア（インターネット）の総合利用によるニュース情報の入手 日本製品の使用体験
93	聞き手	相さんは戦争についてかなり詳しく知っているし、日本についての知識の中でかなり大きな割合を占めているし、それなら、相さんは日本に対するイメージはよくなさそうと思ったけど、先ほど、日本に対する全体的な印象はどちらかといえばよいとお話ししましたね。戦争以外、ほかにプラス面のイメージは種類が多いからですか。			
94	相さん	そうそう。自分の成長につれて、物事に対する思考は教科書などの文字通りではなくなって、自分の理解や評価によって、できるだけ客観的に物事の善し悪しを分析するようになった。小さいころみたいに感情的で	成長による思考の変化 客観的に物事を分析する自分 感情的な子供ごろの自分	成長に伴う思考様式の変化 知識の加工処理	成長に伴う思考様式の変化 教科書の知識に対する加工処理 感情的思考から理性的思考への自己

		はない、客観的、冷静になった 善し悪しに明らかに分けられないとき、善し悪しの程度もよく考える。 やはり完全にいいか悪いかと分けられるものが少ないと思う。	物事の絶対的な良し悪しがないという見方	感情的思考から理性的思考への変化	成長
95	聞き手	じゃ、日本に対する見方だけではなくて、世の中に対する見方が変わっているから、それは日本に対する見方にも影響している。			
96	相さん	そう、その通りです。我々の世帯はやはり小さいころみたいに感情的ではない。客観的に物事を見て冷静に考える人が多いと思う。			
97	聞き手	じゃ、小学、中学、高校、大学の成長過程の中で、日本に対するイメージも変化していますか。			
98	相さん	そう、そうです。			
99	聞き手	じゃ、どのように変化してきていますか。			
100	相さん	幼稚園の時、日本という国の存在も知らなかった。 小学校時代は日本は中国を侵略したことを知った。やはり衝撃を受けて、日本に対する印象はどちらかといえば悪かった。 中学のときももっと腹立った。印象はとても悪かった。 高校の時は、ちょっと落ち着いたけど、やはりどちらと言えば、印象悪かった。 今は、大学生だから、考え方はより客観的です。前みたいな偏った考え方もそんなに持っていない。 やはり戦争は当時の日本軍国主義のせいです。悪かったのは戦犯です。普通の日本国民ではない。	日本を知らない幼児時 小学校に日中戦争を知った時のショック 対日イメージが非常に悪かった中学校時代 高校時の悪かったイメージ 客観的になった対日イメージ 偏ったイメージの減少 日本政府と国民を区別する	未知の幼年期 衝撃によるイメージ変化始まった小学校時代 イメージ悪化する中学校時代 対日感情が穏やかになった高校時代 客観的になった大学時代 成長過程によるイメージ変化 主観から客観への自己呈示 日本政府と国民に対する違う見方	日本を知らない幼稚園時代 日中戦争を知ったショックによる否定的イメージの形成 イメージが悪化する中学校時代 イメージが好転する高校時代 反省的思考による自己認識 学校段階の転換に伴う対日イメージの変化過程 主観的思考から客観的思考への変化 政府と国民を区別する思考
101	聞き手	小学校から中学校までは、日本に対する印象は悪くなったんですね。なぜですか。			
102	相さん	やはり小さいときは洗脳されたからだ。それで日本人あるとき、数えきれない悲惨なことをしてしまったとばかり思っていた。	洗脳 一方的なよくない記憶	学校教育の影響の強さ 一方的な否定的な情報	幼少年期に詰められた日中戦争の知識の強烈な影響 単純化された戦争イメージ
103	聞き手	じゃ、どうやって brainwashing されたのですか。			
104	相さん	例えば、抗日映画、中学の歴史教科書でわかったことで、日本人はなんでこんなにひどいかと思うようになった。そして、小さかったから、日本人がやったそんなに悲惨なことを見て、すごく憤りを感じて、全然落ち着けないほどだった。	抗日映画と中学の歴史教科書を通してわかった日中戦争 控えられなかった気持ち	抗日映画・中学校歴史教科書という情報源 感情的な幼少年期	抗日映画・中学校歴史教科書 日中戦争に関する情報源 日本軍の行為に対する憤慨 感情的な中学校時代
105	聞き手	小学と中学のとき、抗日ドラマを見ていましたか。			
106	相さん	見ていたよ。そのとき、他に日本を知る方法はあまりなかったから、テレビと歴史教育だけだった。	テレビと歴史教育のみの情報源	情報源の欠乏	幼年期の情報源の欠乏
107	聞き手	例えば、小学校時代には、何か印象深いシーンありますか。			

108	相さん	あります。あの時、新学期が始まる前に必ず学校全員で映画館に行って抗日映画を見ることになっていました。そのシーンはその時見た映画のシーンでした。あの日本兵たちは生まれたばかりの赤ちゃんをとうもろこしを引くひきうすの台に置いて、死なせた。そのシーンすごく印象深かった。今でもはっきり覚えている。あまりにも残忍すぎて、赤ちゃんさえ見逃さない。この侵略者たちの残酷さはもう言葉で表現できない。	小学校全員で見る抗日映画 残酷な日本兵 印象深い出来こと	旧メディア（抗日映画）による情報の入手 言語化できない侵略者の残酷な行為 心に刻まれた日本軍の残酷さ 特定の情報による衝撃的な影響	旧メディア（抗日映画）による日中戦争に関する情報の入手 言語化できない侵略者の残酷な行為 衝撃的なシーンの永存性 抗日映画と残酷なイメージの関連性
109	聞き手	そんなに小さかったのに、その残忍な映画を見させられて、学校教育も残忍だと思わないですか。			
110	相さん	そのことはいずれですけどね。実際に起こったことだから、映画はただ事実を私たちに伝わっているだけです。多少誇張な表現を使っても許せる範囲だったら、そう思えないですね。 事実存在さえしていれば、学校はその事実を何らかの形で私たちに伝える義務があると思う。事実を見て私たちどう評価するかは、私たち個人的なことで、自分で考えるべきだと思う。	事実を重視する態度 映画における描写手法 学校の事実を教える義務 本人の事実を解釈する考え力	事実を知る希望 事実に基づく映画表現 事実を伝える教育の重要性 事実解釈の自己責任	事実に忠実な教育への肯定的態度 事実に基づく映画製作という認識 誇張手法を用いる映画表現に対する肯定的態度 事実を知る欲求 事実の伝授という学校に対する要望 事実解釈における主体の能動性
111	聞き手	先生が教えたことは何か影響がありますか。			
112	相さん	先生が授業を教えるとき、消極的なものや個人的な感情はあまりなかったと思うから、比較的に客観的だと思う。個人的な考えがあっても20%以内です。全体的には、唯物論の角度で教えていただいたかな。偏った見方あまりなかった。	先生の客観的な教え方	教師の教授法の客観性	教師の教授法の客観性 教師に対する信頼感
113	聞き手	もし映画とドラマをみなければ、ただ教科書の習ったことだけを通してとしたら、日本に対する印象も悪い可能性がありますか。			
114	相さん	もとても悪いと思う。教科書には写真と意気軒昂な文字がある。いろんな角度から日本の侵略の史実を呈示してくれた。日本はどんなに残忍なのか、我々はどれくらいの命で今の中国になったかとか。この中で、南京大虐殺もあった。今日本人は30万人を殺したのを認めていないが、30万人が死んだのは事実だ。私たちは歴史を通してこの悲惨な歴史の存在を知ることができた。かれらはたしかに日本軍に殺された。二人の日本兵は殺人試合をして、一人105人、一人106人を殺した。殺人で試合をやるって、こんなことができるのは世の中で日本しかないだろう。	否定的イメージ 多角的な事実呈示 残忍な史実 中国の犠牲者 歴史を認めない日本人 歴史教育は悲惨な歴史を知る手段 日本軍の行為の残酷さ	教科書に与えられた否定的イメージ 多角的な史実に関する情報提供 史実の体系的性 感情的評価	歴史教科書による史実に関する多角的情報呈示 体系的歴史教育 否定的イメージを与える史実の具象性 生き生きとした記憶 日本軍の行為に対する憤慨
115	聞き手	これも教科書に書かれていることですか。			
116	相さん	そう。とても印象深いです。これは本を開いて右手で真ん中より下の位置にある記述です。そして、その二人の日本兵が人の頭を持って、地面に挿した写真も載っていた。あのとき先生が教えてくれた歴史のエピソードは今でも目の前に見えるような感じです。それらは実際に存在していることだから、必ず覚える。			生々しい記憶

117	聞き手	教科書の内容は客観的だと思いますか？			
118	相さん	70%は客観的だと思います。人も出版社もこういう事実を述べるとき、必ず自分の考えを加えることがあります。でも20%を超えなければ問題がないと思います。日本との歴史については、繰り返し言うけど、ドラマミタに誇張することはない。教科書は誇張する手法を使わないから、客観的だ。	教科書の大部分は客観的 執筆者による主観的部分	教科書の客観性に対する評価 教科書にあるある程度の主観性	歴史教科書の客観性に対する信念 歴史教科書の執筆者の記述の主観性
119	聞き手	じゃ、中学校から高校まで変化した理由は何ですか。			
120	相さん	いとは日本への留学で、日本を知るチャンスが増えたから、そして、日本製品が私たちの生活に入ってくるにつれて、日本をもっと客観的に見るようになったから。 実は、私たちはある国そしてその国の国民を理解するとき、ある時間帯を区切ってみるのではなく、やはり長期的かつ発展的な見方で見るべきだと思う。	親しい人からの意見 日本製品との接触 自己の物事の見方の変化	情報源との親和性 消費行動による対日イメージの形成 歴史廻行的思考による異文化理解	対日イメージの変化する背景 情報源との親和性による日本知識の増加 日本製品接触による日本への客観的理解 歴史廻行的思考による異文化理解の重要性
121	聞き手	じゃ、高校に入って、学んだ知識が増えたことで、あなたの日本に対するイメージにも影響しているのですか。			
122	相さん	そうです。私たちの成長につれて、情報を手に入れる手段も増えてきているから、日本に対しても多角的に理解できるようになった。歴史だけではなくて、経済や科学技術など多方面に渡っている。それはある人を評価するときと同じように、見た目だけ評価してはいけない。やはり色々な接触やコミュニケーションを通して、その人はどんな人かはわかるようになりますね。 実は、私が今日本に対するイメージもきっと偏った部分があると思う。もっと時間をかけて自分の日本という国を正しく理解すべきだと思う。	成長に伴う増加する情報源 多角的理解 多方面の日本知識 人を評価する時の例え 自分の偏見 日本を正確に理解することへの期待	情報源の多様化（原因） 理解の多角化 日本知識の多様化 反省的思考 アナロジー的思考 自己成長（原因） 自己反省による自己改善への欲求 日本を正しく理解する意欲	時代の変遷に伴う情報源の多様化による日本知識の多様化 反省的思考 例えとしての人間に対する多角的見方 アナロジー思考 日本に対する偏見の見方 自己の対日理解の正確性への期待 自己改善への欲求
123	聞き手	すくなくとも、今はあまりどの部分にはまだ偏っている考えを持っているかは確信できないけど、今は前より進んでいる。そして、もっと日本を理解すべき。それはあなたの今の思うことですね。実は、あなたは自分の対する評価はもっと客観的になってるんですね。			
124	相さん	そう			
125	聞き手	大学に入ってから、日本に対するイメージはよくなったね。その転換点は何ですか。	イメージがよくなったその転換点に対する疑問		
126	相さん	明らかにここは転換点だっていうのはないです。やはり知識の積み重ねだからと思う。少しずつ変わっていくような感じだね。 でも、考えてみたら、完全に転換点がないというわけでもないね。高校の時、日本の首相が靖国神社に参拝したことを知って、すごく腹立った。でも、後でネットで首相は参拝した目的を調べてみた。実はただ参拝するためではなくて、支持率のためという理由もあったことがわかつ	ぼんやりとする対日イメージの転換点 知識量の増加 靖国神社参拝に対する怒り 情報源の能動的利用 認識の変換	思わず知らずの対日イメージの変化 成長に伴う知識量の変化 靖国神社参拝に対する憤慨 能動的情報入手の実現	対日イメージにある無意識の変化 成長に伴う知識量の増加 靖国神社参拝に対する憤慨 情報源の能動的利用 イメージ変化の契機としての認知的不協和

		た。だから、それほどひどいことじゃないんだって思うようになった。日本首相の政治的行為を見下げるべきだけど、日本という国や日本人を敵視してはいけない。	日本首相と日本国民を区別する	認知的不協和 日本首相と国民の相対的關係	イメージの変化する原点 認識の再構築 首相と国民を区別する思考 感情的思考から理性的思考への変化
127	聞き手	ということは、これは印象深いエピソードだね。単純に受け入れるのではなく、能動的に調べてどうしてって問うようになったからですね。これから色々な角度で物事を見ようとするきっかけになったかな			
128	相さん	そう			
129	聞き手	あなたの家族はあなたの日本に対するイメージに影響を与えていますか。	イメージ形成における家族の影響に対する疑問		
130	相さん	ないです。自分の成長につれて、小学のときみたいに親のいう通りに物事を考えることはなくなっている。自分で考えて自分の世界観が形成させている。特に、高校からは自分の世界観、人生観、価値観少しずつ固定化されていて、人のいうことにすぐに影響されることがなく、自分で少しずつ理解して自分のなりの考え方が形成していくような感じですね。親は日本に対して特別な見方もないから、ほとんど話し合ったことはないですね。	家族の影響の空白 成長による物事に対する考え方の変化 親の言われた通りにする小学校時代 自分の考えの付け加え 高校から固定化された人生観 日本を話題にしない親	成長による思考様式の変化 親の影響が大きい小学校時代 認識形成に働きかける自分の能動性 人生観が固定された高校時代 自己の主体性による人生観の形成 自己の能動性 日本に関する教育をしない親	成長に伴う思考様式の変化 親の影響が大きい小学校時代 認識の形成に対する個人の能動的働き 高校時代からの人生観の固定化 日本に関する話題の少ない家庭環境
131	聞き手	小学と中学の時、自分の考え方は親に影響されることはありましたか。			
132	相さん	ありました。そのときはやはりまだ小さかったから、結構偏見を持っていた。抗日ドラマで中国国民が殺されたシーンを見てかなりのショックを受けた。今でも覚えている。だけど、それほどショックを感じていなかった。多分なれだからね。	子供時代の偏見 衝撃的な深い印象 刺激の解消	幼年期の偏見 刺激的な情報の持続性 成長による刺激の弱化	偏見を持った幼年期 衝撃的なシーンの永存性 成長によるショックの記憶の弱化
133	聞き手	そして、そのときの視野は今と違うからね。			
134	相さん	そう			
135	聞き手	一般的に中国人は日本に対してどのような印象を持っていると思いますか。	一般的に中国人は日本に対して持つ①未熟による不理解 ②戦印象の疑問		
136	相さん	それは年齢層によって違うと思う。10・20歳までは、非理性的で日本に対する不理解や怒りがある。だから、こういう年齢層がもっとも利用されやすい。20・30歳までは、比較的に理性的です。生活のストレスで日中関係に注目する暇もない。日本に対する考えは生活には緊密な関係がないことだから。あまり関心ないですね。30・40歳では、特別な思いがないと思う。日本はただ普通の国だと思っている。50歳以上の人だと、経験したことないけど、上の世代から受ける影響が大きいと思うから、とても痛恨するっていう気持ちあるから、絶対忘れない。私たち絶対それほどの恨みの思いはない。もし実際に経験した親戚に実際の経験	年齢層による相違 争に対する思いの強さによる違い	世帯別の対日イメージ 戦争との距離感	世代差 戦争との距離感による世代別の対日イメージの相違

		を教えてくれたら、その影響はきっとすごくすごく大きいと思う。もっと印象深いのはやはり祖父母世代です。実際に経験したから、一生忘れられません。			
--	--	--	--	--	--

3.2 テキストの再文脈化

5.2 の手順を踏んで、中学生・高校生・大学生それぞれ 3 名のインタビューを書き起こし、テキストをコーディングし、概念キーワードを生成して、カテゴリ化を行い、再文脈化した。なお、文中の中国名前は全て変名である。以下全ての対象者に対する再文脈化の結果である。なお、概念キーワードを下線で示している。

3.2.1 中学生

3.2.1.1 若さん

若さんのテキストの再文脈化の結果は以下の通りである。

1) イメージと情報源

若さんは日本に対して無関心な態度を持っており、中立的対日イメージは友人の話・教科書・インターネットという主要な対日情報源を通して形成された。また、興味関心があるため、能動的情報入手によって肯定的対日イメージも形成された。

若さんは抗日ドラマという情報源による対日情報の入手を通して、日中戦争という日本に対する第一イメージを持つようになり、幼年期において「日本人＝悪人像」というイメージが形成されている。また、比較思考⁷²を行って、若さんは中国人に対する英雄のイメージと日本人に対する悪人のイメージという抗日ドラマの中での人物の塑造の相違を発見した。若さんは抗日ドラマが自己の対日イメージ形成に与えた負の影響を語ったが、実は、その対日イメージはぼんやりとした対日イメージである。しかし、抗日ドラマの愛好者である祖父の語りによって、間接的情報入手をし、日中戦争に関する物語の真実性を推測しており、日本鬼子という日本人に対する深い印象が残された。

若さんは学校教育と日中戦争関連知識の無関係を述べた。一方、地理の授業という情報源によって、観光名所・代表的な風物に関する知識や国土面積が小さい国、自然災害が頻発する国などの知識も習得した。また、他者の立場に立つ思考を通して、多くの災害を経験する日本人への同情心を持つようになった。

若さんはインターネットによる偶然的情報入手を通して、南京大虐殺に関する情報と尖閣諸島事件に関する情報、尖閣諸島事件への反日行動に関する情報を得た。若さんは中国の尖閣諸島領有権主張への支持する態度を表しているが、反日行動に対する中立的態度を

⁷² 再文脈化の結果においては、再文脈するための「概念キーワード」を統一させるために、対象者の認知過程における様々な推論や思考に関わる言葉を全て〇〇思考という表現を用いる。

持っている。それは反日行動から見られた中国人の愛国心への肯定的態度と日本車破壊行為への否定的態度に分けられている。

若さんは父親の日本車に対する肯定的評価に基づき、推論的思考に中国との比較思考を加え、自己の日本車に対する肯定的評価を下しており、日本製品の品質に対する肯定的態度を持っている。しかし、愛国のための日本製品を不買する意識は多少ある。日本車破壊行為に対する恐怖感が主な理由で、現在は日本製品の購入への配慮があり、日本車不買の選択をしている。ここでは、日中関係と消費行動の関連性が示された。

2) イメージの形成過程

若さんには成長による対日イメージのわずかな改善が生じている。そのきっかけについては、以下の二点が挙げられた。まず、渡日経験のある親戚を介した間接的情報入手によって、民度の高い日本人というイメージが形成されたからである。また、歴史の授業による必然的情報入手を通して、日本以外の他国による中国侵略を知ったため、中国の非侵略に対する納得感を持つようになり、推測的思考によって、日本人に対する「思ったより悪くない」という推測をしているからである。

若さんは日本に関する話題がほぼない家庭環境で育てられてきたが、日本好きな中学生に対する反感を表した母親の行動から母親の「日本好き＝売国奴」論を知った。この実体験による思考を通じて、若さんは世代別の対日感情の相違を発見し、反日教育を受けた親世代は自分と異なり、否定的対日イメージを持っていることを推測している。若さんは上記の母親の認識に対する二律背反の態度を持っている一方、親世代との比較思考を行い、若者世代の中立的対日イメージを語った。

3.2.1.2 飛さん

飛さんのテキストの再文脈化の結果は以下の通りである。

1) イメージ

飛さんにおいては、多様な情報源によって多様な対日イメージが形成されている。飛さんは娯楽・料理・政治の分野における日本の情報を知っており、全体的には日本に対する中立的イメージを持っている。①中国の雑誌によって日本的美徳を発見している。②中国の文学作品（『藤野先生』）による肯定的対日イメージ（桜）が形成されている。③飛さんは中学校の国語教師による日本文学に関する情報の入手を通して、日本の文学作品に対する好奇心が芽生え、その後、自分でインターネットによる能動的情報入手を行ったが、日本の古典文学の難しさも感じた。このプロセスは受動的情報入手から能動的情報入手へ

のプロセスである。④飛さんは中国との比較思考により、情報源としての日本製品から日本人の職人精神を読み取った一方、中国人の独創力の欠如も感じていた。そのため、中国の科学技術の将来性に対する懸念を抱いているが、同時に中国の科学技術の独創性に対する期待も述べた。⑤飛さんはアニメによる偶然の情報入手で、中国語にない仮名に対する好奇心と知識への欲求が湧いてきた。その後、インターネットによる能動的情報入手を行い、仮名と漢字の相違点の発見ができた。このプロセスには情報入手の偶然性から必然性への転換が生じている。⑥飛さんは、アナロジ的思考と歴史遡行的思考の総合利用により、首相の靖国神社参拝に対して中立的態度を持つことができた。具体的には、日中間の文化的相違と例えとしての中国人が溥儀「傀儡皇帝」に対する敬意が相俟って、首相の靖国神社参拝を日本人自身の戦犯に対する敬意として解釈している。

アニメについては、飛さんはまず中国との比較思考により、「つまらない」中国のアニメに対する否定的評価をしているのに対し、「おもしろい」日本のアニメに対する肯定的評価を下している。また、アニメの虚構性を認識しており、日本のアニメと現実の日本との関連を考えずに、アニメと現実を区別する思考を行なっている。さらに、「アニメより写真・文字」という情報の信憑性に対する認識をしており、写真・文字情報に対する能動的情報処理を行なっている。このプロセスでは、情報確認における個人の役割の重要性を述べている。最後に、飛さんはゲーム・アニメの製作技術に対する興味関心から興味関心と将来の夢の間の緊密な関連性を語り、夢を実現させるための努力をしたいという意欲も表明している。

また、飛さんは中国政府による外国アニメ放送の規制は愛国教育手段であると理解している。中国の愛国教育の在り方は「愛国すべき」という愛国に関する説教的教育であるが、飛さんは「どうして愛国か」という愛国に関する解釈的教育への期待を語っている。また、飛さん自身はインターネットによる能動的情報入手により、外国アニメ放送の規制回避のための手段を取っている。

2) 情報源

飛さんはテレビニュースの担う自己成長への積極的役割を認識しているため、テレビニュースによる能動的情報入手をしている。それにより、右翼的な政府という対日イメージが形成された。また、歴史遡行的思考とアナロジー思考の総合利用により、「普天間基地を設置する現在の日本政府＝過去の傀儡政権の清政府」という認識を持つようになった。さらに、戦前の日本における反戦思想の存在や平和憲法に関する知識も得られた。それが

きっかけに、平和憲法に対する興味関心を持つようになり、インターネットによる能動的情報入手を行い、平和憲法による日本の平和を重んずる態度の発見ができた。一方、憲法改正が社会的不安定をもたらす可能性も意識しているため、憲法改正に対する「なんとなく不合理」という認識もしている。そのインターネットによる能動的情報入手というプロセスにおいて、飛さんは中国国内での日本の憲法改正に対する過激な言論の存在も知り、その過激な言論に対する懐疑的態度を持ち、それは日本に対する非理性的な感情であると考えている。総じて言えば、飛さん自身は、憲法改正に対する「どうでもいい」という中立的態度を持っている。

詰め込み式のドラマ放送と情報源の欠如のため、飛さんは抗日ドラマによる受動的情報入手しかできない。日中戦争を中心とするテレビドラマの内容の限定性と抗日ドラマの中の「日本人＝悪人」というイメージ作りの限定性を背景に、抗日ドラマから受けた否定的対日イメージを説明しているが、抗日ドラマの残酷なシーンに対する鈍感さもあり、それはゲーム・アニメによる暴力的内容接触に慣れているためである。さらに、飛さんは推測的思考により、人類に共通する善良性から日本人の善良性を推測するという日本に対する自己集团的理解⁷³ができる。そのため、史実が脚色された抗日ドラマの中の日中戦争の真实性の欠如という問題を指摘し、抗日ドラマのストーリーに対する徹底的な懐疑的態度を持ち、史実が脚色された抗日ドラマに対する否定的評価を下している。

飛さんは「近代史の授業＝戦争」という授業内容に対するぼんやりとした認識をしている一方、抗日ドラマ・インターネットにおける主観的対日情報との比較思考により、教科書・テレビニュースの客観的対日情報から歴史教育の相対的客観性を認識している。例えば、飛さんは説明文のような教科書の記述の客観性を見ており、歴史教育による古代の日中友好関係史の知識習得や歴史教科書によって習得した日中戦争の知識の正確性から歴史教育が自分の対日イメージに与えた客観的影響を認識している。

3) イメージの形成過程

飛さんは抗日ドラマによる初めての日中戦争に関する情報の入手ができたが、幼年期については希薄な記憶しか残らなかった。また、幼稚園時代には「ただの名詞」であるとい

⁷³ 「自己集团的理解」とは、日本人と中国人という国籍に関わる理解をせず、日本人も中国人も同じ人間であるため、「私たち」に「善良」という共通性があるために、同じ集団に属しているという理解の在り方である。

う戦争に対する認知があった。さらに、小学校時代に持っていた戦争機械としての残酷な日本人というイメージから憎しみのみの対日感情を持っていた。しかし、小学校時代と現在の対日イメージには大きな変化が生じている。

飛さんは中学校の歴史の授業という情報源により、日中戦争に関する知識を習得し、非人道的な南京大虐殺という認識をしている。一方、中学校受験の失敗からの衝撃を背景に、飛さんは書籍による能動的な知識学習を始めた。この書籍という情報源は中学校からの対日イメージの変化のきっかけとなった。飛さんはまずアナロジー思考により、古代中国の「侵略行為」の存在から考え、近代日本の侵略行為に対する納得感⁷⁴を述べた。また、歴史廻行的思考を行い、近代中国の国力的劣位性による非侵略の必然性を分析している。さらに、他者の立場に立つ思考により、自国のために行う戦争行為に対する日本人の止むを得ない感を感じた結果、日中戦争での他者への理解ができ、両面性⁷⁵のある戦争という認識が形成された。

飛さんは他者の立場に立つ思考ができるようになったのは、友人を傷付けたことへの後悔する気持ちを持っていたからである。すなわち、飛さんは自己体験による「自分本位である」という自己反省から、思考様式の転換を成し遂げた。また、反省的思考を行い、幼年期におけるメディア・リテラシーの欠如がゆえに、飛さんは、親による情報への確信的信念を持っていたため、能動的情報確認を行わなかったことに気づいた。

4) 世代別の対日感情と社会的変化

日本に関する話題がほぼない家庭環境に育った飛さんは、世代別の対日感情の相違を語っている。具体的には、上の戦争経験者世代による影響で祖父母世代の持つ日本への過激な恨みがある。また、飛さんは情報伝播における中国政府の方向付け操作のため、中国国民における情報把握の欠如に至ったと考えている。このメディアの宣伝による影響で親世代における日本への好奇心と恨みが併存している。その恨みの存在する根本的要因は無知・恐怖・恨みという連鎖反応であると飛さんは理解している。そのため、大衆の対日イメージ改善における教育の重要性を語った。現在、教育水準の改善によるメディア・リテ

⁷⁴ 「近代日本の侵略行為に対する納得感」とは、古代中国も「侵略者」として侵略行為をしていたため、近代において日本が侵略行為をしたことも仕方ないという考え方である。

⁷⁵ 戦争の「両面性」とは、戦争は資源不足の日本の発展に与えるプラス面の影響と中国の発展に与えるマイナスの影響のことを指す。

ラシーの改善は若者世代の対日イメージの改善の可能性を提供してくれた。それと同時に、情報源の多様化による情報環境の改善は能動的情報入手の可能性を提供してくれた。上記のメディアの宣伝による影響で、自分の日本に関する知識の欠如のため、飛さんは自分が日本人に対する部分的理解しかできていないと語っている。飛さんは教育水準の改善と情報環境の改善という社会的変化を通して、自己の対日認識がより客観的になることに対する期待をしている。また、飛さんは非理性的な反日行動に対する否定的態度を持っており、過激な対日言論に対する不理解⁷⁶も述べた。それらの変化を通して、大衆の対日言論・対日認識がより客観的になることに対する期待もしている。

3.2.1.3 明さん

明さんのテキストの再文脈化の結果は以下の通りである。

1) アニメに関するイメージ

明さんは日本に対する肯定的評価を行い、日本に対する憧れ感を持っている。抗日ドラマによる初期の否定的印象の形成を経験したが、アニメについての同級生からの情報による好奇心の芽生えの後、アニメ接触ツールとしてのインターネット利用によって、好奇心からスタートした日本理解が実現した。具体的には、まず、明さんは家庭科のような日本の学校の授業の多様化⁷⁷に対する羨ましい感⁷⁸を表した。自分でと言う日本人の子供とママと呼ぶ中国人の子供との対照的な現象が存在している。それは家庭科の授業設定による日中の子供の自立状態の差異である。また、伝統文化を重要視する理念を有する明さんは、日本の伝統文化に対する興味関心と憧れがあり、日本人が伝統文化を重んずる態度に対する羨ましい感を述べた。一方、それによって、自文化に対する再認識ができ、中国人が伝統文化を軽んずる態度に対する口惜しい感を抱いている。このように、中国の伝統文化と日本文化の関係性を確認でき、その中国と日本の文化の関係に対する複雑な心情を持っている。さらに、アニメのストーリーによる日本人の内心への発見ができたため、アニメか

⁷⁶ 「過激な対日言論に対する不理解」とは、過激な対日言論を理解できないことである。

⁷⁷ 試験重視教育を受けている中国の中学生にとって、国語、数学などの試験のための授業以外、家庭生活に必要な見解・知識・技能を習得できる科目が設けられていることはとても想像しにくいことである。明さんは、自分の受けている教育の実情と比べて、日本の学校の授業が多様化していると考え、羨ましい気持ちを表した。

⁷⁸ 本来は「羨ましい感」を使わず、自然な日本語として「羨ましさ」や「羨望感」を使うべきであるが、次の「口惜しい感」と概念の対応をさせるために、「羨ましい感」を用いた。

ら日本人の人間関係の在り方への理解が進み、家庭教育による日本人の高い民度の形成を評価している一方、比較思考による自我の友人関係に対する再解釈も行なっている。その結果、自分の受験勉強によるコミュニケーションの欠如を認識し、比較思考による自己発見ができた。最後に、アニメによる日中間の相違点の発見によって好奇心の芽生えがつき、その好奇心による興味関心の生成の実現が趣味に関しての日本優先選択を促している。

アニメによって入手した情報の豊富性はアニメによる対日イメージの転換を促した。ここでは、イメージ転換ツールとするアニメの重要性が確認された。一方、明さんは物語に教えられた真理に対する探求的理解の重要性を指摘し、アニメを用いた知識獲得的機能に対する欲求を有しているため、中国のアニメの中身の欠如と日本のアニメの教育的役割という比較思考によるアニメに対する評価の相違の形成がされた。特に、日本のアニメにおける中国の再現の忠実性に対する肯定的評価を行う一方、中国の抗日ドラマにおける日本の戯画化の荒唐無稽性に対する否定的評価をしている。このように、比較思考による情報に対する再検討・再認識によって対日認識の形成が実現された。

情報源のスタートとなる絵画趣味を持つ明さんは、アニメから見た創造的な日本に対する敬服感⁷⁹を持ち、アニメによる自分の趣味の再発見ができたとともに、趣味を通じての日本との絆が深まった。この時、日本のアニメはモデル的役割を果たし、明さんは自分の趣味を将来の仕事にしたい願望を述べた。

2) 戦争と政治に対するイメージ

明さんは南京大虐殺の残酷さに対する認識を持っているが、他者の立場に立つ思考を通して、自然災害の多い日本に対する同情心を持つようになった。また、国家利己主義的視点から考えることによって、地理的要因による侵略戦争との認識ができた。一方、自国反省意識が働き、弱国だった中国の被侵略国家になる絶対性による中国の主要的戦争責任の判断⁸⁰をした。このように、日中戦争に対する深層的な思考が行われており、変換的思考による相互理解の実現の可能性を示唆している⁸¹。

⁷⁹ 「敬意」を指す。上述の「羨ましい感」、「口惜しい感」と対応するために「敬服感」を用いる。

⁸⁰ 侵略された当時の中国は弱国であったため、日本に侵略されなかったら、他の国に侵略される可能性も非常に高かったと明さんが考えている。そのため、歴史を辿って戦争の背後にある深層を考えれば、戦争の責任は中国の弱さにあると明さんは考えている。

⁸¹ 日中戦争に対する考え方が深まっている。またそのことにより戦争に対する理解が相互的な理解へと変化する可能性があることを示している。

明さんは尖閣諸島事件に対する疑惑、また、それに関する世論に対する疑いを抱いているため、インターネットによる能動的な情報確認を試みたが、知識・資料不足による判断の困難さがあるため、その事件に対して、慎重かつ保留的な態度を持っている。

政治家と国民を区別視する意識形成がされているゆえに、「戦争日本」と「現在日本」の違いに対する確信的態度を持つことができる。一方、自国に対しては、忘れてはいけない中国の弱さと認識し、悲惨な記憶から強国への自覚をしている。それらの認識に基づき、両国間の長所の相互学習の実現に対する発展的認識を有するとともに、両国間の対等な関係の維持の重要性と日中関係に対する客観的認識を示している。このように、寛容な態度と日中友好の関連性を重視し、良好な日中関係に対する期待をしている。

3) 情報源

抗日ドラマの影響には個人差があり、明さんは元々抗日ドラマから悪い影響を受けたという自己認識をしている。その後、日本についての知識の増加によるイメージの転換が実現でき、政府指導による抗日ドラマ製作を背景に作られた醜悪化された日本人像に対する否定的態度を持っていると同時に、固定化された史実が脚色されたドラマに対する止むを得ない感も持っている。

愛に溢れる家庭環境に育てられた明さんは、両親と、同級生が理解不能な友人的関係⁸²を保っている。明さん自分自身も友人との接触的コミュニケーションによる自己認識の深化ができたため、自分と同級生の、家庭教育の相違による趣味形成の相違と情報源の相違による趣味形成の相違性に気づいた。それに基づき、比較思考による他の家庭の教育理念との差異の発見ができた。この家庭教育理念の相違から情報源の相違へ、情報源の相違から子供の知識量の相違へとの連鎖的作用が働き、親の教育理念⁸³の差異による子供の知識獲得の手段と知識構造の差異も形成されている。この外向き志向の家庭環境では、子供の趣味を支持する親が子供の個性を尊重する育て方をしており、子供に自己努力による留学の実現に対して期待をしているため、子供は夢が応援されているこそその幸福感を感じている。

⁸² 同級生の場合は、自分の親とは友達のように付き合うことができない。そのため、明さんが自分の親と友達のように付き合っているのを見てとても不思議に思っている。

⁸³ 例えば、試験を重視する親の場合は、試験に差し支えがあるかどうかを基準に子供に対する教育を行う。一方、子供の意志や趣味を重視する親の場合は、子供の将来のためになるかどうかを基準に子供に対する教育を行う。

特に、母親の豊富な学歴と職歴による知識の多元化は、親の教師的役割と親の知識媒介的役割を果たさせている。そのみならず、明さんの家庭においては、日本に関する情報源としての母親の特殊な役割が見られ、日本に興味のある親が子供の対日理解に対する影響が現れている。

一方、高学歴の祖父の日中戦争に対する客観的な態度によって内心に控えられている対日葛藤ができています。具体的には、明さんの祖父には対日親近感を容認しない一方、孫の日本留学を応援するという祖父の矛盾的心情が存在している。それにもかかわらず、祖父は孫に対する愛情の優先的な選択をしている。明さんは祖父と自分の心情のように、世代別によるイメージの相違の存在があると認識している一方、世代によるイメージ継承が弱まっている可能性を推測している。そのため、明さんは自分と世論の間の対日イメージ不協和性の認識にも関わらず、世論の対日イメージが肯定的イメージへ変化する傾向を確信している。

情報源に関しては、明さんは二次情報に対する疑問を持ち、能動的情報入手による二次情報再確認の実行が必要だと主張している。明さんは能動的情報入手を行うことによって、日中関係に左右される対日情報入手の特徴に気づき、両国の比較によって中国社会における情報入手の制限の多さを発見した。全体的に見れば、受動的情報源と能動的情報源に見られる情報環境の相違が存在しており、このような情報環境の転換による情報源の変化も生じている。例えば、明さんの家庭では、旧メディア（テレビ）から新メディア（インターネット）への情報源形式の転換という家庭内の情報環境の変化があった。また、多様な情報源による情報入手の多様化の実現ができた。インターネットやアニメなどには情報源間の関係性があり、それらの情報源の転換による知識の豊富化も実現されている。特に、インターネット情報の多元化が存在しているため、明さんは多様な形式のインターネット情報による知識獲得ができた。そして、インターネット情報による好奇心の発生と連鎖的な知識の倍増も実現された。その結果、明さんはまず、知識量の増加によるイメージ転換ができた。次に、自己反省意識が働き、知れば知るほど知らないということがわかる自覚ができた。それが実は、知識量の増加による自我の目覚めである。さらに、明さんには情報の重ね合わせによる日本に対する憧れ感の定着があり、その後、能動的情報入手を行うことによって、知れば知るほどの対日憧れの深層化を経て、好印象に溢れた日本を体験憧れの心情に至っている。

3.2.2 高校生

3.2.2.1 宇さん

宇さんのテキストの再文脈化の結果は以下の通りである。

1) イメージ

興味関心由来の日本への理解意欲があり、興味関心による選択的な情報接触を行なっているため、宇さんの中には知識なき無関心による中立的対日イメージが形成されている。
アニメそのものへの無関心な態度を持つ一方で、日本のアニメ産業に対する肯定的態度を
合わせ持っている。また、宇さんは、個人と家庭の関係性から国民と国家の関係性について考え、アナロジー思考により、日本人と日本の緊密的関連性⁸⁴を語った。

宇さんは電化製品、自動車、アニメ、経済などの先進的分野の成功による肯定的対日イメージを有しており、現在の日本の見習うべき先進性を語った。その日本の先進性に対する「見習うべき≠丸移し」論という弁証法的理解⁸⁵をしているため、自分は日本に対して非外国崇拜という客観的態度を取っている宇さんは述べた。また、宇さんは歴史遡行的思考を行い、日中間の言語的関係性など、日本が過去の中国から見習った先進性を振り返って、日中間の文化面における歴史的関係性から、両国の相互学習による融合に対する期待を表している。

宇さんは、メディア・学校教育・年寄りの語りなど多様な情報源による日中戦争に関する情報の入手をしている。そのうち、宇さんは教科書の記述の客観性に言及し、ポジティブな姿勢を示す一方で、年寄りの語りの主観性を批判している。日中戦争については、宇さんは、戦争を体験した近親者の生活に対する横断的・縦断的比較思考⁸⁶によって、自分とは時間的距離感のある日中戦争に対する「体験なき鈍感さ⁸⁷」を再確認した。また、「百

⁸⁴ 日本人も日本の一部であるため、似通った面が多いと認識、日本と日本人を分けて見るという見方をしない。

⁸⁵ 日本には先進性がある。しかし、中国にとってその先進性は必ずしも全て先進的な部分になるとは限らない。それゆえ、長所を見習うとともに、短所を見習わないという舎短取長の見習い方を取るべきだと宇さんは考え、日本の先進性に対して弁証法的に理解している。

⁸⁶ 「戦争を体験した近親者の生活に対する横断的・縦断的比較思考」とは、その近親者の現在の生活と戦争時代の生活に対する縦断的比較思考・戦争時代にその近親者の生活と同時代の他の体験者の生活に対する横断的比較思考である。

⁸⁷ 過去の日中戦争を経験したことがないため、日中戦争に対しては、怒りや憤慨などの気持ちもなく、自分の評価や感想を表すことができない。

人斬り競争」から見られた日本軍の武士道精神への理解の一面性を語った宇さんは、「百人斬り競争」に対する「体験なき鈍感さ」と「残酷すぎるゆえの憤慨」という2つの心情を抱いている。

宇さんは、歴史廻行的思考から戦争の歴史的必然性を理解することができたと述べている。また、第二次世界大戦については、ドイツの戦争に対する反省的態度と日本の戦争に対する曖昧な態度を比較し、ドイツの戦争責任に直面する姿勢と日本の戦争責任を回避する姿勢を見て取った。このように、ドイツの戦中行動を模倣する日本とドイツの戦後態度を模倣しない日本という戦中日本と戦後日本の相違については、比較思考による日本への否定的評価を下している。

2) 情報源

宇さんは父親の抗日ドラマ視聴に伴う自己の抗日ドラマ視聴という連帯的情報入手を通して、史実を再現する抗日ドラマにおける中国人の強い意志と日本の武士道精神の発見に基づき、それらの精神面の特徴に対する肯定的評価を下している。つまり、抗日ドラマの表層的なストーリーから深層的な精神面の特徴までの理解の深化が起こったのである。一方、ニュースによる日本の武士道精神についての情報からは、急進的な武士道精神⁸⁸という認識に至っている。宇さんは、武士道精神に対する二律背反の理解を持っている。

また、宇さんは、史実と、史実が脚色された抗日ドラマに表れた史実との距離を感じ、その史実が脚色された抗日ドラマと史実を再現する抗日ドラマに対する比較思考により、史実を忠実に再現するストーリーへの肯定的評価を下すとともに、抗日ドラマ視聴と否定的イメージの関連の必然性を指摘している。また、宇さんは史実が脚色された抗日ドラマの脚本家の主観性のみならず、アナロジー思考を通して、記録映画のナレーターの主観性も発見した。それに対して、情報源に対する比較思考により、ニュースの客観性は意識できている。

宇さんはニュースという主要な情報源を利用している。国際ニュースによる日本についての情報の入手の偶然性はあるが、文系学生としての国際ニュース知識の必要性を前提に、宇さんは情報源となる旧メディア（テレビ）と新メディア（インターネット）の総合利用を行い、多様な日本情報を入手している。例えば、日本国内の元日本兵の間の戦争認識

⁸⁸ 宇さんは、武士の切腹する行為は「急進的な行為」と見てその行為に対して否定的に評価している。

の論争や慰安婦問題の存在が挙げられる。そのうち、慰安婦問題に与えられた否定的イメージの必然性に言及している。

宇さんは最初、受動的に入手した情報に対する情報処理によって、現在の歴史問題の背景に対する好奇心が引き出され、その好奇心による能動的情報入手を行なっている。歴史問題に関しては、回避できない過去の史実が存在するため、依然として存在している現在の歴史問題を解決する必要性があると考える一方、過去に対する体験なき鈍感さを持ち合わせている。過去と現在を分けて見る見方を用いた宇さんが日本の経済的先進性と問題解決の曖昧性⁸⁹から発見したのは両面性のある日本である。

全体的には、宇さんはニュース情報による対日イメージの一面性という自己認識を行い、それにより弁証的思考による情報処理を通じた自己の対日イメージへの修正を行っている。

宇さんは、韓国への憧れによる韓国観光を実行した。体験的比較思考により、韓国人の中国人に対する善意と韓国人の日本人に対する敵意を実感することとなった。韓国滞在中の親戚によるその実感の再確認もできた。このような韓国人の対日態度を、中国人の日中戦争に対する体験なき鈍感と比較思考を行い、中韓間の対日感情の差の実感も沸き、それを中国における宣伝の欠如がもたらした若者の戦争に対する鈍感さと理解している。

実は、宇さんの心の中には、日本に対する「いいけど行きたくない」という評価と行動志向の矛盾が存在している。具体的には、日中韓の近隣関係のための比較思考を行い、日本に対しては、「全て日本より韓国」という、関心度による選択的拒否を示している。その理由を、中国で買える自動車への満足感と桜⁹⁰に興味がないことを例に出し、日本に自己関心分野の欠如のための行動志向・憧れの欠如だと説明している。それに加え、日本への経済的貢献になるため、日本観光を拒否する気持ちがあると語った。

一方、自国の一般中国人の対日イメージについては、宇さんは高齢者と若者の間の戦争との距離感の相違があるため、対日イメージには世代差があると指摘し、異なる世代の間

⁸⁹ 宇さんは日本の経済の先進性に対して、肯定的な評価をしている。一方、「問題解決の曖昧性」は主に日本の日中戦争に対す謝罪の態度の曖昧さを指しており、その曖昧な態度に対しては、否定的に評価している。そのため、プラス面もマイナス面もある日本は「両面性のある日本」である。

⁹⁰ 詳しくは、日本関連する事柄について言えば、中国で買える日本メーカーの自動車と日本でしか見られない日本の桜が挙げられる。しかし、宇さんが興味を持っているのは、中国で買える自動車であり、日本でしか見られない桜ではない。そのため、日本への行動志向や憧れも持っていない。

のイメージの継承を観察している。また、宇さんの中には、個人的対日イメージの個別性と自己の対日イメージの普遍性という認知的矛盾が存在している。

3) イメージの形成過程

日本車の存在という対日イメージの原点⁹¹から、日本に対して肯定的イメージを持った幼年期を過ごした宇さんにおいては、興味関心による知識習得意欲の向上が継続し、幼年期からの自動車に対する興味関心の保持をしている。具体的には、父親の日本車に対する肯定的評価に基づき、推論的思考に中国との比較思考を加え、自己の日本自動車産業に対する肯定的評価を下しているが、それを幼年期の一面的理解という自己認識によるものとしている。その後、成長に伴い、宇さんは、過去の戦争行為に対する否定的態度と現在の先進性に対する肯定的態度も同時に持つようになった。しかし、家庭内の影響により日本車への関心を持つようになった宇さんだったが、現在は尖閣諸島事件がきっかけとなり日本車不買の選択に至っている。

また、偶然的情報入手により小学校時代に得た文学作品により日中戦争の背景への理解ができていた宇さんは、日中戦争の発生要因を戦前日本の経済発展と侵略行為の必然的関係と戦前中国の暗黒時代と被侵略歴史の必然的関係によるものと解釈している。

それに加え、宇さんは、中学校時代の受験目的による過度な受動的知識習得がゆえに、反抗期の受験勉強への反感がもたらした知識習得拒否を経験し、その知識習得拒否による日中戦争に対する知識の欠如に能動的知識習得の意欲の欠如が加えられた結果、日中戦争に対する表面的認知しか持っていなかった。それゆえに、過去に対する体験なき鈍感さも持ち合わせるに至った。

最後に、現在の宇さんは、学校教育による物事への見方の変換と知識習得による思考様式の変換が故に、物事に対する客観的見方の重要性を認識することができ、自分の一面的な認識に対する自己反省を行い、弁証的思考による情報処理を通じて自己の対日イメージへの修正を行っている。その結果、宇さんには対日イメージの好転が生じている。

3.2.2.2 雪さん

雪さんのテキストの再文脈化の結果は以下の通りである。

1) イメージ

⁹¹ 幼稚園時代から日本の自動車があることを知り、それは宇さんの最初の対日イメージである。

雪さんは、民度・教育・経済面における日本の見習うべき先進性から日本の積極的な発展理念を読み取る一方、捕鯨問題に日本人の残忍性も見ている。日本の多面性の存在により、多面的な日本に対する多面的な評価をすべきだと考えているが、日本の教育面の先進性への注目から日本への憧れ感が生まれたため、日本に対する肯定的評価を選択している。

雪さんの教育の高水準という日本に対する第一印象は、雪さんの個人の学生身分による教育への注目⁹²から形成されている。その第一印象をもとに、雪さんは、まず、他諸外国の事情とのアナロジー思考により、日本の教育に対する好奇心が生まれた。その好奇心は自己との関連から生まれた好奇心である。また、その好奇心がゆえに、自国との比較思考もあり、筆者に日本の教育重視方針についての確認⁹³を行った。

また、日本人の環境保全意識に関心がある雪さんは民度の高い日本人という認識を持つ。その原因については、地理的状況と環境保全意識の関連性および環境保全意識と教育重視意識の関連性によるものであると解釈している。このような肯定的イメージの形成は国語学習資料となる若者向け雑誌によるもので、教師からの日本関連知識の獲得と国語教育による間接的な対日イメージ⁹⁴への影響とがある。

一方、そうした雑誌による情報入手を通して、雪さんは筆者に果物（柿）の完璧な形に対する疑問⁹⁵を呈し、その果物の完璧な形に対する驚きを示すとともに、それを完璧に追求する日本の科学技術の先進性として解釈している。また、雪さんは日本人の完璧さを追求する意識に対する肯定的態度も示している。その反面、特別な栽培技術によって育てられた果物の食品安全性への不安を抱いているため、完璧な果物に対する恐怖感も持っている。このように、自分の内部で認知的不協和が生じている。

雪さんはまず、世論における対日感情をメディアによる若者の嫌日感情と戦争による高齢者の嫌日感情に分け、世代間に嫌日感情の相違を見ている。また、雪さん自身は、博学

⁹² 教育を受けている学生であるため、教育に関わることに最も興味があると語っている。

⁹³ 雪さんは自分の対日イメージを語るとともに、彼女自身の日本に対する関心を筆者に聞いている。

⁹⁴ その雑誌は雪さんの対日イメージ形成に直接な影響を及ぼしている。一方、教師に直接に指定されている学習資料ではないが、国語の試験のための勉強資料として使われているため、国語教育が間接にイメージ形成に影響しているのである。また、国語教師も授業中日本についての話をしている。

⁹⁵ 日本では、柿などの果物が大きさによって選ばれて、同じ大きさの果物のみが一緒に販売されているという話は本当かどうかという疑問である。

の親戚からの政治・歴史知識の獲得⁹⁶が、雪さんの政治・歴史に対する関心の原点となっている。その関心から能動的情報入手を行い、雪さんは南京大虐殺の非人間性という認識と日本兵の中国人に対する行為の残忍さという認識を持ち始め、日中戦争に対する中国人としてのあるべき否定的態度を述べている。一方、日中戦争の現在との時間的距離に、雪さんは過去との距離感を感じているため、残忍さに対する鈍感さも表明している。また、国土的優位性のある中国と資源的劣位性のある日本の相対的關係を背景に、他者の立場に立つ思考によって、国力的劣位性にある中国と国力的優位性にある日本の相対的關係を見取っている。戦争の本質による被侵略に対する納得感も述べ、中国における国土と国力の不均等によって日中戦争の歴史的な必然性をまとめている。

雪さんは、日本の自然災害の発生要因には、地理的要因による災害の発生と盲信的要因⁹⁷による災害の発生があると考えている。その盲信的要因については、「得るものがあれば必ず失うものがある」という教師からの知識に対する応用的思考によって、「得るもの＝日中戦争、失うもの＝災害」論で解釈している。しかし、盲信的な自分という自己認識をもっている雪さんはそれが自然災害の発生要因に対する主観的解釈だと考え、地理的要因が根本的要因であるという結論を出した。

雪さんはメディア報道の方向性を理由に、あるべき愛国心による尖閣諸島事件に対する否定的態度という自己アイデンティティにからの尖閣諸島事件に対する認識を表している。一方、他者の立場に立つ思考による尖閣諸島事件に対する認識の変化も雪さんの中で生じている。しかし、それに対しては、雪さんは自分に日本人の立場に対する理解不足による、非客観的な自分という自己認識をしている。また、雪さんは受動的情報入手と能動的情報入手の両方の利用を通じて、尖閣諸島事件に対する中国人の過激な反応の主たる要因のひとつはメディアの国民に対する強力な影響であると認識することができた。さらに、その反応はメディアによる事実を脚色した宣伝の結果で、国民が育てられてきたメディア環境の影響の必然でもあると解釈し、中国国民には中国メディアのみから入手した情報の偏りがあると見ている。また、もうひとつの要因としては、道徳教育より知識教育を重視

⁹⁶ 親戚とのコミュニケーションによって、政治や歴史に関するいろいろな知識を得ていることである。

⁹⁷ 客観的な事実に基づいていない、ある仏教の考え方に対しては、雪さんはそれが「盲信的」とであると理解している。

する中国の教育による道徳教育の欠如を指摘している。雪さんは比較思考による日本の教育の先進性の再確認もできた。

2) 情報源

雪さんは抗日ドラマと「小日本」の関連性から幼年期からの否定的対日イメージの原点を振り返った。抗日ドラマが主要な情報源である幼年期を過ごし、抗日ドラマの幼年期からの影響のため、抗日ドラマに対する信頼感を持っていた。当時、雪さんは日本軍の行為に憤慨し、抗日ドラマによって作られた日本軍と同じ日本人イメージを持っていた。しかし、成長に伴う思考様式の変化によって、抗日ドラマの氾濫に対する否定的態度を持つようになった。抗日ドラマの本質を史実が脚色された抗日ドラマによる中国人の虚像作りとして認識し、抗日ドラマに対する不信感を持つようになった。真実と離れた抗日ドラマの氾濫による対日イメージへの負の影響を観察し、雪さんは、抗日ドラマの製作・視聴は控えるべきという態度を示している。

また、雪さんは勉強優先のためにアニメ視聴を控えている。アニメについては、周囲のアニメへの関心による半受動的情報接触⁹⁸から同調心理の働きかけによる能動的情報入手への段階を経て、中国のアニメとの比較思考によるアニメの製作技術の先進性、アニメの面白さと独創性、日本アニメの高級感を発見し、それとともに、雪さんは自らの関心による能動的情報入手によって、中国と比較して、日本のホラー映画の面白さの発見もできた。しかし、アニメと現実の間の距離も認識しているため、アニメと現実を区別する思考を行なっている。

3) イメージの形成過程

雪さんは「日本＝悪人」の小学校時代を経て、中学校からの能動的思考によって対日イメージの変化が起こっている。独自の思考による入手した情報に対する峻別に中国との比較思考を加え、物事には両面性が存在するという認識をするようになり、見習うべき日本の先進性の発見もでき、全ての物事に両面性があると心にかけている現在の自分になっている。雪さんの対日関心度は自分との距離に左右されているため、自己中心的対日イメージ

⁹⁸ 積極的にアニメを見たいという気持ちを持ってはいないが、周囲の友達はアニメを見ているため、周囲の人に影響され、自分も見なければ友達と共通の話題がなくなる恐れがあり、見始めたのである。このように、受動的でも能動的でも言い切れない接触であるため、「半受動的情報接触」とした。

である自己評価をしている。その結果、自己関心の優先的選択によるイメージの形成に至った。

認知の変化過程については、雪さんは日本に関する情報の少ない家庭環境で育てられて未熟な価値観を持っている幼年期を過ごしてきたが、他者の立場に立つ思考の形成の原点となる親戚の影響が大きかった。親戚の影響による認識の形成がなされた雪さんは、形成された認識に対する不理解を経験した小学校時代の後、成長に伴う思考の変化により、両国の立場に立つ理解ができたとともに、実現と認識の深化も成し遂げた。それと同時に、成長に伴う価値観の変化という自己発見ができた雪さんは、いまだに未熟な自分という自己認識もしている。このプロセスは成長に伴う価値観の変化とその価値観の変化に伴う成長の相互作用である。

3.2.2.3 朋さん

朋さんのテキストの再文脈化の結果は以下の通りである。

1) イメージ

朋さんは、日本に関する豊富なイメージを有しており、日本に対する言語化できない特別な感情を持っている。それは基本的にポジティブな方向で、例えば、朋さんは、経済面における先進性を生んだ日本の近代の社会体制と改革政策に対する肯定的評価を下している。その背景には、日本が積極的な文化輸入による国家発展の実現を成し遂げたことで、朋さんが明治維新の成功に対する敬服感を持っていることにある。今の日本は資源欠乏による輸入依存をせざるをえないが、輸入と輸出のバランス調整をうまく行っている。また、科学技術の先進性を有する日本に対して、朋さんは高品質の日本製品を生んだ日本人の誠実さと謙虚さに対する肯定的評価を下している。さらに、朋さんは中国の社会問題に対する批判的態度を持っているのに対して、日本の社会秩序に対する羨ましい感を持っている。このように、自国との比較思考によって日本人の民度に敬意を払っている。

朋さんは歴史への客観的な視点の重要性を認識している。例えば、中国における戦争による被害の事実を理解するとともに、悲慘な南京大虐殺という認識など戦争が誤っているという見方も有している。歴史的には残忍な行為を行った複数の国家の存在と忘れてはいけない国辱に対する認識と、時間的な経過から見直されるべき行為の主体と記憶から消すべき昔の悲劇という過ぎ去った過去に対する態度の併存がある一方、変わりつつある時代の到来という状況下、憎しみの継承に関する消極的態度を示している。特に、朋さんは学校教育による日本による被害情報の入手を通して、日本との戦争による被害の事実を知っ

ている一方、他者の立場に立つ思考を行い、日本人に対する同情心も持っているため、戦争における双方の損害の存在を認識している。それゆえに、「戦争＝罪悪・災難」論、「戦争＝死者」論を深く理解することができた。そのみならず、朋さんは日本における正義・平和理念に対する肯定的認知ができたため、強盗なき幸福論によるアナロジー思考を行い、「性善説」による日本人に対する他者の立場に立つ理解もできている。

それに対して、朋さんは世論には、日中戦争に対する怨念の継続や釈然としない意識があると考えている。歴史遡行的思考を行った結果、その怨念の背景には中華思想による中国大国意識の影響で、中国には外国人に対する軽蔑的認識があると分析している。昔からの慢心した中国を背景に、中国人の愛国心と自尊心による怨念の影響で、現在の中国には「小日本」の中国侵略と見なす国辱的見解がある。また、上記の解釈と例えとしての古代中国の「侵略行為」に対する見解も相俟って、「満は損を招き、謙は益を受く」の道德律による相互的な尊重と相互的な軽蔑の相互作用を指摘している。このように、アナロジー思考と歴史遡行的思考の相互作用が働き、朋さんは日中戦争における他者への理解、かつ思考様式の変換による理解の変換の実現ができ、世論における歴史に対する怨念の薄らぎへの期待をしている。さらに、同文同種の日中関係の家族関係性による「戦争＝兄弟喧嘩」論の見方をすることに加えて、古代文化交流による友好関係の構築を鑑みて、家族友人的関係であったからこそその関係回復への期待もしている。

朋さんは、日本に中国脅威論を定着させた日本政府に対する批判的態度を示し、尖閣諸島事件に対する否定的態度も示している。尖閣諸島事件という予想外の事件に対する憤慨と日本国民に対する幻滅の併存が生じた、期待との不一致による衝撃を受けている。しかしその後、他者の立場で考える共感力により、朋さんは、日本の首相・政府と国家・国民を区別する思考と戦争指導者と一般国民を区別する思考をすることができるようになり、その事件が日本一般国民の意図に反する可能性もあると、感情的思考から理性的思考への変化が起こっている。また、朋さんは例えとしての中国の主席の歴史的罪人への参拝で靖国神社参拝を考え、アナロジー思考によって靖国神社参拝に対する中立的態度を示している。日本人の平和重視理念と中国人の反日感情の比較を行い、自分の日本に対する許しと民衆の日本に対する憎悪が存在していると認識している。この認識で世論と異なる自国認識による非難の恐れを感じているが、批判的思考による自国の問題の発見もしている。

朋さんは、まず、若い世代の日本に対する強烈な反感を実感している。朋さんの日本に対する好感は外国崇拝であるという周囲の生徒の視線に晒されただけではない。生徒（朋

さん) の対日認識に対する数学教師の警戒心を感じた朋さんは、数学教師が生徒の対日認識を問題視することの深刻性を感じている。また、数学教師に対する自分の反抗的態度という国語教師からの見なしもあり、思想上の問題であるという評価の二次被害まで受けた。このように、学校環境での「日本好き＝売国奴」論という学校環境での日本拒否から受けたショックがあった。朋さんにとっては、それは自分の日本への親近感が招いた理解不能な過激な反応であり、その経験は青年期初期の濃い記憶として残っている。さらに、朋さんは親戚という身近な存在の反日感情に気づき、親戚の日本首相を侮辱する行為に反感を抱き、無言の抵抗をしている。一方、日本首相を侮辱する行為に対する周囲の無神経さを感じている。朋さんは他者評価に対する配慮を念頭に置き、相手の立場を理解しようとする意識を持つことによって、この日本首相を侮辱する行為に対する批判も述べている。

それと同時に、日本車利用者の多数の存在が確認されていることにより、朋さんは日本製品破壊行為に対する恐怖感と日本製品破壊行為に対する批判態度を示している。反日行動、失業問題、就職難の連鎖反応の予見をしており、日中間の経済の緊密性を強調した上で、友好的な貿易交流の継続とそれにつながる友好的な日中関係の重要性に対する認識を持ち、日中間の平和維持と経済交流の両立への期待に基づく相互的協力発展の日中関係の構築への期待もしている。

以上のような反日感情を経験した結果、世論の対日イメージ形成に対する疑惑の喚起がされた。この感情は、実は数世代にわたるイメージの継承によるステレオタイプ化であると朋さんは理解しており、集団内の同調現象の働きかけが作用した結果の同調心理によって形成された嫌日感情と推論している。しかしその後、朋さんは同級生の対日感情にある表裏の矛盾に気づいた。例えば、口頭による日本製品ボイコットと行動による日本製品使用という乖離、そして日本アニメの視聴意欲の継続をしている日本アニメ愛好者が挙げられる。このように、朋さんは実体験による言行不一致の対日態度を発見し、同調心理による言行不一致の対日態度の可能性を推測している。実は、対日イメージには距離の隔たりから生じた心の隔たりによる接触機会なき未知・誤解が存在している。朋さんはアナロジー思考の積極的活用を行い、中国の南北を例にして日中両国の相互理解を考えることにより共感的理解をし、実体験による誤解解消の実現の確信をしている。

2) 情報源

朋さんは多様な情報源による情報入手手段多様化の実現ができています。特に、日本に関する情報入手手段の多様性がある。まず、アニメの文化伝播機能性が存在しており、対日

イメージでのアニメのポジティブな役割が示されている。新メディア（インターネット）の普及前の旧メディア（DVD）による中国のアニメ視聴の実現はできていたが、日本アニメ視聴には困難があり、友人からもらうによって日本アニメ視聴の実現が初めて可能となった。それを通して、日本アニメに対する「古いけど新鮮」感を持つようになり、比較思考による日本アニメの長所発見もできたため、アニメに対する高評価をしている。このプロセスを通して、「単なる娯楽要素から、内包する日本の美德の発見手段へ」と成長によるアニメに対する再認識ができています。しかし、勉強障害であるというアニメ視聴に対する親の認識のため、親によるアニメ視聴の制限がされている。それに加え、政府による外国アニメ放送の規制もされている。朋さんは規制回避するための積極的なアニメ視聴措置を講じている。

小学生のころ？理解不能な残酷行為という抗日ドラマによる否定的対日認識の原点が形成された。その後、日中戦争の史実に関する知識の習得により、最新の抗日ドラマに対する批判的評価を下した。最新の抗日ドラマの愚昧性を認識しており、史実が脚色された最新の抗日ドラマに対する否定的態度を持つ一方、一昔前の史実を再現する抗日ドラマに対する肯定的態度を有している。例えば、日本人の美德に対する敬意、自殺した日本兵の親族愛に対する敬意、武士道精神に対する敬意など、昔の抗日ドラマの中での日本人の善心の認知がなされ、他者の立場に立つ思考による共感の実現ができた。

朋さんの場合、書籍が重要な役割を果たし、読書による知識の獲得の実現ができた。例えば、中国における環境問題発生と日本における環境保全意識の比較、文化遺産を保護する日本人と軽視する中国人の比較を行うことができた。「鏡効果」の思考によって、他国に対する謙虚な態度の必要性を強く感じている。そして、文学作品から出発して、その作家の生涯に対する関心への連鎖的情報入手を行い、物事への肯定的評価に導かれたその対象に関わる人間への理解の欲求も引き出され、文学作品による作家に対する多面的認識が形成された。そこから、作家の性格に基づく日本人の性格への類推という認識転用的思考を行なっている。このように、好奇心によって知識としての情報獲得ができています。さらに、朋さんは間接接触による生の日本情報の獲得の実現ができた。それに基づき、直接接触を介した間接接触の情報獲得による対日好感度の向上に繋がった。

学校の歴史教育の多様性のうちには、歴史教科書の執筆者の記述の主観性と歴史そのものの客観性が併存しているが、朋さんは、教科書の史料選択方針の客観性に対する肯定的態度を持っている一方、教科書に対しては、日中戦争の具体化と八カ国連合軍の侵略の簡

略化というような日中関係の阻害的要素の描写に対する不満を抱き、教科書の偏向に対する批判的態度を持っている。朋さんは、科目の性質により差があるという判断をしている。真理が1%の方にある可能性が存在しているため、同一史実に対する記述の相違に対する疑問による再検討の実行が必要である。しかし、現段階で知識習得中の自己認識をしている朋さんは知識を習得する必要性への自覚ができており、疑問解決のための知識探求に対する未来への期待をしている。

朋さんは学校教育を通した多様な情報の入手ができる。まず、複数の授業によってひとつの現象についての多面的知識獲得が可能である。その多面的な知識に対する能動的な統合処理を行い、比較思考による異文化理解の深化ができる。また、多角的な知識の獲得に対する教師の役割が果たされ、朋さんは教師の指導による道德観の習得ができ、教師からの知識に対する加工処理を行い、自己処理による知識の分野拡散的転用を実現させ、知識の活用による文化理解の促進に到達している。

朋さんは日本製品に対する否定的態度を経験した過去を持っている。その後、他者からの情報入手をし、入手した情報の検証をした結果、実体験による情報確認ができた。このように、「接触から好奇心へ」による消費行動の成立を通して、日本製品に対する体験的理解ができた。その結果、まず、日本の科学技術の先進性に対する肯定的評価という比較体験的理解による日本製品に対する肯定的認識が形成された。また、比較思考による日本製品の独創性に対する認識も形成され、それに基づき、細部の独創性による日本人の国民性に対する認識の深化に至った。このように、消費行動による対日認識の深化に基づき、比較思考による異文化理解の深化が実現された。さらに、食品安全を重視する意識を持っている朋さんは、国産との比較によって、日本食品に対するある程度の安心感の形成がされているため、この意識の変化による消費行動の変化が生じている。通信販売利用の普及によって行われた消費行動を通して、良質な製品の使用体験による異文化理解意欲の向上にも繋がった。この消費プロセスにおいてなされた集団内の情報伝播による消費行動の拡大は中国人の消費行動と日本の経済発展の関係を緊密にさせていると「塵も積もれば山となる」思考を持っている。

反日教育し、日本関連教育をしない親を持った朋さんは、日本に関する話題の少ない家庭環境で育てられている。家庭教育は、謙虚な態度の形成、ポジティブな性格によるポジティブな考え方の形成、本人曰くひねくれた性格による物事の両面性の存在に対する認知の形成など、子供の思考様式に対して役割を果たしている。また、祖父母世代の孫への寵

愛を受けている。祖母は日本人との無接触による対日無関心であるが、祖父母世代の日本への寂然としない意識に対する納得感を持っている。戦争の被害を受けた親戚がいる母親の嫌日感情はあるが、子供の自由を尊重する態度を持つ親は、戦争経験のない若者世代が日本を容赦する態度への期待と子孫に対する憎しみの不継承への期待を有している。訪日に対する憧れを抱いている朋さんは、訪日の可能性を提供している親からの支持獲得ができた。しかし、朋さんは親孝行の実現としての親の訪日に対する望みを親に告げたとき、親からは日本を容赦する気持ちと訪日拒否という心理の矛盾が示された。

朋さんは、周囲の言論に対する信頼感を持っている。しかし、周囲の言論と自分の認識のずれの気づきによる再認識的思考の生成によって、実体験に基づいた感受性の獲得の重要性を理解することができた。そのため、日本への間接接触による周囲の言論の持つ錯誤の確認と真実とみなされていることの不正確性が認識できた。このように、周囲の非難と自分の認識の矛盾による知識習得意欲の向上が行なわれた。それとともに、朋さんは若い世代における排外的態度の可能性を推測し、親日感情による孤立の恐れがあるが、友人関係の維持において主導的役割を果たした個人の性格により、対日感情の不一致と友人関係の保持に対する調和的处理を行い、話題の共有による集団内の友好的な関係の維持をしている。

また、周囲の言論と関連して、朋さんは情報入手についての理解を語った。国民の対日認識に対する中国政府の方向付け操作は、政府の情報発信ツールであるメディアを通して中国国民の情報把握の欠如を導いている。それゆえ、情報の氾濫による情報の信憑性に対する疑問を持つと同時に、中国の他国に関する否定的情報の伝播に対する止むを得ない感がある。朋さんは積極的に外国の一次情報の入手の困難の克服を行い、日本に関する一次情報入手の実現ができた。

3) イメージの形成過程

朋さんの日本に関する認識の過程としては、小学校時代の日本国の存在の認知があり、中学校からの日本理解の意欲の芽生えにより認識を深める過程を経た。特に、その過程において、中国の文学作品の親日感に共感を示し、親日だということで周囲からの懐疑的視線による自己否定も経験してきた。そのような親日感情の少数派と嫌日感情の多数派の社会的不協和により、自己個性化の追求をしている朋さんは事実確認の重要性に対する気づきができた。その後、自己に内在する日本への否定的認識の発見及び修正を行っている。このように、「小さな事を通じて大きな事を知る」思考によって、全体像を通じた対日認

識の深化を成し遂げた。高校2年になり、戦争史重視・交流史軽視の歴史教育方針によって受験内容に偏る知識構築をせざるを得なくなった。そのため、受験勉強による日本情報入手の能動的制限は日本に接触する機会の減少をもたらしたが、変わらぬ親日感を持ち続けたままである。

3.2.3 大学生

3.2.3.1 相さん

相さんのテキストの再文脈化の結果は以下の通りである。

1) イメージ

相さんは多様な情報源の利用により、多様化している肯定的対日イメージを持っている。特に、直接接触を介した間接接触によって入手した情報との親近感を感じている。一方、ニュース情報源と否定的情報の関係性があるため、日本に関するニュースによる否定的情報の獲得をした相さんは、二律背反の対日イメージを持っている。しかし、全体的には、相さんの心には肯定的イメージの優位性がある。例えば、相さんは旧メディア（テレビの旅行番組）による情報入手を通して、自然環境に恵まれた日本人に対する羨ましい感を持ち、日本の自然美に対する憧れを抱いている。実は日本のみならず、先進国に対する憧れを抱いている相さんは、先進国訪問による自己向上への期待をしている。また、旧メディア（テレビ）と新メディア（インターネット）の双方の利用により、相さんは自然災害の多い日本に対する同情心をもち、また、日本の災害処理方法に対する肯定的評価をしている。

国際貿易を専攻している相さんは個人の専門分野による日本に関する知識の獲得ができ、経済面の先進性が相さんの日本に対する第一印象である。相さんは日中両国の経済面での相互依存的関係から政治よりも大きい経済の重要性を認識している。このように、専門知識を通してできた日中両国の経済関係に対する理解の必然性がある。一方、相さんは新メディア（インターネット）と旧メディア（テレビ）の双方の利用を通して、自分の専門分野に関する知識の選択的情報入手を行なっている。日中間の距離的な親密性につながる中国のメディアの中での日本経済に関する報道の豊富性を背景に、日本経済に関する情報入手の偶然性もある。

日本製品に関しては、ニュース報道の否定的傾向と周囲の言論の肯定的傾向という異なる情報源の同一情報に対する評価の不一致があるが、相さんは消費行動による情報入手を通して、日本製品との接触が生み出した対日親近感を持つようになった。また、日本製品

の使用体験から、日本製品に対する肯定的認識と日本製品への信頼感も持つことができた。それゆえ、相さんは歴史面で日本政府に対する不信感を持っているにもかかわらず、生活面で日本の科学技術に対する信頼感を示し、科学技術の発展のもたらした生活水準の改善への感謝する心情を表している。特に、自国との比較思考によって「適当な」中国製と「真面目な」日本製という評価をし、製品の品質による日本人の国民性に対する認識の深化により日本の民度の高さに対する認識に至った。

また、自国に対する期待が生み出された反省的思考により、見習うべき日本の先進性という見方もしている。それに対して、個人的な印象を凌駕するメディアによる影響で、一個人による構成員の総意の代表性という国家リーダー像先行論の見方をしている相さんは、日本国民に対するあんな首相を「選んじやった」感を持つようになった。このように、認知的不協和による認識の揺れが生じている。

2) 情報源

相さんにとっては、主要な情報源はニュースである。具体的には、旧メディア（テレビ）と新メディア（インターネット）の総合利用によるニュース情報の入手をしている。中国のニュース報道には日本に関するニュースの報道対象の限定性があるが、原則的な問題に対する強い自己主張を持っている相さんは、興味関心による選択的情報注目を行い、尖閣諸島事件の日本政府の対応に対する情緒的な評価と歴史を無視する日本政府への否定的認識を示している。それにもかかわらず、相さんは旧メディアによって得た専門知識の整理および政府と国民を区別する思考などの総合的情報処理により、日本国民は理性的であるという認識をしている。

相さんは主要な情報入手手段となる新メディアを特に多く利用している。新メディアの利便性は好奇心による情報入手の偶然性につながっている。しかし、新メディアによる日本への批判的言論の伝播の迅速性と広範性の影響で、相さんは批判的言論への無意識的な注目をするようになった。それによって、上記の情報入手の偶然性から必然性への転換が生じている。メディア・リテラシーの重要性を認識している相さんは、まず、インターネット上の異なる（文字、写真、動画）メディアコンテンツの利用による情報の信憑性の確認を通して、報道された情報の是非に基づくその原因帰属の判断を行なっている。また、多様な情報源による同一内容の情報の信憑性の確認を行い、異なる情報源の同一内容の情報に対する描写及び解釈の相違を発見した。

相さんの場合は、史実を再現するドラマによる中学校時代の否定的イメージが形成された。史実を再現するドラマから史実が脚色されたドラマへの転換があったため、相さんは情報に対する峻別の思考を行なった。その結果、相さんの心の中ではこの抗日ドラマの変化がもたらした否定的イメージの弱化が生じている。その後、相さんはテレビを通した積極的情報発見により、抗日ドラマによる日本人の民族精神への認識ができた。このように、情報受け手の能動的な情報処理によるイメージ形成が実現され、固定観念に対する挑戦がなされている。さらに、相さんは抗日ドラマによる日本人の人間性への相対的理解もできている。日本兵の行為の「極悪非道」性があると考えとともに、戦争に対する普通の日本国民の止むを得ない感も理解している。他者の立場に立つ思考により、「戦争＝両国の苦難」論と考えた。以上のように、抗日ドラマを客観的に評価する意識を持っている相さんは、抗日ドラマにある日本（人）像の両面性と抗日ドラマでの滑稽性と史実再現性の併存する実態を見ている。また、抗日ドラマの史実再現性につながるそれに対する大衆の肯定的態度を確信しているため、忠実に史実を再現する理想的なドラマ像への期待をしている。

相さんは教師の教授法の客観性を評価し、教師に対する信頼感を持っている。しかし、教師の教授内容には限界があると見ているため、相さんは情報受け手の主導的情報処理の必要性があると考え、教師からの知識の加工処理を行っている。

異なる学校段階における日中戦争の教育内容の不変性は教育内容の重複によるイメージ強化につながっている。そのイメージ強化の影響で、相さんの対日イメージには、体系的歴史教育によって形成された残虐な日本侵略者のイメージがある。一方、相さんは教科書に基づく日本の発展に対する歴史廻行的理解により、先進国モデルとしての日本は評価されている。また、政治面においては、過去の友好的日中関係の認識と同時に、現在の日本政府に対する批判的見方も持っている。このように、イメージ形成に対する歴史教育の影響の両面性が示されている。

体系的歴史教育には否定的イメージを与える史実の具象性があるため、相さんには「残忍な日本人」という生々しい記憶が残され、さらに、体系的歴史教育によって体系的日中戦争の知識が形成されている。相さんは事実を知る欲求があり、事実の伝授という学校に対する要望もあるため、事実に忠実な教育への肯定的態度を持っている。事実解釈における主体の能動性が必要であると考えている相さんは、教科書の知識に対する加工処理を行い、歴史教科書による史実に関する多角的情報呈示に基づき、歴史教科書の客観性に対す

る信念を持っている一方、歴史教科書の執筆者の記述の主観性も認識している。例えば、相さんは日中戦争に対する国辱的認識を有している。しかし、相さん自身は「戦争＝両国の苦難」論で考え、戦争を許してあげるべき過去と忘れてはいけない過去と見なし、戦争の教訓性に基づいた平和の重要性への理解ができている。また、歴史に対する反省的思考により、強者と弱者にあるべき共同発展的関係の重要性を示している。さらに、歴史の鏡効果による自国への再認識ができ、自国の発展の力になるための自己実現への希望を述べている。そのみならず、歴史廻行的思考による異文化理解の重要性を認識している相さんは、アナロジー思考を行い、例えとしての人間に対する多角的見方を通して、自分には日本に対する偏見の見方を持っていると自覚している。この反省的思考により、自己の対日理解の正確性への期待という自己改善への欲求を述べた。

政府による外国アニメ視聴の規制が行われているが、相さんは反省的思考を通して、その背景には中国の国産アニメへの自信の希薄性があると考えている。その上、相さんは自国との比較思考による日本アニメの長所発見ができた。身近にいるアニメ愛好者の話とアニメ視聴によってアニメへの肯定的評価を下し、アニメ作者の独創力に対する敬意を持っているが、アニメを現実と混同させず、アニメと現実を区別する思考をしている。

3) イメージの形成過程

日本に関する話題の少ない家庭環境で育てられてきた相さんの成長過程は、日本を知らない幼稚園時代から、親の影響が大きい小学校時代に日中戦争を知ったショックによる否定的イメージの形成の段階を経て、さらにイメージが悪化する中学校時代、認識の形成に対する個人の能動的働きによって、高校時代からの人生観の固定化によってイメージの好転が起こっている。このような学校段階の転換に伴う対日イメージの変化過程においては、相さんには成長に伴う思考様式の変化が起こっている。その変化に伴い、相さんは主観的思考から客観的思考への変化と感情的思考から理性的思考への自己成長を経験しているため、成長によるショックの記憶の弱化と日本に対する偏見を持っているという反省的思考による自己認識ができている。

幼年期の情報源の欠乏を背景に、相さんは偏見を持った幼年期を経験した。そのとき、日中戦争に関する情報源は抗日映画・中学校歴史教科書が相さんの主な情報源であった。この幼少年期に詰められた日中戦争の知識の強烈な影響を受けた結果、単純化された戦争イメージが形成された。そのため、感情的な中学校時代に、相さんの日本軍の行為に対する憤慨が強かった。特に、抗日映画と残酷なイメージの関連性があるため、相さんは旧メ

ディア（抗日映画）による日中戦争に関する情報の入手を通して、言語化できない侵略者の残酷な行為を目にした。その結果、「残忍な日本人」という生々しい記憶として今でも残っている。このように、相さんは衝撃的なシーンの永存性を語っている。「衝撃的なシーン」ではあるが、相さんは事実に基づく映画製作という認識、そして誇張手法を用いる映画表現に対する肯定的態度を持っている。

対日イメージの変化する背景は以下のように挙げられる。①日本製品接触による日本への客観的理解、②情報源との親和性による日本知識の増加、③時代の変遷に伴う情報源の多様化による日本知識の多様化、④成長に伴う知識量の増加、⑤成長に伴う思考様式の変化がある。イメージ変化の原点について言えば、相さんは最初自分の対日イメージにある無意識の変化について語った。しかし、よく振り返ってみれば、実は、相さんは靖国神社参拝に対する憤慨を持っていたが、情報源の能動の利用により、イメージ変化の契機としての認知的不協和が発生した後、相さんは首相と国民を区別する思考を行い、認識の再構築ができるようになった。この感情的思考から理性的思考への変化はイメージの変化する原点であると相さんは見ている。最後に、相さんは対日イメージには世代差があると考えて、戦争との距離感による世代別の対日イメージの相違を語った。

3.2.3.2 越さん

越さんのテキストの再文脈化の結果は以下の通りである。

1) イメージ

越さんの対日イメージは、日中戦争という日本に対する第一イメージに始まり、その後、アニメという日本に対する第二イメージが形成された。さらに、ニュースによる日中間の歴史・政治問題に関する情報の獲得をした。それらの情報により、日中戦争に対する否定的評価を下し、自分は「憤青⁹⁹」にあるべき日本に対する憎しみを持つようになったと自己認識をしている。しかしその一方で、個人的感情・集団的行動を区別する思考から、真面目な日本人に対する肯定的評価を下している。また、過去と現在の日本に対する弁証的理解と比較思考により、現在の中国の伝統文化を軽んずる態度と比較して、現在の日本の伝統文化を重んずる態度に対する敬服感を持つようになった。さらに、小学校教師から受けた道德教育の影響で、越さんは他者の立場に立つ思考ができており、それに対照的思考

⁹⁹ 「憤青」は中国語で憤慨する青年を意味する言葉であり、といい中国政府の改革開放政策以後に現れた共産主義の左翼の若者達を指す。

を加えた結果、国家利益のための政府と個人生活のための国民を分けて考えるようになり、日本政府の「戦争＝恥辱論」と日本国民の「戦争＝苦難論」という政府と国民の間の相対的關係を深く理解することができた。それと同時に、国家・国民を区別する思考から、政治家による政治目的による歴史・政治問題処理への配慮を持っており、同一立場としての中日国民の持つ平和維持の希望という共感的理解もしている。そのため、日中間の緊密な経済的關係性から安定する政治的關係の将来への推論もしている。

越さんは、まず、中国の教育とアメリカの教育との比較思考により、アメリカの教育に対する羨望感を持つようになった。アメリカの教育から日本の教育へのアナロジー思考を行い、先進国である日本にあるべき教育の先進性という先入観を持つようになったため、先進国に対するステレオタイプが形成された。そのプロセスを背景に、日本と中国の教育形態の類似性に対する驚きを語った。このように、日本の教育に対する好奇心を持った越さんは、その好奇心による日本の文化・教育に関しての情報発見の偶然性を背景に、日本の文化・教育に対しての興味関心を持つようになり、人生の文化・教育の重要性も発見した。その後、越さんは、インターネットという主要な情報源を利用して、日本の国民生活情報の検索を行うという、興味関心による能動的情報入手を成し遂げ、好奇心によって入手した情報の増加も起こっている。実は、そのプロセスには日本の文化・教育に関する情報入手の必然性もある。以上のように、情報入手の偶然性から必然性への転換が生じている。

越さんは、政府による外国アニメ視聴の規制による逆宣伝効果から反省的思考を行い、アニメ規制の原因は、中国のアニメ製作者の技術と根気の欠如であると解釈している。また、比較思考により、日本のアニメによる製作者の美徳を推測し、日本のアニメ製作者に対する敬服感を持つようになった。しかし、歴史的影響から「アニメ愛好者＝売国奴」という現在の大衆の鋭い認識が存在するため、自分の友人の様に、この認識に直面する日本への好感を持つ中国人の複雑な心情を実感している。

越さんは親戚が認識している軟弱な外観とエコな中身という日本車の両面性から、彼らの日本車に対する拒否と受容という複雑な心情を読み取っている。それについては、まず、歴史遡行的思考を通して、越さんは親戚の日本車に対する拒否感情の背後に、実は戦争に対する恐怖感からの日本に対する恐怖感があると理解している。次に、個別的思考により、対日偏見の形成に影響する国民の低学歴という表層的要因を解釈している。続いて全体的思考により、対日偏見の形成に影響する中国の国情という深層的要因も解釈している。以

このように、越さんは、中国の物質的發展と精神的發展による發展的不協和を問題視しているが、中国の教育の長所と短所の発見ができたため、教育による精神的發展の改善の芽生えが見え、中国人の持つ精神的發展への期待をしている。また、越さんは、大学生の同調心理の影響で行われた理解不能な大学生の反日行動について語った。その反日行動の原因は中国の伝統的教育における自己個性の欠如によるメディア・リテラシーの欠如であると解釈している。上記の二つの例によって、越さんは自己と他者の間の対日認識への比較思考を行い、同調心理を控えた情報の信憑性への判断力の重要性を示しながら、自分の中では客観的対日認識を持っている。

2) 情報源

父親のニュース視聴に伴う自己のニュース視聴という連帯的情報入手が越さんのニュース情報の利用の原点となっている。越さんの場合、そのような半受動的情報接触と日中間の歴史問題・政治問題に対しての興味関心の協同作用が働き、日中関係に関する情報を獲得するに至った。実際のところ、日中間の距離的な親密性につながる中国のテレビニュースにおける日中関係に関する報道の豊富性を背景に、日中関係に関する情報入手の偶然性もある。この偶然性が故に、テレビニュースによる日本の国家政治情報の半受動的入手ができたのである。また、その後、越さんはテレビニュースという主要な情報源を利用して、日本人研究者の客観的な戦争への再認識に関する情報を入手し、ニュース情報の多面性を発見した。

越さんは、抗日映画に見られた真実な物語に感動し、抗日映画による日本兵の反省に対する感激を覚え、映画の取材内容の真実性を認めた上で、抗日映画によるプラス面の「思考侵入」効果を実感した。一方、抗日ドラマを見た大衆による言論の伝播の広範性が働き、抗日ドラマによるマイナス面の「思考侵入」効果も現れており、越さんは史実が脚色された抗日ドラマの製作目的は中国政府の共産党への信仰の樹立方針であると理解している。しかし、誇張手法を用いる抗日ドラマの表現内容の虚偽性を観察した越さんは、抗日ドラマに対して、大衆と異なる自分なりの理解を持っており、抗日ドラマによるマイナス面の「思考侵入」効果に影響されていない。

3) イメージの形成過程

対日イメージへの無影響の家庭環境で育てられた越さんは、日本を知らない小学校時代を過ごして、中学校時代の歴史教育という主要な情報源を通して、中学校の歴史の授業で習った日中戦争から形成された日本国の存在の認知ができ、残忍な民族という否定的対日

イメージを持っていた。しかし、教科書のための日本接触の限定性、教師の教授内容の限定性と受験目的による受動的知識習得がゆえに、全体的には、越さんの中学校時代は日中間の歴史に対する無感情という時期であった。

高校時代では、越さんは歴史教科書の記述内容の真実性に対する肯定的認識をしているが、中学校と高校の歴史教育内容の重複のため、高校の歴史の授業に対する倦怠感を感じていた。歴史教科書の日本に関する内容の限定性があるため、能動的情報処理を行った越さんは、教師の教授内容と自己の情報整理内容の知識不協和を感じた。加えて、731部隊遺跡の見学による衝撃を受け、複雑な心情になり、体験的理解による認識の深化に至った。このように、知識の増加による日中間の歴史に対する抽象化から具体化への変化過程を経験し、高校時代の知識の増加による日中間の歴史への再認識ができた。越さんの高校時代の対日イメージの転換には二つの理由がある。一つ目は、高校時代の新メディア（インターネット）接触により、旧メディア（テレビ）と新メディア（インターネット）の総合利用ができるようになったこと。二つ目は、社会の発展による言論の自由が可能になったことにより、社会意識の変化が生じていることある。このような中国国内の変化は情報の多様化と情報の多面化を示している。

大学時代には、まず、教育方式に対する縦断的比較思考により、高校までの受験偏重教育を大学での受験勉強からの解放と比較し、大学における言論の自由と思考の自由を越さんは実感した。このように、越さんの中で教育方式の変化による思考様式の変化が可能になった。また、旧メディア（テレビ）から新メディア（インターネット）への情報源形式の転換という家庭から大学への情報利用環境の変化があった。情報源の増加による知識の段階的増加を経て、日本に対する理解の深化も実現された。しかし、政府の情報発信ツールというメディアの世界共通の機能があり、そのメディアから得た情報の大衆による伝播がもたらす情報のねじれもある。そのため、越さんはインターネットによる情報の信憑性への能動的確認を行い、物事に対する主観的認識から客観的認識へという自己調整をしている。特に、物事への見方に関して自己成長を遂げる中、越さんは物事の両面性がわかるようになり、その気づきから、小学校教師から受けた道徳教育の影響で、観察的理解による美の発見に過去の日本と現在の日本を区別する思考を加え、忘れてはいけない日本の過去と見習うべき日本の現在という対日理解ができた。

総じて言えば、越さんは、成長に伴う対日イメージの持続的変化を語っていた。自分の現在の対日イメージの相対的固定化を認める一方、将来の対日イメージの変化する可能性

も指摘している。「現在の未熟な自分」という自己認識を持っている越さんは、小学校から大学までの日本に対する自己信念確立過程を「未知・半解・混乱・大半解」という日本を理解するプロセスと解釈している。自分の日本に対するさらなる弁証的理解への期待を、個人の自己改善の欲求として語った。その改善方法については、「万卷の書を読み、万里の道を行く」による自己改善の重要性を認識している越さんは、現在、大学教師から受けた人格教育に対する肯定的評価を下し、その教師の歩んだ「万里の道」という間接的道による自己改善に努めている。

3.2.3.3 亮さん

亮さんのテキストの再文脈化の結果は以下の通りである。

1) イメージ

亮さん自身は日本に対して肯定的イメージを持っている。例えば、日本に滞在中の友人を介した間接的情報入手によって快適な生活環境というイメージが形成されている。また、亮さんは日本の伝統文化にほとんど触れない教科書を利用しているが、日本伝統文化接触の原点となる授業内容に関連する教材を通して日本の国力の優位性や日本伝統文化の発見ができた。この情報入手の偶然性をもとに、亮さんは比較思考を行い、日本の伝統文化の中の中国の伝統文化との類似性と日本の伝統文化における独創性も発見できた。その独創性に対する驚きを語っている亮さんは、魅力的な独創性という日本の芸術に対する評価を下し、日本における伝統文化を重んずる態度というイメージも形成されている。さらに、親戚の日本観光による間接的情報入手によって、日本の先進性に対する再確認ができた。一方、亮さんは、日中関係に左右されている大衆の対日行動を指摘するとともに、「強国なのに優柔不断」という親戚の対日イメージと多方面の先進性という親の対日イメージによって身近な対日イメージによる大衆の対日イメージへの推論を下している。例えば、亮さんの親戚（いとこ）は「厳しい日中関係＝中国人にとって危険な日本」論という身近な言論による影響で、渡日に対する不安を感じ、結局、日本語を専攻にする道を放棄する選択をした。亮さんはこれが親戚の対日認識の一面性だと指摘し、また、推測的思考によって、親戚のこの被害者心理の背景には親戚の父親の政治への敏感もあると考えている。さらに、亮さんは親戚の結論に対する懐疑的態度を持ち、自己との比較思考によって、自己の渡日に対する期待を表した。

2) 情報源

亮さんは父親の抗日ドラマ視聴に伴う自己の抗日ドラマ視聴を通して、獣のような日本兵の不思議な行為という衝撃的なシーンを目にしたが、アナロジー思考によって、抗日ドラマ・映画の日本兵像の作り方の「ピラミッドセーリング¹⁰⁰性」を説明している。また、現在と過去を区別する思考を行い、過去の軍国主義の日本は「せざるを得ない」戦争を行ったと推測し、現在の平和主義の日本への受容する意欲を表しているとともに、過去に対する「忘れてはいけない」態度も話している。

亮さんは中国の情報源（テレビニュース）の利用頻度の少なさと日本の情報源（テレビドラマ・アニメ）の利用頻度の多さを通して、興味関心による情報源利用頻度の相違からイメージ形成に与えた情報源の役割の相違を呈示してくれた。具体的には、個人的には時事ニュースに対する無関心な態度を持っている亮さんであるが、父親のテレビニュース視聴に伴う自己のテレビニュース視聴を通して、テレビニュースによる半受動的情報入手ができたことから、ぼんやりとした対日イメージを得ている。一方、個人の専門分野から日本のテレビドラマ・アニメへの関心を示している亮さんは、アニメによる深層的思考を行い、友情や勝利などの日本の美徳の発見ができ、日本のアニメによるプラス志向という教育的役割を語った。

3) イメージの形成過程

日本に関する話題の少ない家庭環境で育てられてきた亮さんは、小学校時代では、父親の抗日ドラマ視聴による祖父の日中戦争経験の言及もあり、烈士霊園¹⁰¹見学による歴史教育も行われていたが、幼年期の記憶の希薄性のため、それらの歴史教育は対日イメージの形成に影響していない歴史教育となっている。それゆえ、亮さんは日本を知らない小学校時代を過ごした。

亮さんは中学校で、歴史教科書のみの情報源による戦争のみの知識習得をしている。亮さんは教科書の規格化/画一化の編纂基準による記述内容の客観性を認識しているが、同時に、教科書の記述によるデータの衝撃を受けた。この例からは、客観的情報による衝撃の

¹⁰⁰ ピラミッドセーリングとは、販売員が家庭や職場を巡回して商品の購入を勧誘する訪問販売（外交販売）である。それ自体は新しい販売法ではないが、勧誘の進め方、契約の方法、苦情処理、商品内容などに問題がある。中国においては、この販売法の最も大きな特徴は洗脳するような勧誘の進め方によって、親戚や友人、知人に商品を販売する。そうすると、同様な形による販売法を通して多層販売となるのである。亮さんはこのメタファーを用いることで、抗日ドラマ・映画における拡大の推進力を説明している。

¹⁰¹ 烈士霊園とは、戦争に参戦した「中国人民解放軍」を慰霊する目的で建設された記念館である。

強力性がうかがえる。また、亮さんは「つまらない」と、教師の教授内容に対する評価を下している。教師の控えめな言語的教授が行われていたが、教師のツールによる教授方法（写真呈示）によって印象的な南京大虐殺などの視覚的衝撃があったため、残酷で乱暴な民族という否定的イメージが形成されている。以上のように、中学校時代における対日情報源（歴史教科書・抗日ドラマ・映画）の限定性による情報の限定性から、中学校の歴史教育が対日イメージに与える負の影響が呈示されている。一方、中学校時代の受験目的による受動的知識習得を経験してきた亮さんは、実は、当時反抗期における教師への反感から歴史の授業への軽視する態度を持っており、日本に対する鈍感さを示す中学校時代を過ごしてきた。

アニメは亮さんにとって、自己成長に対する特別な意義がある。趣味のない幼年期に、亮さんは絵画の受動的学習をしてきた。また、中学校時代の終わりごろ、亮さんは消極的な精神状態にいた。アニメの個人のストレス発散的役割の発見をきっかけに、個人の精神的欲求によるアニメ接触を始めた。このように、アニメ視聴による趣味の芽生えの後、亮さんは、対日イメージの転換点となる高校時代からの「濃厚アニメ接触」から、「知らず知らずのうちに」行われたアニメを現実に関連する思考によって、アニメにある現実な日本や多元的な日本文化を発見することができ、対日知識の豊富化もなされている。例えば、亮さんはアニメという主要な情報源によって、日本の学校文化（サークル、文化祭）を知り、その学校文化に対する羨望感を語った。また、ホストという職業の存在という新情報の発見をした。ホストという職業の存在は亮さんに開放的な国という対日イメージを与え、「存在＝合理」論でそれを日本文化の一部として理解している。以上のような内容に関して、インターネットという情報確認手段を通じて、情報の真否の確認を行い、日本のアニメの写実性をさらに確認することができた。

こうして、亮さんは高校時代からの能動的絵画学習を始め、アニメへの狂熱感を持っている高校時代を過ごした。そのため、亮さんは政府による外国アニメ放送の規制に対する憤慨も強く、能動的情報入手によって、インターネットによる日本の青少年向けアニメの視聴を実現させた。また、亮さんは歴史逆行的思考を行い、過去の中国のアニメの内容の優位性と現在の中国のアニメの視聴者の限定性を指摘した。それに基づいた比較思考を行い、中国と日本のアニメの間の相違を発見し、日本のアニメのジャンル別分類に対する肯定的評価を下した。一方、日本のアニメを模倣する中国のアニメに対する否定的評価を下し、中国のアニメの独創性に対する期待を語った。

亮さんのアニメ視聴に対して、子供の個性を尊重する育て方をしている亮さんの親は子供の趣味への支持する態度を持っている。また、趣味を介した激励という教育方法を用い、亮さんの自己努力による日本留学の実現への期待を亮さんに表した。それに対して、アニメ視聴に対する勉強障害であるという友人の親の認識のため、友人の親による友人のアニメ視聴の制限がされている。友人との趣味共通をしている亮さんは、アニメが見られない友人とアニメ情報の共有もしている。また、一時的に緊張状態にある日中関係に左右される大衆の対日イメージがゆえに、亮さんは「アニメ愛好者＝売国奴」論という現在の大衆の鋭い指摘¹⁰²をされたこともある。

大学の歴史の授業を受けることによって、中学校・高校・大学の歴史の授業の内容の重複からの倦怠感を感じている一方、中高校時代の学習第一という生活の単純化と大学時代の生活の豊富化という学習生活における対照的な変化も生じている。例えば、日本語に対する興味関心と日本に対する憧れのため、亮さんは大学でアニメ視聴から「アニメ視聴＋日本語学習」への時間の再配分を行なっている。それが亮さんのアニメ視聴時間の減少した理由である。その日本留学を実現させるための努力を通して、亮さんの日本に対する積極的行動志向がわかる。

¹⁰² 亮さんは「売国奴」扱いされたこともあり、現在の中国民衆に「アニメ愛好者＝売国奴」と思っている人が結構いると思っている。